
俺達の戦争

椿山 昇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺達の戦争

【Nコード】

N3698F

【作者名】

椿山 昇

【あらすじ】

サバイバルゲームの日本一を決める大会に何も考えずに参加した俺達。だが、その大会で行われている事は本当の殺しあいだった。生き残りたいがために俺達は銃を持つ・・・

第一話 リアルウォー開催

サッカーの起源は、将軍や偉い人の生首をみんなで、蹴り始めた事が始まりだと言う説がある

アメリカンフットボールは、

どうやって、敵陣に爆弾を放り込むか

戦術をたてる事が、由来

剣道、柔道、ボクシング、

人は、争いの中から娯楽を生み出し

娯楽の中で、人は争う

それを見物にして、人々を熱狂させる

そんな中、一時期社会現象になり熱狂し

社会問題にもなった娯楽があった

『ウォーゲーム』

戦場を、見物にする最低のゲームだ

暗い森林の中、俺は草にまぎれ身を潜めた

「チェック」

八人の敵が、徐々にこっちに近づいてくる

まだ、俺達には気づいていない

「チェック」

頭の中の無線から毎回、毎回この声が聞こえる

規則的に、リズムよく

「チェック」

「グアッ!!」

一発の乾いた銃声とともに

中央にいた、敵の一人が頭を撃たれ倒れた

それと同時に、敵を囲うように身を潜めていた

仲間が、一斉に射撃を始め

正面で待ち構えていた俺も、身を乗り出し

敵の一人に向かって、引き金を引いた

敵がバタバタと倒れる中

敵の一人が、俺に向け引き金を引こうとしていた

おかしい、あいつはもう、銃弾を喰らっているはずだ

そう思いながらも、そいつに銃口を向ける

駄目だ・・・間に合わない

下腹部のあたりに、電撃が走る

撃たれた・・・

仲間の一人が、そいつの頭に弾を喰らわせ

敵は、後ろに倒れた

『試合終了です。』

チーム1の勝利です』

機械の音声が、俺達の勝利を無線ではなく

あらゆる所に設置されたメガホンから流れる

「やったな、康太」

「『やったな』じゃねーよ

撃たれた」

息苦しい、黒色の覆面を外し

俺に駆け足で近づいてくる鈴木 勉に言った

「でも、急所じゃないだろ

大丈夫だ」

「本物だったら、どうするんだよ

電撃攻撃じゃ済まないぞ

おい、龍ノ介　！！あいつは、お前がやる仕事だろ」

「ご、ごめん

うまく当らなくて・・・」

勉の後ろから、身を隠すようについてくる

福見　龍之介

「まあまあ、落ち着いて

まだ、チームに入ったばかりだし」

「そうだよ、康太」

勉達とは、逆の方から

高本　大次と佐伯　裕大がやってきた

「はあっ？お前ら、先生から教わんなかったか？

今の社会が、求めるものは

即戦力の人なんです

それにな・・・」

「おい、一人がミスをしたら

すぐに誰かが、バックアップに回る

それが、チームだろ」

俺の後ろから、相変わらず気配が感じられない

五十嵐・・・なんだっけかな？

「はいはい、そうですね

早く、帰るぞ」

俺は、井上　康太

一応、このチームのリーダーだ

以上、自己紹介終わり

メインゲートに着くと

さっき倒した、敵と鉢合わせした

「あ・・・いや、どうもお疲れ様です」

「おお、お疲れ

いや、強いな、君たち」

いや・正直、おっさん達が弱すぎ

「いや、たまたまですよ

俺も腹に一発たまを喰らいましたし」

「弾^{たま}だけに『たまたま』なんてな」

うわっ、笑えねえ

「ハハッ、それじゃ俺達はこれで」

「あつ、ちよっと待ってくれ」

「なんですか？」

「最初の一発目と

そのあと、俺の頭に撃った人って誰だい？」

「ああ、五十嵐ですよ

後ろにいる、やけに背が高い奴」

初めて、俺達と試合をする奴は必ずこの質問をする

そして、答えは背が高いと言えば、誰だかわかる

五十嵐は、俺たちですら見上げるほどの長身で

どこかの怖いお兄ちゃんなんかよりも、ずっと威圧感がある

「おお、君が、狙撃手か

すごい腕だな、場所が分からなかったよ

一体、どこから撃ったんだい？」

なにも、喋ろうとしない五十嵐に

俺は、仲裁を入れる

「いや、言う訳ないじゃないですか

俺達の手の内がバレちゃうし

この戦闘システムは、門外不出です」

「お、おうそうか、すまんな」

「それじゃあ、俺達、これから

ミーティングするんで」

「高校生なんだから、早く帰りなさいよ」

「はい、そうします」

俺達は、先にメインゲートに向かった

個別のミーティングルームに入り

俺は、左手首の端末につけた位置座標発信器をむしり取り
乱暴に投げた

「あゝくそっ、なんなんだよ

あのおっさん」

「弾だけにたまたま、いやウケる」

特殊なゴムの靴を脱ぎながら

勉強は、思い出し笑いをしていた

「いや、受けないし

あんなギャグ何百年前のギャグだよ

平成か昭和ぐらいまでいっちゃうね、きっと」

俺はロッカーを開け、埃混入防止用の蓋を
手首の端末にかぶせる

「しかしだ、みんな聞け！！

この頃、敵があまりにも弱すぎる。そして、その弱い敵から

俺は、一発喰らってしまった

その原因は、貴様だ。龍之介」

康太に指をさされ、ビクつく龍之介

「ご、ごめん」小さく呟く龍之介に

勉強は、弁護に回った

「はい、裁判長」

「弁護人、発言を許可する」

「ありがとうございます、裁判長

今回、龍之介さんは、確かにミスをしました
ですが、今までもそしてこれから

このような、ミスは誰でもしてきたし
これからも、誰かがするかもしれませんが
ですから、今回のミスは

チームの誰かがバックアップに回る

その対応性と順応性が向上したとは言えないでしょうか？」

「異議あり、それは結果論であり

話の論点がズレています」

大次が、発言し横で裕大がうなずく

「異議を認めます」

「そもそも、チームに入ったばかり

と言いますが、龍之介さん

あなたは、いつこのチームに入りましたか？」

「に、2か月前です」

そこで、待ったと言わんばかりに裕大が手を挙げた。

「裁判長、正確には2か月と20日です

ほぼ3か月と言っていていいでしょう

そんな彼を、『入ってばかりかし』と

言っているのでしょうか？ 以上で発言は終わりです」

「弁護士、意見がありますか？」

「いえ、ないです」

「では、判決をいいます

龍之介さんには、

俺の銃のメンテナンスと解体を命じます」

俺は、龍之介の机の上に俺のサブマシンガンを置いた

その瞬間、唖、大次、裕大から非難の声が上がった

「はぁ？ 異議あり

自分の銃のメンテナンスは自分でやれ」

「ただ単に、やるのが面倒くさいだけだろ」

「銃を粗末に使うものは、銃に泣くんだよ」

「ちよっと待て、俺の弁護士はいないのか？」

「いるわけないだろ
馬鹿」

「さすがにこの弁護は無理だな」

「そんな、勉強まで・・・」

ようやく、ジョークだと気づき

龍之介からも笑みがこぼれる

「いや、でもさすがに

龍之介の穴はどうにかしないとな

ポジションを変えるか？」

大次と裕大のどっちかと変えてみるか？」

全員、銃のメンテナンスが大体終わったところで

康太は、真剣な表情で言った

「それじゃ、逆効果だ

龍之介の実力を考えて勉強と一緒にしたんだから

例え、俺が裕大と変えたとしても

穴の大きさが大きくなるだけだぞ」

「ああ、冗談に聞こえないのが恐ろしい」

「うわっ、冗談のつもりだったのに

傷つくわ」

「ごめんね、僕のせいで」

うまく銃を解体できない龍之介から

勉強、銃を取り

「気にするな、お前が足引っ張っても

今度は、俺がカバーしてやる」

解体した銃を、龍之介の机の上に置いた

「あ、ありがとう」

「やっぱり、一番の解決策は五十嵐なんだよな」
そう言いながら、俺は

銃の手入れをする、五十嵐に視線を向ける

「悪いが、900を超えた距離じゃないと

俺に観測手は、いない

それに、二人になると目立つ」

「やっぱり駄目か・・

仕方ない、しばらくはこのままの状態でやるか

それじゃ、今日は解散

勉、帰るべ」

「おう、それじゃみんな
したっけな」

全員バラバラな返事を返す中

俺と勉は、部屋をでた

いくつもの、個別の部屋が並ぶ

長い廊下を歩いていると

扉の向こうからは、笑い声や喧嘩の声

たまに、発狂している奴がいたりする

まあ今回は、いないらしいが・・

「なあ、康太」

「ん？何だ」

「俺達、今度いつ試合できるかな？」

「んゝ、どうだべかな？」

もう俺達と試合したがる人いなくなってるからな」

「ここらへんじゃ、

もう俺達に敵^{かな}う敵はいないんじゃないかな？」

「そうだな、

せっかく道内一のガンズショップに来てるのにな」

「今度、オンラインで対戦してみるか？」

「でもあれは、有料だべ？」

「そんな金ないよ」

「はぁ？よく言うぜ、自分のおや・・・っと悪い」

「いいよ、気にするな」

おい、岸边」

受付に立っているヒョロとした男が岸边だ

「いらっしゃ・・・なんだお前らか」

「今度、オンラインやりたいから

期間限定でもいいから無料にしろ」

「お客様、無理です」

「もう、ここらへんで強い奴がいなんだよ

この店、紹介したのお前だろ

責任とれ」

「そう申されましたも

ここで強い敵がいないのであるなら

日本中、どこを探しても、もう強い敵はいません」

「嘘つけ　！！」

その時、岸边の後ろの壁に

ゴシック体で所々穴があいた文字の周りに

鎖が巻きつけられ日本のホラー映画のような感じで

『リアルウォー開催』と書かれた張り紙を見つけた

「リアルウォー？」

「ん？ああ、これか？」

岸边は、張り紙を一枚はがし康太に渡した

近くで見ると、ますます気味が悪い

ゴシック体だと思っていた文字は

実はレンガで、虫食いのような穴は銃痕だった

そして、鎖やレンガには、所々血のような物まで付いていた

「うわっ、なんだこりゃ？」

後ろから、覗いてみた勉も気味悪そうな顔をした

「大会だよ、非公式だけどな

ウォーゲームの日本一決定戦みたいなものだよ

優勝賞金300万円」

「300っ?」

あまりの額に後ろで驚く勉と、それほど驚かない康太

「おい、康太、今

まあそんなものかと思ったべ?」

「ん?・思ってたねーよ。

いやなまらすごい額ですな」

「まあ、二人とも

一応このパンフレット渡しとくから

参加するかどうかは、みんなで決めるといい」

「一応、考えておくよ」

店の外に出ると、あたりは暗くなっていた

明かりと言ったら、月明かりと

この店の、無駄に広い駐車場の街頭ぐらい

あとは、道路や歩道のまちまちとした明かりだけ

俺は、薄暗い中、岸辺に渡されたパンフレットを見ていた

「なあ、どう思うよ」

「ん?何が・ってうわっ、お前・

康太、まだそれ持ってたのかよ」

「いや、一応みんなに聞いてみないとな

これ参加料もかかるみたいだし」

「いくら?」

「一人一万」

「高っ・でもさ、その表紙、俺はやだな
誰が、デザインしたんだろうな」

「え、そうか？俺はこのスポーツの一般的な人から見た表現としては妥当だと思うぞ」

「それは、周りの人間だったらいいさ
でも、こっち側の人間がこんな表現をしていいのか？」

「いいべ、別に」

でも、このパンフ、おかしいんだよ」

「なにが？デザインか？」

「ちげーよ、参加応募期間が書いてないんだ
普通書いてあるだろ？」

「人気がないから、随時募集ってことじゃないの？」

「それも考えたけど、ならいつ優勝できるんだよ」

「ああ、そうか・・・」

「優勝賞金300万とも書いてない」

「え？そうなの」

「うん」

「なんだそりゃ？」

「しらねーよ」

そんな話を話していると

勉の家の前についていた

「まあ、そしたらまた明日、学校でな」

「おう、したっけ」

勉が家の中に入ると

家の中からは、楽しそうな声が聞こえてくる
毎回ではないが、妬ましくも思う

勉の家から、少し歩くと

周りから見れば立派な豪邸だが

明かりが一つも付いていない、我が家がある

玄関を開けても、誰もお帰りとも言ってはくれない

「ただいま・・・」

自分の声が玄関でむなしく木霊する
居間には、巨大なテレビと
誰も座らないでかいソファー
電話は赤い色が点滅していて
毎回一件の留守電が入ってる
そして毎回、聞かないで消去する
消去し終わると、二階に上がり自分の部屋に向かう

電気をつけベットに横たわる
いつもは、そのまま寝るのだが
たまに、違う事がある
今回はその違う事が起きた
カン、カン、カン

誰かが、部屋の窓ガラスに小石を投げてきている
窓を覗くと、向いの家の二階から
中村 洋子という言葉ば幼馴染と言う奴が、
窓をはさんでいるのに、聞こえる声で

「起きろーこのやろー」
と叫んでいる。嫌々ながら、窓を開ける
「なんですか？こんな夜中に

お向かいの中村さん」

「おい、幼馴染の中村さんだろ
それにまだ、11時だ」

「何の用だよ。洋子」

「あのさ、数学の宿題なんだけどさ」

「はぁ？やってるわけないだろ」

「誰が、あんたに頼むか

勉強に聞いてみてくれない？

最後の問題わかった？って」

「最後の問題？見せてみる俺が解いてやる」

「自分の教科書見れ」

「自分の教科書は学校にある」

「まったく、これだから・・・」

「いいだろ忘れ物は一回もしたことはないぞ」

「威張るな」

とにかく、勉君に聞いてみてよ」

「学年トップのお前が、わからないなら

あいつもわからないよ

それじゃ、お休み」

「え？ちよつと、もう寝るの？」

「寝る子は育つ」

俺は、向こうで引き留めようとしている

洋子は無視して窓を閉め、カーテンをした

とりあえず、勉には一応聞いてみる

『わからん』と一言、帰ってきたただけだった

それを、洋子に送ると

『知ってる（笑）』と来たので無視し、寝た

「だあゝ、なまら疲れたわ」

「康太は、寝てただけだべ」

「そうだよ。それだけなのに」

どうして教卓の前に、席移動なんだよ

人権侵害だ。それにお前らだって、たまに寝てるだろ」

「はい、はい、わかったわかった」

「次の授業何？」

「日本史だ」

「やった、説明書先生じゃん
マニユアル

また寝れる」

説明書と呼ばれる山岸先生とは、若いくせに教科書を持って、ブツブツとお経を唱える先生だ寝ていようが、何しようが怒られることはない

「それは、俺らのセリフだ

お前の場合、いつでも寝てるだろ」

そんなくだらない会話を周りの奴等としていと俺らの輪に入ってるんだが、やけに浮かない顔をした勉がいた

「勉、どうした？」

「ん？ いや、何でもない」

「なんだよ、浮かない顔して」

「いや・・実はな」

「？」

「・・最後の問題が結局わからなかったんだ頼む、誰か教えてくれ」

「止せ、しがみつくなっ！！」

ガリ勉菌が移る」

学校では、チームの奴とは別につるんではないみんなも別々の奴等とつるんでる

まあ、勉とは一緒だが

大次と裕大は別のグループだし

龍之介は、昔はいじめられていたが、

と言うか、いじめていたが、

チームに入り、俺達がいじめをしなくなると

他の奴等もしなくなり、昔は、いじめられ無視されていたが今では、たまに会話するぐらいの立場になっていた

ただ、五十嵐は、常に一人だ

いつも窓辺の自分の席で、本を読んでいる。見た目に似合わないし長身のくせに小さい本を読むから

より一層、本が小さく見える

それにどんな本を読んでるんだ？

茶色い紙のブックカバーをつけたまんまだから

タイトルすら見えない

え？ そんなバラバラな奴等が、どうしてチームを作ったかって？

うん・・まあ、それはまた今度

第一話 リアルウォー開催（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

ええまあ、あらずじであんな事まで書いておきながら
まだそこに至っていません。ごめんなさい

ご意見、感想お待ちしております。

これからもよろしく願います。

第二話 リアルウォー参加

さて、それでは歴史を少し・

ウォーゲームは、昔からひどい批判をされていたわけではない
もちろん、昔から批判はされていたが
今ほどではない

昔は、この国でも

かなりのプレイヤーや観戦者がいた

俺は、その中の観戦者側だった

やりたいと言う気持ちは、抑え
見るだけで我慢していた。

俺の方がもつとうまくできると言う気持ちも少しはあった

だが、ある事件を発端に

このゲームは、批判されプレイヤーも観戦者も
極端に減った

そのある事件とは、世界各国で続いていた

内戦や紛争、それによって

先進国が、みるみる豊かになった

この国も例外ではない

3年か4年前に内戦や紛争は、一時的に停戦したものの

この事件は、『創られた戦争』『偽りの戦争』

と呼ばれるようになった

え？その名前の理由？そこまでは覚えていない

とにかく、ウォーゲームは、その戦場を再現するかのよう
に新たなフィールドを造り

その動画を、誰かが無料動画サイトに載せたりしたことで
ウォーゲームは、社会的に批判され

今の状況に至る

そんな中、俺はみんなには内緒で
プレイヤーになり、ここから離れた小さな店で
密かに楽しんでた

そんな中、同じ制服を着た人と鉢合わせ
それが、勉だ

昔、勉とはよく観戦者として一緒に見に行ってたから
誰にもバレたくなかったが、勉には一番、内緒にしておきたかった
まあ、それは互いに同じ心境で

二人の秘密にしようとしていたが
そこでバツタリと五十嵐に会ってしまった
気まずい空気が流れる中

大次と裕大までここに来てしまった
全員で、考えた結果、チームを作ろうと言う訳で
チーム名が決まらずみんなで話し合う中
痺れを切らせた五十嵐が

未入力で決定ボタンを勝手に押すとチーム1になったので
それに決定した。

その後、龍之介は、小さな店ではなく
今、使っている店で発見しチームに入れた

『おい、康太 起きろ』

頭の中で、洋子の声が聞こえる

「ああ、くそ回線オンにしてたのか」

俺は、机から延びるコードを手首の端末に繋いだまま
寝ていたらしい

手首から抜こうとすると

『コラっ、抜こうとするな ！！』

次、康太が当たる番だぞ』

回線を使い洋子が話しかけてくる

『ああ？何が』

『数学だよ宿題』

『まじか？どの問題』

机の中から、ノートを取り出し起動ボタンを押す

画面が開くと、数学の教科書のボタンをタッチする

『最後の問題』

『まじか、わかんねーよ』

教えてくれ・・・

あれ？ってか説明書マニュアルの授業は？』

『もう、とっくに終わってる』

『ただ、マジ寝してるのよ』

『洋子、最後の問題わかったの？』

『わかってる、今から送信する』

『ありがとう、助かった』

『はい、それじゃあ、最後の問題は』

『お、康太が起きてるじゃないか』

『じゃ最後の問題、やってもらうかな？』

『はい』

今、受信した。模範解答を生徒全員に一斉送信する

担任の先生は『はい、よくできました』と言っているが

クラス全体が、クスクスと笑い始めた

『ば、馬鹿じゃないのあんた　！！』

回線のボリュームを最大にされ

洋子の声が、頭の中に響く

『うわっ！！』

思わず康太、起立っ！！

『ん？康太どうした？』

「いえ、何でもないです」

そして着席

何事かと、洋子の席は後ろの方だから

振り返る。すると洋子は顔を真っ赤にしていた

「お前、気付いてないのか？」

横の席にいる勉に尋ねられた

「何があったの？」

「これ見てみる」

勉は、自分のノートを見せ

模範解答以外の添付ファイルがあることを見せる

俺は、自分のノートの添付ファイルを

急いで、開くそこには、

《寝てんじゃないわよ、バカ》

と直筆で書かれた画像があった

「そう言う事か・・・」

「まあ、おのろけ話はあとで聞こうか」

「そんなんじゃないよ」

俺は、ふてくされながらも

回線を使い

『ごめん、気付かなかった』

と言ったが、向こうが回線を切っているのか

返事はなかった

「いやゝ、説明書の授業もある意味、面白かったけど

数学の授業で、まさかあんな事が起こるなんてな」

「うるせえ、気付かなかったんだよ

わかった、大次これから一階の接近戦ルームに來い

サシ
一対一で勝負だ」

「冗談じゃない、ナイフのみで
お前に敵う奴なんていないよ」

俺は、ガンズショップのミーティングルームで
全員がそろうのを待っていた
全員揃えば、リアルウォーについて
聞いてみようと思っていた

「ああ、そうだ康太

この紙、見たか？」

大次と裕大が、取り出した紙は、リアルウォーのパンフだった
「お前ももらってたのか」

横で驚く、勉

「お前もって事は」

「ああ、俺らももらった」

「すみません、遅れました

あつ昨日、こんなパンフレットもらったんだけど」

そう言いながら、龍之介が入ってきた

「お前もか・・・」

「え？」

最後に五十嵐が入ってきた
机の上に並べてあるパンフを見て
五十嵐も鞆からその紙を取り出した

「全員、貰ってるってことか
で？ どうする」

みんなに聞いてみると

「どうするって、金がねーよ」
と勉が即答

「いや、優勝賞金を分けてくれるなら

出してやってもいいって岸边が言ってたぞ」

「面白そうじゃね？」

俺は、参加してもいいぞ」

「で、でもこのデザインはちょっと気味が悪いです」

全員であだこうだ言ってるが一人喋ってない奴がいる

「五十嵐はどう思う？」

「・・・お前らに任せる

ただ、大会があるならこの店でなかなか試合ができない俺らにとっては好都合なんじゃないか？」

「んー、そうだよな

とにかく、この答えは、帰るときに決めよう

一応、受付で試合の申し込みはしておいたから呼ばれるまで各自、自由行動」

「了解」

全員が部屋を出る中

パンフレットの一枚が机の下に落ちた

土造りの崩れた建物が広がる市街地の中

ナイフを片手に息を潜^{ひそ}め

地面は砂利だが、なるべく足音を出さないようにゆっくりと歩く

音は、自分の息と小さな足音

市街地を流れる風の音しか聞こえない

近くで金物が、カランと音をたてビクつく

その瞬間、後ろから誰かに首を抑えられ

膝をけられ両膝をつく

「しまった」そう呟く時には、もう遅い

ナイフで、肺と心臓一突きされた

「よし、俺の勝ち
ざまあみろ」

「だあ、くそっ・・やられた
康太どこに潜んでいるんだよ」

「へへっ、内緒だ」

ヘルメットを外し覆面を取る

周りのメガホンから流れるゲーム結果

『ゲーム終了』

康太選手 v s 大次選手

勝者、康太選手』

後ろを振り向くと

康太が覆面をしたままガッツポーズをとっている

「昔なら、ここで歓声上がるのにな」

「ああそうだな」

今は、誰も見ていないし歓声すら上がらない

「さあ、戻るべ

勉強もそろそろゲーム終了してるべ」

「そうだな」

康太は、大次を起こし

ゲートに向かった

ゲートが開くと勉強が待っていた

「よお、一方的な展開だったな」

「そういう、そっちはどうなんだよ」

「二対一なのに、勉強の勝ち」

「かぁ、情けねえ」

「よく言うぜ、金物の音にビクつきやがって」

「はいはいそうですね」

「なんだ、じゃあ五十嵐はまた最上階か？」

「そうじゃね？ 狙撃バカだからな」

みんなで行ってみるべ」

「おお、いいね」

みんなで四階まで上がると

そこは、かなり静かな場所で

時折銃声が聞こえるそんな感じだった

そんな中、一つ一つ区分けされた場所で

五十嵐を見つけ

目標物の設定を見て勉が驚く

「おい、見ろよ

目標物との距離」

そこには、赤い文字で1600と書いてあった

「本気^{マジ}かよ、届くのか？」

全員が見守る中、

五十嵐は寝そべった状態で銃を構え

引き金を引いた。

発砲音が鳴り響き

目標物は、しばらくしてからはじけた

『1600m成功』

「うをおおお　！！」

全員が唸る

「どうした、お前ら？

いつからここにいる」

全員がここにいる事に今気づいたのか？

「いや、すごくなって思ってたさ」

「そうか？」

俺以外の奴は「よし、俺もやってみよう」

と言う事で、レンタルのライフルを取り

区分けされた部屋に入ってしまった

電光掲示板には、最高記録ベスト3が載っていた

「あのうちのどれかに、お前の記録もあるのか？」

遊び半分で聞いたつもりだった

なぜなら、記録はすべて2000mを超えていたからだ

「ああ、全部俺のだ」

そう返ってくるとは思わなかった

「なあ、初めは距離どれくらいがいい？」

勉の声がなかったらしばらく固まっていただろう

「300ぐらいがいいんじゃないか？」

勉は「わかった」と言うときまた部屋に入った

「どうして、300なんだ？」

「俺だったら、必ずヘッドショットを決めれるから

お前もやってみたらどうだ？」

「いや、俺はいいよ

そんな集中力、無いから」

「そうか」

「なあ、お前はと思う？」

「なにがだ？」

「リアルウォーだよ」

「どっちでもいいぞ」

「それが、困るんだよ

まったく自己主張のない奴だな」

「・・・まあ、俺達のレベルがいったいのくらいなのか

日本中の奴等と戦ってわかるって言うのは

いい事なんじゃないか？」

「じゃあ、お前は賛成か？」

「そうだな」

「そんじゃ、全員一致で参加決定だ

実は、ここに向かう途中でみんなには聞いてたんだよ」

「そうだったのか」

「ああ、そうだったの」

俺達、全員で受付に行った

「岸辺」

「いらっしやい

で？どうするの」

「俺達、参加するぜ」

「はい、わかりました

登録は私がしておくよ

あと、多分今日、さっそく試合があると思うから
パソコンにキーボードで何やら打ち込んでいる

「え？すぐに？」

何の作戦もたててないよ」

「大丈夫、この前の森林と同じ所だから
新たに作戦をたてる必要もないでしょ」

「おお、俺達の得意分野だな」

「40%」

「え？」

「初参加の人が勝つ確率

はい、登録完了

うん、やっぱり今日から試合があるね」

「今すぐ？」

「違います。それは主催者側も準備があるから

この紙に、必要な武器や装備にチェックを入れて
武器や装備は、向こうで渡すことになるから」

一人ひとりに紙を渡され、

そこには武器の名前がずらりと並んでいた

「どれでもいいの？」

「もちろん、なんのための参加料だと思ってる

「それでもOK」

「うわっどうしよう

悩むな」

その紙には、今使っている奴から

最新のままでずらりと書かれてあった

「なるべく、使い慣れてる奴にしな

使い慣れない武器使って、負けましたなんて

洒落しやれにならないから」

全員が、今使っている銃を選び

試合までまだ時間があつたので

みんな、一時帰宅した

勉とも、「試合、楽しみだな」なんて話して
別れた

俺は、まっすぐ家には向かわず

小さな石ころを何個か拾って家に入った

部屋に入ると向かいの電気がついていたので

石をそっくりと投げた

昔だが、石を投げて窓ガラスが豪快に割れてから

怖くてそっくりと投げるようにしている

窓から様子を窺うように出てきた

洋子は、なぜかバスタオル一枚だった

あわてて洋子は姿を消し

しばらくしてから、服を着て登場した

「馬鹿、変態、なんでいつもより

帰宅が早いのだよ」

「なっ、別にいいだろ

それより、今日の事謝りたくて」

「どの事よ、今の事だったら

絶対許さない」

「それはカーテンをしないお前が悪い
あゝヤダヤダ

男家族がいない家庭は、みんなそんな恰好してるのかね」
「うるさい、男しかない家庭にそんな事言われたくない
それにね、あのメールのせいで

今日、部活でも話題にされたんだからね」

「いや、だからそれはごめんで・・・」

「嫌、絶対に許さない」

洋子は、豪快にカーテンを閉めた
「あ・・・」

そんな事をしている内に
時間が来ていた

「そろそろか・・・」

俺は、家から出て勉の家に向かおうとした

「こんな夜中にどこに行くの？」

窓から身乗り出す洋子がいた

「まだ11時だろ、夜中じゃない
遊びに決まってる。じゃあな」

勉の家に向かった

勉と合流すると

ガンズショップではなく、駅に向かった

駅前のバス停に11時30分貸し切りのバスが来る

それに乗って試合会場に行く

そう教えられ、向うと全員揃っていた

楽しみな、なんて会話をしていると

バスが来た。何の変哲もないバスだ

俺達が、乗り込むと扉が閉まり

バスは出発した。バスには、俺達しか乗っていない長い間、バスは見た事のない道を走り着いたところは、知らない山奥だった

「試合が終わりましたら

お迎えにあがります」

運転手はそう言う一枚の紙を渡しどこかへ消えた

紙には、相手の人数と武器が置いてある場所を示した地図が書いてあった

ペンライトを使い、武器が置いてある場所に向かった

「あった、これじゃね？」

ペンライトで当てた場所に長方形の黒い鞆が

俺達の人数分、置いてあった

一つ一つに名前が書いてあり

誰の物かが一目でわかった

鞆を開けるとそこには

解体された銃と装備が入っていた

全員が、黙々と組立て、装備に不良がないかチェックした

「いやゝ緊張してきた」

「あと十五分で試合開始だよ」

「楽しみだ」

「敵は何人なんだ？」

「五人だ」

「俺らより少ないのは珍しいな」

なんて、会話をしていると

銃を隅々までチェックしていた五十嵐がハンドガンをもってこっちに近づいてきた

「おい」

「え・・・？」

一言そう言うと、銃口を下に向け
引き金を引こうとした

「馬鹿・・・」

全員が耳を閉じる

暗い森の中に馬鹿デカイ銃声が響く

そして、ある光景に全員が息をのみ、目を疑った
地面に穴があいている

五十嵐は、地面にあいた穴を掘り

そこから、弾を取り出した

全員が、この光景に固まった

誰もが夢であってほしいと願った

だが、これは夢ではなかった

俺は、声が裏返りながらもこの疑問をみんなに聞きたかった

「・・・これ、ほ、本物？」

第二話 リアルウォー参加（後書き）

なんとか、あらすじの途中までは
書けたのではないだろうか・・

第三話 引き金を引け

これ・・・本物？

どうして、地面に穴が開く

なんで、本物の銃がここにあるんだ

「康太、落ち着け、向こうに無線を入れろ」

全員が、呆然とする中、五十嵐だけが、落ち着いていた。

「あ、ああ・・・そうだな」

五十嵐の言う事を素直に聞きいれ、カバンの中に入れてある無線を探す。

だが、探す手が震えてうまく動かない

「なんで・・・なんで、え？どうして」

状況を段々と把握していくと段々と声が出てくる

「落ち着け、龍之介　！！」

「落ち着いてられるか、なんで君は、落ち着いてられるんだよ」

「ここで、パニックだったって何も始まらない。みんなもだ、とにかく向こうに無線を入れてみないと　何も始まらない。とにかく落ち着くんだ。」

五十嵐が、みんなを落ち着かせる中

俺は、ようやく無線を見つけ

共通の周波数に合わせた。

「こちらチーム1、応答してください。こちらチーム1、応答してください」

しばらく、雑音が聞こえていたが、返事がきた

『こちら鷹の目、どうした？』

返事が、来た事に安心しました逆にパニックになってきた。

「お、俺達の、武器が本物なんです。だから、どうしたらいいのかわからなくて」

『なんだって？すまないがうまく聞こえない もう一度言ってくれ』
もう一度言おうとスイッチを押したが、五十嵐が、俺から無線を取った。

「俺達、この大会に初出場なんです。それで、武器を調べたところなにかの手違いか本物が入っていたんです。そちらの方は、どうですか？」

簡潔に五十嵐が、今の状況を向こうに伝えた。

すると、向こうから不気味な笑い声が聞こえてきた。

一人だけでなく、無線の後ろからも笑い声が聞こえた。

『なるほど、お前ら何も知らないで この大会に参加したのか？
バツカじゃねーの、これは本当の殺しあいだ。』

本物の銃があって何がおかしい？』

先ほどとは、違う口調で喋る向こう側の人に

俺達は、全員血の気が引いた。

『いいか、俺達はあと10分後にお前たちを殺しに行く。別に泣き叫んでてもいいぞ。カンケー無いから』

わけがわからない

俺は、パニくる頭の中で脳みそをフル回転させた。

五十嵐から無線を取り

「だったら、俺達のコードを教えます。コードを教えたら、試合は終わるんですよ」

無線からしばらく応答がなかった。

コードとは、アルファベットと数字からなる

番号で、コードを入手し入力すると

武器にロックがかかり、その時点でゲーム終了となる

『だが、それを聞いてもコードを携帯パソコンに打つかどうかは俺達の判断だ。俺達の判断は、打たない。お前たちを殺す。以上、通信終わり。安心して泣き叫べ』

それからは、一切通信は繋がらなかった。

それから、みんな今、置かれている状況を理解し
その場に座り、誰も口を開こうとは、しなかった。

「ちょっと、聞いてください。お願いです。応答してください」

ただ一人、無線に必死で話しかける康太を除いては

「康太　！！ウルセーよ　もう、繋がらないんだ諦めろ・・・ってか、
少し黙ってろ」

痺れを切らせたのは大次だった。

「なんだと、諦めてどうする。お前らみたく、黙ってうつむいてろ
ってのか？」

「そうだ、少し黙ってろ」

「黙っててどうする、そのまま殺されろってか？」

「そんな事言っていないだろ」

「なんだと・・・　そもそも、お前があの時この大会について言い出
さなければ・・・」

続きを言おうとすると

勉が、途中で割って入ってきた。

「おい　！！　康太　それは、違うだろ。大次が言い出さなくてもき
つと、俺達のどちらかが言い出してた。とにかく、これからどうす
るかだ」

「ば、僕は、降伏する。死にたくない」

龍之介の降伏と言う言葉に心が揺れたが

無線でのやり取りを思い出し　また、どん底まで落とされる。

「無線聞いてただろ、あいつ等・・・俺達がどんなに命乞いしても殺
す気だったぞ降伏したって意味ねーよ」

俺は、涙声ながらそう訴えた。

「じゃあ、どうすればいいんですか？僕は、死にたくない、人も殺
したくない」

「俺だって死にたくねーよ」

「俺もだ」

みんながバラバラに言い合う中、一発の銃声が鳴った。
銃を撃ったのは、五十嵐だった。

「みんな、落ち着け。全員、死にたくないのは誰でも一緒だ。もちろん、向こうもな・・だったら、やることは一つだろ」

五十嵐は、立ち上がり、右の拳で自分の胸を二回叩き、拳を前に突き出した。

「いつも通りだ」

今の動作は、俺達が試合をする前にする

決まりの動作だ『心一つに』

五十嵐は、そのまま全員が立ち上がるのを待った。

最初に立ち上がったのは、勉強だった。

胸を二回叩き、拳を突き出す。次に裕大が立ち上がった。

龍之介、大次が立ち上がり拳を突き出した。

「リーダー」

立ち上がろうとしない康太に勉強が声をかけた。

康太は、立ち上がり胸を二回叩き拳を突き出し深く深呼吸した。

「俺達は、一心同体、必ず生きて帰ろう」

これも決まり文句だ。

それを言い終わると、みんなで突き出した拳をぶつけあう

ピピピと腕時計が鳴った。

ちようど、試合開始の時間だ。

「行くぞっ!!」

全員が、みんなを信じ持ち場につく

『敵は五人だ。セオリ理論通りなら、向こうは、ファイフマンセル五人一組で来るはずだ。

俺が中央の指示係をやったら合図だ。ポイントマン全員で撃ちまくれ』

全員が、持ち場に移動する中

耳につけた無線から、五十嵐の声が聞こえてくる。

今までなら、声もなかなか聞けない奴の声を聞くとなんだか落ち着く

『敵発見、正面から近づいてくる。このままだと俺達の巢には、入らない』

勉から無線が入る。

「わかった。俺が行く」

康太は、立ち上がり

右の少し坂になった所にいる勉の指のサインで敵の位置と武器を把握する。

俺は、敵の方へ進み向こうから見えそうで見えない位置を保ちながら巢におびき寄せる。

敵は、俺についてくる。

巢の前まで、おびき寄せると俺は、急いで姿を消す。

あらかじめ用意しておいた草の中に身を潜め、銃を構え息を殺した。敵は、ジワジワと巢に入ってくる。

車に轢かれそうになった時、一秒が十秒に感じることもある。

だが、今それを俺は感じている。敵の動きが、すごく遅く見える遅いせいで、嫌な考えまで、浮かぶ・・

俺は、本当に引き金を引けるのか？

他のみんなは、引けるのか？

例え、俺が引けてもみんなはどうか？

引き金を引くと言うのは、人を殺すと言う事だ。

俺が、人殺しになる。

人ってそんな、簡単に殺していいものなのか？

俺にそんな事は本当にできるのか？

見ず知らずの人を殺せるのか・・

『みんな、黙って聞け』

五十嵐からの一本の無線で我に返った。

『今、本当に引き金を引けるのか？もし、俺が引かなくても他の奴

がやってくれるんじゃないのか？　・ ・ ・とか、思っている奴がいると思う。けどな、一人が引き金を引かないことで、そいつが死ぬのは仕方がない。でも、俺達のこの戦術では、一人が引き金を引かないことで死ぬのは、俺たちじゃない、康太だ。それを肝に命じておけ』

そうだ、誰かが引き金を引かないことで撃たれるのは俺だ。

なぜなら、敵を正面で待ち構えるのは、俺と五十嵐だが、あいつは、300m先にいる。

そして、他の奴等は、左右にいるが、40m以上離れている。

俺は、15mもない・ ・ ・狙われるとしたら、俺だ。

『死ぬのは俺たちじゃない康太だ』

その言葉が、重く木霊する。

もし、誰も引き金を引いてくれなければ俺は死ぬ。

俺は、みんなに命を預けているようなものだ・ ・ ・

俺はそれでいいのか？

『大丈夫だ。康太は死なせない。全員死なせない』

勉の声だ・ ・ ・

この声で俺は、救われた。

大丈夫だ、みんなを信じろ・ ・ ・何のための決まり動作と決まり文句だ。

この一瞬のためだ。

「チェック」

五十嵐のカウントが始まった。

大丈夫だ。やれる

「チェック」

みんなを信じろ

みんなを信じるんだ

「チェック」

銃声が一発鳴った。

中央にいた人の後頭部が、色々な物をぶちまけながら仰向けに倒れた。

それを合図に、左右に待ち構えていた勉達が一斉に撃ち始めた。

今だ、引き金を引け、引け、引け　！！

引き金を引くんだ・俺も身を乗り出し

引き金を引く・・・引け！！

「うわああー！！！」

覚悟を決め引き金を引く

サブマシンガンは、一発一発、手に振動が、伝わってきた。

俺が撃った人は、大次も横から撃っていた。

弾丸を浴び、その場で、しばらく立ち尽くし倒れた。

また一人、ハンドガンを取り出し俺を狙って引き金を引こうとしていた。

そんな、あいつは他の奴がやっているはずだ。

俺は、銃口をそいつに向けたが間に合わない

一発の銃声が聞こえた。

弾丸が高い音を立てながら俺の耳の横を通り過ぎたのを感じた。

その瞬間、そいつは俺以外の全員から一斉射撃を喰らい

体を赤く染め服はズタボロになりその場に倒れた。

「康太　！！」

そう叫びながら、大次達が駆け寄ってくる。

「康太、大丈夫か？」

俺は、無事だが呼吸がかなり乱れていた。

目は大きく開き、ある記憶がフラッシュバックした。

台所で母親が、倒れてるのを見つけ
駆け寄るとその場には、大量の血が溜まっていて
片手には包丁、もう片方の手は、切り落とされていた。
俺は、とっさに包丁を母の手から離し、握り締めた。
すると、そこへ父親が息を切らせながら
やってきた。俺は、父親に向かい何かを言った・

「康太、しっかりしろ　！！」

大次が、俺の体をゆすっていた。

「あ・・・大丈夫だ」

「よかった・・・」

俺の横では、涙を流している裕大がいた。

「勉と龍之介は？」

疑問に思った俺は、大次達に聞いた。

「あそこだよ」

その声には、何やら怒りが混ざっているように聞こえた。
目をやると勉が、龍之介の胸倉をつかみ叫んでいた

「なんで、引き金を引かなかったんだ」

「ごめん、ごめんよ・・・わざとじゃないんだ」

「そのせいで、康太は死にかけたんだぞ」

「そ・・・それでも　僕は、僕は人殺しなんかしたくない」

「てめえは・・・」

勉は、拳を強く握り龍之介を殴ろうとした。

だが握った拳は、龍之介に届く前に
五十嵐に手首を掴まれ、止められた。

「よせ、必ず一人は出ると思ってた。そういう奴は、殴ったって変
わらん」

「だからって・・・」

「だからだ、おい、康太 お前は、こいつに命預けられるか？」
突然、俺に振られ驚いた。

俺は・・・

「む、無理だ」

「なら決定だ、龍之介をチームから外す」

五十嵐からそんな言葉が出るとは思わなかった。

一番胸に突き刺さっているのは、龍之介だろう。背中を丸め、俯いてしまった。

それを見た大次は、弁護に回った。

「お、おい、いくらなんでもそれは、ないだろ」

「もともと、俺達は5人のチームだ。何も支障は出ない」

「本気で言ってるのか？ ジョークでも通じねーぞ」

「もちろん本気だ。」

口を詰まらす。大次に代わって俺が続けた。

「仕方ないよ」

「ああ、俺もそう思う。あいつはもう、俺達の仲間でもなんでもねえ」

勉は、龍之介に指をさしながら憎しみをこめて言う

「みんな、落ち着けよ・・・龍之介だって・・・」

大次は、助け舟を求め裕大に目をやる

だが、裕大も首を横に振るだけだった。

「大次、いいか、俺達がこれからやろうとしている事は、ああ言う事だ」

五十嵐は、そう言いながら指をさした。

その方向には、なるべく触れたくなかった。

そう思い、誰も口には出さなかった光景が映し出された。

5人の死体だ・・・俺達のすぐ横に転がっている。

なるべく見たくなかった、目を覆いたかった。

体の原型は、留めているが所々、肉片が飛び散り、グニャリと折れ

曲がった体

俺達が、俺が、こいつらを殺した・・

そう思うと、突然、胃がひっくり返った。

俺だけではない、おそらく全員吐いていた。

ただ、五十嵐だけは、立ち尽くしているだけだった。

俺達が、こいつらを殺した。

自分が、生き残りたいがために・・口の中は、胃液まで出てきて酸っぱい味と匂いがする。

目には、涙があふれてきた。

「多分、これから続くぞ」

五十嵐がそう呟く中、

「お、おい、こいつ・・」

勉強が死体の一人に指をさした。

死体は、全員が覆面をしているが指をさした奴は、顎が無くなっていて覆面がめくれ上がっていた。

そして、そいつの顔は見た事のある顔だった。

「マニュアル説明書だ・・山岸先生だよ」

第三話 引き金を引け（後書き）

なんとか前書きを追い抜く事に成功しました。

これからもよろしくお願いします。最後まで読んでいただき本当にありがとうございます。

ご意見や感想、お待ちしております。

第四話 創られた戦争

「ええ、突然だけど山岸先生は、実家の自営業を継ぐことになり、退職なされた。だから、しばらく日本史は、臨時の教員が来るまで、自習だ。以上、HR終わりっ」

担任が、教室から出て行った。俺は、なぜかわからないが、後を追った。

「先生・・・」

「ん？どうした」

「説明・・じゃなくて、山岸は本当にやめたの？」

「山岸『先生』だろ。ああ、今日電話があった。まったく勘弁してほしいよな。」

江戸時代から続く、伝統ある酒蔵だか何だか知らないが突然辞めやがった。こっちの身にもなれって感じだよ。・・・どうかしたのか？顔色悪いぞ？」

「いえ、何でもないです」

「そうか・・・体調悪くなったらすぐ、保健室行けよ」

担任の名前は、先田 竜生、略して『先生』と呼ばれている。

その後の事は、覚えていない

とにかく、放課後になったらすぐに学校を飛び出した。

行先は、決まっている、ガンズショップだ。

「岸辺　！！」

「いらっしやいませ、ミーティングルームに行け。みんな待ってる」

岸辺は、あの出来事が終わった後、あの場所にきて、いつも通りに学校に行けと言われた。

なぜ、その通りにしたのかわからないが、パニックっていた俺達は、

そのまま従った。

ミーティングルームに行くと勉と大次、裕大がいた。全員、軽く挨拶しただけで何もしゃべらないしばらくすると、龍之介が、五十嵐に連れられやってきた。

龍之介は、今日は学校を休んでいた。

「龍之介・・・てめえ」

いつもなら、勉の後ろに隠れる龍之介が、勉からの睨みのきいた低い声に五十嵐の後ろに隠れた。

「やあ、みんな集まったね」

岸辺が、軽い口調で扉を開けてやってきた。

だが、扉の横にいた五十嵐からの強烈なパンチを食らいロッカーまで吹き飛んだ。

「い、いきなりひどいな」

俺は、昨日の出来事があったて抑えていた感情が爆発した。

「どういう事だか、説明しろ　！！」

「さて、みんな落ち着け。これから、説明するのにタコ殴りにされたら喋れないじゃないか・・・はい、みんな席について」

相変わらず、軽い口調にイライラしながらも全員席に着いた。

岸辺は、自分の鼻から血が出ているのに気づきティッシュを鼻に突っ込んだ。

「はい、じゃあ説明します。とにかく、君たちは別に逮捕されることもないから　安心していいよ。死んだ人たちも死んだことは公表されない。このゲームは、非公式だけど、政府公認の元で実行されてます。・・・まあ、そんな事説明されても君たちにはわからないか」

岸辺は、鼻を押さえながら上を向き鼻血が喉を通ったのか、咽ていた。

「それから、この事は無論口外してはならないよ。左手につけた位

置座標特定機、外れないだろ？それ、盗聴器も入ってるから喋ったら殺されるし、下手したら君たちの家族も殺されるよ」

その言葉に、全員がグツと息をのむ

「それから、まだこの戦いは続くから。」

次は、三週間後フィールドは、市街地と森林の合わさった場所だ。

また、バスで移動するから」

「俺は、行かないぞ。あんな事、またやらされるのかよ」

大次が、岸边にそう言う

「別にいいよ、来なくても。バスに乗らなかつたら死ぬだけだから。もちろん君達の周りの人も。」

まあ、君達の中には、死んで欲しいと思っている家族がいるみたいだけ“どく”」

その言葉に、ピクリと反応したのは、俺と腕を組んだまま動かなかった五十嵐だ。

「はい、これで説明終わり。じゃね」

岸边は、立ち上がり扉から出ようとしていた。

さっきまで飛びかかってやろうと思っていた気持ちには、どこかに失われていた。

「待てよ。まだ重要な事言っていないんじゃないのか？」

五十嵐の言葉にドアノブに手をかけようとしていた岸边の手が止まった。

「お前は、国に俺達を売ったんだろ、いくらだった？」

「・・・一人頭十五万、まあいい額だったよ。君は、二十万だけだね」

「俺達を売った？何のことだ」

勉が、五十嵐に質問をする。

何も喋ろうとしない五十嵐に岸边が深くため息をつきながら話し始めた。

「参ったな、お見通しってやつか・・・まあ、ここからは話す規則

でもないが

話してはいけないって規則もないから、教えてあげるよ」

岸辺は自分の頭をなでながらゆっくりと席に座った。

「『偽りの戦争、創られた戦争』って知ってるかい？あれでこの国は、莫大な利益を得た。こんな田舎に、こんな馬鹿デカイ、ガンズショップを作れるのは、そのお陰だ。

戦争をしている、国に、この国の最新兵器を売りまくったんだ。もちろん、両方にね。世間では紛争とか、内戦だとか言ってるけど、ありやもう、ひどい戦争だ。激化の一途をたどってた。

まあ・・激しさを増す原因は、俺達が武器を売っていたからだけだな。

だから、売らなくなれば、戦争はピタリと止み、今のような停戦状態が続いていると・・

・・で、リアルウォーの原因なんだけど・・この国は、戦争経済に依存しすぎた。

また、経済がどん底に陥るってな、そこでこのゲームができた。周りの国々から武器を貰う。

そして、この国でゲームとして武器兵器の威力を実演する。

その宣伝料を諸外国からもらうと・・その役者を俺のよう^{キャスト}な人達が紹介する。

俺は、その紹介料を貰う。」

話を聞いてるだけで、腹の底からフツフツと怒りがこみ上げてくる。それと同時に、今まで知らなかったこの国のあり様に、絶望を感じる。

「俺達の命は、そんなものなのかよ。・・人一人の命は、そんな物で買えるのか!？」

勉強が、椅子を飛ばす勢いで立ち上がった。

「仕方ないだろ、僕だって命は惜しい。紹介しないと僕だって消されるんだ。」

誰だって、自分の命が一番大事だ」

「ねえ、お願い　僕だけでも助けてくれ。僕は、このチームから外されたんだ。」

もう関係無いんだ。僕は、今聞いたことは誰にもしゃべらない。だから、バスに乗らなくてもいいでしょ？」

龍之介が必死に岸边にしがみつき懇願する。

「だから言っただろ？別に乗らなくてもいいって。ただ、殺されるけどね」

「嫌だ、僕は死にたくない　死ぬのは嫌だ。嫌だ、嫌だ、嫌だ。ヤダよ」

「ああもう、うるさいな」

何が起こったのか、わからなかった。

必死にしがみつく龍之介が、見えなかったが岸边が何かした瞬間、龍之介の後ろに回り腕を固め顔を机に押さえつけられていた。

「気付かなかったのかい？僕は、君達なんかよりもずっと強い。僕が笑顔のうちに、この部屋から出さないと殺すよ」

固めていた腕をさらに締め付ける。龍之介が叫び声を上げる。

「お前、頭おかしいんじゃないか？」

五十嵐が、岸边の後ろに回り岸边の髪を鷲掴みにした。

「お前が強いんじゃない、龍之介が弱すぎるんだ」

五十嵐は、岸边の顔を勢いよく机に叩きつけた。

岸边は、鼻からだけじゃなく唇を切ったのか、口からも血が出てきた。

「そ、そうだよな君は・・・」

続きを言おうとした岸边に髪を掴んだまま、頭を持ち上げ顔面にパンチを喰らわせた。

「ぎゃあ、ああ、歯が、俺の歯が」

気がつく、俺の足元にも歯が一本転がっていた。

そして、五十嵐の血が付いた、拳にも歯が一本突き刺さっていた。

「チッ、おらっ返すよ」

五十嵐は、拳から刺さった歯を抜き、その場でうずくまる岸辺の顔をまた持ち上げ口を開かせた。

「お願い、やめ、やめて あゝあああゝ」

五十嵐は、持った歯を抜けた場所に無理やり突き刺した。

「うわゝ・・・」

ヒィヒィ言う岸辺に俺は、完全に血の気も引いたが、俺みたく血の気が引いた奴もいるが、逆に怒りがこみ上げている奴もいた。

「俺達が、笑顔のうちにここから出て行け。そうじゃないと、今度は俺以外の奴がお前に歯を突き刺すぞ」

岸辺は、俺達を睨みつけたが、すぐさま扉を急いで開け出て行った。

「よくやった。五十嵐」

絶賛するのは、裕大だった。

「ちょっと、やりすぎだった気もするけどな。あいつが可哀想だ」
同情するのは、大次

「いや、あれぐらいが、ちょうどいい俺はスッキリした」
そう言うのは、勉だ。

「それより、これからどうする？手首には、これが付いたまんまだ」
俺は、外れない発信器を隠すために付けておいたリストバンドを外し指をさした。

「まだ続けるっていうのか？」

大次は、俺を睨みつけた。

「でも、続けないと殺されるって言ってただろ」

「だからって、あいつ等に従うのか？」

「でも、俺達は人質を取られてる」

勉は小さく呟き、そして続けた。

「あいつ等言ってたろ？家族や周りの人が殺されるって」

「はったりだよ。そんな事できないって」

「でも、実際にこのゲームは昔から続いてるし今も続いてる」

裕大は、そう言うのと鞆からパソコンを取り出した。

「これ、見てくれ。これは、どこかのプレイヤーが、勝手にネットに載せてるんだと思う」

パソコンを開くと、ある動画を再生させた。それは、一人のプレイヤーの目線だった。

場所は建物の中で長い廊下だった。前には二人の仲間が映っている。廊下の両端に立ち手で情報を伝える。

どうやら、本人は支持係らしい。ポイントマンこいつの手の指示で、前の二人が進む

突き当りに差し掛かり二人が同時に両側の廊下に銃を構え身を乗り出す。

その瞬間、銃声が上がリ一人が倒れた。まだ生きている・・・

自分も応戦に回り仲間の一人が、けがをした奴を連れていく。撃った銃弾は、敵の頭に当たり敵が倒れた。

敵は、徐々に後退していく、そして跡を追う

突き当りに、部屋が一つある。一人が、扉を突き破り、その瞬間一気になだれ込む。

一人、また一人、敵が倒れていく。

最後の一人になった時、そいつは、足を引きずっていた。

『お願いだ、助けて・・・死にたくない、助けて、お願い・・・助け』
命乞いをする、人を全員で一斉射撃した。こいつらは、必要以上に撃ちまくった。

もう死んでる。それなのに撃っている・・・

その地面には、大量の薬莖と大量の血が広がった。

次の映像も、同じようなものだった。命乞いする奴等も関係無く殺

していた。

ただ違うのは、段々と命乞いをする奴の殺し方が残酷になっていく所だった。

そんな映像が、しばらく続く中

「これが、最後だ」

そう裕大が呟くと映像が、始まった。

『今回は、楽勝そうだな』

『ああ、そうだな。楽勝楽勝』

そういうながら準備を始め、腕時計がピピピとなり始める。試合開始の合図だ。

初めは、一列に並び森の中を探索し始める。

『おい』

一人が、声を上げる目線を動かすと一人の影が映った。

『はっけくん』

手を動かし、五人一列ではなく広がった隊形になった。

敵は、見えたかと思うとまた見えなくなり、それがしばらく続いた。

「おい、これってまさか」

康太が、言うまでもなく全員が感じ始めていた。

『くそっ、どこに行きやがった』

イライラを口に出した瞬間、そいつの目線は、一発の銃声と同時に上を向き、暗い夜空を映し出した。

『山岸 ！？』

カメラは空だけを見るが、音声はまだ続く

『うわああああー』

敵の叫び声と、やられていく仲間の悲鳴が、パソコンから流れてくる。

カメラには、仲間の返り血が所々についていき、最後には、血でなにも見えなくなっていた。

『くそ野郎がー』

一発の銃声になる。その瞬間、周りから一斉に撃たれる音がし、ドサリと倒れる音がした。

まだ映像と音声は続くが、康太がパソコンのスイッチを切った。

しばらく、誰も喋ろうとはしなかった

「これって・・・」

俺が、重い口を開けようとしたが

「やめてくれ」

勉が、叫んだ。

「でもさ・・・！！これって」

「やめてくれよ」

「ごめん、俺がこんな物、見つけちゃったせいで・・・」

裕大が、腰を下ろしながら呟く。ただ、俺は学校での出来事を思い出しながら続けた。

「正直、山岸が死んだなんて思いたくなかった。だって、学校ではそんな事言われなかった。

でも、この画像ってさ・・・山岸じゃん。やっぱり、俺達、人を殺してたんだ。

俺達、こんな事続けられるのか？」

誰もしゃべらない中

「続けてもらわないと困る」

扉から五十嵐ほどの体格で、店員の制服をきた人が現れた。

「君達は、人質が取られてるんだ。戦わなければ、家族が殺されることになるぞ。」

岸边は、君達の担当から外されることになった。今度から、担当は私に代わる。

ちなみに名前は岸边だ。大丈夫だ。君達が、戦いで死んでも家族は、死なない。それは、私が保障しよう。

ただ、戦わないなら、あまり気は進まないが、そうするしかない」
新しい岸辺は、まるで機械かのように言葉を棒読みする。

「俺は、やるぞ」

そう言ったのは、勉だった。

「他の奴等は？」

岸辺が聞くが、誰も口を開かない

「・・・まあ、いい三週間後だ。駅前にバスが来る。乗るか乗らないかはお前たちに任せる」

それまでは、普通通りの生活を送ってもらおう」

そう言うと、新しい岸辺は部屋を出て行った。

第五話 覚悟を決めろ

あれから、一週間がたった。何も答えが出せないままの、日々が続いている。

そんな中でも、学校に行くと言う習慣が体から抜けないのか、毎日一応登校している。

そして、放課後は、ガンズショップに足が進む

受付には、二人目の岸边が立っている

「いらっしやいませ」

そいつは、無視しミーティングルームに向かう。そこには、俺と同じく答えが出せない大次と裕大がいた。

「勉と五十嵐は？」

もう龍之介は、ここには来ないようになっていた。

「あいつ等は、多分フィールドに出てるだろう」

「五十嵐は、答えが出たのか？」

「いや、正直わからねえ。 勉が、ただ単に手伝ってくれて言っ
てそれについて行っただけだし・・・ 五十嵐ってどうなってるんだ？」

「どおって？」

「あいつ、あの画像見ても、表情ひとつ変えなかった。いつも思っ
てたんだけど、感情あるのか？あいつ」

「確かに、俺達がパニックってた時、あいつだけ取り乱してもなかったな」

五十嵐の事を話し始める大次と裕大。そこに、俺は釘を打った。

「でも、あいつのお陰で俺達は、ここにいるんだろ。何も不審に思
う点なんか、一つもないだろ」

「それも、そうだけど・・・」

そこへ、勉と五十嵐が入ってきた。

「みんなどうしてここに来て、ここから出ようとしなんだ。家族が人質なんだぞ。」

「どうして、助けようとしなんだ？」

「だからって、お前は人殺しができるのか？家族のためだからって、人を殺すのか？」

大次の言葉に勉は、しばらく黙っていた。

「・・俺は、どんなに汚れたっていい。家族を守れるんならそれでいい」

「お前はそれでいいかもしれない。でもな、そんな事、家族が知ったらどう思う？」

「家族には、言わないんだ。バレなきゃいいんだべ」

沈黙の中、五十嵐が口を開いた

「・・みんな、俺には、兄弟はいないし、もう両親もいない」

その言葉に、少し違和感を覚えたのは多分、俺だけだろう

「でも、あのバスに乗らないと周りの人も殺されると言っていた。

つまり、誰か一人乗らなければ、みんな殺されるってことだ。俺一人だけなら、まだいいと思っていたが、俺一人で、全員が殺されるというなら、俺はあのバスに乗る。」

そして、もう誰も戦いで死なせやしない」

『俺一人だけならまだいい』正直、俺の心の中にもその気持ちがあった。

周りの人間って事は、近所の人たち、もしかしたら、洋子も・・

「それに、相手もそう言う気持ちで戦っている奴もいるかもしれない。お互いそれを理解してるんだ。

きっと、殺されたって恨んだりはしないだろう・・で、どうする？

そろそろ、みんなで試合に合わせて全体の練習をしたいんだが？」

確かに、もし試合をするなら、そろそろ全体の打ち合わせなんかないといけない。

そうじゃないと・・・おそらく負ける。でも、いきなり答えを出せだなんて無理がある。

「わかった、やるよ」

そう言ったのは、裕大だった

「向こうも、了承済みなら話は別だ。互いに家族を守ろうと言う気持ちは一緒なら正々堂々と戦いができる。それに、正々堂々と戦わなかったら向こうに失礼だ」

「俺もやる。家族は、正直どうでもいいけど周りの人には、死んでもらって欲しくない」

そう言ったのは、康太だ。

『家族はどうでもいい』と言う言葉にみんな、え？という顔をしたがその言葉の意味を理解したのは、勉だけだった。でも、そうは言ってもまだ正直迷っていた。

「それで、俺だけ乗らないとみんな殺されるんだろ？・・・わかったよ、やってやるよ」

最後に、大次がそう言った。おそらく、大次も迷っているだろう。みんなが、やると言ったから仕方なくと言う感じだろう。

龍之介は、当日にどうにかすると五十嵐が言ってくれた。それでも一応、全員がこれでそろった。

そこからは、早かった。戦闘システムは、森林での体系をベースにそのほかにも、何通りかのパターンを作りミーティングは、終わりあとは、実際にフィールドに出てシュミレーションを行った。

人数も何も分からない状態でのシュミレーションだから今日一日では、半分も終わらなかった

「今日は、これまでにするべ」

俺が、無線でそう伝える

「ああ、そうだな」

「なら、メイングートに集合な」

「了解」

ゲートを出て、受付の前を通りながらミーティングルームへ向かう途中、受付に座る岸边に声をかけられた。

「先に言っておくが、『家族のためだ』とか正義感ぶってる奴等は、極少数だ。」

正々堂々戦おうなんて思わないことだ」

「どういう意味だ？」

「いずれわかる。それから、相手をあまり信用するな」

「人の話を盗み聞きするなんてサイテーだな」

それを言われたら困ると言うかのように机に肘を置き、手に頭を乗せた体制をとった。

「そう言う任務なんだ」

「どうだか？行くべ」

そう言い、部屋に戻って行った。

あれから、いくつか日にちが経ちシュミレーションもすべて終わり、気づけば当日を迎えていた。

ミーティングは、早めに済ませ全員が一度、帰宅した。

だが、俺はまだ正直、悩んでいた。寝る前には、いつもゲームの抜け道がないか考えていた。

今は、部屋に入り座り込んでいる。

もし、俺一人行かなかったら・・・みんなは、いつ殺されるんだ？そして俺は？周りの人を殺された後に殺されるのか？

俺達は、敵を殺す理由をみんなのためと正当化してるだけじゃないか？

俺は、偽善者なのか？

カン

窓を小石があたる音がした。でも、一回だけだ。空耳かもしれない

俺の部屋は電気もつけていないし、多分いるとは、思っていないだろう。

でも、もしいるなら。見ておきたい。もしかしたら、あいつとこうやって会話するのは最後かもしれない。

いや、別にいなくてもいい・・・

ただ、あの窓を開けて部屋に電気がついているかどうか？

それだけでもいい

そう思い、俺は窓を開けた。

「やっぱり、いた」

窓の向かいには、洋子が立っていた。

「いるなら、すぐに出てよ。待ってるこっちの身にもなれ」

「そりゃ、悪かったな。で？何の用だ？宿題か？あれ、宿題あった？」

「やっぱり、珍しく起きて授業聞いているかと思ったけど、耳に入ってなかったみたいだね」

学校での出来事が、全く覚えていない。ここ三週間の学校の出来事を全く覚えていない事に

今気づいた。

「最近、様子が変わったから心配してたんだよ」

「だからって、なんで今日なんだよ・・・」

そう小さく呟く

「え、何？」

「何でもない」

「全く、今日も出て来ないつもりかと思ってたんだから」

「え？」

「ああ、そうやって知らなかった振りするんだ。毎日毎日、石投げたのに気づかなかった振りするんだ」

「マジで？」

「え？本当に知らなかったの？大丈夫なの？あんた」

ああ、大丈夫じゃないかもしれない、なんて言えない。言えるわけがない。これ以上、心配させるわけには、いかない。

「大丈夫だ。明日になってりゃもう完璧だ。きつと、授業は俺の睡眠時間に戻っちゃうだろうな」

「いや、そこは戻るなよ。授業ちゃんと受けろよ」

「まあ、気が向いたらな」

そう言うのと、俺は窓を閉めた。短い、やり取りだったがそれで十分だ。

もう心は決まった。

俺は、あいつを守る。幼馴染だからじゃない、俺にとって、特別な人にランクアップしたからだ。

偽善者だろうが構わない、絶対に守ってみせる。そして、絶対に死なねえ

勉強と合流し、駅に向かうと駅前には、バスが既に来ていた。

乗り込むと、中には五十嵐と龍之介が来ていた。

その後、大次と裕大がやってきた。すると、バスは出発した

バスの中では、誰も口を開こうとはしなかった。

沈黙したバスは、長いトンネルに入りオレンジ色の光が窓から入っては抜け、入っては抜けて行った。

トンネルの中では、色々な加工された言葉が蘇ってくる

『バツカじゃねーの 本当の殺しあいには本物があって何がおかしい』

『俺達を売ったんだろ？いくらだった』

『お願いだ、助けてくれ、助け・・・』

『正々堂々戦おうとするな・・・いずれわかる』

『一人頭十五万だ。お前は二十万だけだな』

『家族のために人を殺してもいいのかよ　！！』

『俺は、どんなに汚れたって構わない』

『もう戦いで、誰も死なせやしない』

『この国は、戦争に依存しすぎた』

母親が倒れている場所に立ち尽くす俺は父親が台所に現れた時、憎しみをこめて、父親に言った。

『人殺し・・・』

俺は、掴んでいた包丁を父親に向けて突進していった。

「康太！！ 着いたぞ」

気づくとバスは止まっていて全員降りてる中、勉に起こされていた。

「んあ・・寝てたのか」

「みたいだな。よくこんな時に寝れるなお前は・・・授業中に寝れる事と、なんか関係あるのか？ちよっと、羨ましいぜ」

勉は、俺を起こすとバスから降りようとしていた。

「なあ、勉？」

「ああ、何？」

「俺の母親って自殺だよな？」

一瞬、勉の顔が曇った。

「な、何言ってたんだよ。まだ、寝ぼけてるのか？」

勉はそう言っていると、急いでバスを降りた。

俺は、バスを降りるときに運転手にまた紙を一枚渡された。

「試合が終わりましたら迎えにあがります」

バスを降りると、バスはどこかへ行ってしまった。

俺達は、ペンライトを片手に示された場所を目指した。

そこには、あらかじめ頼んでおいた銃が入ったバックが置いてあった。

俺達は、着々と準備を始めた。五十嵐は、自分の準備が大体終わった所で俺達から離れて座る、龍之介の方に鞆を投げた。

「僕は、そんなもの身につけない」

そう言ってそっぽを向いた。

「じゃあ、俺達が死んだ後、一人でどうするつもりだ？ いいから、さっさと装備しろ」

全員が装備し終わると集まった。

「今回の敵の数は、三人だ。つまり、それほどあいつ等も仲間を失ったんだろう」

「俺達が、森林にいると言う事は、向こうは、市街地に潜伏しているはずだ。ゲリラ戦になるかもしれないな」

「なら、二人一組だ。五十嵐は、バックアップを」

「了解」

その時、一本の無線が入った。

『こちら、チーム鯨 応答願います』

全員がビクツツと驚いた。まさか、無線が入るだなんて

『こちら、チーム鯨 応答願います』

向こうから連絡を取ろうとしている

「どうする？」

「出ない方がいいんじゃないのか？ また、前みたいな奴だったら」

「しばらく、放っておくべ」

「そうだな」

『応答する気がないなら、そのまま、聞いてくれ。俺達は、すでに何人も仲間がやられてる。』

だから、無駄な戦闘は避けたい。そちらも、家族や周りの人を人質に取られているんだろう？

だが、このゲームには、抜け道があるんだ。君達も助かるし、人質もみんな無事だ。

俺達は、発信器を取り外す方法を知っている。だから、武器を放棄し市街地に降りてきてほしい。

そしたら、君達の発信器をすべて取り外す』

無線からは、そんな事が流れてきている。投降する市街地の場所詳

しい場所まで指定してきた

みんな戸惑っていたが、そんな中、五十嵐が無線を取った。

「もし、そんな事が出来るとしてもどうして、そちらは発信器を外さない」

確かに、もしそんな方法を知っているなら、俺は今すぐにでもやる。

『俺達は、発信器を外すわけにはいかない この大会に優勝すれば、300万以上の莫大な金が入るんだ。』

私達は、絶滅危惧種の動物の保護活動をしている。鯨と言うのも、昔生存していた世界最大級の哺乳類の名前から取っている。だが、保護活動には、莫大な金が必要なんだ。

そのためには、この大会の優勝賞金が必要なんだ』

『莫大な金』と言う言葉に、大次と勉が反応した。五十嵐は、無線を切り「嘘だな」とキツパリと言った。正直、俺もそう思っていた。

『試合開始から、三十分待つ。それまでに、投降しない場合は、戦うしかない。以上、通信終わり』

ピピピと腕時計が鳴り始めた。試合開始だ。

「どう思うよ。これは、嘘だろ」

「いや、でも、もし本当ならどうする？ 本当だったら、俺は飛び付くぞ」

そんな事を言っていると龍之介が口を開いた。

「なんで？ どうしてそう言う風に疑うの？ 僕は、投降するよ」

まったく、こんな時にと思いながら、勉が龍之介に言った

「龍之介、あれは絶対に嘘だ。投降した瞬間、殺される」

「そんな事ない。どうして君達は人を信じれないのか？

僕は、行く。そもそも僕はこのチームの人間じゃない」

そう言うと、龍之介は山の斜面を下りて行った。

「待て、龍之介 ！！くそっ・・どうする」

聞いてきたのは大次だ。

「行かせてやれ」

五十嵐が、ライフルを準備しながらそう言った。

「もし本当なら俺達も投降すればいい。もし、違ったら戦闘開始だ」
「もし違ったらって龍之介を見捨てるつもりか？」

大次が五十嵐に聞くが、喋ろうとしない。

「そうかい、お前はチームじゃない奴には、そんなに薄情なのか見損なったよ。」

俺達は、龍之介を止めに行く」

大次と裕大が龍之介の後を追った。

「で？これからどうするつもりなんだ？」

ライフルの調整をする五十嵐に尋ねた

「なにがだ？」

「多分、今から龍之介を追いに行っても間に合わない。なのに、わざと行かせた」

あいつの足の速さは、尋常じゃない

「龍之介が狙われないように俺がバックアップをする。その内に、大次達が保護するだろう」

『なるほど、そう言う事か』

無線から大次の声が聞こえた。

「康太、てめえ回線オンにしておいたのか？」

五十嵐が、驚き俺に叫ぶ。俺はにやりと笑った。

「一応、俺はこのチームのリーダーだ。チームの不安要素は、排除しないとな」

なんだか、始めて五十嵐を出し抜いた。気がして思わず、ニヤけた。
『で？どのタイミングで保護すればいい？』

「合図を待て」

『了解』

そこで、通信は終わった。

俺達は、狙撃ができそうな所へ向かった。

「ここで、いい」

五十嵐がそう言う

双眼鏡を取り出した。あわてて、俺達も双眼鏡を取り出し市街地を見まわした。

龍之介はちょうど森を抜け市街地に入って行くところだった。

あいつは、今武器は何も持っていないただ、ビクビクとおびえながらゆっくりと入って行った。

そこへ、敵が一人現れた。それに気づいた。龍之介は後ろへ逃げ出した。

「ヤバいつ」

「大丈夫だ」

五十嵐の言うとおり、龍之介は立ち止まり無事だった。敵の二人目が降りてきた。

そいつが、手招きをし龍之介を近づかせた。それを見ていた五十嵐は軽く舌打ちをした。

「どうした？」

「いいから、黙って見てろ」

五十嵐は、双眼鏡を置き山の斜面を下りて行った。

三人目が、現れた。そいつは、武器を手にかけていなかった。

腰に銃をつけているが、取り出す仕草はなかった。そいつが、龍之介に近づきボディチェックを始める

そして、龍之介に後ろを向けと手で合図を送る。それに従い、龍之介は後ろを向く

その瞬間、腰に差してあった銃を龍之介の頭に向けた。

「止せっ　！！」

銃声がここにまで届いたかと思った。だが、実際は倒れたのは龍之介ではなく、龍之介に銃を構えた奴だった。

倒れた事に気づき、龍之介はその場に頭を抱えしゃがみ込む。敵は、狙撃だと気づき建物の中に逃げ込もうとする。

だがその前に、二発目の銃声になり二人目が倒れた。目の前で、仲間が倒れた敵は、一瞬ひるみ、足が止まってしまった。

そして、三発目が聞こえた。

全てが終わったかと思った。五十嵐は、俺達の所に戻ってきた。

大次達はおそらくそろそろ、森を抜ける頃だろう。龍之介は、立ち上がりその場に転がる無線機をひとつ取り無線が入ってきた。

『ぼ、僕を餌につかったな』

俺は、無線を取った。

「違う、五十嵐はお前を助けたんだ」

『僕を餌につかって、この人たちをおびき出したんだ　！！』

あの状況を全く理解していなかった事に俺は心底ムカついた。

「てめえ、いい加減にしろよ　！！　そいつ等はお前を殺そうとしてたんだぞ」

『そんな事ない、この人たちは、おびえる僕に優しくしてくれた。

大丈夫だって話しかけてきてくれた』

「なら、聞くがお前の後ろに倒れている奴は　！！　さっきまで銃を持っていたか？」

龍之介は、後ろを振り向き倒れている奴の右手に銃があることを確認した。

「そいつは、お前を後ろから　！！　お前の頭を狙って引き金を引こうとしてたんだぞ。」

それを聞いてもまだ、そいつ等の肩を持つのか？」

『・・・この人達は、僕のせいで死んだんだ』

「何言ってるんだ？」

龍之介は、倒れている奴から銃を取り自分の頭に銃口を向けた
「馬鹿・・・止せ！！」

第六話 初めての犠牲者

「何を考えているんだ。馬鹿な事をするな」

『うるさい、僕のせいでの人達は死んだんだぞ　！！』

右手に構える銃がガタガタと震えていた。

「落ち着け、お前が一番死にたくないって言ってたじゃないか」

『だからって、僕は人の屍の上で生きていい資格なんてない』

パニックになる龍之介を、どうにか抑えようと俺が必死になる中、

「ふざけやがって」と呟いた五十嵐が、その場で射撃体勢をとった。それを見て俺は、一度無線を切った。

「おい、五十嵐。なにするつもりだ」

「いいから、黙って説得を続けろ。・・・あいつに恐怖を植え込んでやる」

五十嵐は、ライフルに違う弾を詰め込み始めた。

五十嵐は、準備が終わると「無線を貸せ　！！」と叫んだ。

俺は、五十嵐に無線を渡した。

「おい、龍之介　！！お前、今から死のうとしてんだろ？　だったら、さっさと引き金引きやがれ」

「五十嵐　！！何考えてる」

叫ぶ俺を五十嵐は「うるせえっ！！」と一喝した。

『い、言われなくても、そのつもりだ』

龍之介は、無線を落とし右手で、構えた銃の引き金を引こうとするが、引けなく左手も添えようとしていた。

「引けねえのか　！！だったら、俺が殺してやる」

そう言う五十嵐は、引き金を引いた。銃声と、ともに隣に倒れていた死体の頭が吹き飛び

地面に血が飛び散った。

『ヒッ　！！』

無線からは、龍之介の恐怖で引きつった声が聞こえてくる。

「いいか　！！　龍之介。今詰めた弾の大きさはな、さっきの銃弾とは訳が違う。当たれば、隣にいる奴みたく頭なんて軽く吹き飛ぶぞ」また、五十嵐は引き金を引いた。次は片腕が、肘からちぎれ宙に浮き龍之介の横にボトリと落ちた。

「さあ、こうなりたくなかったらな　！！　さっさと自分で引き金を引け　！！」

今度は、龍之介の足元に着弾した。

「次は、頭を狙う。さあチャンスはあと一回だ」

龍之介は、頭に銃を向けたまま硬直し動かなくなった。

「チェック」

五十嵐の声は、今までにないくらい感情的だった。

「チェック」

五十嵐のライフルは、本当に龍之介の頭に標準を合わせた。

「チェック　！！」

「おい、止せ」俺が五十嵐を止めに入ろうと飛び込んだと同時に大次と裕大が、龍之介に飛び込んだ。

大次は、龍之介から銃を外そうと龍之介の手を地面に何回も叩きつけた。

必死に抵抗する龍之介を、裕大は押さえつけた。

「放せ　！！　放してくれ」

「てめえこそ銃を・・放しやがれ」

龍之介は、銃を放した瞬間、大次は、銃を遠くへ投げた。

そして、無線からは裕大が『無事確保したぞ』と、連絡があった。それまで、俺は五十嵐に飛びついて引き金を引かせまいと、もがいていたから、勉に言われるまで全然気付かなかった。

訳が、わからない俺に五十嵐が、勝ったと言わんばかりに俺に向かってニヤついた。

全てに気が付いた時、俺は

「ああ〜クソ、やられた〜」

そう叫びながら、仰向けに倒れた。

「くっそー、合図を待ってっそう言う事かよ」

無線からも

『俺もこういう事だとは、思わなかった』

と連絡が入る。

「いや、俺もこうなるとは想像もしてなかった。問題は応用力だ」と五十嵐が言う

「はいはい、全員が一杯食わされたってことね」

ようやく、みんなに笑顔が戻った。俺は、無線とみんなに聞こえるように言った。

「さあ、帰ろう」

「ああ〜くそ〜・・・なんで授業中寝ちゃ駄目なんだよ」

「よく言うぜ、起こされた後もぐっすり寝てたくせに」

「だからって、教科書の角で叩くかフツ？体罰じゃね？これってさ、PTAだPTAに訴えてやる」

そんな事を言っていると

「寝ている人を起こすのは先生として当たり前の行動だ　！！」

後ろから、洋子にノートの角で叩かれた。

「イってええ、ヤベっノートが頭に刺さった。サックリいったあー」

「んなわけあるかー！！馬鹿。まったく・・・いつも通りに戻ってもこれはこれで、問題ねやっぱり、あんた昨日までの状態に戻りなさい」

そんな事を言って、昨日のお陰で、幼馴染からランクアップした奴に顔を近づけられたら正直困る。

「あれ？どうしたの！？顔が赤いわよ。熱でもあるんじゃないの？」

「——っ！！何でもない」

「ん？変なの」

そう言っ、女子の集団の方へ行ってしまった。ってか、そんな事を真面目な顔をして悩まないでくれ・・・

「いいねえ、青春かえ？」

なんて、男子からはやし立てられ

「馬鹿っそんなじゃねーよ」

・・・そんな、くだらない会話をぶち壊す、惨劇がこれから起こる
とは、思ってもいなかった。

今日は、やけに天気が良かった。窓も開けてあるし程よい風が教室に吹き込む

「はあ、こんな日は学校なんて抜け出して、どこかいきてーな」

なんて、誰かがいい

「ああ、そうだなー」

なんて言っ、窓の方を向くと何か黒い物体が、上から落ちてきて通り過ぎて行った。

日差しが強く差し込むのに一瞬、影が入ったため、クラスのほとんどが、一度は、窓の方に目をやったが、異常がないことを確認するとすぐに会話に戻った。

ただ、俺とさっき天気の話をしていた奴を除いては・・・

「お、おい、今なにかおちて・・・」

俺が言いかけた時、窓の外で半端じゃない女性の悲鳴が上がった。

「おい、なんだどうした」

そう言っ、野次馬気分で男子は窓辺に群がり、他の奴等が見れないようにバリケードを作った。そして、ある物を目にし全員が固まる。

窓辺に座っていた五十嵐は、それを見た瞬間、勢いよく教室を抜け

出した。

俺は、五十嵐が抜けた場所に穴ができたのでそこから外を覗き見る。俺らの教室の真下には、血が飛び散り、その中心に同じ学生服を着た人間がありえないような、方向に腕が曲がり、頭はパツクリと割れた状態で倒れていた。

そこに、さっき駆け出して行った五十嵐がやってきた。

俺は、倒れている姿は、どこかで見た事があるような気がしていたが、それを信じたくはなかった。

「い、五十嵐・・そいつ、誰だ」

俺が五十嵐に問いかける。

五十嵐は、顔を見上げ「福見・・龍之介だ」と小さい声だが、俺達の教室に届くような声で

一区切り一区切り丁寧に言った。

「うわあああーっ　！！！！」

男子の特徴ある叫びで、全員の金縛りが解けた。

ある人は叫びだし、ある人はその場で吐いた。

何があったのか、わからない女子は、窓に押し寄せるものもいれば、その場でオドオドする奴もいた。

「止せ　！！見るな」

大次が、見ようとする女子を止めようとしていた。それに気づいた裕大と勉も止めに入った。

その場を切り抜け覗いた女子も何人かいた。俺は、相変わらず金縛りが解けず、外を見降ろしていた。

五十嵐は、最初に悲鳴を上げていた。今は、その場にうずくまり、泣いている女子に近寄り

「大丈夫だ、大丈夫だから」

そう言い聞かせ、自分の体に引き寄せていた。しばらくして、その場に、何人もの男の先生が現れた。

それから、彼女は意識を失ったのかグッタリとし、五十嵐は彼女を

担ぎ校舎に入って行った。

「ねえ、康太・・・」

後ろを振り返ると、洋子と数人の女子が立っていた。

「ねえ、何が見えるの・・・？」

見たいと言う、好奇心と見てはいけないと言う恐怖心が入り混じった表情をしていた。

見てはみたいが、周りの様子をみて見たらこうなってしまう・・・今、どうすべきか戸惑っている。

「・・・見ない方がいい。龍之介が・・・死んでいる」

その場にいた女子が全員、息をのみ、手で口を押さえ涙を流す女もいた。

しばらくして、救急車とパトカーがやってきた。当然学校は、臨時休校となり。

生徒全員が、帰る時に使う通りに龍之介が倒れているので、俺達を通る時にはブルーシートがかぶせられ一部分、盛り上がりがあった。多分あそこに・・・

何人かは、パニック状態が抜けず病院に運ばれた。龍之介が同じクラスだったからか俺らのクラスからは、かなり精神がやられた奴がいた。

だが、違うクラスからも精神的にやられた人が数人出ていた。

五十嵐は、なぜか、倒れた彼女の付き添いで一緒に救急車に乗せられ病院に行ってしまった。

校舎を出るところですでに、数人のやじ馬ができていた。

「え・・・マジで？」

「やべえ・・・グロすぎ。見れば良かった」

「マジもっかいやってくんねえかな？」

なんて言っている。奴等に勉と大次、裕大、他数名の男子が、そい

つ等をぶん殴り何人かの先生と警察に押さえつけられ、鎮圧はしたものの野次馬からも、病院送りが数人出た。

俺も、本当は殴りかかりたかった。けど、横で泣きじゃくる洋子を置いて行くことはできなかった。

やべえ、俺って紳士・

なんて、なるべく他の事を思っていたかった。

「だ、大丈夫だ。ってか、もう泣くな」

「う、うん、ごめんね。泣きやまなくて、本当は康太の方が泣きたいのにな」

「いや・・そ、そそそんなことねえよ。俺だって、確かにショックだったけど・・お前が、そんなに泣いてるからさ・・」

だぁー逆効果だ　！！また更に謝ってくるし！！

「大丈夫だ。落ち着け」

「大丈夫って、何が大丈夫なのよ。だって、龍之介君が・」

そうだ。なるべく思い出したくなかった・・俺らのせいだ。あいつが自殺したのは・

「俺らのせいかな」

「え・・？」

思わず、声に出してしまった。そう思うと、顔から血の気が引いて行く。

ヤベ・・どうしよう・

『・・ったく仕方がないな』

俺の頭に誰かが話しかけてくる。

「違うよ。康太達のせいじゃないよ。確かに、いじめてたかもしれないけど今は会話だとしてたし普通になってきてたじゃない」

「いや、あいつにとっては・・そうじゃなかったのかもしれない」

「そんな事言わないで、責任感じる事ないわよ」

「でも、現にあいつは・」

「お願いだから、責任感しないで、ね？ 私もう大丈夫だから。もう、泣かないから。あっ私ここでもう大丈夫・・・それじゃあね」

「ああ、わかった。ごめん・・・」

洋子は、家に入って行った。

『まったく、余計な事で無線を使わせるな。前から思ってたが、俺って女心がわかってるな』

俺の頭の中に岸边の声が入ってくる

「どういう事だ？なんで、お前の声が聞こえる」

『言っただろ。盗聴も任務の一つだって。盗聴以外にも、任務はあるんだよ』

「本当にサイッターな野郎だな」

『最低な野郎のお陰でゲームの秘密は漏れることはなくなった。彼女に嫌われる事もな』

「ああ、お陰さまで“助かりました”」

『おう、感謝しろ』

「おい今、スゲー嫌味で言ったんだけど」

『知っている。今から、ガンズショップに来い。他の奴等も時期に来る』

岸边からの無線はこれで終わった。

「くそがっ　！！」

ミーティングルームに入ると、まだ誰も来ていなかった。

誰もいないなら、好都合だ。ただ、このイライラを解消したかった。俺は、目の前にある長机を思いっきり蹴飛ばした。

「くそっ　！！　くそっ、くそ、くそ・・・」

倒れた長机が壊れても何度も何度も踏みつけた。だが、イライラは収まらない。増していく

目頭が段々と熱くなってくる。

「くそがつ・・・」

声にも段々と張りが無くなってくる・・・

そこへ、勉、大次、裕大が入ってきた。この光景を見ても、誰ひとり何かを言おうとはしなかった。

きっと、みんな同じ心境だからだろう。全員が、椅子に座り五十嵐と岸边が来るのを待った。

「全員、そろったか？」

そう言って入ってきたのは、岸边だった。

「五十嵐は、まだか・・・くそ・・・よりによってあの病院に入りやがって」

その言葉に反応したのは、俺と勉だった。

「まあいい。お前らだけにでも、連絡を入れておこう。別に今回のケースは数は少ないが、無かった訳ではない。お前達が心配してるの事は、これから言う事だろう。あいつは、自殺はしたが、安心しろ。周りの奴等を、消したりはしない」

そう告げて、誰一人として安堵の表情を見せた奴はいなかった。

「なんだ？それ以外にでも心配してることもあるのか？」

「心配事なんかじゃねーよ」

「じゃあ、なんだ？浮かない顔して」

全員が黙っていたが、俺は心にあるこのイライラを口にだし、表現したかった。

「俺は・・・俺達は・・・目の前で、龍之介が死んだってーのに、どうして　！！」

クラスの奴等とは、違う事をしてるんだ！！クラスの奴なんかよりも・・・俺らの方が　！！

あいつとの付き合いは長いんだ・・・それなのに、あの場で泣けなかった　！！

あの場で、吐く事も、叫び声を上げる事もできなかったんだ。

・あの場で泣けなくて、どうして今、涙が出る　！！
しかも、この涙は、悲しいからじゃなくて、悔しいからだ　！！・
・イライラするからだっ　！！
なんで、悲しくて泣けないんだ・・・俺達は、もう・・そんな人間なのかよ　！！
周りの人間とは違うのか・・？そんな、俺達が・あの場所なんかで　！！生きてていいのかよ」
全員が、その場で泣く中、岸边はしばらく全員が落ち着くまで待った。

「全員、落ち着いたか・・なら話を続ける。いいか、これは前例があるとは、言っても極めてまれなケースだ。あいつは、ある意味、幸せ者だ。死んだって事が、みんなに知らされるからな。」

お前等は、もしかしたら、これから戦いで死ぬかもしれない。だが、死んでも誰にも知らされない。せっかく守った家族にも、周りの奴等にも　！！仲間の中で覚えてる奴がいるかもしれないが、これは、たくさんの前例があるが、みんな死んだ事を忘れて行く。それだけは、覚えておけ・・・それと、屋上には、あいつからの遺書があったそうだ。

『俺は、人間である内に、死ぬ』そう書いてあったそうだ。あいつも、お前等と同じ心境だったんだ。・・・さて、ここで次の試合の連絡だ。」

次の試合の連絡を伝えると岸边は、足早に部屋から出てきた。これ以上、あの場所にいたら
あいつ等に、感情移入してしまう。

扉を閉めると、向こうから五十嵐がやってきた。

「よお、お帰り・・さっき、あいつ等には、もう伝えたんだが・・」
「悪い・・後で聞く・・」

そう足早に通り返る時に言われ、五十嵐は部屋に入り、勢いよく扉を閉めた。

しばらくすると、扉を挟んでいるのに聞こえるような音で、ロツカ―が壊される音と五十嵐の叫び声が、聞こえた。

あんな、子供に・・・俺達、大人は・・・一体・・・何をさせようとしてるんだ・・・

第七話 どっちが正義・・・？

大次の部屋は殺風景だ。部屋には、整頓された・・・と言うより中学の時から手をつけていない机と埃をかぶった本棚と大量の参考書、それと整頓されたベットただ、変わっているのは、扉には、たくさんの何重にもなったカギがある。

外からは、誰も入れないようになっていいる。大次がガンズショップに行く時は、内側のカギをすべて閉め二階の窓から飛び降りる。

「お待たせー」

家の前で、大次が降りてくるのをいつも待つのは、裕大だ。

そして、いつも二人でガンズショップに向かう姿をいつも二階の自分の部屋から見ているのは兄の英介だ。

ミーティングルームに入ると勉と康太がいた。

「五十嵐は？」

「きつと、狙撃場だ。あの狙撃バカは、立ち直りなんか人の十倍早い」

「そういや、あいつの下の名前って何？」

「ああ、俺もそれ考えてた。実は俺も知らないんだ」

「え？じゃあ誰も知らない？」

全員から、返事はなかった。そんな中、康太が言った

「岸边に聞いてみるか？」

「なんだあ？お前らチーム組んでるくせに名前知らないのかよ」
受付から身を乗り出し、マジかよ・・・なんて顔をしながら聞いてきた。

「だから、ここに聞きに來てるんだろ。いいから、教えろ」

「ああ・・・ちょっと待ってろ・・・あれ？これなんて読むんだ？スゲ・・・ん？」

「え？読めねえのかよ。見してみろ、俺が読んでやる」

受付を乗り越え、康太が岸边の持っている紙を取ろうとしていた。

「ああ、駄目だ駄目だ。これは個人情報だ。名前以外にも、色々と乗ってるんだ。見せるわけにはいかん」

「うわっ、出たよ。大人の言い訳！！サイッターな奴がやることだ」

「うるさい、そんな事だったら、直接本人に聞けばいいだろうが」
そう言うのと、全員が口ごもってしまった。

「本人か・・・どんなリアクションするかな？」

「ショック・・・受けるんじゃないか？」

「あいつ、ショック受けるのか？」

そんな事を言っていると

「別に五十嵐のままでいいぞ」

後ろから突然、五十嵐が現れた。

「うわっ、だからそうやって現れるなよ！！びっくりするだろ」

「そうか・・・そう言うつもりじゃないんだが」

「あれ？もう帰ってきたのか？記録塗り替えるの、諦めたのか？」
受付から岸边がそう聞く

「え？いや塗り替えたぞ」

「はあっ？早すぎだろ？」

「別に普通だろ・・・ちよっと、部屋に戻ってるわ」
そう言うのと、五十嵐は部屋に行ってしまった。

「マジかよ。あれ塗り替えるの苦労したのに・・・」

そう呟いたのは、岸边だった。

「え？岸边って狙撃手なの？」

「ああ、元狙撃手だ・・・」

「で？五十嵐のどの記録を塗り替えたんだ？」

「いや、言わない」

「なんで、言えよ。笑わねーから」

「いや・・・そげっ、狙撃・・・距離の三位の記録・・・」

恥ずかしそうに、言う岸边に全員が爆笑した

「だっははは、バツカじゃねーの！！三位かよ、一位狙えよ。なんであえて三位なんだよ。塗り替えたらずぐ消えちゃうだろうが」

「笑わねーって言っただろうがてめえら」

「わりい、わりい・・・いや、でも三位でもすごいなあ・・・全部2000m超えてたのにい」

大次の声が裏返ってた

「馬鹿っ、あれ本当にすごい距離なんだぞ！！一つ抜くの何時間かけたと思う？なのに、あいつは物の10分でクリアしやがった」

「さすが、俺らとは、値段が違うねえ」

笑いすぎ目に涙を溜めながら康太が言った。

「何・・・？今なんて言った」

岸边が鋭い声で聞いてきた。

「いや、前の岸边が言ってたんだよ。一人頭十五万って、でも五十嵐は二十万らしい」

「あの野郎・・・そんな事まで」

「なあ、他の奴等は一体いくらなんだ？」

「駄目だ、駄目だ。そんな事教えん、ほら、早く部屋に戻れまだ、ミーティングもしてないだろ。ほらっ、シッシッ」

「なんだよ、虫を追い出すような扱いだな。行こうぜ」

そう言いながら、康太達は部屋に戻って行った。

戻って行った事を確認し、岸边は、もう一度、さっきの紙を確認した。

その紙には、あいつ等の事が事細かに書いてある。そんな中、五十嵐の所で、ある事に気づいた・・・

「国籍・・・不明？」

今度は、建物の中で戦闘をやるらしい。敵との鉢合わせも十分考え

られる。

今回は、五十嵐の得意な狙撃も使えない。全員がサブマシンガンにグレネード、ハンドガンにナイフだ。

「五十嵐は大丈夫か？近距離戦だけど」

「大丈夫だ、足は引っ張らない」

後でわかることだが、シュミレーションで試したところ、三対一ですら五十嵐が勝ちやがった。

「だから、今回は三人一組と二人一組で二本の通路を同時進行で、詮索をする。

同志撃ちは、マジで勘弁だからな。組み合わせは、俺と勉で二人一組、残り三人一組。

よし、それじゃあシュミレーション始めるぞ」

「了解」

今日も、そんなこんなで無事終了した。

「けど、まさか五十嵐があんなにできるとはねえ」

裕大が帰り道そう呟いた。

「ああ、そうだな・・・なんせ、無駄撃ちがない。弾数を体で覚えてるんだよ、あいつ・・・っていうか、なんだよあいつの体術！！あんな動き見た事ない」

「俺も驚いた。逆に俺らが足ひっぱっちゃうかもな」

「はあっ、そんな事ぜってーさせねえ！！明日から、もう特訓だ」

「うん、そうだな。それじゃ、俺はここで」

「おう、したっけな」

裕大は、木造の今にも壊れそうな建物の中に入って行った。今にも壊れそうな家でも、中からは大量の子供達の声が聞こえる・・・

こっちは、ごく普通の家だが家庭が壊れた家だ。

玄関からは、入れない、裏側に回ると、兄の部屋から梯子が降りてくる。

ギシギシと音を立てながら登る。窓から、兄貴の姿が見える。机に向い、参考書を読みノートに何かを書いている。

「梯子は、俺が連絡するまで上げといってくれて言ったら？ 兄貴」

「違う、そろそろ帰ってくるころだと思って梯子を下ろしておいた」

「そうか・・・ありがとう 兄貴」

「ああ」

大次は、英介の窓からヒョイとジャンプし自分の部屋の窓に飛び移った。

そして、部屋に入りわざと大きな足踏みをする。すると、一階で扉が閉まる音が聞こえる。

そうすれば、何重にもした鍵を外しゆっくりと音をたてないように下に降り冷蔵庫から、作られてある食べ物を取り食べ終わったら、食器を洗い、みんなとは、違う食器棚に自分の食器をしまい、洗う時に使った布巾は、燃えるゴミに捨てておく。

そして、自分の部屋に戻り、何重にも鍵をかける。

「だあーくそつ、また負けた。」

「勝てないねえ・・・」

今は、大次と裕大の二人一組対五十嵐との対戦で・・・

『ゲーム終了 勝者、五十嵐選手』

「俺なんか、完璧にヘッドショット喰らっちゃったよ・・・」

「俺なんか後ろからナイフで一突きだよ」

「お前ら、人の気配を感じれないのか？」

「感じれるよ ！！ ただな、お前と康太は気配を消しすぎなんだ！

！ 康太はな、戦闘以外では、気配は感じれるよ。ただな、お前は常につ ！！ 気配が感じられない」

「そんなつもりはないんだがな・・・」

「くそー、これで三連敗だ」

「まだやるのか？それより、俺達のチームプレイを向上させないか？」

「あと一回、あと一回だけ」

「・・・わかった。五分後スタート」

『確認しました。五分後、ゲームスタートします』

五十嵐は、まだどこかへ消え完全に気配が感じられなくなった。

五分後ピピピと腕時計が鳴り始めた。ゲームスタートだ。

俺が前方、後ろを裕大が守りながら廊下を進んで行く右側にすぐに突き当りのある廊下と今いる廊下を繋げる出入り口がある部屋がある。俺が、裕大に手で右側の廊下に行くように指示する。

裕大が、そこに向かうと同時に俺もこちら側の入り口に近づく。入口の壁に張り付き、一呼吸おき、入口から半身出し銃を構える。部屋にはだれもない・・・

向こうの入り口からも裕大が、誰もいないことを確認する。俺は、裕大にこっちに来るよう指示をする。

だが、裕大は突然、俺に向けて銃口を向けた。何事かと思い、後ろを振り向く。するとそこには、五十嵐がドンと立っていた。

「くっ・・・」

銃口を向けるには、時間がかかり過ぎる。だから、ひじ打ちを喰らわそうとしたが、五十嵐は体をひねり、一瞬にして俺をあおむけで倒した。

その衝撃で俺は銃を落としてしまった。銃を拾おうとするが首元を五十嵐に踏みつけられ動けない。

五十嵐は裕大に銃口を向けていた。裕大も五十嵐も一歩も引かないまま時間が過ぎた。

俺は、とっさにナイフを取り出し五十嵐の足に刺した。

「むっ・・・」

ひるんだ瞬間に、裕大は五十嵐の頭に狙いを定める。ところが、五十嵐は腰に差していた銃を取り出し俺を撃つと同時に裕大に向けて

いた銃も引き金を引いた。

俺は、戦闘不能になり、裕大は腕を負傷し引き金を引けなかった。その隙に五十嵐は、裕大に向けて発砲した。

『ゲーム終了 勝者、五十嵐選手』

「んゝ・・・わかんねえってか、勝てねえーっ！！！」

試合当日、俺達は、一階からの侵入だった。全員で胸を二回ぶつけ拳を突き出した。

「俺達は、一心同体 必ず生きて帰ろう」

そう言っ拳をぶつけあった。ピピピ腕時計が鳴り始める。試合開始だ

一階は、ほぼ無視し階段を目指した。敵がいるのは最上階からだ。だったら、初めからゆっくり行ったって意味がない。その調子で二階も飛ばし階段に差しかかった。

三階に差しかかる階段は、五十嵐を先頭にし上に注意しながらゆっくりと上がった。

三階からは、二手に分かれ二本の廊下を同時進行で詮索を開始した。両側に部屋がある。大次は、裕大と五十嵐に指示し両側を同時に確認した。

どちらも異常なしと合図する。

すると、隣の廊下で銃撃戦の音が聞こえる。

それと同時に、五十嵐が叫んだ。

「隠れろ ！！」

廊下の先を見ると、二人がこっちに銃口を向けようとしていた。

「ヤッベッ・・・」

五十嵐と大次は、左右の部屋に横っ跳びをした。だが、遅れた裕大は、足を撃たれた。

「あゝあああくそおおっ ！！」

「大次、俺が弾幕を張る。その内に部屋に引きづり込め　！！」
その瞬間、五十嵐は腕だけを出し廊下の向こうに撃ちまくった。すると、向こうからは一時的に銃撃が止まった。

大次は、部屋から飛び出し痛がる裕大を引きずりながら部屋に入れた。

まだ、五十嵐は弾幕を張り、弾が切れる瞬間、俺達の部屋に飛び込んできた。

「大丈夫か？」

裕大は、足をかすただけだった。

「大丈夫、問題ない」

「俺は、向こうに合流する。大次は、裕大とここに残れ」

そう言うと、五十嵐は弾を詰め直し部屋から出て行った。しばらく続いた。銃撃戦は、やがて止んだ。

そして、一本の無線が入った。

『裕大、大丈夫か？』

康太の声だ。

「大丈夫、カスッただけだ」

『しばらく、そこで待ってろ。あとで迎えに行く』

「了解」

無線が終わった。

「大次・・・」

出血部分を圧迫する大次に裕大が上体を上げ、話しかけてきた。

「ん？なんだ」

「結局、俺達足ひっぱちゃったな」

「ああ、そうだな・・・迷惑かけちゃったな・・・」

三階には、両廊下に二人ずつ、いたみたいだが死体は、三人しか確認できなかった。

だが、残りの一人も負傷しているらしく廊下に血の跡が点々と残っ

ていた。

「向こうの人数も五人だ。つまり、あと二人だ。行くぞ」

康太達は、血の後を辿って一つの部屋の前に到着した。

康太が蹴破ると同時に五十嵐と勉が突入した。敵は、扉の正面の壁によしかかるように座っていた。

すでに呼吸が浅く目の焦点もあっていない・・・

だが、そいつは俺達に向かって銃口を向けてきた。その瞬間、五十嵐と勉は反射的に引き金を引いてしまった。

そいつは、弾丸を浴び反動で体が、所々飛び跳ねるように動いた。

勉は、突然過呼吸を起こし自分で必死に深呼吸をし、パニくる自分を抑えつけようとしてその場で、倒れた。

「勉　！！」

五十嵐が、勉に近づく中。カランカラカラカラと言う何か缶詰が転がるような音が向いの部屋から聞こえた。

不審に思った康太は、扉を開けた。目の前には、一人敵が残っていた。

そいつは、手に先ほど転がった奴であろう缶詰を手に使っていた。

「お、お願い、殺さないで・・・」

そいつの声に俺は驚いた。女性だ・・・

銃口を敵に向ける俺・・・そんな中、敵は、自分の覆面を外した。

「や、やめろ・・・ず、ずりいぞ、そんなの　！！」

「お願い・・・殺さないで・・・お願いだから」

覆面の下は、やはり女性だった。

「ふ、ふざけるなよ・・・なんで覆面を外したんだ。覆面をつけろ　！！」

そうは、言っても彼女は命乞いをするだけだった。

「そんな・・・そんなのって反則だ！！覆面をつけろ　！！」

どんなに叫んでも彼女は必死に首を横に振るだけだった。

「頼むよ・・・覆面をしてくれ・・・」

彼女はしばらく俯いていたが、自分が外した覆面を拾い、手が震える中、覆面をした。

俺は、覆面をした彼女に銃口を向けた。呼吸は、吐く事は出来るが、吸う事がうまくできなかった。

銃を彼女の頭に向け引き金に人差し指をかけた・・・目の前にいる、彼女が洋子に合わさってくる。

俺は、洋子を守るために戦っているのにどうして、洋子を殺さないといけない・・・

「駄目だ・・・できない」

銃口を下した瞬間、彼女はとっさに銃を取り出し俺に向けてきた。

「意味わかんねーよ・・・」

俺は、訳が分からなかった。洋子が、俺に銃口を向けている・・・何故だ？俺はお前を守るために・・・訳が分からず、俺は目を閉じた。

銃声が三発部屋の中に轟いた。目をあけると、目の前で洋子が胸に三つ穴を開け、血を出しながら倒れて行く。

「洋子ー！！」

俺が、倒れる洋子に近づこうとした。だが、それを五十嵐が止めた。

「どけ、邪魔をするな」

「康太　！！落ち着け、洋子なんかじゃない」

その言葉で、我に返った。目の前では、横たわる死体がビクンと一度、痙攣をおこしそれ以降動かなくなった。

「あれ？洋子、洋子は」

そう言ってそこら中をフラフラと歩く康太を見るに見かねた五十嵐は、肩を貸した。

「康太、これを見ろ」

そう言って一枚の写真を見せた。

「向かいの敵が大事そうに持っていた」

その写真には、目の前にいる。女性と楽しそうな笑顔を見せる男性が写っていた。

そして、その後ろで前の二人をはやし立てるかのようにある意味、小馬鹿にしてるような感じで何人かの男性が写っていた。

「夫婦なのか、恋人同士なのかはわからんが、この人は、洋子なんかじゃない」

洋子じゃないとわかると、なにやら、もやもやとした気持ちになってきた。

「この人達は、この女性を守るために俺達と戦っていたのかな？」

「康太？」

「だってそうじゃね？あの戦い方は、俺達を待ち構えた戦い方だった。それなのに、俺達は、この人達が、守ろうとしていた彼女までも殺してしまった。俺達が生き残りたいがために」

「康太、やめろ」

五十嵐が静かにそう言う

「なあ、五十嵐、俺達ってこういう人達を殺してまで生き残る価値なんてあるのかな？」

五十嵐は、俺の両肩を掴み俺に「しっかりしろ」と言ってから話を続けた。

「康太、このゲームが、どんなにスポーツマンシップに反していうが、互いにこれだけは守ろうとしている事を忘れたのか？何のために、覆面をしている？それは、顔をわからせなれたためだ。これ以上、死んだ人達の過去を追い求めようとするな！！頭がおかしくなっちまうぞ」

「・・・ああ、ごめん」

「それより、勉強運ぶのを手伝ってくれ。あいつ、見かけよりもかなり重い」

「ああ、わかった」

そう言って、彼女の手に大事な写真を持たせて俺達は部屋を出た。

第八話 日常が壊れた

「お前ら、大丈夫か」

バスは、いつもなら駅前に止まるはずだが、けが人がいるからと言
う訳でガンズショップに到着すると何人かの医者らしき人に混じっ
て岸辺が血相を変え入ってきた。

「なんだよ、岸辺・・・そんなあわてた表情して、そんなんでいい
のか？」

あわてる岸辺を見て大次が笑いながら言ってきた。

「ああ・・・いや、そう言う訳じゃないんだ。お前達が、戦い以外で
死なれたら困るんだ。お前たちを保護するのも、俺の任務だからな」

「はいはい、そうですね・・・俺達はどうせ商品ですよ」

岸辺は、それに対し何も言い返せない事に腹が立った。

意識の戻らない勉と足を撃たれた裕大は医者によって、ガンズショ
ップの中に運ばれていった。

「岸辺、なんでガンズショップなんだ？」

「ん？お前ら、何のためにこの店には、ミーティングルームがいく
つもあると思ってるんだ？犯罪者にはいい隠れ家で、俺達にとって
はあそこで、十分生活ができるってわけ。

あ・・・覗かない方がいいぞ。身のためだ」

大次は、なんやかんやと話しているが、康太は口数が少なかった。

「・・・ん？どうした、康太？もしかして、お前もどこか怪我して
るのか？」

「なあ、岸辺、もし俺らが死んだら、その死体はどこに行くんだ？」

「・・・原形を留めていなければ、その場で廃棄処分だ。だが、原
形を留めていれば、銃弾なんかは、処理して医療大学なんかに、持
って行く。まあ、向こうに着くまでに銃弾処理とかしていると腕一本
になっていたりする事も、あるらしいがな。訳有りの死体なんかは、

向こうに持っていけば解剖して向こうで処理してくれる」

「そうか・・・」

「おい、本当にどうした・・・カウンセリングでもやるか？」

「いや・・・知らない・・・」

明らかに様子のおかしい康太に全員がそう思っていた。岸边は深いため息をついた。

「とりあえず、連絡することがあるから部屋で待ってろ」

岸边は、そう言うバスから降りて行った。

岸边が、部屋に入ると全員が口を開かず、黙って座っていた。

「おい、それじゃ・・・とりあえず。勉と裕大は、こっちでしばらく預かる。それとしばらく、試合はないと思ってくれていい。裕大の方は、家には連絡をつけておいたんだが、勉の方は、康太・・・申し訳ないが、勉の家に伝えてほしい事がある」

伝えてほしい事を聞くと、康太は部屋から出て行った。

「康太・・・大丈夫か？」

心配したのは大次だ。

「あいつ・・・大切な人が目の前で死んだ幻覚を見たんだ」

「五十嵐、てめえ、なんでそれを言わなかった」

大次が、椅子から立ち上がり五十嵐に掴みかかった。

「言っただうする？立ち直るかどうかは、あいつ次第だ　！！」

「だからって、放っておくのか」

にらみ合いが続く二人に岸边は痺れを切らせた。

「二人とも落ち着け。お前等が、言い争ったって意味がないだろ」

大次は、掴んだ手を放し椅子に座った。

「・・・そうだ、お前ら、聞いて驚け！！おい、五十嵐。お前の狙撃距離の最高記録言ってみろ」

「2300・・・」

「さっきな、俺・・・2350出したぞ」

「そうか・・・なら、さっさと2400の記録だして帰るか・・・」

「え・・・ちよっ・・・マジで？」

五十嵐は、自分のライフルをロッカーから出し部屋を出て行った。

「くそっ・・・あの狙撃バカが、こんな状態でよくあんな事が出来るな」

苛立つ、大次に岸边は静かに言った。

「そうでもないさ・・・」

「あいつは、感情がないんだ。立ち直りが早いとかじゃなくて、落ち込むことがないんだ」

「俺も、狙撃バカだったからわかるが、あいつは、落ち込むと自分の記録を塗り替えてるんだ。落ち込んでる自分と決別するためにな・・・」

「・・・こんな、くそゲームをやる奴らなんて、みんな心に傷を持っている。みんなの前では、元気そうに振舞うお前みたいにな」

そう言う、岸边は部屋から出て行った。

「くそ野郎がっ！！」

大次は岸边にすべてを見透かされているようで苛立ち、目の前にあった鞆を掴み壁に思いっきり投げた。

康太は、勉の家の前にいた。チャイムに手を伸ばそうとすると

「お兄ちゃん？」

そう言う、勉の弟が扉を開けて出てきた。

「よお・・・久し振りだな」

「・・・うん」

「おばさん、いるか？」

「待ってて」

そう言う、家の中に戻って行きしばらくすると、おばさんを連れてやってきた。

「康太君・・・久しぶりね」

「どうも・・・お久しぶりです」

一礼し顔を上げると前は、笑うとても優しいおばさんだったはずだが、今は何かやつれているような気がした。

「やだ、そんなにかしこまらないで・・・あっ・・・上がってく？」

「いえ、大丈夫です。勉から、伝言があってきました」

「伝言・・・？」

「ええ、ちょっと泊まり込みでいいバイト見つけたから、しばらく帰ってこれないそうです」

「あらやだ、そんな事なくていいのに・・・」

岸边からは、それ以外に何も聞こうとはするなどは言われていたが、どうしても聞きたかった。

「あっあの、おじさんは・・・？」

「ああ、今は・・・まだ帰ってきてないのよ・・・でも、安心して、元氣よ」

その言葉に、違和感を覚えたが、それ以上聞けなかった。

「それじゃ、これで・・・失礼します」

「うん、それじゃあね。またいらっしゃい」

「・・・はい」

俺は、静かに扉を閉じた。

「兄貴、兄貴開けてくれ」

大次は、英介の部屋の窓に向かって石をいくつか投げた。すると窓が開き、梯子が降りてきた。

「悪い、兄貴・・・遅くなった」

「別に気にするな・・・それより大丈夫か？この頃、帰りも遅い様子もおかしいぞ」

「大丈夫、絶対に迷惑はかけないよ。それじゃ、俺もう寝るわ」

大次は、窓から窓に飛び移り、自分の部屋に入って行った。

あれから、だいぶ日にちが経った。学校は再開し、マスコミからは、野次馬に対しての暴力事件や、記者に数人の生徒が、掴みかかったりでだいぶ批判をされたものの、落ち着きを取り戻し始めていた。

ただ、クラスの様子は少し変わっていた。裕大と勉が来てないことは、他にもショックで学校に来ていない人がいるため誰も疑問には持たなかったがいつもなら、生徒で賑わうはずの教室も人数が少ないせいか、落ち着いている。

五十嵐は、相変わらず、本を読んでいるが大次は、輪から外れ一人で席に座りほぼ放心状態だった。

そして、康太も輪から外れ龍之介が落ちてきたあの日のように五十嵐の席の横で窓から身を乗り出しずっと下を見ていることが、多くなっていた。

「ねえ、康太？」

声に反応し、振り返ると洋子がいた。

「あんた、前より悪化したんじゃないの？大丈夫？」

「ああ・・・お前には関係無い」

そう言うのと、また窓の下に目線をずらした。

「関係無いって・・・人がどれだけ心配してると思ってるの　！！」

洋子は、俺を窓から引きずり出した。その時、俺はこの前の記憶が、重なった。

洋子が俺に銃口を向けてる。なんで・・・俺は、死にたくない・・・死にたくない　！！

「よせよ　！！止めろ！！」

康太は、洋子の頬を叩き、洋子は周りの机に当たりながら倒れた。一瞬、クラスは静まり返り女子からは、悲鳴と非難の聲がとび洋子に駆け寄る奴もいた。

「康太　！！お前何してんだっ・・・」

男子が康太に叫ぶが、康太は反応しない

「なんで・・・なんで」

ただその言葉を繰り返し頭をかきむしりながら、その場で立ち尽くす。

すると、横で本を読んでいた。五十嵐が本を閉じ立ち上がり康太を思いっきり殴った。

そこでもまた女子の悲鳴がある。康太は吹き飛び、泳いでいた目もようやく元に戻った。

「気が付いたか？康太」

五十嵐が問いかける、ただ頷くことしかできない康太。五十嵐は、康太の肩を担ぎ

「おい、そのの」

そう言って、大次を指名し

「こいつを、保健室に連れて行くのを手伝ってくれ」

大次は、「わかった」そう言って片方の肩を背負い、ぐったりとした康太を連れ、教室から出て行った。

保健室に入ると、誰もいなかった。

「まあ、好都合か・・・」

康太をベットに放り込み反応を待った。

「大丈夫か？康太」

康太は、両手で顔を覆い隠し語りだした。

「あいつが・・・この前の敵と重なったんだ。あいつを守るとか言っておいて俺が怪我させちゃった。そんな俺って最低だよな・・・龍之介の時と同じだ・・・やっぱ、俺は、ここにいちゃいけないんだ。俺は・・・あいつのためとか言っておきながら、本当は死にたくないから戦ってたんだ。そんな俺に、あいつを守る資格なんてない」

何も言い返せないのは、大次も戦ってる本当の理由は、死にたくないからだからだ。

「俺は・・・もうここにいてる事はできない・・・これ以上ここにいたらおかしくなっちまう。」

「・・・俺、学校やめるよ」

「な・・・まてよ、そんな学校を」

「いいじゃないか、別に」

止めに入る、大次を五十嵐が止めた。

「確かに、これ以上ここにいたら気がおかしくなるのは、確かにそうだ。」

大次だってそうだろ、戦場から次の日には、平和な学校生活、気がおかしくならない方がどうかしてる。それに、こういう事だって、今までにもあったんだろ？ 岸边」

すると、全員の頭の中に岸边の声が入ってきた。

『もちろんだ、お前達は、現実と非現実を行き来しているようなものだ。どちらが現実でどちらが非現実なんてわかったもんじゃない、実際に両方起きてるんだからな。だから、俺達がいるんだ。康太の保護もこちらでやるから、安心しろ』

「まあ、そう言う事だ」

五十嵐は、保健室からシップとテープを一つずつ取り保健室から出て行った。

『大次も、もう教室に戻れ』

「クソッ、わかったよ」

岸边からの指示で大次は保健室から出て行った。

五十嵐は、教室の扉を開けた。

「五十嵐君、どこに行ってたの！！早く、席に着きなさい」

社会の臨時の先生が、立场上ミスは出来ないからか、やけにピリピリし、なにやら叫んでいる。

五十嵐は、すぐ手前にいた男子に話しかけた。

「おい、他の女子どこに行った？」

「え・・・？ いやわかんねーよ。女子トイレじゃね？」

「おう、わかった」

そう言うのと、五十嵐は扉を閉めた。

「五十嵐君　！！ちょっと待ちなさい」

先生はそう言いながら後を追おうとして扉の前まで来たが、開けようとすると扉があき、大次が現れた事に驚き、ヘニヤヘニヤと腰を降ろした。

「え・・・先生？あれ・・・俺のせい？」

女子トイレには、洋子と他数名の女子が、洋子を励まそうとしていた。

そして、女子トイレの入り口に五十嵐が現れた。

「中村　洋子いるか？」

数人の女子に囲まれ、目を赤くし片手で頬を隠した洋子がいた。

「ちょっと、何の用よ」

一人の女子が前に立ちただかる

「何って、怪我してるんだろ。保健室に連れて行くんだよ。ちなみに俺、保健委員だ」

「保健室には、あいつがいるんでしょ？行かせるわけじゃないじゃないの」

「行かせるも何も、決めるのは、洋子次第だ。お前になんか、聞いてない」

五十嵐にとっては、睨んでるつもりは無いだろうが強い口調で、そう言われるた女子は、五十嵐から離れた。

「・・・私、行くよ」

「嘘・・・なんで？」

「行かない方がいいって」

「大丈夫、大丈夫だから」

女子が止める中、洋子は五十嵐に近づいていった。

「あいつのした事、許してやってくれ」

保健室に向かう途中、五十嵐が、話しかけてきた。

「えっ？」

「いや・・だから、あいつもかなり反省してるし、かなり落ち込んでるんだ」

「うん・・大丈夫。いつもの、康太じゃないもん」

「あいつとは、付き合い長いのか？」

「えっ・・ただの幼馴染だよ。家がお隣同士なだけ」

「そうか・・あいつ何言うかわからないけど引きとめたりは、しないでやってくれ」

「うん、わかった」

「その手で隠してる、頬は腫れてるのか？」

「うん、ちよつとね」

「見してみろ」

「え・・でも」

「いいから、そのためにシップとかを、わざわざ持ってきたんだ」
洋子が手を外すと、見てわかるほどボツコリと腫れていた。

五十嵐は、その腫れに触れた。

「熱はまだあるみたいだが、腫れは引いてきてるな」

五十嵐の手は、ヒンヤリとしてて、やけにゴツゴツとしてた。

そして、シップを貼りテープで固定しようとした。

「え・・いいよ、恥ずかしいし」

「そうか?・・このぐらいやっておかないと、あいつショック受けないんじゃないかなって思っていたんだが？」

「いい、シップだけでいい」

「そうか・・」

すると突然、五十嵐が洋子の顔を見て思わず横を向き嘔き出した。

「ちよっ・・今、笑ったでしょ」

「いや・・笑ってない。これは、くしゃみだ」

五十嵐は、口を隠し体が震えていた。

「笑ったでしょ、っていうか今も笑ってるでしょ」

「・・・ああ、わかった。笑った、許してくれ。悪気は・・・少しあった」

「何よそれ・・・じゃあ、許してあげるから、一つ聞きたい事があったの正直に答えて」

「なんだ？」

「いつも読んでる本あれって何？」

しばらく黙っていたが

「康太達には、内緒だぞ」

「うん・・・いいよ」

五十嵐は、一呼吸おいて早口で

「実は、ライトノベルとか言う奴だ」

洋子は、しばらく、固まっていた。

「え？うそでしょ？正直に答えてって言ったじゃない。」

五十嵐は、ポケットから本を取り出しページを選び、洋子に見せた。そこには、挿絵があり、その絵は、いわゆる萌えと呼ばれるような、絵が描かれていた。

しばらく固まっていた洋子が思わず噴き出した。

「アツツハハハ・・・本当だった・・・！！あ・・・痛い、腫れが痛い」

「おい、あまり笑うなよ。腫れが悪化するぞ」

「うん、うん、ごめんね。わかった。結構な秘密、私握っちゃった」
目に涙を溜めながら、洋子は言ってきた。

「それから、あいつの前でもそのぐらい笑ってやれ」

「うん、わかった。ありがとう・・・なんか元気出た」

そう言っていると、保健室の前に到着した。

「ここで待ってるから、また殴られそうになったら思いっきり叫べ。」

「わかった」

洋子は、そう言うど保健室に入って行つた。

『なかなか、気の効いた事するじゃないか・・ああ、安心しろ、お前にしか回線はつないでない』

岸辺の声が五十嵐に入ってくる。

「何の用だ？」

『いや、お前は、あいつのためにやったのか？それとも彼女のためか？』

「それも任務の一つか？」

『いや、気になってな』

「もちろん、あいつのためだ」

五十嵐は、教室に戻ろうとした。

『おい、待ってなくていいのか？』

「あいつが、また彼女を殴る事なんてねーよ」

康太は、その日に高校をやめた。

第九話 それぞれの過去

「い、いらっしやいませ」

受付の前に立つ大次を出迎えたのは、岸边ではなく、ぎこちない笑顔を作る康太だった。

それを見た大次は、しばらく硬直していたがそのまま笑顔を作り続ける康太に大爆笑した。

「ダッハハハ、何それ！！康太、保護ってそう言う事？」

「馬鹿、笑うんじゃねー！岸边が、働かざる者、食うべからずとか言って、ここの制服を渡されたんだ。お前等がここに来るまでの間、ここで働く事になったの。お前が来たから、俺の業務は終了なのに岸边の奴、まだ帰ってこねー。寝てんのか？」

「でも、いいねえここの店員で初めて井上って名札ができるんじゃないか？」

「いや、俺も岸边になるらしい」

「ん？どういう事？」

「岸边から聞いたんだが、ここには俺みたく保護された奴が、中にはいるらしい・・・だから、そう言う奴がバレないように、ここの店員は、全員岸边らしい」

「なるほど・・・でも、名前呼ぶ時、大変だろうな」

「店員同士、お喋りしてる所みた事あるか？」

「ああ・・・ないな」

「とりあえず俺、岸边探しに行ってくる。お前は、部屋にでも行つてろ」

康太は、受付から飛び出しどこかへ行ってしまった。

岸边は、勉強がいる個室に向かっていた。

「意識戻ったみたいだな」

扉を開けると、ベッドで寝ている勉がいた。

「体には、異常は見つからなかった。お前は、これで退院だ。それとこれを家に持って行け」

岸边は、勉に封筒を渡した。

「二十万入ってる。いやゝいい住み込みのバイトがあつて良かったな」

「なあ、岸边・・・」

「なんだ？」

「康太、ここで働く事になったんだろ？」

「ああ、保護としてな」

「・・・頼みがあるんだ。俺もここで働かせてくれ」

勉の頼みを岸边は悩む事なく、即答した。

「駄目だ。理由はわからんでもないが、ここで正式に働くと言う事は、紹介者になるってことだぞ。お前にそれができるのか？」

「岸边・・・もしかしてお前も紹介したことがあるのか？」

「・・・いや、まだない。でもいつかは、そうなるかもしれない・・・

でも、お前は出来ないだろ」

「・・・」

「なら、駄目だ」

「俺も、高校をやめたら保護してくれるのか？」

「そう言う訳じゃない、康太の場合は、リアルウオーに支障がでるから、保護をしているだけだ。ただ、お前の事情では、例えば親父さんが死んでもこちら側に、なんら支障は出ない。

だから、残念だが保護することはできない。ここにある、二十万でしばらくは、親父さんも助かる」

「そうじゃねー！！俺は、もう親父を楽にさせてやりてーんだ」

その時、奥の扉がガチャリと開き、康太が入ってきた。

「どういう事だ・・・？」

岸边は、また面倒臭いことになったぞと言わんばかりに頭をかきむ

しった。

「康太には、関係無い」

「おじさんが、入院してる事が関係あるのか？」

「え？なんで、知ってるんだ？」

「康太っ　！！あの紙、見やがったな」

「ごめん、目にチラッと入っちゃったんだ」

「クソッ・・・俺の管理ミスか・・・」

「なあ、勉強、おじさん、何かあったのか？岸边　！！知ってるんだろ。教えろよ」

「俺からは、言えん」

しばらくの間、沈黙が続き、勉強が話始めた。

「俺の親父・・・今、死んだまま生かされてるんだ。意識が戻らないまま、自発呼吸もしていない。生命維持装置で何とか生きてる状態なんだ。過労が原因らしい。会社からは、毎月少ない金額だけ振り込まれてくる。でも、それだけじゃ生きてなんか行けない。母さんは、体が弱いから、そんなに働くことなんかできないのに、無理して俺を高校にまで、行かせて。

でももう、それは限界に来てるんだ。今までは、貯金があったから何とか耐えたけど、それも底をつき始めてる。会社から金が入ってくるけど、生命維持装置にも金がかかるんだ　！！

しかも、会社は親父が死んだら金の振り込みを止めるって言うてきてる！！

・・・へ、変な、話だよな・・・金になる木の維持に・・・その倍以上金がかかるんだ。

けど、親父の生命維持装置を外しちゃったら金は入らなくなって、俺達の収入が無くなっちゃうんだ。母さんは、やつれてきてると言うのに、俺は　！！こんな所で、自分が生き残りたいがために人殺しをしてる・・・」

「・・・どうして、俺に相談してくれなかった。維持装置の方なら、俺が親父に・・・」

「なら、お前は　！！・・・お前の親父と面と向かって話ができるのか？」

「それは・・・」

俺と勉は、小さい頃から、よく遊んでいた。俺ん家の父親は、家に帰ってくることはなく仕事だとは、わかっていても。全く帰って来ない父親に、不満はもっていた。父親は、いないものだと思えるほどだった。

父親の職業は、医者で、父親は病院を大きくする事に没頭していた。母親も、そんなにアウトドアでは、なかった。でも、とても優しい母親だった。

だから、おじさんは、勉と一緒に俺も色々な所に、連れて行ってくれた。

ウォーゲームも、おじさんの影響だ。おじさんは、プレイヤーだった。

その頃は、プレイヤーも観戦者もたくさんいた。試合に勝って、チーム全体で喜ぶ中、おじさんは、観戦席で見る、俺達に手も振ってくれた。

「おじさん、凄かったね！！僕もいつか、プレイヤーになりたいな」
「康太がなるなら、僕もなる」

そんなある日の出来事だった。俺と勉は、おじさんの試合について話しながらの、帰り道だった。

「お前達がプレイヤー？そりゃ、楽しみだな」

「僕と勉のチームが、おじさん達のチームを倒すんだ」

「それは、困るな・・・無敗伝説を、息子のチームに破られるのは」

「それじゃあね、勉、おじさん」

俺は、夕暮れ時に電気が点いた、家の中に入って行った。

「ただいま、お母さん。今日は、すごかったんだよ。おじさんが、

大活躍！！足を撃たれた仲間をかばいながら、おじさんが、敵をど
んどん・・・倒して・・・いってさ・・・」

家に入り、靴を脱ぎながらいつも通り母親が、料理をしている。台
所に今日の出来事を語りながら駆け足で向かうと、そこには、料理
をしているはずの母親が、片手に包丁を持ち、もう片方の手は、あ
るべき所には、付いておらず、倒れている母親の場所から離れた場
所に落ちていた。

母親の周りには、血の池が広がり、壁には血が飛び散っていた。顔
には、血の気はなく、真っ青で、俺は何が何だかわからなかった。

「お、かあさん・・・？」

俺は、とっさに母親が握りしめていた包丁を取り両手で胸に抱える
ように握りしめた。

すると、向こうで玄関の扉が開き、誰かがこちらに向かってくる音
が、聞こえた。

ここにやってきたのは、スーツを汗まみれにし、息を切らせた父親
だった。

父親は、この光景を見て固まっている。俺は、そいつが視界に入っ
た瞬間、フツフツと怒りが沸いてきた。

お前のせいだ。お前が俺から、お母さんを奪ったんだ。

「・・・人殺し・・・」

俺の声に少し反応しこちらに目をやった。俺は、包丁を父親に向け
突進した。

父親は、目はこちらにやったものの、体が反応しなかったのか包丁
は親父の右足に突き刺さった。

父親から、包丁を抜くと、そこから血が飛び出し俺の顔にかかり、
目をつぶった。

親父の叫び声が聞こえる。生暖かい血を拭い目を開くとその場で足
を抑え、うずくまる親父がいた。

俺は、包丁を再び掴み

「この・・・人殺しー！！！」

両手で頭の上まで持ち上げ、親父を殺そうとした。振り下ろした包丁は、途中で止められ

気がつく俺は、仰向けに倒され包丁は奪われていた。

「康太、馬鹿な事はするんじゃない」

俺を倒したのは親父の叫び声を聞いた勉のおじさんだった。

おじさんの顔を見ると、涙があふれてきて俺は、その場で倒れる父親をそのままにし、おじさんに抱きつきその場で大声で泣いた。

その後、父親と母親は救急車で運ばれ母親は死亡、父親は足に障害を持ってしまった。

自殺の原因は、俺がまだ小さいことから教えられなかった。それ以来、親父は家には、全く帰ってくることはなくなり俺は、しばらくの間、勉の家にお世話になる事になった。

けど、俺が家で待ってないと、母親が帰ってきたとき、俺がいないと淋しがるそう思い、俺は

勉の家には、親父が帰ってくるようになったから大丈夫だ。と説明し、誰もいない家に一人で帰るようになった。

おじさんとおばさんは、家に誰もいないことは知っていたんだろう・

たまに、様子を見に来てくれたりした。・・・けど俺には、その愛情が重すぎた。

「しつこいよ、おじさんもおばさんもっ　！！俺はもう、大丈夫だから、もう来なくていい」

そう突き放しても、回数は減ったものの、おじさんとあばさんは、こっそりと様子を見に来ていた。

俺は、それが嫌で、家の窓と言う窓はすべて閉めきり引きこもるようになった。

引きこもって数か月が経ったか、まだ地面には、雪が所々、残っている時期、部屋で動かずにいると、

カン、カン、カン

と、窓から音が聞こえてきた。鳥か何かか？と思い、カーテンを開けると空き家だったはずの

隣の家に俺と同じ年ぐらいかの女の子が立っていた。

そして、俺に向かって「窓開けてー」と叫んでいる。

窓を開けると

「私、隣に引っ越してきたの。中村 洋子っていうの、よろしくね。あなたのお名前は？」

正直、戸惑った。近所からは同情の眼差しで見られ一部からは避けられ、それが嫌で、家から出たくなかったのにこの子は、俺の過去を知らない普通に接してくれる。

「い、井上 康太・・・」

少し戸惑ったが、それより嬉しかった。

「でも、おじさん達には、俺はかなりお世話になったんだ。おじさんを助けるためだったら、俺は親父に・・・」

「違う、俺は、もう親父を楽にしてやりたいんだ。だから、母さんの給料だけじゃなくてもっと安定した、金が必要なんだ」

「・・・だったら、俺がここで働いた分の金を全部やるよ」

「そ、そんなの・・・受け取れるわけないだろ」

「いいから、いつか返してくれればいいから」

そんな会話を、部屋の外で大次と五十嵐が、扉の横で座りながら聞いていた。

大次は、部屋に入ろうとした時、どこからか康太の叫ぶ声が聞こえ何事かと思い、叫び声がする部屋に近づき、その場で立ち聞きしていると五十嵐が、登場し大次が手招きし二人で立ち聞きをしていた。「いい友情だね」

大次がそう呟く

「・・・康太と勉もそうだが、お前と裕大だってそんな感じだろ？」
五十嵐がそう聞いてきた。

「そんなんじゃないよ。俺達は、互いに家庭の事情は、知ってるけど関わったりはしてない」

「そうか・・・」

ここは、あえて深く聞こうとしなかったのは五十嵐の考慮か、ただ康太と勉の過去を知ったのに俺だけ話さないのは、不公平だ。

「俺は・・・俺には兄貴がいるんだが、父親が違うんだ。異母兄弟ってやつ・・・？」

兄貴の父親は、兄貴が生まれる前に事故で死んだらしい。その後、違う男と結婚したらしいんだが、その男は、実は死んだ親父の慰謝料とかが目当だったらしくて、俺を母親に身籠みこもらせておきながら金を持って、どっかに消えちまった。

それ以来、母親は誰も信じられなくなって、俺達にそんな思いは、させたくないと思死になった。俺達は、それに答えようと必死に勉強して立派な人になろうと頑張った。

・・・けど、年月が経つと、俺の顔に父親の面影が重なったのか、母親は、俺を恐れるようになった。

どんなに、テストでいい点を取ろうが、どんなに、先生に褒められた事を報告しようが、俺を遠ざけるようになって、兄貴ばかりを見るようになった。母親が、俺を遠ざけようとするなら、俺が母親から遠ざかろう。そう思った。

・・・それが、今の俺の家の家庭の事情。

裕大の方は、あいつは、両親がいないんだ。生まれてすぐに、施設に預けられたらしい。

そこには、いろんな事情で捨てられた子供がたくさんいる。そんな中でも、あいつは最年長だ。

でも、その施設の管理人は、爺さんと婆さんだ。もう正直、先は長くない。

管理人がいなくなれば、金もなくなるし施設にいる子供達はバラバラになる。

だから、裕大は、この大会で優勝して優勝賞金を施設の運営に使おうと思っているんだ。

正直、俺も優勝賞金を手に入れたら、母親が俺の父親に取られた分の金を持って、金を母親の前に突き出して『俺は、あいつなんかの息子じゃない　！！』って言ってやりたいんだ。

変だよな。所詮は、みんな戦っている理由は死にたくないのと金なんだ・・・」

「ああ、そうだな・・・」

しばらく沈黙の中、五十嵐が立ち上がり

「今日は練習はなさそうだな」

帰ろうとしていた。

「五十嵐、お前にも、そう言う過去があるんじゃないのか？話してみろよ、気が楽になるかもしれないぞ」

大次がそう言うのと、五十嵐は立ち止まりしばらく黙ったまま動かなかった。

「・・・俺には、両親がいらないと言うのは実は嘘だ。母親は今どうなのかは知らんが父親は生きている。俺は、そいつを殺すために生きている」

「はぁ・・・なんだよそれ・・・？」

五十嵐は、そう言うときまた歩きだした。そしてその会話をすべて聞いていたのは、盗聴を続ける岸辺だけだった。

しばらくして、勉の父親の生命維持装置は、家族と康太が見守る中、外される事になる。

康太は、ガンズショップでの仕事を終え家に帰った。何も変わらず、

部屋に入ると突然、家のブザーが鳴った。俺は、急いで玄関に行き念のためチェーンをつけた。

扉の向こうから、コツツ、コツツ、っと不規則な足音と松葉杖をつく音が近づいてきた。

扉の前につくと、そいつはドアノブを握り扉を開こうとしたが、開かなかった。

「何しに来た？」

康太は扉の外に立つ奴に声をかけた。

「康太、またID錠のナンバーを変えたな」

静かな落ち着いた声が扉をはさんで聞こえる。

「当たり前だ。あんたがIDを調べれば、すぐに変える。何の用だ、ここにあんたの居場所はない」

「高校を辞めたと連絡があつてな」

「あんたには、関係無いだろ」

「ああ、そうだな。ただ、一つだけ言わせてほしい事がある。康太がどんな人生を歩もうが私に引きとめる権利はない。ただ、今、就職しているガンズショップだけはやめてくれ・・・」

あそこは、知らないかもしれないが、危険なんだ」

何やら知ってる口調に康太は驚いた。

「どうしてだ？」

「詳しくは、言えない・・・ただ、危険なのは変わらない、だからあそこに就職するのだけは、やめてくれ」

「あんたは、知っていたのか？」

「康太・・・？」

「知っていて、何もしなかったのか　！！」

「康太・・・お前まさかプレイ・・・」

「出て行ってくれっ　！！ここにもうあんたの居場所はない！！あんたの息子も、もういない　！！」

扉の向こうの奴は、しばらく立ち尽くしていたが松葉杖の音は、段々と離れて行き聞こえなくなった。

第十話 命なんて、脆くて軽い

『我々は、コードを教える』

試合開始前に、向こうから一方的な無線が入ってきた。向こうは、どうやら二回目の出場らしい。人数は七人、全てに守るべき家族がいる。

こんな所で全員無駄に、死にたくはない。だから、向こうは降伏することを宣言してきた。

そんな向こうからの申し出に康太達はまだ、無線には返事をしていなかった。

「どう思う？ また、罠か？」

康太は、全員に聞いてみた。

「でも、罠だったとして、向こうにどんなメリットがある？」

「こっちは、まだ裕大が、帰ってきてないんだ。向こうの意見をもう」

「五十嵐はどう思う？」

しばらく、黙って考えていたが

「・・・罠では、無いと思う。けど、誰がコードを打つ？」

「どういう意味だ？」

「コードを打って、武器のロック以外にも何かが起こる可能性があるってことだ。もし、この交渉を飲むなら、誰が電気椅子のスイッチを押すかだ」

「まさか・・・考えすぎだろ」

「これは、あくまでも可能性だ」

全員が、黙ってしまった。

「・・・向こうにも、聞いてみるか」

康太は、無線に手を伸ばした。

「こちら、チーム1 応答してください」

『コードを打ってくださいですか?』

「まだ、決まってません。もしかしたら、コードを打つとあなた方は、死ぬかもしれません。それでもいいんですか?」

向こうからは、理解できなかったのか返事が返ってこない。

『まさか・ウォーゲームでは、武器にロックがかかるだけで』

「これは、リアルウォーです。何が起こるかは、わかりません」

自分の口から出てきた言葉だが、確かにそうだと思ってしまった。けど、俺は心の中で何かが、プツリと外れた。

「そちらも、よく考えてください。それでもいいのなら・・・俺がコードを打ちます。まだ、時間はあります。ゆっくり考えてください・・・以上、通信終わり」

「康太・・・本当にお前が打つのか?」

勉が、問いかけてきた。

「いや、やっぱり俺が打とう。お前には、重荷だ」

五十嵐が、そう言ってきたが、俺は

「俺達は、もう人殺しなんだ。いきなり、七人増えようが、変わりはない・・・

さあ・・・みんな、もう少しで試合開始だ。念のため、周りには警戒しておこう」

言い終わると、ちょうどよく腕時計が、ピピピと鳴り出した。

康太の様子に誰もが疑問を持ったが、全員、丘の上から、周りを警戒した。

耳に装着した無線から大次の声が聞こえてくる。

『岸边に聞ければいいんだけどな・・・』

『ここでの会話は聞けないって言ってただろ。それに、例え聞いて

いても、あいつは何も教えてくれないさ』

『少しぐらい、教えてくれればいいのに』

『そうだな・・・』

長々と大次と勉の会話が聞こえる中、五十嵐の声が割って入ってきた。

『来たぞ。林の俺から見て右の方向、距離350』

『やっぱり、嘘だったのか？』

全員が目視で確認した。林の中に動く人影が何人か確認できる

『・・・いや、そうでもないみたいだ』

五十嵐が無線で、どうしてそう言うのかわかるには、しばらく時間がかかった。

暗い林の中を抜け、見晴らしのいい所に現れてのは、戦闘服ではなく、作業服を着た人達だった。

『下りてきてくれませんか？』

向こう側から、そう連絡があった。康太が立ち上がり、丘を下りて行った。

『康太　！！行くな、絶対にあれは何かの罠だ』

無線から勉の声が聞こえる

『勉と大次は、あいつ等の射程距離まで移動しろ！！俺がどうにかする』

五十嵐は、持ち場を離れ康太の後を追いかける。

敵の方に徐々に近づいて行く二人、五十嵐は、ショットガンを構え康太の横を歩くが、康太の方は、腰のホルダーに入ってはいるが、丸腰状態だった。

相手との距離はもう5mもないほどの距離になった時、五十嵐も銃を降ろした。

康太は、覆面を外し、五十嵐も外した。

目の前まで来て、ようやくわかった。

「驚いた。君たちか・まさか、こんな再開をするとはね・」

「あの・ダジャレを言う人は」

「ああ、部長は、最初の時にね・」

「それで、どうしますか？」

聞くまでもないが、念のためだ

「ああ・コードを教える。例え、死んだとしても、君達を恨んだりしないそれを言いたくて来たんだが、まさか君達が相手だったとは・」

「どうして、この大会に？」

「うちの小さな会社が破産寸前でね・優勝賞金に目がくらんだ。けど、こんな戦いをしてまで金なんかいらぬ。また一からやり直すよ」

「そうですか・」

「人を殺めてしまったから、元の日常には、戻れないかもしれないけどな。だが、これ以上、人殺しもしたくはない」

向こうから、コードが書いてある紙を渡された

「人を殺したことを・」

「何だって？」

「人を殺したことを、悔やめるなら、あなた達はまだ人間です」

「ああ、そうだな・ありがとう」

俺は、腕につけた。携帯パソコンにコードを入力した。

だが次の日、新聞の誰も気づかないようなところに聞いた事のないような会社の倒産とその家族の無理心中の小さな記事が、載る事になった。

「いいか、もう二度とコードなんか打とうとするな・・あのコードを打つと、手につけた発信器から微弱だが電流が流れる。その電

流が、直に脳に到達すると、一瞬にして脳死体の出来上がりだ」

ミーティングルームに全員が集まり、岸辺の溜息混じりの説明を聞いていた。

「覚悟の上だったとしても、まさか家族にも火の粉がかかるとはな・
・さすがに、ひどいな・」

「どうしてだ？あの人達は、試合で死んだんだぞ！！なのにどうして、家族まで殺されなくちゃいけないんだ」

勉が涙声ながら岸辺に訴える。

「・おそらく、他の奴等への見せしめだ。ちゃんと武器を使って戦えってな、さもないと・」

続きを言おうとしたら、椅子で大きな音を立てながら倒し突然、康太が立ち上がった。

「すまん、これ以上は言わん」

「いや、そうじゃない。練習に行ってくる」

康太は、そう言うのと部屋から出て行った。

「大丈夫なのか？あいつは・」

心配する岸辺に、勉が言った。

「無理もないだろ。康太が、あの家族を殺したようなもんなんだぞ」

「いや、あいつ、もしかして・・いや、何でもない」

「・・なんだよ。途中で止めるなよ 気になるじゃないか」

勉がそう言う中、岸辺は、しばらく黙っていたが口を開いた。

「人を殺すことに、快感を覚えてきたんじゃないのか・・？」

「まさか・・そんな訳ねーだろ ！！」

「一瞬戸惑ったが、それは少しだが、心当たりがあるからじゃないのか？いいか・・もし、少しでもおかしい動作が、あったら俺に報告してくれ」

確かに、康太の様子は少しではなく、かなりおかしい所はある。けど・・だからと言って・・

その時、腕を組みながら椅子に座っていた五十嵐が前にある机を蹴り飛ばした。

「そうじゃねーだろ」

五十嵐の声は、相変わらず静かだが怒りが入っているように聞こえた。

「俺も練習に行ってくる」

ロッカーを開け、ライフルを取り岸边の前を通り過ぎる時に

「あんたの過去に何があったかは、知らないけどな。それを、俺達と重ねてんじゃねーよ。見え見えなんだよ」

そう言うと、五十嵐は部屋を出て行った。静まり返る部屋の中で、岸边が突然、泣きながら笑い出した。

「ハハハハッ・・・そうだな・・・そうだよな、そりゃそうだ。ようやくわかった。どうしてこいつ等に感情移入しちまう訳が・・・」

「お、おいどうしたんだよ。岸边・・・過去ってなんだよ」

「プレイヤーに心配されるなんて紹介者失格だな・・・まあ、いいお前等の過去を知っているのに俺だけ話さないのも、なんだからな」
岸边は、制服の左の袖を捲りあげた。すると手首には、俺達が付けているのと同じ発信器が付いていた。

「ど、どういう事だよ。岸边っ　！！　なんだよそれ・・・」

「俺もプレイヤーだ。いや、だったの方がいいかな」

「はあっ？　意味わかんねーよ」

「話は終わりだ。それじゃあな」

岸边は部屋から出て行った。

五十嵐は、受付の前を通り射撃場へ向かう途中だった。

「あれ・・・五十嵐君？」

声が聞こえた方を向くと、そこには洋子いて駆け寄ってきていた。

「五十嵐君、どうしてこんな所にいるの？」

「それはこっちのセリフだ。どうしてこんな所にいる」

「うん、実はね・・・ここで康太が働いてるって聞いてね。まあ聞いたというか、聞こえたというか・・・とりあえず、本当なのかなっ

て見に来たの。でも、店員もないし今日はお休みなのかなって思ってたら、目の前を五十嵐君が歩いてるんだもん。びっくりしちゃった。五十嵐君は、ここで康太を見た事ある？」

しばらく、五十嵐は黙っていたが

「まあ、ここで待っていたのはいい判断だな」

「え？ そうなの」

「ああ、この建物は、受付をはさんで向かって左側は全て個室になっていて、右側は、一階から接近戦、二階は中近距離、三階は様々なフィールド、四階は遠距離、狙撃場になっている。

荷物とかは、個室に置いて行くから。必ずここを通るんだ」

「へえ、詳しいね」

「ああ、多分、康太なら一階にいるだろ。一緒に見に行ってみるか？」

「本当？ ありがとう」

観戦席から見みると康太は、接近戦ルームで誰かと戦っていた。

「どっちが康太？」

確かに、両方覆面をしているから、始めてみる人にとってはどっちが誰だとか、見わけがつかない。

「右側の方だ」

互いに正面に構え、ナイフを構えながららみ合いが続いていた。

相手が、ナイフで突いてきた時、康太はすばやくその手を取り手首を返し、相手を地面に倒して喉元にナイフを突きつけた。

「勝ったの？」

「ああ・・・これで相手が」

相手はナイフを放し、両手を上げ降参する。

その瞬間、康太は相手の喉にナイフを突き刺した。

『ゲーム終了、勝者 井上選手』

康太は、倒した相手には目もくれず、メインゲートに歩いて行った。
「え・・・何、今の？」

「ちょっと、ここで待ってろ」

五十嵐は、そう言うと観戦席から出て行き康太の所へ向かった。だが、一步遅かった。

「なんだ、あのゲームは　！！」

五十嵐が、到着する前に言いたかったことを誰かが先に叫んでいた。様子を隠れて見てみると、勉が康太に掴みかかっていた。

「どうして、敵が手を上げる中とどめを刺した？これは、あの試合じゃないんだぞ！！ごっちゃ混ぜにしてんじゃねーよ　！！」

五十嵐は、その後は何も聞かずその場を去った。観戦席に戻ると、洋子が席に座って待っていた。

「あ、五十嵐君」

「ここから、下に降りれる。康太もそこにいる」
そう言うと、五十嵐は観戦席から出て行った。

崩れたビルや瓦礫が、入り組む市街地の中、三つの目標物、距離は550。崩れてはいるが、全体を見渡せる古い教会の中に身を潜める。一つ目の目標物に狙いを合わせる。

そいつは、あえて急所を外す。引き金を引くと脇腹に弾を喰らいその場に倒れる。

狙撃に気づき遮蔽物しゃへいぶつに身を隠す。目標物は、倒れている奴を助けようと一人が飛び出し、もう一人が、あたりかまわず援護射撃をする。身を隠すすぐ横で弾がはじける音がする。すかさず、壁に隠れると後ろの壁に何発も弾が着弾する音と衝撃が伝わってくる。

俺は、撃ちまくる的の頭に狙いを定め、引き金を引く。そして、一人を背負い壁に身を隠そうとする的に標準を合わせ、引き金を引いた。

『シュミレーション終了』

「映像シュミレーション終了」

『確認しました。映像シュミレーション終了します』

すると、市街地が段々と溶けて行き次第に狭い個室に変わった。五十嵐は、映像を映し出す眼鏡とイヤホンを外し外に出た。

「五十嵐君、すごいね。レベル5のコンピューター3人相手でも、勝っちゃうんだ」

個室を出ると、目の前に洋子が立っていた。

「なんで、ここにいる。康太の所に行ったんじゃないのか？」

「いいの、康太がここにいてるって事がわかれば安心だから・・・それにしても、この店、人少ないけどこの階は、本当に少ないね」

「ああ・・・狙撃手は、人気ないからな」

「さっき、五十嵐君ぐらいの身長のお店員が、五十嵐君と同じ部屋に入って行っただけであとは私達しかいないよ」

「そうか・・・やってみるか？」

やけにソワソワとする洋子に、初めは黙っていようと思っていたが、目で訴える洋子に、根負けし自分のライフルを洋子に渡した。

「えっ、いいの？」

「ああ・・・でもここは、初めての奴には難しいからあっちだ」

バッテリーセンターのように分けされた所に移動し中に洋子を入れた。

「距離は300m。風とかで、ほとんど影響されないからスコープで目標物をとらえたら、引き金を引け」

外で、目標物の設定をしながら洋子に言った。

「300m？そんなに遠かったら当たらないよ」

「・・・じゃあ、150」

直立した状態で銃を構える洋子は、なかなか様になっていた。標準を合わせ、引き金を引くと

ガチッと音がし途中で引き金が止まった。

「引けないよ」

「安全ロックがかかってる。外さないと引き金の少し上の方にある」

「えっ？どこ」

洋子は、安全ロックを探して銃口を自分の頭に向けた
「馬鹿っ、銃口を自分に向けるな　！！」
五十嵐は急いで、洋子のいる所へ駆け込んだ。

第十話 命なんて、脆くて軽い（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

毎回毎回ヤベツ・・ネタが尽きた！！とかハラハラドキドキしながらなんとか十話まで行くことができました。

これからよろしくお願い致します。ご意見感想お待ちしております。

第十一話 命は脆いが重い

五十嵐は、ライフルの銃口を掴み向きを変えた。

「えっ・・・何？」

息は荒く、視線は洋子を見ているが、まるで違う人を見ているかのようだった。

「五十嵐君？」

しばらく動かない五十嵐を心配そうに洋子は覗いた。

「・・・ああ、悪い大丈夫だ。ほら、安全ロックはここだ。」

ロックを外すと、五十嵐は外に出た。しばらく上を向きボーっとしていているのか動かず前にある長椅子に腰を下ろした。

「大丈夫だ、心配しないでくれ」

心配する洋子に五十嵐はそう呟いた。そう言われた洋子は、銃を構え目標物をとらえた。

引き金を引くと、反動がすごく思わず声を漏らした。弾は、的には当たらなかった。

『着弾場所、目標物から20 m右にずれています』

音声がそう流れる

「ええー、ちゃんと狙い定めたのにーこの機械、壊れてるんじゃない？」

「きつと、反動で銃口が少しずれたんだ。数ミリのズレでも狙撃の場合、着弾するときには、かなりずれるんだ」

椅子に座りながら、様子を見ていた五十嵐がそう言う

「ねえ、コツとかないの？」

「引き金を引く時に、指に力をそんなに加えるな。指が緊張して思うように動かなくなる。人差し指は、軽く置いておくんだ」
コツを聞き、もう一度、挑戦してみる。

『着弾場所、目標物から15 m右手前にずれています』

「んゝ当たんない・・・五十嵐君は、どうやっていつもやってるの？」

「俺の場合は・・・銃を構えて、無心になろうとする、だが色々な記憶や考え事が出てくる。けど、それをどうにか、抑え込み一つの目標物に集中する。そうすると、俺の中での的がズームアップしているかのように見えてくる。それで的を捕えても、慌てて、引き金を引こうとするんじゃない・・・あせらずに三回、心の中で、数を数える。今だ・・・今だ・・・今だ」

声に合わせて、洋子は引き金を引くと目標物ははじけた。

『150m、成功』

「や、やったああゝ」

その場で喜び飛び跳ねる洋子

「凄いな、狙撃のセンスあるんじゃないか？」

「えゝ、違うよ。五十嵐君の教え方がうまかったんだよ」

「じゃあ、次300いってみるか」

「えっ、いいよ。次、五十嵐君やってみてよ」

洋子は外に出てきて設定をいじる、五十嵐に横入りし、設定を変えようとした。

「いや・・・俺がやったら大変な事になるから、駄目だ」

そう言って、割りこもうとする洋子に抵抗しながら設定を戻そうとした。

「あっ、ズルイ。大変な事って何よ・・・いいから、やってみてよ・・・」

また設定を変えた。

「駄目だ」

また、戻した。

「いや、ちよっと」

変えた。

「無理」

戻した。

「ヤダ、やってよ」

「お前が、やれ」

「そっちが先」

「くそっ・・・」

「なんの、これしき」

「しつこい」

「そっちこそ・・・」

こんな状態が、しばらく続いた・・・

「よし、わかった！！じゃんけんで決めよう」

そう言いだしたのは、五十嵐だ。

「いいわよ、負けた方は勝った方の言う事をちゃんと聞く事！！私、こういう時の勝負運は誰にも負けないわ」

「俺は、狙撃手だ。戦いでは、敵との駆け引きが、勝負の行方を左右する。こんな初歩的な、心理戦で負けるはずがない」

「じゃあ、負けたら一日奴隷よ。いい？」

「いいだろう、そっちが負けたら狙撃以外にも、色々と要求してやる」

「そっちこそ、覚悟しておきなさい」

互いににらみ合いほぼ同時のタイミングでハモリながら

「ジャン・・・ケン　！！」

「洋子っ　！！こんな所で何やってやがる」

ボン・・・で出した結果は、五十嵐はパーで、洋子はグーだった。

だが、五十嵐は康太の叫び声でそっちに視線をやっていたので洋子は、すかさずグーをパーにしておいた。

五十嵐は、結果を見て首をかしげたが、追及はしなかった。

それよりも、康太がズンズンとこっちに歩いてきた。

「なにしに來てるんだ」

「何って・・・遊びによ。それ以外に何があるのよ」

本当の理由と違う事に五十嵐がピクリと反応したが、何も言おうと

はしなかった。

「お前みたいな奴が、こんな所に来てんじゃねーよ。帰れっ　！！」
「わかったわよっ　！！それじゃあね五十嵐君、じゃんけんの続きはまた今度」

「ああ、わかった」

洋子は、駆け足でその場から立ち去った。

洋子がいなくなってから

「なんで、教えてくれなかった」

「教えようとしたさ、ゲーム中だったからな、お前の戦い見て彼女、困惑してたぞ」

「勉強にも言われた。お前は、人を殺す事に何の躊躇もなくなっちゃったのかって」

「本当はどうなんだ？」

「正直、わからない・・・お前はどうかだ？」

「躊躇してたら、自分が死ぬだけだ」

「やっぱりそんなもんか」

「ただ、お前の考えとは違う」

「どういう意味だ？」

「お前、狙撃はしないって言ってたよな？」

「・・・？ああ、そう言ってたな」

「なら、接近戦でいいから俺と勝負だ」

訳が分からないがとりあえず、接近戦なら俺が負けるはずがない。

「そっちの好きな状況でいいぞ」

「ああ、わかった」

部屋に入ると、正方形の広い部屋だった。凸凹もなかっただの平面だ。何も身を隠すところもない向こうの扉から五十嵐が入ってくる。

「この部屋でいいのか？」

「ああ、ゲームスタート」

『確認しました。ゲームスタート』

すると、突然部屋の明かりが消え、何も見えなくなった。

「うわっ・・・なんだこれ？」

「三日だ」

「何？」

「通常の人間が密閉された空間で光も音も何も感じない場所で心身に異常が出てくる期限だ。」

けど、今からお前を、30分以内にそれに近い状態にしてやる」

五十嵐の声が壁に反響しどこにいるかもわからない。

「この状況で、戦えないのはお互い様だろ」

「そうでもないさ俺には見えてる」

今の五十嵐の声は、後ろから耳元で呟かれた。背筋に鳥肌が一気にたった。

俺は、後ろに向かってナイフをがむしゃらに振り回す

「くそっ、どこに行った」

あたりを見渡しても、暗闇だけ気配を感じようと集中しても何も感じない。ただ、突然、両足の腱が切られ、足が動かなくなり、身動きを取れなくなった。

どういう事だ。どうして向こうには俺が見えているのか？

俺には、何も見えない自分の手すら見えないのに・・・けど、妙だ。俺はもう身動きが取れない。

なのにとどめをどうして刺さない？俺は、いつ足を切られた？どうして足だけしか切らない、もしかして、足以外にも切られたのに気づいていない？俺は、痛みも何も感じないのか？

俺は今、声を出しているのか？それとも心の中で考えているのか？いや、それ以前に俺は・・・生きているのか？

『ゲーム終了 勝者、五十嵐選手』

「フィールド、アウト」

『確認しました。フィールドアウトします』

暗闇が消え両手で頭を抱えうずくまる俺の前に五十嵐が立っていた。

「大丈夫か？どうだった？」

「わからない・・・ただ怖かった」

「試合の時、そう言う思いを敵がしているって事を忘れるなよ。そんな事、ゲームでは思わないだろ。殺しあいとゲームの違いはここだ」

「ああ・・・」

五十嵐は、康太の肩を軽く叩き部屋を出て行った。

「兄貴、開けてくれ」

「どうした、今日はやけに早いな」

「いや、この後またすぐに出かけないといけないんだ」

大次は、部屋に飛び移り一階の部屋の扉が、閉まる音を確認してから扉を開け、一階に下りて行った。

いつも通り、飯を食い食器を片づけ上に上がろうとした。

「・・・あんた、いつも部屋に鍵かけてどこに行ってるのよ」
扉をはさんで、母親の声が聞こえてくる。

「別に、出かけてなんかねーし部屋で勉強してるよ」

「嘘つくんじゃないわよ。いつも、夜遅くに帰ってきてるの知ってるんだからね。周りに変な噂が出るような事はしないでよ」

「そんなに世間が大事かよ・・・」

「少しは、お兄ちゃんを見習ったらどうなの」

「はいはい、自慢の息子ですね」

「今日は、やけに帰りが早いけど、どうせこれからお父さんにでも、会いに行くんでしょ」

その母親の言葉に一瞬イラッときた。

「なんだと・・・」

「ムキになるって事は、そうなんですよ！！やっぱり、あんたはあの人の息子なんだわ」

「ああ、そうだよ　！！あんたの息子は、兄貴だけだもんな！！俺はあんたの息子なんかじゃねーよ　！！」

大次は、そう叫ぶと大声で泣き叫ぶ母親を無視し二階に駆け上がり、部屋の扉を閉めた。

何重にも鍵をかけ、乱れた息を整える。

「大次・・・」

今度は、扉をはさんで英介の声が聞こえてきた。

「ごめん、兄貴・・・兄貴の事、少し悪く言っちゃった」

「それは、別にかまわん。それより、母さんを許してやってくれ、あれは本心で言ってるわけじゃないんだ」

「何も考えないで、口から出た言葉が本心以外に何があるって言うんだ」

「じゃあ、お前はさっき言ったことは本心なのか？」

「・・・本心ではないけど、心のどこかで思ってたのかもしれないな」

「母さんもきつと同じだ。言いたくて言っただけじゃない」

「俺の代わりに謝つといてくれ」

大次は、窓から外に出ようとした。

「大次っ」

「何？」

「俺達って昔は、よく外で一緒に遊んでたよな」

「ああ、遊ぶ道具ないから、ガムテープ丸めてキャッチボールとかしてたな」

「いつから、こんな風に扉はさんだり窓をはさんだりしないと、面と向かって話ができなくなっちゃったのかな？」

「それは・・・」

考えてみても一体いつからこうなったのか、全く分からなかった。

「わからないな・・・ただ、俺の父親がいなくなってから、きつとこ

うなる事は、決まっていたんだよ」

大次は、窓に足をかけ身を乗り出した。

「今日も行かないと駄目なのか？今日は家うちにいてやってくれ」

「悪い・・・兄貴・・・今日だけは、どうしても行かないといけないんだ。母さんには、謝っておいてくれ『ごめん・・・』って」

大次は、そう言う窓から飛び降り外で待つ裕大と一緒に、ガンズショップではなくみんなが待つ駅へと向かった。

「お待たせ・・・」

「ねえ何かあったの？」

「いや、別に・・・」

第十二話 第二の犠牲者

バスの中は、いつも通り誰も喋ろうとはしない。静まり返っていると、バスはまた長いトンネルに入って行った。

この長いトンネルを抜けると目的地に到着だ。ただ、いつもと違うフィールドに全員の顔から緊張と恐怖心がにじみ出ている。そんな事は、お構いなしにバスは目的地に到着した。

「到着しました」

誰も降りようとしなから運転手が、そう言った。最初に五十嵐が立つと、後に続き全員が立ち、ノロノロとバスから降りた。

康太が最後に降りようすると運転手にいつも通り紙を渡される。

「試合が終わりましたら、お迎えにあがります」

そう言うバスは、向きを変えどこかへ行ってしまった。康太は紙とペンライトを手に移した。そこには、いつも通り名前を書かれたバックが置いてある。

そして、目の前には暗闇が続くフィールドが大きな口を開けて待っている。

全員が、黙々と準備を始める

今回のフィールドは、洞窟だ。右左と入り組んではいるが、一直線だ。

つまり、必ず敵と正面で対峙することになる。どちらが先に引き金を引くかが、勝負を左右する。

このフィールドの場合、運までも必要となる。だから、全員が苦手とするフィールドだ。

「大丈夫だ・・俺達は一心同体、必ず生きて帰ろう」

全員が握った拳をぶつける。ピピピ、試合開始の合図だ・・・五十嵐を先頭に一列に並び大きな口を開けた洞窟へと俺達は入って行った。

先頭から五十嵐は前方、勉は二番目で右斜め前、康太は三番目で左斜め前、裕大は四番目で右

大次は最後で左を注意するはずだった。

だが、入ってみると中は一人が立って入れるほどの大きさしかなく右も左もほぼ関係無かった。

全員が暗視ゴーグルとライトををつけ慎重に進む、しばらく進むと五十嵐が左手を突然上げた。

『止まれ』の合図だ。

そして、裕大を指さし『こっちに来い』と合図する。裕大が近づくと五十嵐と雄大の足元にはワイヤーのトラップが仕掛けてあった。その場に座り込み裕大と五十嵐が前で何かやり取りをする中、かすかだが、どこかで壁が崩れるような音が鳴ったのを大次は耳にした。

裕大は立ち上がり人差し指を立て顔の横でぐるぐると回した。

『進行中止』

「どういう事だ？」

洞窟から抜け出せた事に安堵はするもののさっそく康太が裕大に問いかけてきた。

「わからないよ。とりあえず、敵の中に俺並の機械オタクな爆弾魔がいる。

見えるワイヤーの後に見えないワイヤーが仕掛けられていた。しかも、それを跨ぐとその先に赤外線トラップまで仕掛けられている。あの暗闇の中、五十嵐が見つけてなかったら、俺達死んでたぞ」

「解除は？」

「できるけど、爆弾の状況はリアルタイムで向こうに報告されてる。少しでも異常があれば、向こうが手動で操ってドカン！！別のルートは・・・ないよね」

「どうして、そんなトラップが仕掛けられているんだ？いつ仕掛け

「たんだ？」

「それが、わからないんだ・・・あんな物を簡単に仕掛けれるはずがない。最低でも40分はかかるよ」

「試合開始してまだ15分も経ってないぞ」

「待ち時間だ」

全員が悩む中、五十嵐がそう言った。

「試合開始までの時間を入れれば1時間以上はある」

「でも、それってルール違反じゃ・・・」

「ルールもなんもなくなってきたってことじゃね？とにかく、あの爆弾をどうにかしないと始まらないぞ」

「いや、そうでもないんだなあ・・・」

大次は自信ありげにそう言った。

「この洞窟、何か変だなんて思ってたけどようやくわかった。所々土が違う所があるんだ」

全員が首をかしげる。

「だから、このフィールドは一本線じゃなくて隠し通路があるってこと。敵もその事に、多分気づいてる」

大次は、洞窟に入ったすぐの壁を銃で叩いた。するとゴロゴロと音を立て、大きな穴ができあがった。そしてその先には、地図にはない通路が現れた。

「どお？」

先はどうなっているのか、わからないため、偵察で大次と裕大が隠し通路に入る事になった。

初めは五十嵐と裕大の予定だったが他にも通路があるかもしれないからと、大次が言い張り

五十嵐と交代した。

「やっぱり、俺も一緒に行こう」

「大丈夫だ五十嵐、危ないと思ったらすぐに引き返す。心配するな」
「・・・わかった。敵に見つかったらすぐに銃声を鳴らせ。急いで向かう」

「了解・・・20分経ったら一度戻ってくる」
そう言って、大次と裕大は隠し通路に向かった。

長い一本道が続いていたが、段々と穴の大きさは広くなってきた。
そして、二つの穴が目の前にでてきた。

『どっちがいい？』

『右』

二つの穴は、別れてはいるもののほぼ並列した状態だった。ただ、しばらく進むと通路は右に曲がりほんのり薄明るい広場に出た。

そこは、壁の割れ目から流れる水、天井から地面まで伸びた柱の割れ目から流れた水が地面にたまりできた小さな川。そして月明かりかはわからないが広場全体を照らす光。大次が思わず「すげー」と、声を漏らすほど、幻想的で、人工なのか自然なのかは分からないがこのゲームとは正反対の美しさがそこにはあった。

思わず試合中だと言う事を忘れる大次を裕大は連れ戻した。

『時間だ。戻ろう』

大次は頷き、裕大を先頭に來た道に戻った。

通路を左に曲がると隣の通路からかすかだが、足音が聞こえた。裕大は、まだ気づいていない

急いで裕大の肩を叩き、後ろを振り向いた裕大に人差し指を立て口の前に持ってきて見せた。

『音を出すな』

足音は聞き間違えであってほしかった。だが、聞き間違えではなかった。足音に裕大も反応した。

なるべく、音を立てずに敵と並列に歩いた。足音から敵の人数を確認した。

『敵は、三人一組 どうする？』

裕大は、大次の指示を待つ

『通路が合流する所で襲撃、壁は、崩れやすいからお前の合図で壁を壊して攻撃する』

裕大は頷き、ナイフを音を出さないように取り出した。そして、裕大と大次は、道の合流地点へ急いだ。裕大は壁に張り付き敵を待った。

大次は裕大から少し離れた所に構えた。敵の足音が、段々と近づいてくる。

裕大は大次に目をやった、大次はただ頷いた。裕大は、手でカウントを始める

『3・・・2・・・1・・・』

合流場所から敵の顔がヌツと出てきた。次の瞬間、裕大は敵の顔めがけナイフを突き刺した。

敵の喉にブツリと、ナイフが入りそのまま、裕大は壁に押し付けた。それと同時に大次は、壁を蹴り壊し隣の通路に侵入した。

目の前に一人、少し前にもう一人いた。敵は、裕大が起こした出来事に反応しこっちは反応が遅れた。

チャンスだ・・・

目の前の敵の喉元に、左手でナイフを突き刺しながら右手は、ハンドガンを構え、もう一人の敵に向けようとしたが、向こうは、俺よりも先に俺に銃を向けていた・・・

死ぬ・・・

一発の銃声が鳴り、敵の胸から噴き出してきた。生暖かい液体が大次の顔にビシャツとかかった。敵は倒れ、その先には銃を構えた裕大が立っていた。

「大丈夫・・・？」

「あ？ああ大丈夫だ」

大次の左手は、まだナイフを掴んでいるがナイフが刺さった敵は、壁伝いにズズズッと崩れた。

そして、その場で体をふるわせ始めた。まるで脈打つかのように、リズムよく体が痙攣し、しだいに脈が弱まるように痙攣も弱まっていき動かなくなった。

大次は、ナイフを抜くと首からドロツとした血があふれてきた。

「戻ろう」

「ああ、そうだな」

ナイフを腰に戻し、戻ろうとしたその時、段々と敵の足音が近づいてくる。

「裕大、逃げるぞ」

そう言った時にはもう遅かった。敵はもう、目の前まで来ていた。凸凹とした壁に張り付き、その場で銃撃戦が始まった。銃撃戦とはいっても、ほぼ一方的だった。

俺達は、壁に張り付きすぐ耳元で、弾がはじける音を聞きながら身を隠した。

そして、威嚇射撃で、何とか敵を近づけさせないようにしていたが、ジワジワと敵は近づいてきていた。

「裕大、俺がどうにかするから、後退しろ」

裕大が何か反論を言う前に大次は飛び出し敵に向かって撃ちまくった。

裕大は、遅れて出てきて後退するのではなく同じく敵に、撃ちまくった。

「裕大　！！」

「大丈夫だ。康太達が来るまで、持ちこたえればいいんだべ？」
そんな事を言っていると敵の方で突然、何かが爆発した。

「無事か？お前ら　！！」

五十嵐が、やってきて敵に向かって手りゅう弾を投げた。また、向こうで爆発が起き、悲鳴が上がる。

壁が崩れ外から月明かりが入ってくる。土煙が立ち、五十嵐はその中に突撃して行った。

何発かの銃声上がり、向こうからの攻撃はピタリとやんだ。

「大丈夫か・・・？」

後ろから、遅れて勉と康太もやってきた。

「ああ、大丈夫」

そう言いながら、立ち上がる裕大の横で立ち上がり、呼吸を深くする大次、今まで、興奮していたから気付かなかった・・・
恐る恐る腹を覗きこむ・・・額には汗がにじみ出る。月明かりに照らされ大次の服は所々破れ、赤く染まっていた・・・

「ごめん・・・無理だった」

そう言い終わると、大次は両膝をつきドサツと倒れこんだ。

「大次っ・・・！！」

全員が、大次に近寄る

「おい、しっかりしろよ。何やってるんだよ」

大次の呼吸は、今度は浅く早くなっていた。

「ごめん・・・ごめんな・・・」

震えながら、上げた手を裕大がしっかりと掴んだ。

「何・・・何謝ってるんだよ・・・意味わかんねーよ。たのむから・・・
しっかりしてくれよ。あつあと、少しでバス来るから、それにみんなで乗って帰ろう」

「俺・・・俺、死んだら・・・みんなに迷惑かけちゃう・・・それに、俺・・・母ちゃんにまだ、謝ってない・・・謝んなきゃいけないのに・・・」

「うん・・・わかった、わかったから。謝りに行こう。俺も一緒に行くから」

大次の手の握力が段々と弱まっていく

「優勝・・・優勝・・・して・・・」

大次の手は、裕大の手からスルリと抜け地面に落ちた。

「大次・・・？なあ、大次・・・起きてよ・・・起きてよ、起きてくれよ・・・」

・」

裕大は、大次の亡骸を抱きよせ小さな声を漏らしながら涙を流した。康太達は、涙をこぼす者や壁にぶつかりながら悔しがる者など各々で悔しさを表現した。

「お迎えにありがとうございました」

声のする方を見ると、運転手がポツンと立っていた。裕大は、運転手に縋り寄った。

「頼む、俺が怪我したとき見たく大次もガンズショップに・・・」

裕大は、何の前触れもなく突然倒れた。

「裕大っ　！！てめっ何のつもりだ」

運転手は勉に手に持った黒い何かを向けスイッチを押した。すると、勉まで倒れた。

五十嵐は、運転手に向かって突進していく。だが、運転手の方が早く反応しスイッチを押し五十嵐はその場に受け身も取れないまま転げ落ちた。

「一体、何するんだ　！！」

運転手は、康太にも何かを向けてきた。

「お迎えにありがとうございました」

スイッチを押した瞬間、突然視野が黒に変わり何も感じれなくなった。

「・・・ええ突然ですが、高本　大次君は、家庭の事情がありました、父親の住む方に引っ越す事になりました。先生も今日、突然そう言われて正直驚いています。まあ、みんなに言わなかったのは、少し恥ずかしかったんだろう・・・よしそれじゃ、HR終わり」
先生が、大次についてそう言うと言った教室から出て行った。

教室の中は、今までの活気はすでになくなっていた。龍ノ介の自殺、康太の自主退学、それに加え、今回の大次の転校・・・康太に大次、

グループは違うが二人ともムードメーカーのような、存在であった。龍ノ介の後に、そんな二人がいなくなりクラスの誰もが、変わったと感ずるほどに変わってしまった。

教室の席は、相変わらず欠席者が多くて虫食い状態だった。ただその欠席者の中には、珍しく裕大も含まれていた。

裕大は、大次の家の前に立っていた。大次が死んだ事をどうしても信じられなかった。

もしかしたら、またいつものように、二階から飛び降りてくるんじゃないか？

「おまたせ」軽い口調でそう言いながら一緒にガンズショップに行くんじゃないか？

そんな淡い希望を持っていた。

『おい、裕大何をしようとしてるんだ』

頭の中に岸辺の声が入ってくる

「いや、大次がいるんじゃないかと思って」

岸辺の溜息が聞こえてくる・・・

『いいか、言いたくはないが大次はもう・・・』

「わかってる・・・でも念のため」

裕大はそう言うとき家の呼び鈴を鳴らした。

「誰・・・？」

扉から現れたのは、頭は白髪交じりで手入れもしていないのかボツサボサで痩せこけたおばさんが現れた。

「あの・・・大次君はいますか？」

「そんな子は、家にはいません」

お婆さんは扉を閉めようとした。

「あ、あの・・・俺、大次から伝言を預かってきました」
裕大は閉まろうとする扉に足を滑り込ませそう言った。

「えっと・・・最初に、まだ謝ってないことを謝りたいと言ってます。それから・・・」

「もう、やめてくださいっ!!」

話し続けようとする裕大にお婆さんは、割って入った。

「あの子は、父親の所に行っただんです。それで十分です」

「違う!! 違うんです!! 大次は親父さんの所になんか行ってません!!」

お婆さんは、呼び止める声も無視し薄暗い家の奥へと姿を消した。

「待ってくれ」

裕大が帰ろうとした時、誰かに呼び止められた。振り返ると誰かが、二階から飛び降りた。

「大丈夫ですかっ!?!」

駆け寄ると大次の兄貴が倒れていた。

「いって・・・やっぱり不慣れな事はするもんじゃないな・・・」

「あの・・・」

「いや、母親が俺に伝言を頼んできてな、全くこういう連絡ごとを人に頼む所とか変な所が似てるんだからあの母子は・・・」
おやこ

英介は立ち上がり土や草をほろいながらそう言った。立ち上がると英介は長身で周りから言えはいわゆるイケメンの部類に入る容姿だった。

「父親を選んでないことぐらい言われなくっても知ってる・・・あぁ、今のは伝言じゃないから伝言は、『いつでもいいから帰って来て』だそうだ。俺達は大次の連絡方法とかないからもしかして、君ならあるんじゃないかなって思ってたさ・・・あ、あともし正面からは、無理だったら、いつでも梯子下ろしておくから。そう伝えたいてくれ」

連絡方法だなんて俺だってない・・・俺だって教えてほしいくらいだ。

「わかりました。伝えておきます・・・」

そう言って、裕大は立ち去ろうとした。

・・・死んだ事は家族にも伝えられないか、

もしかしたら、それはいい事なのかもしれない・・・

第十三話 サプライズ

『昨日、仙台市で発砲事件が発生しました。拳銃を所持していた犯人は、その場で射殺され 一般市民にも負傷したという情報も入っています。それでは、現場にいるリポーターに現地の状況を伝えていただきます』

『こちら現場です。詳しい場所は明かされず中にはいる事は未だに出来ませんが、ごらんください。今でも進入禁止のテープが張られいつもなら人で賑わうここも、静まり返り事件の傷跡を物語っています。・・・それでは、ここまでの事件をVTRにしましたご覧ください』

いつもなら日本でも拡大する砂漠化現象のニュースで持ちきりだが、今はこの事件で、持ちきりだ。ここ最近、いたる所でこんな事件が続発、これで五回目だ。そして殺された犯人や捕まった犯人の共通点も拳銃の輸入ルートも全くの不明らしい・・・けど、そんなニュースを見る康太は拳銃の輸入ルートには、心当たりがある。それは、ガンズショップだ。

北海道の少ない夏も終わり、衣替えの季節、店員の服装も上に羽織るものが支給された。

そして、康太のその服の下にはホルダーと拳銃を隠し持っていた。

事は時間を少しさかのぼる・・・

試合が、終了し全員が黙って装備を鞆に入れていると

「全員、拳銃とホルダーはしもうな」

そう言ったのは、五十嵐だ。

「どうしてだ？」

「自分の身を守るためだ。拳銃が嫌ならナイフだけでもいい」

康太と勉は、理解に苦しむ中

「今日の事件の事？」

そう言ったのは、裕大だ。

「今日の事件？」

「知らないのか？都心で発砲事件があったんだぞ」

「ああ、そういやこの頃、テレビとか見てないな」

「で？その事件が、何か関係あるのか？」

五十嵐が、喋ろうとする前に裕大が話し始めた。

「実は、俺も気になってその事件について調べただけど、どうやら報道規制がかかってるんだ。目撃者にも緘口令が敷かれているって噂もある」

「カンコウレイ？」

「誰にも言うなって事、犯人の名前も誰も公表されてないでしょ。」

暴力団でも武力集団でもないんだ。おそらく誰とも言えないただの一般人が犯人なんじゃないかな？」

「どう言う意味？」

「俺達は周りから見たらどんな感じだ？」

「ごく普通の学生と社会人」

そして裕大が意味ありげに拳銃を見せる。それを見てようやく康太と勉は理解した。

「そう多分犯人はプレイヤーだ」

「・・・でも、何のために？」

「わからない。でもこの街にだってプレイヤーはまだいるんだ。俺達だっけもしかしたら巻き込まれるかもしれない。そう言う事ですよ？」

裕大が五十嵐に尋ねる

「まあ、備えあれば憂いなしだ」

それで話し合いの結果、全員が所持することになり手首の発信器にはほぼ全員がしていたが、リストバンドをつけるように再確認した。

次の日から学校も衣替えが始まり、冬服の下に全員が拳銃を隠していた。

ただ、それは少し逆効果にもなった。拳銃を所持することで、バレるのではないか、外を歩けば、全員があやしく見える気を張りすぎて、唯一気を許せるのが家だけになってしまった。

そんな家でも、小さな物音でも反応するようになり、ぐっすり寝れる事はほぼなくなった。

そんな事で、話は最初に振り替える。康太が家の外に出るとなぜか洋子とばったり遭遇。

康太は、腕につけた携帯を見ると8時50分をさしていた。

「・・・お前、完璧に遅刻じゃん」

「え？知らないの？今、学校祭準備期間よ」

「学祭？もうそんな時期か？」

「そう、今回は女子も男子もやる気ばっちりよ。みんな元のクラスの感じに戻ろうと必死になってんのよ」

「そうか・・・まあ頑張れよ」

そう言ってガンズショップに向かった。

「学祭は、少しでもいいから顔を出しなさいよ」

「・・・おい、受付がなに呆けてるんだ」

康太が顔を上げると受付の前に岸边が立っていた。

「別に・・・客来ないし暇だなんて思ってたさ」

「まあ、それもそうだな」

「なあ、岸边・・・」

「なんだ？」

「学祭って岸边もやった事あるべ？どうだった？」

「学祭か・・あんまりいい思い出はないな・・準備期間とか、よく外出届出してサボってたりしたし、学祭当日は、他校の奴等と喧嘩になったりとか散々だったな。・・・そう言うそっちは去年とかどうなんだよ」

「そっちとそんなに変わらない。去年は、音楽の先生とマジ喧嘩して合唱ボイコットしたり・・でも合唱以外は意地になって、1年の中で全部最優秀賞取ったりしてた。

ああ、でも中3の時はどっかの不良達が展示品、ぶっ壊してさクラス男子全員でそいつ等フルボッコ。クラスが初めて一致団結したみたいでちょっと面白かった。でも、全員で暴れたからほかの展示品も悲惨な事になって、代表者として勉と一緒に先生に怒られてたような気がする・・・」

「勉とは同じ中学だったのか？」

「岸边・・こんな田舎に何個も学校があると思うか？裕大とも一緒だよ。ああ、あと大次と龍之介・・・でも五十嵐とは、違うんだよな・・あいつは高校から一緒だ」

「ふくん。そうか」

「五十嵐ってあいつ中学とかどこなのかな？岸边お前知ってんだろ？」

「知ってても言いません」

「いいよくだ。あの紙もう一度、見てやるから」

そう言っただけで康太は、受付の机の中を探し始めた。

「なっ・・駄目だ。止せ」

岸边は受付を乗り越え、紙を奪い取り自分の口の中に押し込んだ。

「ゲッ・・」

「うん、よくカンニングペーパーとか証拠隠滅とか言って口の中に突っ込んだもんだ」

口をもぐもぐとさせながら岸边がそう言った。

その瞬間、ガンスシヨップ全館に非常ベルが鳴り始めた。

教室や廊下では、段ボールやプラスチックなどが散乱し個性溢れたジャージ姿の生徒たちの声が飛び交う。ステージの出し物の練習や当日の行動を一緒にしようと約束をするカップル。

勉や裕大のクラスにも昼飯の買い出し部隊が「ただいま帰還しました」なんて言いながら帰ってきた。

待ってましたと言わんばかりに教室に湧き上がる歓声

「準備期間ってやっぱり楽しいよな」

勉と一緒に作業をする裕大が話しかけてきた。

「この熱気が当日まで持てば最高なんだが・・・」

「あっ確かに、当日ってなんか燃え尽きちゃうよな」

「その線に定規あわせてくれ」

「あいよ」

長方形の発泡スチロールに縦に何本も切れ目を入れて裏返して円柱を作り上げた。

「よしっ、完成」

そう言って裕大と手でハイタッチ

「凄ーい、出来たんだ。はい、これ勉と裕大君の頼んでた食べ物」
そう言いながら制服を着た洋子が現れた。

「おう、ありがとう。裕大ちょっと白いペンキ取ってきてくれ」

「あいよ」

裕大がそう言って勉達から離れた。

「ねえちょっと相談なんだけど」

洋子が突然、しゃがみ込み真剣な表情になった。

「何？」

「康太や大次君を学祭に呼べないかな？それで全員でクラス写真を撮ろうと思ってるんだけど・・・最近、勉さ裕大君と仲いいでしょ？だから大次君の連絡方法もわかるかなって思ってた」

一瞬、勉の表情が曇ったが洋子はそれに気付かなかった。

「女子って企画もの好きだよな」

「いいじゃない、サプライズ！私好きよ」

「とりあえず、俺から聞いてみるから、洋子は絶対に裕大に大次の事、尋ねたりするなよ」

「どうして？」

「どうしてもっ！！あいつだって突然いなくなって傷ついてるんだから」

「そっか・・それもそうだよな」

「そう言う事」

勉はおにぎりを取り出し口に運ぼうとした時

「はい、これ白いペンキ」

そう言っ裕大は作業をする人たちの間を縫って教室の出入り口に立っている女子の方へ行った。

そして、何やら楽しそうに会話をしている。周りにいた男子もざわつきだす。

「おい、あいつ確か一年の美男女コンクールの優勝候補じゃね？」

「ああ確かそうだ・・って、なんで裕大なんかと」

そして、会話が聞こえないため勝手にアテレコを始める奴等がいた。

「どうしたんだよ。こんな所に来て」

「実はね、私・・美男女の優勝候補にあがっちゃって」（男の声）

「へえ、すごいじゃないか」

「それでね、結果発表の時に遠くでもいいから、見てほしいの」

（男の声）

「ああ、別にいいよ」

「ええ！本当？じゃあさ、もし優勝したら。その後の学祭、一緒に行動してくれる？」（男の・・）

「ああ、いいよ」

「本当？嬉しい！！」（男　！！）

そう言いながら女性役をしていた男子が裕大役をしていた男子に抱

きつく。

それと同時に彼女も裕大に抱きついた。

「ぬおおおおお——！！」

男子全員が雄叫びをあげる中、女性役の男子は裕大役の男子に軽く抱きついていたのだが、驚きのあまり思いっきり締め付け、裕大役の男子は痛さのあまり男子の中で一人だけ悲痛な叫び声をあげていた。

燃え上がる男子と女子、そして冷めきる一部の女子。洋子は、どちらかと言うと後者の方だった。

「・・・ねえ、男子の方がサプライズとか、かなり好きそうなんだけど、そこどこどうよ？」

勉は、どれにも当てはまらず驚きのあまり開いた口も塞がらず、手に持っていたおにぎりを白いペンキの中に落としてしまった。

「ぬあああ、俺のおにぎりがあああ」

勉が叫ぶ中、なぜか洋子も叫んだ。

「きゃっ私のパンツ・・・」

続きを言おうとした洋子は思わず口をつぐんだ。続きが気になり男子の視線が、ギツつとこちらに向けられる。

洋子は、何やら慌ただしい動作を取った後

「パ・・・パンよ。パン・・・私も落としちゃったの・・・ペ、ペンキに」

残念そうに裕大の方に視線を戻す男子

裕大も少し残念そうに振り返ると

「もう、バカっ」

そう言って少し頬を赤めた彼女はどこかへ行ってしまった。

「よっしやああー！！」

喜びはしゃぐ男子に残念がる女子・・・これは極端に別れた。

「よくやった裕大。お前は、男の中の男だ」

「裕大、お前の雄大さは雄大だっ！！・・・あれ？雄大が裕大？」
喜ぶ男子に首をかしげる裕大の一言

「妹だ」

一気に冷める男子と女子

「そ、それじゃ私、外の男子達におすそ分け持ってくるね」
全員に背を見せないように洋子は教室から出て行った。

「・・・あれ？これ洋子のパンじゃない」

一人の女子が一つのパンを指さしそう言ってるのがどこからか聞こえた。

この高校は、外にも展示する作品があり、裏庭でその作業が行われる。

洋子は、飲み物が大量に入れられた袋を片手に裏庭の一步手前の場所です度服の最終チェックをした。

「よしっ！」

片手でガッツポーズをとり裏庭に向かおうとした時

「お前、こんな所で何やってるんだ？」

洋子は驚き思わず声を漏らしながら、すぐさま後ろを振り返ると相変わらず小さな本を片手に持った五十嵐が木陰から現れた。

「ちょ、ちょっと、驚かさないでよ」

「そうか、悪い・・・そんなつもりじゃなかったんだ」

「あ、はいこれ、飲み物。みんなで飲んで」

「残念ながらほかの奴等は、いないぞ」

「えっウソ・・・」

裏庭を覗いてみると確かに作業をする人はいるが、うちのクラスの人間は見当たらない。

「木材調達と言う名目の友達の家への脱走だ」

「いわゆるサボりってやつね・・・」

「それよりスカートにペンキついてるぞ。ペンキがはねたのか？」

「嘘っ　!!どこ？」

「後ろ後ろケツの方だ」

「女子にケツだなんて言うな！」

そう言いながら器用にスカートを回し後ろの部分を前に持ってくる
と確かにペンキの粒が

ポツポツとついていた。

「嘘でしょ、せっかく変えたのにまさかこんな所に飛んでたなんて・
」

「変えた？」

「何でもないっ!!」

「まあ灯台もと暗し、頭隠して尻隠さずって言うからな」

「でも今回は、頭じゃなくて全部、尻の方なのよ・・・」

そう言って落ち込みしゃがみ込んでしまった。

「お・・・おい、何かあったかは知らないが、気にするなっ」

落ち込む洋子を励まそうとする五十嵐。だが、それを阻止するかの
ように突然、校内放送が流れた。

『職員は至急、職員室に来てください。そして、外で作業をしてい
る人達は速やかに作業を中断し校内に入ってください』

いつもなら聞き流す校内放送だが、今回は声が違った。何か緊迫し
たような声だった。

何事かと裏庭で作業をしていた人達はぞろぞろと校内へ入っていっ
た。

「何かあったのかな？」

心配する洋子を横に五十嵐は、左手から延びたイヤホンでラジオを
聞いていた。

「校内に入ろう」

五十嵐は耳からイヤホンを外し洋子の腕を掴み校内へと入っていっ
た。

「え？ねえ、何があったの？」

洋子を半分引っ張る感じで歩く五十嵐に洋子が尋ねた。

「多分、学校から連絡があるだろ」

「でもさっき、ラジオで何かわかったんでしょ？」

「詳しい事はわからない。ただ、学校が休校になるのは確実だ」

「え？なんで」

教室に入るとサボっている生徒以外は教室に全員いた。

『五十嵐、大変な事になった』

五十嵐の頭の中にすぐ横で腕につけたパソコンをいじる、裕大が話しかけてきた。

『ああ、俺もラジオで聞いた』

『頼むから二人で話を進めるな。俺にもわかるように説明してくれ』

『発砲事件がこの駅前で起きた』

「発砲っ!？」

驚きのあまり思わず口にしてしまった。そして勉の周りに人がごった返す。

「どういう事だ、勉!!誰かと回線を繋いでいるのか？」

「発砲って、あの事件の事よね・・・この近くでもあったって言うの？」

「さて、みんな落ち着け・・・俺だって詳しくはわからない。先生が来るからそこで話を聞こう」

勉がみんなを落ち着かせる中、先生がやってきた。

「・・・この様子だと、少し状況がわかってるみたいだな。誰か、今外にいる生徒に連絡がとれる人はいるか？」

「はい、俺わかる」

一人の男子が、手を上げそう伝える

「それじゃあ、今から連絡を取ってくれ。それで、もし誰かの家にいるなら、絶対に、外に出るなって伝えてくれ。・・・さっき警察から連絡があつてな駅の近くで誰かが銃を撃ったらしい」

ざわつく生徒を「静かにしろ　！！」と先生から一喝が入った。

「親がもし迎えに来れるのであれば今から連絡をして迎えに来てもらってくれ、もし無理な生徒は先生達が手分けして送り届ける。そして、安全が確認されるまで外には絶対に出ないでほしい。もちろんしばらく学校は休校だ」

先生からの連絡が終わると生徒達は親に連絡をとるなり、ざわつき始めた。

「どうしよう私の家、駅の近くなの」

「私の家においでよ。唯、一人くらいなら何とかなるわ。駅からも遠いし」

「駄目よ、弟がいるの」

「俺、家族全員で親戚の所に行くらしい」

「俺は隣町のおじさんが迎えに来てくれるらしい」

校門の前には車がずらりと並んでいた。玄関から車まで走って行く人や頭を低くしていく人

玄関の前で外に出たくないとか喚く人など色々といった。

「ああ母さん・うん大丈夫こっちは、どうにかするから大丈夫。だから無理しないで、家が近い友達に乘せてもらおうから大丈夫だつて。・・・うん・うん、それじゃ、したっけ」

勉は、親に連絡を取り洋子の親の車に乗って行った。

しばらく経つと、校門に並んでいた車もいなくなり騒がしかった教室は、静まり返り展示品と段ボールの残骸、そして裕大と五十嵐だけになった。

第十四話 敵か味方か・

「大量に並んでた車、いなくなっちまったな」

「ああ・・・」

誰もいなくなった教室で裕大が窓から外を眺める五十嵐に話しかけた。

「お前も両親がいらないんだっけ？」

「ああ・・・」

「そっか・・・俺とおんなじだな」

「ああ・・・」

「どこか施設に預けられてるのか？」

「いや・・・親戚と国から補助金貰って一人暮らしだ」

「先生、おせーな」

「ああ・・・」

「頼むから『ああ・・・』以外にもなんか言ってくれよ。言葉のキャッチボールが一方的で淋しいんだけど」

「・・・お前も制服に着替えてきたらどうだ？」

『拳銃、制服の中に隠してるんだろ？』

「ああ・・・そうだな。それじゃ、トイレ言ってくる」

そう言って裕大は教室から出て行った。

しばらく窓から外を眺めていると廊下から誰かの足音が近付き教室のドアを開けた。

「何の用だ？」

振り返ると女性が一人立っていた。

「あの・・・裕大さんはいますか？」

「トイレに行った」

「そうですか、ありがとうございます」

そう言うと、駆け足で彼女はトイレに向かった。

五十嵐は、窓から外を眺めながら裕大に回線をつなげた。

『トイレに一人の女性が急接近』

『何？まじでか？ちよっと待って、まだ銃が丸出し』（下ネタ？）

『到着まで残りおよそ5秒』

『ちょ・・・嘘』

『3・・・2・・・1』

（ガサ・・・ゴソ・・・ボタン）

『裕大さん、どこ？』

『な、その声・・・み、未来か？ここ男子トイレだぞ』

『裕大さん・・・そんな所で、何やってるの？』

『何って、トイレだからやる事は決まってるだろ！！ウ○コじゃ、ウ○コ』

『そこ、掃除用具入れよ』

『・・・いや、制服に着替えてたらな・・・廊下から足音が聞こえてきたから、急いで隠れたからこうなったんだ』

『ふーん、どうだか？』

『なんだよ、不審がりやがって』

『裕大さん、家で隠れてそう言う事が出来ないからってここでやるのは、どうかと思いますよ』

『馬鹿　！！何言ってるんだ。いくら俺でもな、時と場所はわきまえる』

『何が時と場所よ！！さっきも誰かの「きゃっ」って言う甘い叫び声に反応してたじゃない』

『あれは違う、あれは男同士のノリと言う物があっただな』

『どうせ、さっきの人ば、思い出しながらやってたんでしょ　！！』

『ハッ、そんな事で嫉妬するだなんて、未来もまだまだ餓鬼だな』

『そ．．そんなんじゃないもん！馬鹿、変態』

『誰が、変態．．ん？．．ヤベ、回線がオンになってる　！！』

『嘘！！じゃあさっきの会話が筒拔．．』

（プツン．．）

五十嵐は、軽く舌打ちをした．．

五十嵐が誰もいなくなった教室でしばらく、窓から外を眺めていると廊下から急ぎ足の二人の足音が近付いてきた。

「五十嵐　！！」

扉を開け裕大が五十嵐を呼んだ。

「どうした、そんなに慌てて」

「聞いてたか？」

「何をだ？」

「俺とこいつの会話」

裕大の横でやけにオドオドとする未来を指さしながら言った。

「一体、何の事だ？」

「．．．本当に聞いてない？」

「だから、何？」

「いや．．何でもない」

「．．．よく、わからないが、俺に立ち聞きの趣味はない（嘘）．．

．それより、先生の車が来たぞ。そろそろ玄関に行こう」

玄関に着くとまだ何人かの生徒が残っていた。

「それじゃ、多分全員乗れるからと思うから乗ってください」

玄関の前には、部活動で使うバスが止まっていた。バスに乗り込むと生徒達もようやく落ち着き安心した表情になっていた。ところが、やはり全員は乗れずバスは出発した。

しばらくし、次の乗用車が来た。

「さあ、早く乗って」

残りは、五十嵐と裕大、それと裕大の妹だけになり残す席は一つになった。

「五十嵐・俺とこいつ同じ家だからお前先に乗れよ、俺等次のに乗るから」

「・出来れば、そうしたいんだが、お前らどちらか先に乗れ鞆を教室に忘れた・」

そう言って両手を上げ鞆がないことをアピールした。

「そんなのどうでもいいだろ」

「いい訳ないだろ。俺の鞆には、色々入ってんの！」

『銃があの中に入ってる』

運転席に座る女性の先生は、色々の意味を読み間違え「アホらしい」とか呟いているのが聞こえた。

「・・・そっか、なら未来。お前先に乗れ」

「裕大さんは？」

「見ての通り、俺も鞆忘れた」

そう言っつて裕大も両手を上げた。未来は、車に乗り込み心配そうにこちらを見ってくる

「心配するな、大丈夫だから」

未来は、何か言おうと口を開きかけたが非情にも車は、出発した。

取り残された五十嵐と裕大

「それじゃ、お前の鞆取りに行くか」

裕大がそう言った。

「ああ、今持ってくる」

そう言っつて五十嵐は下駄箱のちょうど死角になる所から、鞆を持ってきた。

「それじゃ、お前の鞆取りに行くか」

五十嵐がそう言う

「悪い、俺今日学校、手ぶらで来た。ただジャージ持ってくるの忘れたから取りに行くか」

そう言って二人は教室に向かった。

「本当に学校にいるの俺達だけになっちまったな」

「ああ・・・」

窓から外をみる五十嵐に話しかけた。

「おい、『ああ・・・』って禁止」

「わかった」

「それと、お前が俺に何か聞け」

「・・・じゃあ、一つ聞きたい事が」

「何？」

「未来・・・だっけか？同じ家ってもしかしてさ」

「ああ、妹だ。血はつながってないけどね。施設で一緒に育てられた。最年長が俺でそんな次が、未来。あと下は、みんな小学生や幼稚園に行ってる」

「・・・どうでもいいかもしれないけどさ・・・俺の予想だけども・・・別に聞き流してくれても構わないけど。あいつは、お前の事、兄じゃなくてそれ以上の」

「知ってるよ・・・薄々気がついてるさ」

「・・・なら、応^{こた}えてやろうとは、思わないのか？」

「応えてやりたいけどさ・・・俺達が今やってる事、考えるとどうにもさ・・・俺だけいいのかな？って思うのさ・・・」

「そうか・・・別にいいと思うけどな。」

「けどさ、お前からそんな話が出るとは思わなかった」

「意外だろ」

「けど、やっぱりお前、あの会話聞いてたろ」

「さあ、どうだか」

「さっきまではさ、疑惑だったんだけどさ。今、確信に変わった」

「悪気は、かなりあったんだ。許してくれ」

「よし、今回は正直な所に免じて許してやろう・・・ってなるかあゝ！一発殴らせろ」

「やだなゝ先輩御冗談を・・・」

「誰が先輩だ！！・・・なら、お前も一つ秘密を暴露したら許してやろう」

「秘密・・・特にないな」

「嘘つけ！！お前はいつも謎のオーラに包まれてるんだよ！じゃあさ、お前このゲームについて何か知ってるの？」

「どうしてだ？」

「なんとなく最初の時、慌てる俺達をまとめ上げた。岸边が言っていた初参加が勝率40%以下なのは、お前みたくまとめ上げるものがないからだ」

「・・・」

「お前はあの時、やけに落ち着いていた。それに何か理由があるとしたら、それ以外に考えられない」

しばらく五十嵐は悩み、ようやく口を開いた。

「・・・俺は、まだ餓鬼の頃」

その時、裕大と五十嵐の頭の中に慌てる康太の声が流れてきた。

『お前ら、今すぐに学校から離れろ　！！』

「康太か？どうした」

康太の後ろからは岸边が必死に康太を止めようとする声が入ってくる。

『駅前の発砲は偽物だ。本当の場所は学校だ！！人を外に出さないための偽の情報だったんだ』

五十嵐と裕大は、ただ返事はせず康太の言う情報を聞く事に集中した。

『つまり学校がゲームの会場になる一般市民の負傷者とは、ゲーム

の勝者。犯人が全員死亡なのは、ゲームでの死者だ。犯人に共通点がないのは、敵味方入り乱れて死んでるからだ！！

目撃情報もそりゃないよな、プレイヤー以外に誰もいないんだ！！
・・けどその試合には抜け道・・』

康太からの声はここで途絶えた。

「くそっ、回線が切られた　！！」

悔しがる裕大だが、すぐに誰かから連絡があった。

『今、聞いた通りだ。ここがフィールドだ。どお？見慣れた場所が戦場になる気分は？』

「だれだ？」

『俺も岸边、あっち側の紹介者だ。よろしくこの前は、よくも僕の掘り出し物チームを殺してくれたね。あれ結構いい値段してたんだよ。』

一番最初の岸边と言いついてこんなにも軽い口調なんだ・・・

『でも、今回は強いと思うよ。このゲームの経験値は君達より上だし・・・まあ、負けないでしょ。人数も君達より多いし。あと抜け道なんてないから、まあ頑張っ。いや、学校を戦場にするなんていいアイデアだね。とても俺には思いつかないよ。うんうん・・・でもさ、俺だって』

「お前に戦場の何がわかる」

岸边の語り口に割り込みそう言ったのは五十嵐だ。

「戦場の本当の意味も知らない奴が、戦場、戦場言ってんじゃないよ」

「五十嵐・・？」

『・・・そうだったね。ちょっとお話しすぎたようだ。それじゃ、頑張っ。優勝候補。それからちよつと助言。もう、学校内で会う人は敵だと思った方がいいよ』

そう言うと、岸边と名乗る奴からの回線は切れた。

「・・・どうしようか？」

しばらくの沈黙の中、口を開いたのは裕大だ。

「いきなりあんな事言われて慌てなくなったのは、ちょっと予想はしてたからかな？」

「とにかく、準備は一応しておくか」

五十嵐は、鞆を取り出しチャックを開いた。鞆の中には、必要最低限の装備がズラリと入っていた。

「五十嵐・・・よくこんなの入れて学校に来てたな」

「正直、いつバレるかオドオドしてた」

「度胸あるな」

学生服を脱ぎ装備を着々としながら会話をした。

装備をし終わり、上にまた学生服を着た。

「これは、正直賭けだ。敵に見つかっても取り残された生徒を演じよう」

「ミスったら終わりだな」

「玄関に行こう。康太が言ったようにこの試合には抜け道がある」

「本当か？」

驚く裕大に五十嵐はすぐにアイコンタクトを取るよう指示した。何事かと思ったが、それはすぐに理解した。

急ぐ足音がこっちに向かってきていた。

五十嵐は、拳銃を取り出し腰のあたりに置いた・・・

足音はドアの前でとまりドアを勢いよく開きドアに立っていたのは、担任の先生だった。

「お前ら、まだいたのか、急いでここから出るここは危険だ。」
「先生・・・」

「・・・どうした。お前ら？」

五十嵐は、バレないように銃を腰に差し込む

「車が・・・まだ来ないんです」

裕大も五十嵐も戸惑っていた。山岸先生の事もあるが、先生は生徒に慕われ人気のある先生だ。

「とにかく玄関で待ってるんだ。車が、きっと来る」

信じていいのか？そんな疑問が頭の中をぐるぐると回る。いつもならそれに従うかもしれない

でも、今は場合が場合だ。

「先生・・・先生の車は？」

裕大が尋ねる

「先生は、これから学校の中を巡回して他にお前らみたいに隠れる生徒がいないか確認しなきゃならない」

「先生、ここが危険って言うのはどういう意味ですか？」

今度は五十嵐が問う

「それは、銃を持った人間がこちら辺をうろついているかもしれないんだ」

「でも、それなら家でも危険なんじゃないんですか？銃を持った人間が家の中に押し入ればそこだって危険だ。つまり学校が取った行動は、危険を分散させたんだ。学校で死ななければ学校に責任はないですからね」

「・・・だから、これまでの発砲事件は、ここのように公共の建物や広場で起きてるんだ。学校が標的になる可能性の方が、高い」

その言葉に違和感がある事に気づいたのは裕大だった。

「先生、どうして発砲事件の場所とかわかるの？」

「それは、ニュースで・・・」

「その事件は、報道規制がかかってるんだ。公共ネットでは、場所などは公表されてない。俺だって調べたんだ」

「・・・さっき警察の方から連絡があったって言ったろ。それで聞いたんだ。ちょっと頭の中がごっちゃになってな」

「先生、俺ずっと窓から外見てたけど、パトカーとか一台も学校の周りを通ってないんだ。公共の建物や広場が標的になるって言うでしょ？ならどうして、警察はここの辺を巡回しないんだ？」

「・・・何が言いたいんだ？五十嵐」

明らかに先生の顔色が変わった。

「つまり・・・どうぞここでドンパチやってください・・・って言うてのようなもんじゃないですか？」

「・・・お前たち・・・まさか」

その瞬間、五十嵐と裕大は銃を抜こうとした。

だが、早かったのは先生だ。

「動くな　！！お前等」

拳銃を二丁取り出し、裕大達に向けた。

「俺に早抜きで勝てると思ってるか？手を上げるんだ　！！」

二人とも素直に手を挙げた。

「せ、先生　！！どうして先生みたいな人が・・・」

「そりゃこっちのセリフだ！！！！どうしてお前らみたいな奴がこんなのをやってるんだ！！このゲームは、子供がやるもんじゃないぞ。」

「童貞や処女を早くに捨てるのと同じですよ。このゲームをやる年代もだんだん若くなってきている」

「そんな物と一緒にするな！・・・くそっ俺の指導力不足か」

「先生・・・」

「ああ、待て待て今、考え事をしてるんだ。くそ・・・岸边のやり。お楽しみってそう言う事かよ・・・」

「俺達を学校から出してください。そうすれば、試合は終了です」

「何？本当か」

「康太は、それを言いたかったんだ。緘口令だなんてそもそも不可能だ。インターネットが主流の今、一斉に何百、何千人もの発言を取り締まる事なんて不可能だ。だから、目撃者は絶対に出したくな

い。学校内には、目撃者がいないかもしれない。でも、学校外に出れば目撃者は、絶対に出てくる。・・・先生、どうする？先生は俺達を撃てない。もちろん俺達も先生は撃てない。どお？先生」

しばらく迷った後、先生は銃を降ろした。

「よし。いいだろ、お前等を最初に見つけたのが俺で良かった。俺以外だったら、今頃銃撃戦の真っ最中だ」

「・・・でも、先生の仲間でしょ？話せばわかるんじゃない」

「誰が、なんな奴等の仲間なもんか、あんな人殺しを楽しむような奴等」

「どういう事、先生？」

「それは、移動しながら教える」

そう言うと先生と俺達は廊下に出た。

第十五話 担任が変わった（前書き）

一部、暴力的な表現が含まれると思います。苦手な方はご遠慮ください。

第十五話 担任が変わった

「敵は俺を含めて六人だ。全員、他の階を単独で詮索している。職員玄関に俺の車がある。」

「そこまで、誰にも会わないように祈ってな」

先生を先頭に廊下の真ん中を堂々と銃も手に持たないで歩いていった。

「先生、やっぱりこれってどうかと思うんですけど・・・」

「うるさい、お前達が、学校に隠れていた方が悪い。隠れて歩けば逆に怪しまれる」

裕大は、本当に大丈夫かな？と思いつつも意外とスムーズに職員室まで来れた事に驚いた。

だが、二階と一階をつなぐ階段で敵と遭遇してしまった。どこからどう見ても禿げた中年太りのおっさんで私服姿は毛糸のセーターを着て緑のズボン。・・・とりあえずビミョー

「よお、いたか？」

先生は、敵に話しかける

「いや、見つからん。・・・と言うよりそいつら誰だ？」

声は明らかに裕大達を疑っている

「こいつ等は、俺の教え子。スリリングがどうか言って学校に隠れてたんだよ。いや問題児でさくそれで、今からこいつ等、家に届けようと思ってさ」

未だに俺達から目を離さないおっさん

「先生、お知り合いですか？」

「ん？ああ、自警団の人で中島って言う人だよ。先生以外の人たちにも、ここら辺を巡回してもらってるの・・・なっ　！！」

「ん？あ、ああ・・・いや、まさか、あんた公務員とか言ってたが教職だったとは知らなかったよ」

「それじゃ、俺こいつ等、家まで送ってくるから、みんなにそう言

っておいて」

先生の後についておっさんの横を通り過ぎ階段を降り終わった時、
またしても、おっさんが話しかけてきた。

「おい、本当に違うんだろうな？」

「そんなに信じれないならリーダー使って調べればいいだろ」
先生がそう言うが一体何の事かさっぱりわからなかった。

「ああ、そうさせてもらう」

おっさんは、何かを取り出そうと初めて目を俺達から離れた。

その瞬間、五十嵐と先生が動いた。五十嵐がおっさんの片腕と頭を
掴みうつ伏せに倒し先生はすばやく銃を抜きおっさんに向けた。

「な、何のつもりだ」

「凄いだろ、俺の教え子だ」

五十嵐は、そのまま首を絞めつけおっさんの気を失わせ立ち上がった。
た。

「・・・何をしている」

先生が五十嵐を問いただした。

「何って落としただけですよ」

「違う、そう言う意味じゃない」

そう言うのと、先生はその場で伸びているおっさんの頭を思いっきり
蹴りあげた。

ゴキツと言う鈍い音を上げおっさんの頭は首がある位置からズレて
おっさんは呼吸も何もしなくなった。

その光景に裕大は息をのんだ。

「先生、何やってるんですか　！？仲間でしょ」

「さっきも言ったはずだ。説明してる暇はない行くぞ」

先生は何事もなかったかのように進み始めた。

職員玄関までたどり着き先生はすぐに外に出ようとした。

「先生、止まってください」

先生の肩を掴みそう言ったのは五十嵐だ。

「屋上に狙撃手がいます」

だが、五十嵐は外を一度も見ずにそう言った。

「どうして、そう思う？」

「俺ならそうします」

先生は、玄関にある鏡を叩いて割りその一枚を取り出し鏡で屋上を窺うと確かに人影があった。

「本当だ。よく気が付いたな」

「まぐれです」

「よし、一度二階に上がってあいつを殺そう」

そう言って先生は来た道を戻ろうとした。

「待ってください先生、仲間をまた殺すんですか？」

裕大の問いかけには先生は答えてくれなかった。

「先生っ！！」

「待て、裕大。多分先生達は、チームなんかじゃない」

「その通りだ。五十嵐、読みがいいな。」

まだ理解が出来ない裕大

「つまり寄せ集めチームだ。全員が単独で行動してる」

「正解　！！成績表をオール5にしてやりたいくらいだ」

裕大は、笑いながら廊下の真ん中を堂々と歩く先生が変に見えてきた。

二階の職員室に入り先生の席からなんと組み立て式の狙撃銃が出てきた。

「五十嵐、出来るか？」

「はい」

先生はその他にも色々な所から銃を取り出した。

「凄いだろ、これ全部、山岸先生の形見だ。こうなる事を先読みし

てたのか、職員室に隠しておいたんだろう。」

五十嵐は、狙撃銃をテキパキと組み立て始めた。その間、裕大はハ
ンドガンからサブマシンガンに変え先生とともに廊下の監視をした。

「どうした、裕大？ 様子がおかしいぞ」

「いえ、ただいつもの先生と違うような気がして」

「ああ、俺もそう思う」

「寄せ集めのチームってどういう事ですか？」

「ただその通りだ。寄せ集めだ。俺の本当のチームは、もうみんな
死んだ・・・俺一人生き残っちまって、そんな俺を今の岸边は、
俺みたく一人生き残った奴を集めてチームを作ったんだ。一人でも
生き残っちまうような奴等だ。運にせよ実力にせよ、腕は確かだか
らな。・・・ただ、団結力も人としての心も無いけどな」

「組み立て終わりました」

五十嵐は、身を隠しながらゆっくりと窓を少し開き、開いた窓の隙
間から銃を少しだし屋上の敵に銃口を向けた。

「チェック」

スコープのしぼりを最終調節に入る

「チェック」

五十嵐の泳いでいた人差し指が、引き金に吸い寄せられるように動
いた。

「チェック」

一発の銃声で銃があった両側の窓ガラスは割れ、敵の頭が吹き飛ん
だ。

「さあ、行きましょう」

五十嵐は狙撃銃を構えそう言った。

「おいおい、この窓ガラス安もんじゃないか？ 実際なら強化ガラス
のはずなんだが？」

先生の話は無視し裕大と五十嵐は、廊下の様子を窺う・・・やはり

銃声に気づき足音が聞こえる。

「・・・ここは、俺に任せとけ」

先生が、そう言うのと職員室から堂々と出て行った。廊下の突き当たりから二人の敵が出てきた。

「おう、俺だ。撃つな」

両手を上げ敵に向かって歩いて行く

「お前か？撃ったのは」

「違う、職員室に生徒が二人隠れてる俺の教え子だ。俺には殺せないだから行ってくれ」

「ハッ、根性無しめ」

先生を鼻で笑う私服を着た二人は、銃を構えこっちに向かってきた。裕大は耳を疑った・・・先生が俺達を売った？

だが、敵が先生を通り過ぎた瞬間、先生は二丁、銃を取り出し敵に向かって撃った。

一人は、即死だったようだが、もう一人は、撃たれた右肩を抑え壁によしかかるように腰をついた。

「何すんだよ・・・てめえ」

「俺は、教え子は撃てないが、お前なら簡単に撃てる」

先生の一発で、出血をする右肩を抑えていた左手はダラリと落ちた。

「・・・お前等、いつまで職員室に隠れてるんだ。さっさと行くぞ」

その言葉で我に返った裕大と五十嵐は先生の元に急いだ。

先生の元に向かう途中、廊下の突き当たりから、また新たに敵が二人やってきた。

「先生っ　！！」

先生が振り返った時には、もう遅かった。敵は先生に銃口を向け引き金を引いた。

その場に崩れる先生、裕大と五十嵐は、敵に銃口を向け引き金を引いた。

一人は裕大の大量の弾を浴び、もう一人は後ろの白い壁を自分の頭から嘖き出た赤いもので染め上げ倒れた。

「先生、大丈夫ですか？」

裕大が駆け寄る中、先生は、右のわき腹を抑えてその場でもがいていた。

五十嵐は、先生を抑えつけ服を捲りあげた。血で赤く染まる腹を服で拭うと臍へその少し上のあたりが、くつきりと小さな穴が開いていた。だがそれも一瞬にしてあふれる血で見えなくなってしまった。

「裕大　！！　きっと説明書マニュアルの事だ。職員室のどこかに止血剤とかあるはずだ探して来い」

五十嵐にそう言われ、裕大が立ち上がろうとした時、先生は、裕大の足を掴んだ。

「俺の車のトランクの中・・・」

裕大は、外に出て先生の車を探し出しトランクの窓ガラスを銃でたたき割った。

トランクの中には、色々な箱が入っていて、どれかわからないので全部持って五十嵐の元に急いだ。

五十嵐は、白い粉袋を歯でちぎり傷口にぶっかけた。

「oooooooooooo！！！！」

先生は、声にならない悲痛な声を出した。五十嵐はすばやく丸めた布を先生の口に入れた。

「何やってるんだ？」

「このままだと、舌を噛み切ってしまうかもしれない。だから、布を口に入れたんだ。その鎮痛剤を取ってくれ」

「鎮痛剤？　どれ」

箱の中は、整頓はされているがどれがどれかさっぱりわからない

「お前、そう言うのは、ちゃんと調べておけよ。」

「そんなのわかる訳ないだろ。」

「よし、先生をガンズショップに連れてこう。このままじゃヤバイ。たぶん岸边がどうにかしてくれる」

五十嵐と裕大は先生の両肩を担ぎなんとか、一階まで下りた。

「・・・ちよっと、よってほしい所がある」

そう言われ先生をボイラー室に連れて行った。

「先生、ここには何かあるんですか？」

「いや、ここには何もない。ただこの上にいる」

そう言うとき先生はボイラー室に隠していたのか銃を取り出し上に向かって発砲した。

天井にいくつもの穴があき上の階から悲鳴が上がった・・・

先生は悲鳴が聞こえた瞬間、脇腹を押えボイラー室を飛び出した。

「先生つどこに行くんですか！！」

追いかける裕大と五十嵐は、この上に何があったか考えてた。

「・・・確か放送室？」

二階に上がると先生は放送室のドアノブを取り開こうとしていた。すると、小さなサブマシンガンの銃声が聞こえ放送室のドアと先生に大量の弾を浴びせた。

「そんな・・・もう敵はいないはず」

訳の分からなくなり立ち尽くす裕大。五十嵐は、先生の所に駆け寄る。

だが次の瞬間、放送室のドアを蹴破り全身を血で赤く染め奇声を上げた男が日本刀を持ち現れ五十嵐に襲いかかった。

「ウラッ・・・オラッ　！！」

我武者羅に振り回す刀を巧みにかわし振り下ろした刀が地面に刺さった瞬間

刀を片足で押さえつけ、血まみれの男の顔面に強烈なパンチを喰らわせた。

先生は、壁伝いに立ち上がり、その場に倒れる男の所に歩み寄った。先生の体は、弾を浴び赤く染まり始めていた。

「よお、岸边・・・あんたの事だ。どこか近くで俺たちの戦いを見てると思ってたぜ」

その場で倒れる男は、何が楽しいのか突然笑い出した。笑う男に先生は、話を続ける。

「お互い変態らしいな・・・こんな殺傷能力のない銃を撃った所でよほど当たり所が悪くない限りすぐには死にやしない銃を選びやがって・・・そんなに人が苦しむ姿が見たいならな！」

・・・お前もその痛みを味わえっ　！！」

先生は、落ちてる刀を拾い男の右手を切り落とした。

「あゝああああ　！！！！」

さっきまで笑っていた男は叫び声をあげた。先生は、切り落とした手を拾い男の口に突っ込んだ。口から切り落とされた手を取ろうと左手を伸ばすが先生はそんな左手を足で踏みつけ喉元に刀を突き付けた。

「オラッ　！！食えっ岸边　！！食ってみろっ　！！」

涙を浮かべる男は、顎を震わせながらも自分の手が入った口を閉じようとした・・・

一発の銃声が鳴り男は動かなくなった。・・・撃ったのは五十嵐だ。

「五十嵐、何考えてるんだ」

五十嵐に向かい低い声で言った。

「あんたこそ、何考えてるんだ」

目をカッと開き先生を睨みつける・・・

「あんたに鎮痛剤を入れたのが間違いだったようだな、あんただって実際なら全身に痛みが走っているはずだ。先生は人の痛みがわからなくなってしまうたのか？」

「いいんだよ、どうせ・・・」

先生は突然、何かに気づいたのか口を詰まらせその場で腰を落とした。

「なんてこった・・・俺もあいつ等と同じになっていたのか」

片手で頭をかきむしりながらそう言った。

「先生・・・どうしてあんな事を」

裕大が、先生に聞いた。

「お前達は、今までこういう事はしてこなかったのか？」

「当たり前です」

「そうか・・・俺達のチームは違った。前のチームじゃないぞ、今のチームだ。無抵抗の奴に対しては、もっと酷かった・・・もしそれが女だったら、みんなで使いまわしにしたりもしていた」

「まさか・・・先生も？」

「・・・それは、お前たちの想像に任せる・・・いつかの試合が終わった時、俺はみんなに聞いたんだ。五十嵐と同じように『どうしてこんな酷い事が出来るんだ？』・・・そしたらあいつ等はこう言った。

『別にいいだろ、どうせ殺すんだから』

・・・俺は、そんな時思った。ああ、俺とこいつ等は違う生き物なんだって・・・でも俺は五十嵐にその質問をされて全く同じ回答をする所だった。所詮、俺もあいつ等と同じ生き物になっちゃったってことか・・・こんな生き物なら俺は簡単に殺せると思った時点で俺もそんな人間になってたのか」

「けど、俺達を助けようとしてくれました」

「いやただ、あいつ等を殺す機会が巡ってきたと思って協力しただけなのかもしれない。それに助けようと思って行動してたとしても

俺は最後に自分のわがままでお前達を危険にさらした。・・・教師として失格だな」

そう言っまぶたて先生は瞼を閉じようとした。

「まだ寝ちゃ駄目だ」

五十嵐が先生を揺さぶる

「リーダーってなんですか？先生は、俺達が知らないことを知っている。何でもいいから教えてください」

「岸辺に・・・聞・・・け」

それが先生の最後の言葉だった。先生の周りには血が溜まり、裕大と五十嵐は先生の血で黒い学生服は赤黒く染まっていた。

学校に七人の死体。廊下や壁には、血痕や銃痕が所々にあり裕大は岸辺が言っていた『どう？見慣れた場所が戦場になるって？』を思い出し、考えてみると何とも言えない悲しさがこみ上げてきた。

学校は、数日後に再開・・・そこには、血痕も銃痕も真っ赤に染まった死体はきれいさっぱりなくなっていた。

そしてそこで初めて担任の先田 竜生が死んだ事を伝えられる

原因は交通事故死

そして担任がいなくなり担任が変わった。

第十六話 先生の次・

見晴らしのいい丘の上に俺ともう一人、狙撃手と観測手が身を隠していた。

「どうする・・・みんな死んじゃったぞ。・・・なんで、仲間を殺したんだよ」

双眼鏡で覗きながら敵の位置を確認しながら俺は話しかけた。

「いいんだよ、あんな奴等。人を殺す事に快感を覚えた奴等なんてチームにいらない」

「・・・だからって、殺す事ないんじゃないか？悠一」

実際、人を殺す事に快感を覚えていたのは悠一の方だったのかもしれない。

でも、それは怖くて言えなかった。

「いいから、お前は俺についてくりやいいの！敵はあと何人？」

「3人は、左の高いビルに固まって行動してる。・・・あと2人は、まだ見つからないあいつ等が倒したのかもしれない」

「ったく、殺したんならちゃんと連絡すれよな！・・・個人行動とリやがって」

「悠一、とりあえず、あの3人やっちゃおう。あと二人は、後で探せばいい」

「OK、座標行ってくれ」

「距離は405、風向きは北北西2、7湿度は60・・・あと欲しい情報ある？」

「んーや、要らない」

悠一は銃を構えた。俺はいつも通り隣で双眼鏡を覗き眩し始めた。

「目標物との標準良し、撃て、撃て、撃て、撃て」

ビルの窓から頭が出ていた敵の頭に当たった。残りの二人は、さすが腰をかがめ、肉眼では見えなくなった。

俺と悠一は、双眼鏡のモードを赤外線に変えた。スコープと双眼鏡

は壁を通り抜け残りの二人の位置を見してくれた。

「撃て、撃て、撃て・・・」

赤外線でもわかるような豪快な血しぶきがあがった。残りの一人は、その場から逃げだそうとしてか階段を降りはじめた。

だが、双眼鏡とスコープは逃げる敵をしつかり追っていた。

「撃て、撃て、撃て」

敵は、折り返しの階段で弾を喰らい豪快に下までころげ落ちて行った。

「あと二人っはどこ・・・？」

悠一は上機嫌に鼻歌を歌いながら俺に聞いてきた。

探していると敵を発見し鳥肌が立った。灯台もと暗しとは、まさにこの事だ・・・

「悠一、ヤバイ 丘のすぐそこだ」

悠一は、鼻歌を止め丘の下を覗いた。確かに双眼鏡を使わなくても見れるほどの距離まで崩れた土の壁を遮蔽物にし、こっちに近づいていていた。

「悠一、俺達の場所がばれたんじゃない？」

「落ち着け、まだばれてない」

悠一は、スコープで敵を追おうとした。だが、近すぎて左右に動く敵をうまく追う事が出来ない。

「クソッ、近すぎてうまく追えない」

悠一は、ただひたすらに撃ちまくる。だが敵は、近くで弾がはじけるが怯むことなく着々と近づいてくる。

「悠一、俺がやる」

俺は、初めにセットしておいた機関銃の所に転がりながら向かった。

「止せ、そんなもん撃ったりしたら。俺達の場所がバレちまう」

「もう、バレてるのと同じだよ」

俺は、機関銃の所に到着した。

「お前が、人を殺す必要はないんだ」

必死に止めようと声を荒げる。

悠一は俺を守ろうと人を殺すのを知ってる。悠一が俺に人を殺させないようになっているのも知ってる。でも、俺だって悠一を守りたいんだ・・・弾をセットし、敵に向かって俺は初めて引き金を引いた。土ぼこりと土の壁が、俺が撃つ機関銃によって舞い上がり崩れていく・・・土ぼこりのせいで、敵がどうなっているのかもさっぱりわからない。

ただ、ひたすら撃ちまくった。弾がなくなるまで撃ちまくった。もしかしたら、俺は叫んでいたかもしれない。でも機関銃の音のせいで全く聞こえない。

弾を撃ち終わり土ぼこりが止むのを待ってみるとそこには、人であつただろう肉片が二つあつた。

「やったよ、悠一」

そう言って悠一がいた場所に行くところには頭から血を流した悠一が倒れていた。

「悠一・・・悠一　！！　ゆう・・・兄貴、兄貴・・・しっかりしてよ」俺を止めようとして立ち上がり敵に撃たれたのかどうかは知らない。ただ、俺は兄貴の死に目を見る事が出来なかった。

「悠一、起きろ」

目を開けるとそこは、ガンズショップの個室だった。

「くそっ、嫌な夢を見た」

「あゝそうか、弟さんが死んだ夢。まだ見るのかい？　いい加減忘れちゃえよ。忘れないなんて珍しいケースだな」

話すと口に歯がない岸边が俺に話しかけてくる。

「当たり前だ、兄弟だぞ。忘れるわけがない」

「ふーん、そんなもんなのかね？　でも、死んだのが弟の方で良かった」

たよ。あんな引き金も引けない奴を拾ったって意味無いからね。双子のくせにどうしてこうも違うものなのかね・・・？」

「おい、歯をもっと取らりたいのか？ 岸边」

「ハイハイ、怖い怖い。ほら次の試合の報告書、あいつ等に伝えといてね。そのためにここに來たのに寝てるんだもん・・・全く、いい身分だよな保護対象者ってのは」

「じゃあ、あんたもチーム作って試合に出たらどうだ？」

「冗談じゃない、担任の先生と殺しあうだなんて俺には出来ません。まあ手足を縛られた先生を殺せならやってもいいけどね」

「・・・ったく、あいつ等の担当外されて本当に良かったな。もし、今ここにるのが俺じゃなくてあいつ等なら今頃、あんた死んでるぜ」

ムカつく感情を抑え、冷たく岸边に言った。

「ホントー、担当外れても金が入ってきてて良かったー。それに今回の試合も色々面白そうなんだ。このチーム、どうなっちゃうかな？ 負けちゃうことは・・・無いと思うけど。勝ってもチームは、崩壊するかもね」

不気味な笑みを浮かべながら岸边はそう言った。

「おい、いい加減出てってくんないかな？ あんたみたいなクズと話したくないんだけど」

「おっと、そうだったね。それじゃ出てくたしますー」

岸边は、抜けた歯を笑顔で見せながら出て行った。

「クソッ、あいつはいつになったら歯を元に戻すんだ」

ベットから跳ね上がりながら呟くと

「治すつもりはないよ。笑うとこれ不気味だろ、結構気に入ってるんだ」

ドアを少し開け頭だけ出し笑顔を見せそう言ってきた。

「出てけっ　！！」

そう言って悠二は花瓶をドアに向けて思いっきり投げた。岸边はすばやく顔を引っ込めドアをはさんでもわかるような不気味な笑い声

を響かせながら消えていった。

落ちた紙を拾い中身を読むと怒りが満ち溢れてきた。

「くそ野郎がっ　！！　あの子らにどれだけ障害を与えるつもりだ
！！」

紙を引き裂きながら悠二は叫んだ。

「おい、岸边っ　！！」

受付でボケラっとしてしていると裕大がズカズカとこっちにきた。

「どうした？」

「リーダーってなんだ？」

「なんだ？そんな情報どこで手に入れた？」

「やっぱり、知ってるんだな？教えろ」

「手首につけてる位置座標特定機の特種な周波数に反応し音が出る
機械だ」

「なんで、そんな道具がある事を教えてくれなかったんだ。もしそれがあれば、学校でオドオドする必要だってなかったかもしれない
じゃないか」

「お前な・・・もしそれを俺が渡したらどうなったと思う？あ
る人に反応したらどうする？その場で銃撃戦か？」

「それは・・・」

「とにかく、ミーティングルームにみんなを集めろ。次の試合の報
告がある」

次の試合と聞いた瞬間、裕大の顔が曇った事に気づいたが気付かなか
った振りをした。

裕大は、俯き加減で部屋に向かって行った。

「・・・全員そろったか？」

全員がそろう事はもうないことなのだが岸辺がミーティングルームに入ると生き残った全員が席に座り誰も喋ってはいなかった。

「どうした？ 空気が重いぞ」

扉を閉め席に座ると康太が、話しかけてきた。

「岸辺、俺達って優勝候補なのか？」

「・・・ああそうだ。お偉いさん方は、武器の宣伝のみでは飽き足らず、競売まで始めやがったんだ」

「競売だと・・・？」

「ああ・・・お前達は、その年齢の割に活躍して経験値キャラの上の奴等をドンドン倒していくから人気があるらしい」

「ふざけやがって・・・」

「それに・・・逆に大穴を狙ってる奴もいる」

「大穴？」

岸辺は、大きなため息をつき一呼吸おいてから言った。

「次に・・・誰が死ぬか・・・お前達は周りに比べて生存率がいいんだ。だから、お前達それぞれ一つの命に何憶っている」

岸辺は続きを言う前に勉に殴られた。

「・・・お前、段々岸辺になってきたな」

「・・・ああ、否定はしない」

「お前だって、元はプレイヤーだろ　！！俺達を見て何とも思わないのか」

殴られた頬を拭いながら周りを見渡す、全員がこっちを見てくる。

何かを感じるがそれがなにかはわからない・・・

「悪い・・・なんにもわからねえ。俺はもう、そっち側の人間じゃない。こっち側の人間になっちまったんだ」

勉の怒りは不完全燃焼に終わり。椅子に座った。

「次の試合は、2週間後、フィールドは平地だ」

そう言うと、岸辺は部屋から出て行った。

「クソっ、あの野郎　！！」

勉は自分の座っていた椅子を壁に向かって乱暴に投げた。まだ暴れたりない勉を康太が抑えた

「止せよ、勉。あれは仕方ない事だ」

「仕方ないだと？あれのどこが仕方ない事だっ　！！」

「あいつはプレイヤーだったかもしれない。でも、今はあっち側の人間だ。あいつの性格じゃ正直つらいだろ・・・違う環境に置かれたら、そりゃ性格だって変わるだろ」

「俺もそう思う、先生の担当の岸边も前の岸边と似た性格だった。俺達を商品としか見ない岸边より俺達を本気で心配してくれる今の岸边の方がいいだろ？」

康太と裕大の言い分に納得し落ち着きを取り戻す勉

「お前等、意外と残酷だな」

悪戯に笑う五十嵐

「どういう意味だよ、五十嵐」

「この会話、全部あいつに聞こえてるんだぞ。もし、俺があいつなら、もっと貶けなされてる方が楽だと思うぞ」

「あっ忘れてた・・・」

「今回の人数は？」

「七人だ。かなり多いな。っていうか、チーム名『ゾンビ』だってさ」

「今日はやけに冷え込むと思ったら、やっぱりな・・・雪降ってきたな」

空を見上げるとうすい雲がかかり、細かい雪がパラパラと落ち始めてきていた。

「山の上だからな、仕方ないよ」

全員が装備をし終わり後は、試合開始の音が鳴るのを待つだけだった。

「この人数でこのフィールドは正直厳しい。今回は詮索はしないで巣を作って待ち伏せしよう」

フィールドは草原、夜だとしても背の高い草は生えてないから見つけやすいが、見つかりやすい。

だた屈めば、何とか身を隠せる。ピピピ試合開始の音が鳴った。

「俺達は、一心同体だ。必ず生きて帰ろう」

全員で拳をぶつけあう。移動を開始しようとしたその時、遠くで一発の銃声が鳴った。

「なんだ？」

「向こうも俺たちみたいに始まりの儀式的な物でもしてるんじゃない？」

「ハハッそりゃいい、そんな決まり事やるの俺達だけだと思ってた」

「おい、みんな静かにしろ。・・・どうやら、そう言う訳じゃないらしい」

五十嵐にそう言われ静かにしてみると暗闇の遠くから悲鳴に似た叫び声が聞こえてきた。

「こりゃ一体なんだ？康太、どうする」

「とりあえず、俺達は巣を作って待機だ」

『誰か　！！　助けてください』

無線から敵の声が聞こえてくる。

『誰でもいいから応答してください』

何がどうなっているのか、さっぱりわからない。康太が、無線に出ようとすると思が止めた

「止せ、どうせ罠だ」

『誰か・・・お願いです』

「で、でもよ・・・これはさすがに出ないとやばくないか？」

確かに、無線から聞こえてくる。助けの声は尋常じゃないくらいパニックだった。

「わかった、とりあえず出て見る。みんなは、周りに警戒してくれ
そう言う」と康太は、無線に出た。

「こちらチーム1、どうしたんですか？」

すると、無線からは無線を奪ったのか違う奴の声が聞こえてきた。

『お・お、俺じゃない。潤也を殺したのは、俺じゃない』

『待て、落ち着けわかってるから。止せ　！！銃を下せ・秀っ、
止せ・やめろー』

無線から一人の悲鳴と銃声が鳴った。そして、しばらくして遠くから銃声が聞こえた。

『大ちゃん！！しっかり、しっかりしてよ！秀っ！！何やってるんだよ』

大ちゃんと呼ばれる人の痛がる声は無線の向こうから聞こえてくる・
・声だけでも状況が大体わかる

「おいっ　！！お前等、何やってやる」

『だから、俺じゃないんだ！！潤也が死んだのは、俺のせいじゃない』

「意味がわかんねーんだよ！！なんで、仲間同士殺し合いしてるんだ。お前じゃない奴に変われっ！！」

涙声で訴えてくる奴についつい声がでなくなった。しばらくすると、また違う奴が出てきた。

『今、大ちゃんも死にました・・』

「何があったか、最初から説明しろ」

『最初は、俺達の決まり動作で俺達は一度死んだ。だから、もう死ぬ訳がない・・・そう言う意味で、仲間の胸に一発撃つんです。それが今回は、秀と潤也の番だったんです』

「・・・・なんでそんな事をするんだ」

康太は呆れたと言わんばかりに言った。

『だって、仲間からの攻撃なら電流は流れるけど戦闘不能には、ならないでしょ』

その瞬間、やな予感がした。

「おい、こいつ等まさか・・・」

勉が先走る中、康太が、向こうに聞いた。

「お前等、大会初参加か？」

『・・・はい、そうです』

全員の背筋に鳥肌が一気にたった。そして、勉はある事に気づき康太から無線を取った。

「おい、勉・・・」

「お前、名前なんて言う？」

康太を無視し勉は向こうに聞いた。そして、名前を聞いた瞬間、「マジかよ・・・」そう言って勉は無線を落とした。

「おい、勉・・・大丈夫か？」

「・・・間違いない」

「知ってる奴なのか？」

勉は、うなだれながら勉はこう言った。

「・・・サッカー部の奴らだ。大ちゃんって俺達のクラスの大樹の事だ」

第十七話 どうする事が、幸せか？

「大樹ってあの大樹か？・・・えっ大樹が、死んだ・・・？」
康太の記憶の中に大樹の顔が蘇える。

「ああ、あいつ部活連中と仲良かったからな」

「でもガンズショップでは見てないぞ」

実際、そんな事は意味がないのに等しかった。ガンズショップはコンビニのように点々としてる。

「店なんてどこにでもある。初参加か、厳しいな・・・」

「とにかく、俺。あいつ等にこの大会について説明する」

「俺達の事は隠しとけよ」

裕大の助言に康太は一度頷いた。

とりあえず、一通りの説明が終了した。

「だから、俺達は家族や周りの人を人質に取られてる。もちろんお前たちもだ」

『そんな・・・そんなのってある訳ないじゃないですか』

「現にお前達の仲間は死んで俺達は、この大会ですでに戦ってる」

『・・・』

「しばらく、そっちで話し合え。こっちも少し話し合いをする」

『はい・・・』

そう言うのと無線は切れた。降る雪は、段々と地面を白くさせていた。

「どうにか、出来ないかな」

「どうにかってどうさ？」

「いや・・・助けられないかなって」

「正直、俺達もこの大会でこの性格ってのはキツイね・・・俺達もいつか、先生みたいな性格になっちゃうのかな？」

しばらく、沈黙が続く、五十嵐が口を開いた。

「助けるにしても、どういう意味で助けるかにもよるんじゃないか？」

「意味って？」

「普通に助けると言う意味なら方法は一つだ」

その瞬間、全員がグツと息をのむ・・・誰もがその方法しかないと思っただからだ。

「けど、それをするとかいつ等をこっちの世界に放り込む事になっちまう。お前らだってその辛さは知ってるだろ？俺達だけじゃなく周りにも影響する。どっちにしろあいつ等に幸せはない。もちろん俺達にも」

五十嵐がそう言うときまた沈黙が始まった。そして、次に口を開いたのは康太だった。

「・・・戦おう、どっちも決めれないなら、こっちの方が楽だ」

康太が無線を取り向こうに伝えようとした。だが、それを五十嵐が止めた。

「俺が言う」

五十嵐が無線を取りスイッチを押した。

「おい、聞こえるか」

『はい・・・聞こえます』

「そっちの結論は出たか？」

『いえ、まだちょっと・・・』

「そうか、ならこっちの結論から言う。お前達を殺しに行く」

『え・・・』

驚いたのは向こうだけじゃなくこっちも驚いた。なぜなら、言い方ってものがある。

「これは、悩んだ結果、俺達の結論だ」

『え？・・・でも・・・』

「いいか？今から30分後、俺達は移動を開始する。わかったか？30分後だ」

『ちょちょ、ちょっと待ってください』

「話し合いならそっちでやれ。お前たち、初参加の勝率何%か知ってるか？」

『よ、40%だと岸边から聞いてます』

「どうしてそんなに低いかわかるか？原因は、通信が終わったあと、パニくるか、引き金を引けないかだ。だから、お前達が引き金を引なくても、悪いが俺達は引く互いに命は惜しいからな。……いいか？今から30分後だ。以上通信終わり」

無線の向こうから待ってくれと言う声も聞こえたが五十嵐は、無線を地面に叩きつけ壊した。

「お前、言い方ってもんがあるだろ！！」

五十嵐にキレル勉

「事実を言ったまでだ。それに強く言った方がいいだろ。向こうからの反論は一切聞かないですんだ」

「だからって一方的な俺達の結論を受け入れろって言ってるようなもんじゃないか」

「その通りだ。それに、もし俺達全員が自殺したとしても、向こうに一方的にこじつけたのと同じだろ」

言い争う二人を止めるかのように裕大が突然、口を開いた。

「もしかしたら、説明書マニュアルも同じ気持ちだったのかな？きつく言ったのは、俺達への配慮だったのかもしれない」

「お前な……あの動画見たろ？楽勝とか言ってるんだぞ」

「でもさ、あれって誰が言ってたのかな？一人とか二人だけがそう思って言っただけじゃない？俺だって正直、初参加って聞いて楽勝とか一瞬思っちゃったもん」

「てめっ……人を殺すのに楽とか辛いとかあるのかよ！！」

裕大に掴みかかる勉

「じゃあ聞けどさ！！勉は、命乞いする人や死にかけた人に引き金を引いた事はないのかよ！！……俺達だってそう言う人を殺してるじゃないか！！」

心当たりのある勉はそれ以上言えなかった。もちろん勉だけじゃなく康太にも心当たりがあり胸に深く突き刺さった。

「おい、止せ。他のチームなんて関係無い、俺達は俺達だ」

そうしていると、またしても遠くから銃声が聞こえた。

「どういう事だ？まだ時間には・・・」

ただ、銃声は一発では終わらなかった。まるで銃撃戦が、始まっているかのようだった。

「まさか・・・あいつ等」

勉が、音がする方に走り出し全員が後を追う。腰まである草をかき分け前に進む銃声は、大きくなるが数が減っていく。そして下りの斜面に差し掛かりその先の草が生えていない白と黒が混ざる地面は血で赤く染まり七人の死体が転がっていた。

「何があったってんだよ・・・」

その時、死んでいたと思っていた一人がうつ伏せから仰向けになった。

それに気づき勉が駆け寄る。

「おい、大丈夫か？・・・テル？テルか？」

「勉・・・？なんで・・・なんでお迎えが、お前なんだよ」

「何があったんだよ」

「お、俺達また話し合ってたそしたら、秀がまたパニックって抑えようとしたら撃ってきて全員で反撃したんだけど・・・なかなか秀が死ななくて、でもこっちがどんどん死んで・・・」

「おい・・・テル？テル・・・」

テルは静かに目を閉じ、また細かい雪が降り始める中、俺達が一発も撃つことなく試合が終了した。

「おい勉、聞いたか？」

「んあ？何」

「大樹もそうなんだけどサッカー部の奴等。集団で家出したらしいぞ」

教室では、サッカー部数名の集団失踪の噂が飛び交っていた。

「ふーん、そうなんだ・・・」

「ああ、でもどこに行くかとかも誰にも言ってないらしい。勉、何か知らない？」

「えっなんで俺？」

「そりゃ、お前、元サッカー部だろ？それに大樹とかとも仲良かったじゃん」

「そうかもしれないけど、俺も知らね」

「んーそっかー、他のサッカー部に聞いても手掛かりないんだよ」

「お前、そう言うミステリアスなの好きだよな」

「ん？まあな」

「変な所に首突っ込んで、首引っこ抜かれても、しらねえぞ」

「うわっ、勉からそんな言葉が来るとは思ってた。けど実際、俺達の学年呪われてんのかな？」

サッカー部の失踪事件により知らず知らずのうちに『俺達のクラスは呪われてる』から『俺達の学年は』に変わっていた。

もしくは、俺達のクラスの呪いが感染し始めたと言われるようになっていた。

『目標物より10m手前です』

「なんで？いいじゃない10mぐらい」

「いや、駄目だろ・・・っていうか、ここに何の用だ」

ある日、洋子がまたガンズショップに来ていた。

「えっ？いやーちょっと暇つぶしに」

少々テンパリ気味に洋子は言った。

「康太に用があるんじゃないのか？」

「いいの、康太には、ほぼ毎日会ってるようなもんだから」

「じゃあ一体何の用だ？」

「何か用ないところに来ちゃだめなの？」

「・・・別にそう言う訳じゃないが」

「・・・あっそうだ。五十嵐君ってまだあの本読んでるの？」

「いや、もう読み終わった。今は違う奴を読んでる」

「え？なに」

「どうして教えなくちゃいけない」

「康太にこの前まで読んでた本、バラすわよ」

「今、読んでるのはこれだ」

「うわっ即答？」

そう言いながら五十嵐が出した本のタイトルを見ると『国際社会と法』と書かれていた。

「・・・読んでて理解できるの？」

「いや、全く」

「ところでさ、どうして本なの？アナログじゃないと何かだめなの？紙の本って今、高いでしょ？」

「これは無料だ。ゴミ捨て場に落ちてた」

「・・・ゴミあさってるの？」

「おい、嫌な表現するな」

「うわっ簡単に想像できそう」

「そういや、この前のジャンケンなんだが・・・」

「うっ・・・さくてと、そろそろ練習始めるかな？」

「おい、いい加減俺の銃を返せ」

「いいじゃない、もう少し貸して」

「駄目だ。下手くそ」

「なによ、センスあるとか言ってたくせに」

「あれは言葉のあやだ」

そう言って無理やり銃を取ろうとしていると向こうから岸边がやってきた。

「ちょ、ちょっと・あっ店員さん。この人、痴漢です。俺の銃はどうとか言って襲いかかろうとしてます」(下ネタ)

「おい、何言ってるやがる。俺の銃は、そんなのよりもっと立派だ」(下ネタ)

「あつやババ、この人本当に変態だ！」

そんな事を言っていると岸边が五十嵐達の所にやってきた。

「おい、五十嵐」

「なんだよ、言っておくがこれはジョークだぞ」

「そんな事、どうでもいい。俺と勝負だ」

「はあっ？」

と言う事で急ぎよ、ライフフルで飛んでくるフリスビーをどちらが多く撃ち落とすか、勝負することになった。

フリスビーを飛ばすタッチボタンを押すのは洋子。

今のところ勝負はほぼ互角なせなら、一枚ずつ交互に撃ってるから。

「・・・っと言う訳なんだが・・・どう思う？」

ライフフルで撃ちながら五十嵐に問いかけた。

「どうって何が？」

「・・・お前、人の話聞いてた？」

「言いたい事が遠まわしすぎて、意味が全然わからない、ハッキリ言え」

「言えるわけないだろ」

『一般人がいるって言うのに』

飛んでくるタイミングがまちまちなフリスビーに岸边は、痺れを切らせた。

「おい、お譲ちゃん。もっと規則的にフリスビー飛ばしてくんないかな？」

「だってつまんないんだもん　！！」

そう言って画面をバンバンと叩く

「わっ馬鹿・・・」

画面に大量のフリスビーが飛び交う。慌てて撃ち落とすが、ここで遂に差が出て五十嵐がリード！

「おい、彼女は一体誰だ？」

「康太の彼女だ」

「違います　！！幼馴染　！！」

そう言って、またしても画面を叩くここで少し岸边が追いついた。画面を叩くと大量に出る事を知った洋子は面白おかしく画面をバンバン叩くが、機械に『画面を強く叩きすぎないようお願いします。故障の原因になります』と怒られた。

「おい、知らないのか五十嵐。幼馴染は彼女になれないんだぞ」

「幼馴染は一生幼馴染ってか？」

「そうだ。だから、今のうちに唾つけとけ。意外と彼女がお前に気があるんじゃないのか？」

「違います　！！そんなじゃありません」

またもや、画面を叩くと

『おい、いい加減にしろよ！！もっと優しく叩け・・・てかお願いします。もう少し優しく叩いてください』

と、きつく怒られ？機械の反応に戸惑う洋子。

その機械と岸边の言葉に動揺した五十嵐に追いつこうとした岸边だったが、なんとか最後まで五十嵐が逃げ切った。

『五十嵐選手VS岸边選手。勝者五十嵐選手』

そして、洋子は「私を心理戦の材料として使うな」そう言って帰った。

「・・・で、どう思う？」

「ん？洋子の事か？」

「違う、さっきの事だ。本当に遠まわしすぎてわからなかったか？」
「なんで俺に聞く？っていうか年下の俺に相談って正直どうよ」

「うるさい。この際、プライドなんて関係無いんだよ」

「別にいいんじゃない？ あいつ等にも聞いてみろよ。もうみんな部屋に戻ってるはずだ」

部屋に入ると全員がいた。だが、全員が岸辺が入ってきた事に驚いた。

「なんだ、岸辺。なんか報告することでもあるの？」

康太が問いかける

「おい、みんな岸辺から重大発表がある」

五十嵐がそう言い席に着き、後につられ全員が座る。

「いや・・・重大発表と言うよりこれは、お前等に頼みたい事があるんだ」

髪をかき照れながら岸辺は話を続ける。

「お前達は、俺に聞こえてるとは知らずにだが・・・えっ・・・とだな、こう言った。

あいつは向こうの人間になるにはその性格ではきついとそれと、性格だって変っちゃいとも言ってた。それでだな・・・俺は、この性格でこのまま行こうと思ってた。

けど、それは勉に殴られてわかったんだが、気付かないうちに変わりは始めてるって事がわかった。

・・・つまり、俺はあっちの人間にはなりたくないんだ。だから・・・あっちを選ぶなら、俺はこっちの方がいい・・・この性格を保つためならこっちの世界にいた方がいいと思う・・・」

なんとか、頑張っって聞こうとしていたが途中から集中力が切れ始め目が虚ろになる全員。

それに気づいた岸辺は一呼吸置き、言いたい事を一気に吐き出した。
「だからだな　！！　率直に言うと、俺をお、お前達のチームに入れてくれ」

「はあっ!?!」

五十嵐以外の全員が驚き、開いた口が閉まらなかった。

「もし、入れてくれるなら、俺は今日で岸辺を辞める」

「岸辺が岸辺を辞めるとしたら俺達の担当はどうなる？」

「もちろん、俺が続ける。岸辺にも色々というんだ。お前達が言ったように間近で試合を見る奴もいるんだから俺みたく試合に一緒に出たって問題ないだろ。俺が死ねば、担当が変わるそれだけだ」

全員が答えに困る中

「まあ、良いんじゃないの？狙撃センスで言えば五十嵐と同じレベルだし」

康太がそう言った。

「確かに、俺もいいと思う」

「賛成」

「五十嵐はどう思う？」

康太が聞くと

「俺が反対なら、ここに岸辺を連れてくると思うか？」

「なら、満場一致だ。よろしく岸辺」

「言ったら、入れてくれるなら岸辺を辞めると・・・俺の名前は、

悠二、浅野 悠二だ」

「悠二か・・・なんか違和感あるな。よろしく悠二」

そう言って握手をしようと手を出した。

「ちなみに二十歳だ」

それに答えようと悠二も手を出したが、いきなり手を引かれた。

「はあっ？二十歳？」

「な、なんだどうした」

全員が疑うような目つきでこっちを見てくる。

「ざっけんなよ！！おめーが二十歳なわけねーだろ！優しく見ても三十路は超えてる」

「そうだ！！俺達と三つしか変わんないってのは絶対に嘘だ。このおっさん顔」

「なわけねーだろ！！誰がおっさん顔だ。お前等のノリにだってつ

いける」

「ついてくんな、おっさんが!!」

「おっさんじゃねー!!」

第十八話 死と隣り合わせの生の輝き

「おはよう、悠一」

扉を開け、歯が抜けた岸辺が悠二の部屋に入ってきた。

「だまして悪かったな。本当は、俺は悠一じゃない」

「ねぇ、びっくりしたよ。だから、悠一君じゃないって事がわかったから君、保護対象者から外されたから」

「ああ、別にかまわない」

岸辺の話に全く反応しない悠二

「少しは反応してよ。嘘だよ。プレイヤーに戻るんならちゃんと保護しないとね。でも、ここからは本当の話、あのチームの担当これから俺だから」

岸辺は歯を見せるよう笑った。あいつが笑う時は、本当の事を言う時だ。

「どうして！？担当から外されるような事をした覚えはない」

「今まで前例がない事をやった時点でよっぽどな事してるんだよ」

「お前みたいな奴があいつ等の担当、務まるのかよ」

「うん、大丈夫。プロテクターとかフル装備していくから試合の報告あるから部屋にみんな集めという」

岸辺はそう言うのと部屋から出て行った。

「はい、全員揃った？」

岸辺が部屋に入ると全員から睨みの効いた視線が集まった。

「今回は、森林と市街地が合わさったフィールドです。森の中に小さな建物がポツポツとしてる感じだね。ええ・・と、あと2週間後、雪積もってるかもしれないね以上、連絡終わり。今回の敵は」

話を続けようとする岸辺に勉強が割って入った。

「おい、報告終わったんなら。さっさと出てってくんねーかな」

「そお・・・残念だ」

本当に残念そうに岸边は部屋から出て行った。

「みんな・・・悪かった。まさか担当を外されるとは思ってもいなかった」

「仕方ねーよ。それより、対策を練ろう。岸边・・・じゃない悠二が新しく入ってきたんだ。」

配置場所も考えないといけないだろ」

「巢の形は今まで通り。左右に裕大と勉、正面に俺、そして離れた所に五十嵐、悠二・・・で、どうだろう」

話し合いの結果、それ以外にも何通りかの配置を考え話し合いは終了した。

「今日は、ここまでにするべ」

「わかった、みんなメインゲート集合で」

フィールドに移動しシュミレーションを一通り終え一段落ついた頃には、窓から見える外は真っ暗になっていた。

「冬って日が落ちるの速いから、ヤダよな」

「確かに、でも俺は冬の空の方が好きだな。朝は青空が濃く見えるし夜は星がなまら綺麗に見える」

廊下から外を覗きながら康太と勉が言った。

「いいねえ、ロマンチストコンビ野郎」

「はあっ？ロマンチストのどこが悪い。機械オタクのお前よりはマシだね」

「いくらロマンチスト野郎でも相手がいないだろ。バゝカ」

「そ、そりゃお互い様だ　！！」

「はあっ？俺にはいます」

「このシスコン野郎　！！」

「シスコンじゃねー！！フェミニストだ！！」

笑ってるんだか、言い争ってるんだかわからない会話を外から眺め

る悠二。

「何、見物人気取りしてるんだよ」

あとから来た五十嵐に言われた。

「いや、みんな笑顔が絶えないなって思ってた、俺達のチームは生き残るにつれて必要最低限の会話だけで、こんな風に笑顔なんて誰も見せなくなっちゃったからな・・・」

「確かに最初、見た時はこいつ機械なんじゃないか？って思うぐらい無表情だったからな」

初めて悠二が登場した時は確かにそうだった。

「そりゃお前もだろ。今より口数は絶対に少なかった」

「そうかも知れないな・・・」

「けどみんな無理して笑ってるんだなって、今改めて感じたよ」

いつ死ぬかわからない。それに、今まで一体何人の人を殺したのかもわからない・・・

そんな事は、今は忘れたい・・・だからみんなで馬鹿騒ぎして気を紛らわす。

そんな事、後から考えれば意味のない事でも今はすごく重要な事。それを全員が分かっているから、馬鹿になれる。そんな事を考えながらこの風景を見ると、とても悲しいようで美しくも感じる。

「おい、悠二　！！」

「ん？なんだ」

「まさか・・・彼女とかいないよな・・・いつも彼女とよろしくやってるって事はないよな？」

「ああ、なんだそんな事か・・・もちろん、よろしくやってるぞ」
全員の表情が一気に崩れる。

「・・・いや、冗談だ冗談」

「ああ・・・まあ、そうだよな・・・こんなおっさんに彼女なんているわけないよな・・・聞いた俺がバカだった」

「おいおい、それどういう意味だよ」

「さあ、みんな帰るぞ」

「おい、無視するな　！！」

そんな感じで受付の前を通り過ぎる中、受付に座る岸边に五十嵐は呼び止められた。

「次の試合楽しみだね」

「それは、あんただけだ」

「そうでもないさ、次の試合。君も楽しみになるはずだよ」

「何が言いたい？俺が人殺しを楽しんでるとでも言いたいのか？」

「そうじゃない、敵のチーム名聞きたい？」

「別に」

そう言って立ち去ろうとした。

「あっそう、残念だ。君の為にこの試合を俺が設定してあげたのに・
」

「チーム名を聞かせろ」

何かに気づいた五十嵐は表情が一気に変わり急に足を止め振り返りながら言った。

「・・・やっぱり、内緒」

岸边は五十嵐に向かってニタニタと笑って見せた。

五十嵐はとっさに岸边の胸倉を掴み殴ろうとしたが岸边は入口の方を指さす。

入口を見ると洋子が店に入ってきている所だった。

「残念でした」

岸边が笑いながらに言う。五十嵐は深くため息をつき手を離した。

「あっ五十嵐君・・・」

洋子は五十嵐に駆け寄ろうとしてたが、五十嵐は無視しそのままミ
ーティングルームに入っていた。

「え・・・ちよっと五十嵐君？」

後を追おうとする洋子を岸边が止めた。

「お客さん、受付をしてもらわないと困ります」

「いや、そうじゃなくて、友達が今そこに・・・」

「とにかく、受付をしてもらわないと困ります」

「え・・・そんな。この前の人は入れてくれましたよ」

そう言っているうちに五十嵐はいなくなっていた。

「はあっ？五十嵐の様子がおかしい？」

康太が家に帰るとさっそく向かいの窓から洋子が話しかけてきた。

「うん・・・声聞こえてたんだと思うけど無視して行っちゃったの」

「そりゃしつこいお前に愛想尽かしたんじゃないのか？」

「五十嵐君がそんな態度取るわけないでしょ。五十嵐君は誰とでもフレンドリーになるんだから」

「いや・・・それはないだろ。声もそんなに出不さないし無愛想だし」

「そんな事ないもん。ただみんなが怖がって話しかけないだけだよ。話しかければちゃんと受け答えしてくれる人だよ五十嵐君は！」

「まあ確かにそうかもしれないな・・・」

「とにかく、悩みとかあるんだったらちよつと相談にでも乗ってあげなさいよ」

「あいつが悩みを相談してくるわけないだろ・・・」

「康太が聞けばいいでしょ！」

「なんでムキになるんだよ・・・まあ気が向いたらな」

洋子にそんな事言われながらも聞くのをすっかり忘れ、2週間が経っていた。

「・・・今回の敵は五人だ。五十嵐と悠二は、見晴らしのいい場所を見つけて俺達を援護してくれ」

紙を見ながら康太が言う。

「・・・おい、敵のチーム名はなんだ」

五十嵐がいつもよりでかい荷物をなぜか肩にかけながら聞いてきた。
「いや、それがさ漢字、俺苦手だろ？読めないんだよ」

五十嵐は紙を奪いしばらく眺めると森の中に入っていこうとした。

「えっ？おい　！！五十嵐どこに行く気だ」

康太の声に全員が気付き作業を止めこっちを見る。

「悪いが、今回俺一人でやらせてくれ。万が一俺が死んだ場合、悠二を俺の代わりにしていつも通りやってくれ」

「何言ってるんだ、それに試合はまだ始まってない」

「もうあいつ等はセットを始めてる。先を越されるわけにはいいかな
い。・・・あいつを倒せるのは俺だけだ」

そう言うと、五十嵐は森の中に走っていき、森の中に消えた

「おい五十嵐　！！」

後を追おうとするも五十嵐は一瞬にして見えなくなってしまった。

「康太、一体何があった？」

「わからねえ、ただ敵のチーム名見た瞬間、あぁなっちまった」

悠二は落ちていた紙を拾い敵のチーム名を見た。

「マジかよ・・・くそっ岸辺め。最悪だよ・・・最悪の相手だ」

ため息をつきながら悠二はうなだれた。

「なんだよ一体。悠二、知ってるんだろ隠し事は無しだ！！教えろ」

悠二が持つ紙のチーム名には『梟』と書いてあった。

「なんて読むんだ？これ」

裕大が首をかしげる。もうここまで来てしまったら話すしかない悠二はそう思い口を開いた。

「チーム名はフクロウだ。チーム梟ふくろう五十嵐の前のチームの名称だ」

「前のチーム・・・？って事は、あいつはリアルウォーを知っていたのか？」

「違う、そうじゃない。あいつは・・・五十嵐は、創られた戦争・

偽りの戦争の体験者だ」

「は・・・？」

「あいつは、傭兵だ。少年兵を中心とした、傭兵軍団の一人だったんだ」

傭兵？少年兵？突然そんな事を言われても理解が出来ない。

「なんで？あいつ日本人だろ？」

「父親は日本人だ、母親はわからん。昔の国籍は日本だが今は国籍不明だ。国籍変えて傭兵になったのはいいがその国は滅んじまった。」

「でも、日本で生まれたんだろ？」

「だが、小学生になると同時にあいつは、父親と一緒に国を出た。正確には父親に連れてかれた。国籍を抹消され、少年兵として戦地で育てられてる」

悠二は腰を下ろしみんなは、とにかく今の状況を理解しようと悠二に耳を傾ける。

「父親は、その傭兵軍団の責任者だったんだ。自分の育てた部隊を諸外国に売りまくる。そして、自分の子供までも他の国に売ったんだ」

五十嵐が言った『国に俺達を売ったんだろ？いくらだった？』そんな言葉が、頭の中をよぎった。

だが、それ以外にも何か悪い予想が浮かび上がってきた。

絶対に聞きたくはない・・・けど、康太の口が勝手に動いた。

「その父親の名前って・・・」

「わかっちゃまったか・・・」悠二は独り言をつぶやき続けて言った。

「・・・そうだ。紹介者の名称のモデルになった男。父親の名前は岸辺 悟だ」

全員の胸に何かが突き刺さるような、締め付けられる思いがあった。「どうやって日本に戻ってきたかは知らないが五十嵐と名前を変えて、おそらく父親を殺す。その復讐心だけであいつはこれまで生きてきた」

みんなそれぞれの考えを思い浮かべながら沈黙が続いた。
そんな中、またしても無線が入った。

『こちら、チーム梟 応答願います』

「止せ、出るな。向こうの戦術だ。戦闘意欲を下げようとしてくる」
悠二が、頭を抱えながらそう言った。だが、勉が突然、無線を取った
「岸边っ！！今そこにいるのは、てめえか！！」

しばらく、向こうからは何も聞こえなかったが無線がつながった
『驚いた、俺の名前がバレてるだなんて・・・君は誰だ？』

「お前は！！自分の息子をなんで国になんか売れるんだ」
悩んでいるのか戸惑っているのか、そんな声が無線から聞こえた。

『・・・君は誰だ』

「お前は家族をなんだと思ってるんだ！！」

『会話が成立していないな・・・今は私が質問しているんだ。君は誰だ』

「お前が先に俺の質問に答えろ！！」

『ようやく会話が成立した。息子をどうして国になんか売ったか？
なんて言ったね？』

それは、俺の息子だからだ。俺の最高の遺伝子を受け継いだ子供だからだ』

訳の分からない返答に沈黙する中、悠二が説明を始めた。

「岸边はある障害を持っていたんだ。症状は、夜盲症と逆の状態だ。
夜がまるで朝かのように見えるらしい・・・だから朝は、逆に眩し
すぎて裸眼だと失明する恐れがある。おそらく五十嵐もそれを受け
継いでいるんだろう」

『・・・さあ、答えたよ。次は君の番だ。君は誰だ』

『俺はあんたの息子だよ』

無線から五十嵐の声が聞こえてきた。「五十嵐っ！！」 勉が無線を取ろうとしたが、康太に止められ無線からは五十嵐と岸边のやり取りが続いた。

『久しぶりだな、親父。俺はあんたを殺すためにこれまで生きてきた』

『ほお、久し振りだな。そうか、やっぱり生きてたか』

『あいつ等の仇を取ってやる』

『仇？何を言ってる？あいつ等を殺したのはお前だろ』

『そう仕向けたのは誰だ。お前だろ！！』

『そうだ。だが、最終的に判断するのはお前たちだ。お前について行った仲間まで殺したしもんな・・・』

『違う、あれは俺が殺したんじゃない』

『どこが違う？あいつの頭の吹き飛び方は俺が渡した、お前の銃でしかありえない最後の最後に裏切られたあいつはどういう気持ちだったんだろうな？』

おちよくるような声が岸边から聞こえる

『・・・あと、10分で試合開始だ。今のうちに念仏でも唱えとけ』

『お前、俺を殺せるとでも思っているのか？』

『そっちこそ、俺なしでその戦闘システムがちゃんと発揮できると思っているのか？』

『お前の穴なんて機械と俺で埋める事が出来る』

『・・・未来予想をしてやるよ。その無線がお前の姿だ』

無線から銃声と同時に岸边の無線が途絶えた。

『あんたに恐怖を植え込んでやる』

そう言う五十嵐の無線は、それ以降つながる事はなかった。

ピピピと腕時計が鳴った。試合開始の合図だ。

第十九話 人が死ぬ事で生を実感できる

あれから何分経ったのだろう・・・いや、もしかしたら何時間かもしれない。

五十嵐が発砲してから白い雪が薄く積もった。森には虫の音も何も聞こえない静けさが広がっていた。

そして俺達は、周りに警戒しながら最初にいた場所から一步も動く事が出来ない状態が続いた。

「チーム梟のメンバーは全員、狙撃手だ。それぞれ別々の所にポイントを置き、敵が来るのを待ってる。気づいた頃にはもう死んでる。なんて事には、なりたくないね・・・

羽音を出さないで梟は獲物を捕える。チーム梟の名前の由来だ」
木に体をはりつけながら悠二が言った。

「敵に手の内を読まれているのにどうして、変えようとしらないんだ？」

「それほどこの暗闇ではこの戦術に自信があるってことだ」
そんな事を言っていると勉が割って入った。

「五十嵐は一体何やってるんだ」

「とにかく、五十嵐と連絡を取らないと、何も始まらない」

「連絡を取るってどうやって？無線は壊されたし、体内無線もオフにしてやがる」

木から雪の塊がドサリと落ちた。その音に全員が反応し銃を構える。だが、安全を確認し一息つく

「くそっ・・・五十嵐のやろー」

勉は木の幹にひじ打ちを喰らわせた。木の上にあった雪がパラパラと落ちてくる。

「おい、止せ、敵にばれるぞ」

その通りだった。勉のすぐ横の地面に弾がはじけた。

「うわっ・・・!!」

その後に遠くから銃声が鳴った。勉強だけでなく康太や裕大、悠二の地面でも土と雪が舞った。

全員が急いで立ち上がり木にビツタリと張り付いた。

その時、悠二は銃を落としてしまった。

「くそっ・・・」

手を出そうとするが、すぐ横を弾が通る音がし、すぐさま手を引く込めた。

すぐ後ろでは、木に弾が当たる音を聞きながら康太達は、目を閉じ歯を噛みしめる事しかできなかった。

裕大は手鏡を取り出しどこからの狙撃か確かめようとした。

「くそっ・・・わからねえ」

鏡には暗闇と白く濁った木だけしか映らなかった。その鏡まで、敵の銃弾によって壊された。

「あいつ等・・・遊んでやがる」

弾は全員のすぐ横で弾けるだけでそれが何回も繰り返されるだけだった。

「ふざけやがって!! なめてんじゃねえー」

「くそっ、どこにいやがる!!」

だが、どんなに吠える事は出来ても状況は何も変わらなかった。

「どうする、康太!! このままだったら全員死ぬぞ」

「・・・一旦散ろう。合流ポイントは後で言う」

康太はそう言うと言煙弾、閃光弾、発熱弾を投げた。

全てが爆発したと同時に全員が一気に散った。

突然の閃光と白い煙、すかさず赤外線に変えてみるが発熱弾でどれが人影かわからない状態だった。

「ほお・・・考えたな」

岸辺は左頬をさすりながらスコップから目を離した。五十嵐の放った銃弾は、岸辺の左頬をかすめ無線に当たった。お前なんかいつでも殺せると言わんばかりの挑発した一発だった。

ならば、俺を挑発したことを後悔させてやろうと息子の仲間を恐怖に駆らせようと取った行動だが、敵もなかなかの発想力だ。

「おい、全員聞け」

体内無線で仲間に通信を取る

「もう遊ばなくていいぞ。見つけたら殺しても構わん好きにしろ」無線からは、返事は返ってこない。ただ無線が切れる音だけが聞こえた。

窓枠に窓がないくコンクリートがむき出しの建物で息を切らせる康太。

全員無事だろうか・・・

『みんな、大丈夫か？』

建物に誰もいないか詮索をしながら無線を入れてみる。階段に差し掛かったところで勉と裕大から無線が入った。

『俺と裕大は無事だ。今どこにいる？』

『待て、今いる座標を教えてください』

階段を音を立てずに一歩ずつゆっくりと進んで行く。二階には、誰かいるのだろうか？

そう思いながら上へと進んだ。《気づいた時にはもう死んでる》それは、マジで勘弁・・・

二階の手前で一度止まり、一呼吸置き、二階に一気に飛び出す。銃を構え周りを確認するが誰もいない。勉達の座標が康太に送られてくる。

部屋を一つ一つ調べるが今のところ何もなく、ただ最後の部屋に五十嵐の空の鞆が放り出されていた。

『勉、裕大、俺の所にゆっくりでいい。気付かれないように来てくれ、建物の中にいる』

『わかった。それより悠二は？』

『わからない。今のところ連絡がないんだ』

『そっかまあ、あいつなら大丈夫だろう。これからそっちに向かう』
そう言うのと、勉の無線が切れた。

そんな中、勉と裕大が手を使いコンタクトをとる姿を敵のスコープが捕らえた。

横の観測手が手で敵の距離、風向きを伝える。狙撃手は、確認しスコープに目を戻す。

観測手も双眼鏡で敵を注視する。スコープは勉の頭を捕え引き金に人差し指が伸びる。

「うげっ・・・」

引き金に延びた人差し指は止まり、声に気づいた観測手は双眼鏡から目を放し横を見る。

そこには頭にナイフが刺さり二度と動く事がない仲間と、こっちを睨みつける敵がいた。

覆面からは何も表情はわからないが、睨みつける目はまるで笑っているようにも見えた。

その目で金縛りにあった観測手は、何も動けぬまま狙撃手の頭に刺さってあったナイフが今度は自分の顎に入る事になる・・・

顎からナイフを抜くと返り血は、白い地面と自分にかかった。目の前に横たわる二人を見て軽く舌打ちをする。

「くそっ・・・」

血のかかった白い覆面を外すと悠二の顔が現れた。悠二の顔は、覆面の中で笑ってたとは思えないほど暗く曇っていた。

「・・・俺にも人を殺したい願望があったのか」

緊張のあまり口の中は乾きネバネバとして舌で舐めまわす。その時、唇に付いた血を舐めてしまい口の中に血の味が充満する。思わず吐き出すが、口から血の味が取れる事はなかった。

「俺って・・・生きてるんだな」

落ちてる銃を拾い悠二は勉強の所に向かった。

建物にこもる康太。外で物音がしたような気がした。康太は壁に張り付き窓から様子を見ようと顔を出す。ところが、敵のスコープは窓から顔を出そうとする康太を捕らえようとしていた。

「窓から顔を出すな　！！」

誰かがそう叫びながら康太の顔を手で抑えつけながら窓に飛び込んできた。

その瞬間、弾が康太の頭を抑えつけた手をかすめた。

康太はその場に倒れ、窓から飛び込んできた男は腕を撃たれバランスを崩し転がりながら建物の中に入ってきた。

「いって・・・五十嵐か？大丈夫か」

「大丈夫だ・・・かすめただけだ」

右腕からは血がにじみ出てくる。そんな事を無視し、腰を下ろしながら指が動くか確認をする。

大丈夫だとわかると背負っていた荷物を下ろし中から銃口がないが引き金がある謎の機械を取り出した。

「なんだそれ？」

五十嵐はもう一つ、片目にセットするスコープ的な物を自分にかけた。

「遠隔操作だ。セットに手間取った」

右腕に機械をはめ込み何かをいじり始める。すると、五十嵐がどこかにセットしたと言う銃がひとりでに動き五十嵐のスコープには今、俺達を狙っている敵が映っていた。

いつものチェックと言うカウントもなく五十嵐は引き金を二回引いた。

映し出される映像で頭から血を流す二人が映し出される事を確認すると今度は違う所にセットした銃のチャンネルに合わせる。

だが、スコープに映し出されたのは二人の死体だった。

「誰かが殺したのか・・・？」

「ああ、さっき悠二が二人倒したって連絡があった」

「・・・って事は、残りは俺だけか」

気がつくど入口に敵が銃を構え立っていた。

「動くなよ。手も上げなくていい」

敵は俺達から目を離す事なく体内無線を使い周りの状況を確認する。

「・・・全員死亡か・・・せっかく育ててきたのに、どうしてくれるんだよ」

ため息交じりでこっちに話しかけてくる。

「おい、五十嵐・・・あいつがもしかして」

銃を突き付けられているのに康太と五十嵐はやけに落ち着いていた。

「ああ・・・俺の親父だ」

小柄で髪は白髪だらけのおじさんだがどっしりと構え、全く隙を見せない。

今までの岸边とは違い（悠二は除き）軽い性格でもなさそうだ。

「・・・ったく、会話が成立しねえ。お前のチームって誰でもそうなのか？」

「・・・」

何も話そうとはしない五十嵐

「どうして、俺を裏切った？」

「裏切ったのはあんただろ」

「割り切れと言ったはずだ。仲間はずれではない」

「じゃああんたは同じ状況に立たされて割り切れたと言うのか？」

「当たり前だ。だから俺はここにこうしている」

岸边はそう言うのと康太に銃口を向けた。

「俺の所に戻れ。」

「また、俺に仲間を裏切れと言うのか」

「そうだ。俺とお前ならまだこの状況を挽回できる」

「俺が、そんな話に乗ると思ってるのか？」

「お前が拒否できると思ってるのか？」

岸边は康太に向けた銃をアピールした。

「俺が、話に乗ったとしても殺すんだろ」

「もちろん、乗らなかつたらお前も殺す。そうすれば、お前は何を
選ぶか俺は知っている。俺がそう教えたからな」

「ああ、そうだ。殺されそうになった仲間を助けようとするな。殺
されそうな仲間なら自分で殺せだったな」

「その通りだ。俺と一緒にまた戦え」

五十嵐は立ち上がると康太を庇うように岸边の前にドンと立った。

「何のつもりだ？」

「いつまでも親離れできない子供だと思ふなよ。今は反抗期だ」

「今、置かれている状況を理解してないのか？」

「あんたこそ、わかってないみたいだな」

突然、岸边の脇腹を銃弾が貫いた。その瞬間、五十嵐は腰に差して
あたナイフを抜き岸边に向かって投げた。

ナイフは、岸边の右肩に刺さりよろつきながらも岸边は、白煙弾で
部屋の中を包んだ。

五十嵐は、康太を乱暴に掴み窓から外に飛び出した。

煙の中から飛び出してきた岸边をスコープは必死に追う。だが、岸
辺はこちらの場所を把握したのか木や山の斜面を盾に岸边は走り見
失ってしまった。

「くそっ、見失った」

悠二はスコープから目を離し立ち上がった。

「康太達は無事なのか？」

横で勉強と裕大が聞いてくる

「ああ、無事だ。康太達の所に行こう」

悠二は銃を肩に背負い康太達の所に向かった。

「大丈夫か？」

せき込む康太に五十嵐が聞いてきた。

「煙吸い込んだ」

「俺は、あいつの後を追う。お前は残ってろ」

五十嵐は立ち上がり岸边の後を追おうとしていた。

「いや、俺も行く。一人で行かせるわけないだろ・・・今度は逃がさないからな」

そう言う康太は立ち上がり五十嵐の後を追った。

「・・・勝手にしろ」

五十嵐は建物の入口から岸边の足跡や少ない手掛かりだが、着々と後を追って行った。

「こんな暗闇の中、よく足跡なんか見つけれるよな。その障害って日常で支障はないのかよ」

「あるさ、冬なんか特に最悪だ。周りが白くて何も見えなくなる」

「学校の時とかはどうしてるんだよ」

「コンタクトレンズをしている。俺の目は光の量を調節できないらしい」

「・・・どうして教えてくれなかったんだよ」

「別に隠しているつもりじゃなかった。話すことでもないと思ってな」

「この戦い終わったら、全て聞かせてもらおうからな」

それからは、口も開かず森の中を進んで行った。

進んでいくと、目の前にさっきの建物より一回り大きな建物が出て

きた。

床には血の跡が点々と続いていた。血の後を追いつつの部屋にたどり着くとタイミングを合わせ扉を蹴破り中の様子を窺うと机に足を乗せ、椅子に座りショットガンを構える岸辺がいた。

「うわっ・・・」

康太と五十嵐は横っ飛びした。一発の銃声で壁にボツコリと綺麗な穴が開いた。

頭を抑える手に瓦礫がバラバラと落ちてくる。

「五十嵐、どうする」

ショットガンで上から瓦礫が落ちてくる中、康太は五十嵐に聞いた。

「・・・いや、このまま引こう」

「まじか・・・？」

銃声と瓦礫はまだ止まない

「ああ、どうせあのままほっとけば、あいつは死ぬ。それでいい」
確かに、あの傷で助かるとは思えないほどの出血と椅子の下には血が溜まっていた。

でも、五十嵐はあいつを殺すためにこれまで生きてきた。それなのにこんな終わり方でいいのか疑問だった。

「・・・そうか、お前がそれでいいなら。それでいい」

その疑問は、今の五十嵐に聞く事は出来なかった。立ち上がり部屋から離れて行くと岸辺の豪快な笑い声が聞こえてきた。

「おい！！お前は俺を殺さなくていいのか？どうせこの傷じゃ助からないと思って放置したんだろ！！甘いな！！・・・けどな、俺はお前達がつけたこの傷じゃ絶対に死なないからな！！」

笑い声はまるで永遠に続くかのように聞こえた。

だが、その笑い声は一発のショットガンの銃声によって止まり、今度は銃声が通路に鳴り響いた。

五十嵐は、上を向き大きく深呼吸をし「終わった・・・」と一言呟き、

突然倒れた。

第二十話 偽りの戦争

「五十嵐!! どうしたんだ?」

「わからねえ・・・ただ、俺はこれまでこの光景を夢見て生きてきた。これを目指して生きてきた。これから俺はどうやって生きていこう?」

「五十嵐・・・」

「山頂に着いたら後は降りるだけ。けど、俺には降りる理由もないし気力もない」

五十嵐は銃を取り出しゆつくりと自分の頭に持って行った。だが、その銃を康太が奪い取った。

「俺がそんな事を見過ごすと思ったか?」

「だったら、俺はこれからどうすればいい? 俺はもうチームにおけないだろ」

「どうしてそう思う?」

「あいつが言ってたろ? 俺は昔、仲間を殺した。それは事実だ。そんな奴をお前は信頼できるか?」

「・・・」

「俺はお前達を裏切るかもしれない。それでもいいのか?」

「お前は裏切らねえよ。お前は、俺を二回も身を挺して助けてくれた。それだけで十分だ。昔と今のお前は違う。そうだろ?」

「・・・どうなのかな? 変わらないような気もするけど」

「とにかく、俺を助けてくれたそれだけで十分だ。帰ろう」

「あっ、待って・・・腰が抜けて立てないんだ。助けてくれ」

「これで、俺を助けてくれた事、チャラな」

そう言いながら康太は五十嵐の肩を持ち建物から外に出た。

「おい、誰か！！五十嵐みたか？」

校庭では紅葉が始まり葉が赤く染め上がる頃、朝の教室では、珍しく言うか初めて五十嵐の話題で持ちきりになった。

「今日来てないんじゃないか？」

「そうなのかな？いつも来てるから、来ないなんて珍しいよな」

「えっ？五十嵐来てるだろ？俺、今日見たぞ」

「だけど、今いねーだろ。定位置に・・・ていうか本当に見たのか？」

「そう言われると不安だけど・・・」

「おい、誰か出席簿見てみろ」

「んなもん、先生が職員室持ってた」

「くそー気になる。あいつが読んでる本も　！！」

「おい、探すぞ！！俺達、全員で」

そう言っただ教室から飛び出すが、生徒指導教員に捕まり男子全員みっちり指導を受ける事になる。

お陰さまで一時限目はつぶれる事にもなり、結局、五十嵐は学校に來ていない事が後で発覚する。

「創られた戦争、偽りの戦争での被害者は各国々に逃げ延びる奴もいた。俺はそこの中にまぎれて日本に戻ってきた。仮の身分証明書を作って親父の親戚を探して北海道までやってきた。知らないかもしれないが仙台とか都市部では、未だに配給制で難民が食糧難で苦しんでる。北海道ではそんな事はないけどな・・・」

ガンズショップで五十嵐がこれまでのあった事を康太と悠二に淡々と話していく。

「俺の親父は親類の中では省はぶかれたいや、忘れ去りたい家族の汚点だったんだろう。金を毎月払うから家には近付くなど親戚に言われ、ここで一人暮らし始めて、銃はもう絶対に持たないと誓ってたのに俺にはやっぱり銃しかないってわかって店に行くと康太達に会った。

あとは、わかるだろ？」

「戦争の体験者って・・・いや、無理に言わなくてもいいんだけど」「別にいいよ。創られた戦争ってのは、日本も含めて他の国が勝手に創った戦争の事だ。けど、死んでいったのはその国の人間は少ない方だ。一番死んでいったのは、俺達のような傭兵だ。国の名誉だ国のためなんて唄って死んでいくのは極わずか、みんな金のために戦いに行く。俺が体験した戦争は終盤の方だったからな・・・どの国も傭兵は喉から手が出るほど欲しい物だった。

どこの国かもわからない所に雇われて、そいつ等のために代理戦争を繰り返す。昨日まで雇われてた所と戦うなんて事もよくあった。

・・・それが、偽りの戦争だ。

長く続いた戦争の中、親父はどこかの娼婦に俺を身籠らせた。日本に俺だけ連れて帰り、しばらく日本で育てた後、俺を連れてまた戦地に戻った」

親父は、孤児や貧困層の子供を人種も性別も関係無く拾い銃を持たせ戦い方を教えた。

「いいか、お前達は仲間だ　！！だが、死にそうになっても絶対に助けようとするな　！！」

助けようとするなら、頭に鉛玉ぶち込んで楽にしてやれ」

親父は向こうの言葉で子供達にそう教えた。そして親父は、言葉のわからない俺をその子供達の中に放り込んだ。孤立していた俺も知らないうちにその中に溶け込んでいた。

言葉の意味は大体理解し受け答えは出来るが話す事は出来なかった。体中泥だらけで、風呂もなく地面にお互い身を寄せ合いながら寝る。遠くで爆発音やここまで響く地響きに怯えながら寝た。

基本的な戦闘訓練が終わると親父は、俺達に弾と銃だけ持たせ戦場に放り出した。

そこらじゅうで爆音や銃声が鳴り響き俺達は、崩れた家の中で銃を抱きよせながら身をかめた。

親父からの命令は「ここで生き残れ」たったそれだけだった。

家中の窓ガラスが一気に割れた時、全員がパニックだった。

割れた窓から銃を突き出し自分を守るため引き金を引いた。応戦されて仲間が何人も死んだ。家に侵入してきた敵は、落ちてるガラスを拾ってメッタ刺しにした。

夜になっても親父は迎えには来なかった。体中に敵味方の血がついて暗闇に溶け込む中、全員の眼だけがギロリと白く不気味に光って見えた。

次の日もまたその繰り返しだった。何十人もいた仲間は両手で数えるほどになった。

その夜中、親父が迎えにやってきた。そんな時、俺達は何をしてたと思う？

俺達は空腹のあまり死んだ人の生肉を食っていた。それを見た親父は、俺達に一瞬おびえた表情をしたが、その後、薄っすらと笑っていた。

おそらく親父は俺達に人を殺すことに対する恐怖心を振り払いたかったんだろうが、俺達はそれよりも上を行った。

「お前達の訓練は終わった」とも言った。

それを何度か繰り返し何人も仲間が増えた。男女関係無く親父は拾ってきたが、訓練を終了するころにはいつも女は死んでいた。

けど、訓練が終了したときに生き残ったのは一人だけの時があった。そんな時、やってきたのは女だった。体の至る所に痣があったが、そいつは生き残った。

生き残った理由は聞くなよ吐き気がする。

新メンバーに加え俺達はそこら中の国に雇われ戦った。戦いに勝つと今までに見た事がないような大金が目の前に積まれた。

俺達は戦いに勝つ喜びと生き残った達成感を全て金に結びつけた。そんな中、親父の命令でメンバーの中で特殊チームが密かに作られた。

俺と女、それと何人かそして俺達は深夜活動することが多くなった。重役の暗殺任務や情報収集が主になった。女の武器を使った事もある。

そんな活動が評判を呼び俺達は引っぱりだこになった。

親父が悪魔になったのは、それからだ。

・・・仲間を二つにわけ敵対する国に俺達を売った。

親父は双方の国から莫大な金を貰い「仲間と味方は違う割り切れ」そう言って俺達の前から姿を消した。

全員がその状況を飲み込み元仲間に銃口を向ける中、俺は全員に聞いた。

「仲間に引き金は引けるのか？」

俺と他の奴等は覚悟が違った。俺は大金が目の前に積まれようが使い道がなかった。

けど他の奴等は、その金で自分の村、家族が豊かになるよう毎回全額送っていたんだ。

俺は何も背負っていないが、あいつ等は背負っているものは大きかった。

そんな奴等の思いを曲げる事は出来なかった。

そう理解はしていても俺は引き金を引く事は出来なかった。親父から貰った銃のスコープには仲間の顔が映る。

引き金をどんなに引こうと頑張っても引く事は出来なかった。

そんな中、俺達は敵を捕虜として捕まえた。そいつ等は、元仲間だった。その中にはあの女も含まれていた。俺達の国からは、そいつ等の射殺命令が下された。

その次の日、実行される事になり、見張りとして俺が任された。と言うより俺が志願した。

俺は、元仲間聞いた。

「俺はこの戦場から逃げるついてくる奴はいるか？」

手を上げる奴は、いないと思っていた。脱走兵はどういう仕打ちを受けるかわかっていたからだ。

むしろ俺達がやる事もあった。死にたいと本気で思うくらいの容姿にされて、でも死ぬ事が出来ない。

そう言う風に親父に教育され実際にやってきた。けど、女が一人ついていくと意思表示した。

抜け出すのは簡単だった。仲間が手助けしてくれたからけど、境界線を抜けるとそこからは敵同士。次の日から俺達は、仲間からの逃亡生活が始まった。

仲間からの追跡を逃れる毎日、夜も休むことなく銃弾が飛んでくる恐怖と緊張の中、銃を握る手がガタガタと震え治まる事はなかった。

遂に仲間には追い込まれた。女に銃口、俺にナイフで襲いかかろうとしてきた時、俺は初めて仲間を殺した。

追い込まれてた女を助けるのではなく俺にナイフで襲いかかろうとする奴に俺は銃を向けて引き金を引いた。

死にたくない・・・ただそれだけの理由で俺は引き金を引いた。

仲間は俺の上に倒れこんだ。生暖かい物が俺の体にしみ込んでくる。

そんな時、俺の何か抑えのような物が外れた。上に倒れこんだ死体を放り投げ女に銃口を向ける敵を殴り殺しにした。

女が俺を止めなかったら俺はずっとそいつを殴ってた。

仲間からの追撃はなくなり、あとは戦場から逃げただけだった。けど、どこにいても戦争だらけ、死体の中にまぎれて死んだふりをする事もあった。

頭の上をキャタピラが通過した時は、さすがに死んだと思った……どこを歩いてても戦場だらけ、俺と女の疲労はピークに達していた。女は突然、俺の銃を松葉杖として貸してほしいと言った。

食い物もなく足は骨と皮になった状態で歩き続けるんだから仕方ないと思って貸した。

そして無駄な体力も使いたくないそう思い何も考えずに俺は先に進もうと前を向いたその時、後ろで発砲音が聞こえ振り向くと頭が吹き飛んだ女が倒れていた。

あまりにも唐突で何がかかわからない……どうして死んだのか理由もわからない。

頭の中でいくつかの仮説が浮かび上がる。自殺、もしくは暴発？

そして、最終的に一番可能性のある仮説が出来上がった。

事故

俺はあの銃の安全ロックをかけていなかった。俺のせいで女は死んだ。

そう思うと言葉では表現できない感情が込み上げてきた。けど、涙も何も出てこない……

ただ沈黙することしかできなかった。

「その後は、さっき言った通りだ。高校に入ろうと思ったのは、あいつ等にも夢があった。『ただ勉強がしたい』と、俺がこの国で出来る唯一の罪滅ぼしだ」

部屋には沈黙と言う静かな時間が流れる。

「まあ……その罪滅ぼしも、リアルウォーと岸边の名前を聞いた瞬間、意味は無くなっちゃったけどな」

五十嵐は立ち上がり部屋から出て行こうとした。

「おい、どこに行くんだ？」

「練習だ。大丈夫だ試合にはこれまで通りしっかり出る。俺を外したかったらそうしてくれ。別に拒みはしない。いつかはこうなるとわかってた」

「馬鹿、外すわけないだろ。俺達はお前の仲間だ。お前が外れるとか言っても満場一致でお前をチームに引きづり戻してやる」

「ああ・・・」

五十嵐は部屋に二人を残し出て行った。

『目標物から50m左です』

「くそっ」

一回も当たらないまま扉を開け外に出ると洋子が立っていた。

「どうしたの？スランプ」

「いつからそこにいたんだ？」

「今日学校来てなかったね、ズル休み？」

「俺が出てくるまで、ずっと待ってようとしてたのか」

「クラスのみんな心配してたよ」

「おい、そろそろ会話が成立してない事を突っこんでもいいか？」

「実はね今日渡したい物があったさ」

鞆の中をかき回しカードを一枚取り出した。

「これ、私が今まで読んだ本で面白かったなって思う奴。カードに入れといたからよかったら読んで」

「・・・どうやって読むんだ？」

カードを受け取り、珍しい物を見るかのように五十嵐はカードを眺めた。

「えっ？知らないの？ノートの横に差し込み口があるでしょ？そこに入れたら読めるの」

「ああ、悪い・・・俺、実は目に障害があってノートとか発光する物、眩しすぎて長時間見れないんだ」

「え？何その嘘」

「いや、ほんと」

右目のコンタクトレンズを外し洋子の顔に右目を近づけた。
五十嵐の目をよく見ると、瞳孔が開きっぱなしで、瞳は透明に近い色をしていた。

異様な目の形、色に思わず息をのむ洋子。

コンタクトをまた入れ直すと元の色に戻っていた。

「直射日光とか見ちゃうと失明しちゃうらしい」

「そうだったの・・・ごめんね。そんなこと知らなくて」

「ああ、だからこのカード、返すの遅くなるかもしれない」

「え？いいよ・・・無理して読まなくて」

「面白かったんだろ？面白いんなら読むよ」

「本当？」

「嘘言ってどうする」

五十嵐は右目を必要以上に擦る^{こす}

「どうしたの？ 大丈夫」

「いや、ちょっと眩しくてさ」

「え？ごめん、私のせいだね」

「いや、気にするな・・・ああそーいや、裸眼で人の顔見たのお前が初めてだ」

「・・・五十嵐君ってさホストとかにいそうだよーね」

「はあっ？なんで」

頬を赤く染めながら言う洋子に五十嵐は過剰反応した。

「いや・・・何となく・・・それでおばさんとかに大ウケみたいな感じ」

「・・・生憎^{あいにく}、俺は熟女好きじゃない」

「それより、私にもやらせてよ」

洋子は、五十嵐から銃を奪い取ろうとする。ただ五十嵐が銃を上を持ち上げると洋子がどんなに努力しようが届く事はなかった。

「駄目だ。俺が成功するまで」

「どうせ、なんか悩み事でもあんでしょ。無心になろうとしてないから失敗するんだよ」

「・・・おお、それだ。忘れてた」

五十嵐は距離を2800にセットし中に入った。

「ちよつと、届く訳ないでしょ」

「なら失敗する方に賭けるか？一日奴隷だぞ」

「え・・・待って、じゃ成功する方」

「んな・・・なんで失敗する方に俺が賭けなきゃいけないんだよ」

「じゃ両方とも成功する方で」

五十嵐は狙撃態勢に入り目標物を捕え心の中で3つ数え引き金を引いた。

『目標物から1m手前です』

「・・・これは完全なスランプですな」

残念そうにうつむく五十嵐を横に洋子が笑いながらそう言った。

第二十話 偽りの戦争（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。二十話まで更新しておきながらなんですが、本当にネタが尽きてきました・・・これからも無い頭を振り絞りながら頑張っていきたいと思います。ご意見や感想お待ちしております。

第二十一話 ガンズショップ休館

『勉強手VS五十嵐選手 勝者、勉強手』

地面に横たわる五十嵐とナイフを持った勉強。

「五十嵐・・・どうしちゃったんだよ」

「わからねえ、正直、長距離の狙撃もできなくなっちゃった・・・」

「裕大や俺にも負けるだなんて。こりゃ問題だな」

五十嵐が過去を明かしてからしばらく経った。落ち込む五十嵐を元気づけようと企画した一対一の対戦だが、結果は五十嵐の惨敗で終わった。

「ごめん・・・今日はここまでにしてくれ」

そう言う五十嵐はフィールドから出て行った。

『どう思うよ・・・』

勉強は観戦席で見ていた康太達に聞いた

『どうって、言われてもな・・・ありゃ抜け殻だべ・・・』

『目的を果たしちまうと、ああも変っちゃまうものなのかね』

『しばらく試合がないからいいけど・・・本調子の五十嵐がいないと辛いぞ』

『まあ、しばらく様子見るべ・・・』

『そうだな』

岸边は、『いい企画考えてくるからそれまで待ってて』そう言っしばらく顔を出してない五十嵐もあんな調子で、過去もわかった事だし下の名前を聞いてみると身分証明書を作る時に適当に書いたらしく自分でも読めないと言う事がわかった。

なら、昔の名前は？と聞くと五十嵐は、忘れた！と言い張るし・・・まあ五十嵐のまんまでいいかという結論になった。・・・残念

この街の地面も白い雪が敷き詰める中、各地で相次ぐ発砲事件に新

たな進展が起きた。

それは、おそらく誰もが予想できなかった。出来事だ。

《また発砲事件　！！平和な国日本はどこに？》

雑誌や新聞では未だに一面で載せる中、ニュースでは市民の関心が薄くなっていたせいかな報道時間は極端に減っていた。

だが、そんな中

《独占報道　！！犯人からの犯行メッセージ》

四角いテレビの上の方にそんな文字が書かれ昼に色黒のキャスターが緊張な面持ちで原稿を読み上げる。

「これから予定を変更することをご了承ください。今回、我社にこのカードが送られてきました」

キャスターの手にカードが映し出される。

「カードの中には犯行声明と思われる映像が入っていました。これからその映像を皆さんにお見せいたしますが、一部、残酷な場面がございます。苦手な方は、しばらくの間、チャンネルを変える事をお勧めします。それでは、ノーカットでご覧ください」

映像が変わり

一人顔を隠し銃を持った男性が映し出された。

「これもう、録画出来てんの？　なんか赤いもんが点滅してんぞ」

「いいから早く言えよ」

撮影者の声が入る

「えー、んー・・・我々は、日本で暮らしながら日本と言う国に売られた人間を代表してこの映像を残そうと思う。そしてこの国で暮らす人にも今の日本で起きている現実を受け止めてほしい。・・・そしてこの国に絶望してほしい。今のままじゃ駄目だそう思って欲しい。そしてそれを変える事が出来るのは、私達ではない。私達と同じ考えを持つ同志達だ」

男性は、左手のリストバンドを外し手首につけた機械を見せるように強調した。

「同志よ、今こそこの国を変えるべきだ。そして我々は忌々しい呪

縛から解放されるのだ。自分の持つ銃口を目の前にいる敵ではなくこの国に向けるんだ　！！」

男性は一度フレームアウトしロープで身動きが取れない男性を引きずってきた。

「俺達は、この国に宣戦布告する。その証拠としてこれから国の飼った犬を殺す。岸边・・・これで最後だ最後に本当の名前でも言ったらどうだ？」

「うゝぐううう」

ロープで縛られた男性は必死に体を動かす。

「ああそうか、俺達お前の顎砕いちやんだもんな。喋れるわけないか・・・残念だ」

男性は銃の引き金を引いた。しばらくの静寂の後、男性の腕時計がピピピと鳴った。

「・・・これから、俺達はある事を始める。それは、今起きている発砲事件と関係している事だ。みんなも発砲事件について疑問に思う事がたくさんあるだろう。これから起こる事を見て、何かを感じてほしい・・・・・・OKだ。よし、みんな・・・いつも通りやろう」その時、男性の壁が突然、爆発した。カメラはその衝撃でどこを映しているのかわからなくなった。

その後、カメラがもう一度男性がいた場所を映すと壁にぽっかりと開いた穴から朝日が入り込み、さっきの男性の物と思われる肉片があたりに飛び散っていた。

穴から外を窺うと下には崩れた建物や壁に何人もの人が隠れていた。

「おい、みんな聞いてくれ！！」

一人の男性が穴から身を乗り出し両手を上げ外の人に訴えかける。だが、そんなことはお構いなしに外からの銃弾を浴び男性は倒れた。

「このバカ野郎がー！！」

「おい止せ」

撮影者が止めようとするがそれを振り払い、穴から外に向かって撃ちまくる男性は、もう一度の爆発でカメラの前で男の体は吹き飛ん

だ。

その時の血しぶきと土砂がレンズにつき真っ暗で何も見えなくなつた。

だが、爆発音や銃声は鳴りやまなかった。レンズの汚れを落とし息が乱れた撮影者が自分を映した。

「いいか・・・これは創りもなんかじゃない。そして、日本で実際に起きている事だ。それなのにこの国はこの出来事を隠している。俺達の後を継ぐ同志おもむろがいる事を信じている。・・・信じてるからな」
撮影者は徐に自分のしている覆面を取り素顔をさらした。

その顔は、土で汚れてはいるが二十代後半、凛々しい顔が映った。

「佳代・・・ごめんな父ちゃん。夜遅くに出かけて、こんな事やってたんだ。毎回仕事だって、嘘ついて、ほんと・・・父親失格だよな」
目に涙を浮かべ鼻をすすりながら話を続ける。

「お前の卒園式にも行けなくて、母ちゃんにはきつく怒鳴られて、佳代には口聞いてもらえなくて、小学の時は無理でも中学の入学式には必ず行くなって約束してたのに・・・どうやら、それも果たせそうにない」

誰かが、この建物の階段を上がる足音が聞こえてくる。

「でもな・・・佳代にどんなに嫌われようがな・・・父ちゃんは母ちゃんと佳代を誰よりも・・・愛してるからな」

そう言い終わると足音が男性の前でとまり大量の銃声が鳴ると同時に手から滑り落ちたカメラは男性の顔ではなく、血にまみれた全体を映し出しそこでカメラは止まった。

ニュースはそのまま続き、専門家を呼び作り物ではない事を証明するなど、これは一体何なのか、というテーマで雑談を始めた。

『信じているからな・・・』

部屋でニュースを見ていて男性が残した言葉に心が揺れ動く康太と勉、裕大だが、

「なんてバカな事をしたんだ・・・」

そう口に出す悠二とそれに同感する五十嵐。その態度に勉強がキレた。

「馬鹿な事ってなんだよ!!!」

「馬鹿な事は馬鹿な事だ!!!これで、こいつ等の家族の命は保証されると思っているのか!!!」

それだけじゃない 同志が集まっちゃおう!!!」

「い・・・いい事じゃねーか」

「同志が全員、こう言う奴らだけだと思っているのか!!!お前等、今すぐにこの店から出ろ!しばらく落ち着くまで家から外に出るな」悠二はそう言うのと部屋から飛び出した。

「なっ・・・なんで?」

理解が出来ない康太達

「同志ってのは、俺達のように全てを知っている者の事だ。そいつ等が、まず標的にするって言ったらどこだと思う?」

「どこって・・・ここ?」

「そうだ。てっとり早く狙うならここだろう。けど、ここには確かに岸边もいるが、俺達や他の関係のない人だっている。それを関係無く殺しにかかる同志がいたっておかしくはないだろ」

五十嵐はそう言うのと先に私服に着替え部屋から出て行った。

「待て、五十嵐」

康太が扉を開け呼び止める

「リストバンドも危なくなってきた。銃を装備するの忘れるなよ」そう言って五十嵐はいなくなった。

出口付近では、こんなに店員がいたのかって言うぐらいの店員が客の誘導をしていた。

「お客様、申し訳ございません。当店はこれより緊急点検を行います。ですからしばらく休業とさせていただきます」

なんて言いながら、数少ない客を外に出そうとしていた。
そんな中、受付前の長椅子に洋子が座っていた。

「あっ五十嵐君・・・」

こんな状況の中、洋子がガンズショップにいた事に驚いた

「・・・まだこんな所にいたのか」

「えっ？何が」

「家まで送る。場所を教えろ」

「え・・・？ちよっちよっと」

五十嵐は洋子の肩を抱き、無理やり店の外に連れて行った。

その光景を、横眼にニヤリと笑う口には歯の矯正をしているのか歯に付いた針金が妙に光る店員がいた。

その店員は携帯を取り出し誰かに電話をした。

「へえーそんな事件があったんだ」

家に向かう途中、その事件について洋子に説明しながら、五十嵐は周りに警戒した。

「ああ、だからあそこら辺は危険だから、しばらく来るな」

「え？あの店とその事件がどう関係あるの？」

「その映像には『同志達』そう言って手首につけた機械を指さしたんだ。その機械は、試合の時につける位置座標特定機に似ているんだ。」

「・・・じゃあ、同志があのお店にいるかもしれないって事？」

「そうだ」

「嘘・・・康太、大丈夫かな？」

「それは、大丈夫だ」

「ねえそれより、肩痛いんだけど」

五十嵐は知らず知らず洋子の肩を強く握っていた。

「ああ、すまない」

「ねえどうかしたの？キョロキョロしちゃって」

「お前ここから一人でも大丈夫か？」

「え？なんで」

「付けられてる」

「え？」

後ろを振り向くと細い路地で人通りの少ない道なのに二人が同じ方向に歩いてきていた。

「まさか・・考えすぎじゃない？」

「でも用心に越したことはない。この街でも発砲事件はあったんだからな」

「でも、それは駅付近でしょ？ここと正反対の場所だし・・」

そう言う風に言ってみるものの洋子も嫌な空気を感じ取っていた。向こうには道が二つに分かれる場所があった。

「俺がどうにかするから、あそこまで行ったら家まで走れいいな？」

「うん・・わかった」

だが、向いの道からまた一人現れた。洋子もそれに怯え、歩きながら五十嵐に強くしがみつく

「そのまま・・まっすぐ行くぞ。向かいの奴は関係無いかもしれない」

後ろの二人は五十嵐達と一定の距離を置いたまま、歩くだけだが、向いの一人は段々とこっちに近づいてきた。

分厚いコートを羽織り毛糸の帽子を深くかぶっている。互いにすれ違った瞬間、男の手が動いた・・・

とっさに五十嵐はそいつの手を掴むが男の手にはナイフがあった。

「今だ　！！　走れ」

五十嵐の合図とともに洋子は一目散に走った。男は掴まれていない手で五十嵐に抵抗するが、五十嵐は掴んだ手をそのままにし背中に回り込み腕を固めた状態で、電柱に男の顔をぶつけた。

男が怯むと同時に五十嵐は男を背中から地面に叩きつけた。

「があっ！！」

受け身もまともに取れなかった男はその場で気を失った。

後ろにいた二人も遅れて五十嵐に襲いかかってきた。一人を蹴り飛ばすと、もう一人を捕まえ

先ほどのナイフをそいつの喉に突きつけた。

「動くな。動くとこいつを殺す。俺に何の用だ」

蹴り飛ばされた男はゆっくりと立ち上がった。

「わかってんだろ？俺達は同志だ」

「同志が俺に何の用だ」

「もち、スカウト」

「違うだろ」

「何が？」

「いくらなんでも早すぎる。これも、リアルウォーか？」

「まさか・・・一般市民を巻き込んでする訳ないだろ」

「岸边にそう言えと言われたのか？」

「そう・・・って言っちゃった」

「なら話は早い」

五十嵐のナイフの先端が少し喉にプツリと入る。「ヒッ・・・」敵は思わず息をのむ。

「おいおい、そんな事しちゃっていいのか？」

敵は後ろを指さす。振り向くと首を腕で掴まれ銃を頭に突きつけられた洋子がいた。

「もう一人いたのか・・・」

「残念でした。これで立場は対等だ」

「彼女は関係無い、放してやってくれ」

「関係無いって言われても俺達の本当に目的は君じゃなくて彼女だ」男は、五十嵐を通り過ぎ、洋子の方に歩み寄った。

「この頃、寒くなってきててね。そろそろ温もりが欲しいかなって思ってたさ」

男は洋子の頬を指でなぞる。嫌がるそぶりを見せる洋子の顔を掴んだ。

「俺達は別に同志なんてどうでもいい。ただ、同志の名前が欲しいだけだ。だからこれは、同志の名において正義の行動だ。おそらくこれからドンドン同志が集まり行動を起こす。これはそんな中のちっぽけな事件だ」

「・・・何が正義だ」

「ああ？」

「これが正義だと言うのか？」

「もちろん。ほら、早く俺の同志を開放しろ」

男は洋子の顔の横でナイフをチラつかせる。五十嵐は言われるがまま男を開放した。

解放された男は、固められていた腕を振り回しながら異常がないか確かめ、その腕で立ち尽くす五十嵐を殴った。

「五十嵐君　！！」

半分叫び声が混じった声で洋子が叫んだ。

「うるせえ！！黙ってろ」

銃を突きつけた男がさらに強く銃を突き付ける。だが、洋子は首に巻きついた腕に思いつきり噛みついた。

「がっ・・・このクソ女あま！！」

噛みつく洋子を振りほどき蹴り飛ばした。

「くそ野郎が、何もしなきゃキレイなまま帰そうと思ってたのによっ　！！　やっぱヤメだ」

ボキッという低く鈍い音が鳴り響き、さっきまで五十嵐を殴り続けていた奴が五十嵐の足元でブラリと垂れ下った片腕を抱え込みながら蹲うずくまっていた。

「おい・・・キレイなままってなんだ」

五十嵐の表情は今までにないくらい怒りに満ち溢れていた。

「てめえ」

五十嵐は何の躊躇もなくもう片方の腕を持ち、反対方向に踏みつけた。

男は、叫び声を上げる。五十嵐はそいつを壁に向かって蹴り飛ばした。

「キレイなままってなんだ」

五十嵐は二人の男の方に歩み寄る

「それ以上、近づくな!!この女がどうなってもいいのか」

「お前こそ、そいつに手―出してどうなってもいいのか　!!」

「つぎの事、言ってんじゃねーぞ」

男は銃を取り出し五十嵐に向けた。

「おめえは同志なんてどうでもいいって言ってたな」

「・・・それがなんだ？」

「それじゃ俺も同感だ。今は目の前の事にしか興味はねえ」

五十嵐はそいつの銃を奪おうと体を密着させた。奪い合う間に一発銃声が鳴りながらも五十嵐は銃を奪い男の両足に弾を撃ち込んだ。残り一人、五十嵐がそいつを睨みつけると洋子を盾に男は五十嵐に銃を向けた。

五十嵐は持っている銃を捨てまたゆっくりとこっちに進んできた。

「く・・・来るな!!」

銃を持つ手はガタガタと震えはじめた。遠くではサイレンが鳴り始める。震える口からは歯に付いた針金が見え隠れする。

「・・・撃ってみろよ」

ズカズカと歩み寄る五十嵐に向けて男は遂に引き金を引いた。だが五十嵐の腹部に当たったものは、ただのBB弾だった。

その瞬間、五十嵐は男に飛びつき洋子から突き放した。

「ご免なさい、ご免なさい、ご免なさい・・・」

形勢が変わった途端、男は土下座し始めた

「ほんと・・・言い出したのは僕じゃないんです。言いだしっぺはそこで伸びてる奴で僕じゃないんです」

五十嵐は、そいつの顔面を蹴り上げた。

「おいキレイなままってなんだ」

「へ・・・？」

「キレイなままって何だって聞いてんだよ　！！」

五十嵐は謝り続ける男の顔を休むことなく踏み続けた。何度も同じ質問をぶつけるが男はただ謝るだけだった。

「五十嵐君　！！もうやめて」

洋子が後ろから五十嵐を止めに入るまで五十嵐は男を踏み続けていた。

男の顔は、真っ赤に腫れあがり意識はすでに失っていた。

「ああ・・・すまない」

後ろを振り向くと俯いたまま黙る洋子が下にいた

「大丈夫か？・・・洋子」

洋子は何も言わず五十嵐に抱きついた。

「よかった・・・本当によかった。五十嵐君、私のせいでお父さんみたく、また死んじゃうんじゃないかと思って」

「・・・あっ、わりい・・・大丈夫じゃないのは・・・俺らしい」

五十嵐は洋子に寄りかかるように崩れた。

「五十嵐・・・君？」

その時、洋子は自分の手に血がべつとりと付いてる事に気づき、銃の取り合いの時のあの銃声が頭の中を過ぎる。

薄れる意識の中、洋子が横で泣き叫ぶ所を見ながら、五十嵐は目をゆっくりと閉じた。

第二十二話 同志の名のもとに

悠二や五十嵐の言うとおりの発砲事件の数は一気に増えた。場所も明確にわかるようになり、目撃者も増えた。官僚や議員の暗殺などもあったが、人通りの多い場所で無差別に発砲するなどの事件も多発した。

そして、そいつ等がそろって言う言葉が『同志の名のもとに』

あのニュース以来、多くの反響を呼んだ。あの放送のせいで発砲事件は急増した。ただの批判を生む中、事件の統一性がない事にニュース番組では、疑問視した内容を伝えていた。

「統率者がいない組織なんだから統一性がないのは、当たり前だ」
悠二のその一言で俺達は納得した。けどそんなにもプレイヤーがいた事に驚いていた。

「プレイヤーって一体何人いるんだ？」
ガンズショップもしばらく営業停止。今は康太の家に全員上がりこんでいる。

「さあこの街にもすでに何人もいるみたいだしな」
「それより、五十嵐の場所まだわからないのかよ」
五十嵐から体内無線でSOSがあり、その場に向かってみるとやじ馬でこった返し割り込みながら中心に行ってみると路地に四人の負傷者とその場で応急処置をする救急隊員だけで五十嵐の姿はどこにもなかった。

「目撃情報によると女もいたらしいんだが、おそらく中村洋子だろう。ガンズショップの防犯カメラに五十嵐と中村洋子の姿があった」
悠二の言葉に胸が痛む康太

「くそっ五十嵐のやろー」
裕大はパソコンを使って五十嵐のつけた発信器を探しているが、LOSTと言う文字が浮かびあがるだけだった。

「駄目だ・・・見つからない。発信器の履歴を見てみたんだけど生命反応が消えてるんだ。多分、五十嵐はもう・・・死んだんじゃないかな」

「死んだとしても発信器は当分は通常作動したままだ。どうして、反応しない」

「体内の微弱電流で動く発信器だ。電池切れしてもおかしくない」
「とにかく、ガンズショップが再開してみない事には、何も始まらない」

「くそっ俺達には待つ事しかできないのかよ・・・」

「俺、ガンズショップが早く再開しろだなんて初めて思っちゃったべや・・・」

「とにかく、同志がいつこちら辺で活動するかもわからない。外出はなるべく控えるように」

そう言っただけは、家から出て行った。

「・・・あいつ、外出控えろとか言っておきながら真っ先に外に出やがった」

その原因は、発砲事件が多発しているとはニュースで報道されてもその事件を身近に感じる事がなかったからなのかもしれない。

「まあ、いいんじゃない？俺もこれから用事あるから帰るわ」

パソコンの電源を切りながら裕大が言った。

「用事って？」

「買い物。そんじゃ、したっけ」

「女か・・・」

康太の一言でドアノブに手をかけていた裕大が止まった。

「当たりかよ・・・」

「えっ・・・嘘、マジで？」

「バカちげーよ、妹じゃボケ」

「ほっほう？」

ニヤつく康太に戸惑う裕大

「な・・・なんだよ」

「五十嵐から聞いた」

「なにっ!! どれを？」

「冗談だよ、ちょっと引っかけてみただけ。・・・で？五十嵐にどんな事を言っただ？どれをって言うくらい秘密を暴露したのか？」

「秘密だ、このボケっ」

そう言って裕大は豪快に扉を閉め出て行った。

「怒ったかな？」

「いや、明らかに照れ隠しだろ。っーかよくわかったな」

「勘だよ、勘。人の恋心なんて見てたらわかるモンよ」

「へえ、洋子の恋心はわからないのか？」

「はあ？何それ」

「知らないの？今、五十嵐にゾッコンらしいぞ。学校じゃそんな噂が流れてる。こんな状況で言うのもなんだけど、洋子と五十嵐が駆け落ちしたって言う噂まででてるからな」

「うっそ・・・？」

「幼馴染は一生、幼馴染なんだよ」

「何それ」

「悠二の名言」

放心状態の康太とそれを見て笑う勉

裕大は未来と一両の列車に揺られながら大きな街に向かっていった。

「・・・で？なんで服買いに行くのにあんな街にまで行かなきゃいけないんだ」

「どうせ暇でしょ」

「暇っちゃ暇だけどさ・・・服屋なんてうちの街にもあんじゃん」

「いいの、メーカー品欲しいんだから」

「はあっ？そんな高いもん買うのか？」

「高いのにはそれなりに理由があるんです　！！」

「へえ、俺には理解できん」

「別に理解されたいとは思ってません」

列車は停車するたんびに人がどんどん乗り込んできた

「・・にしても、今日は、どうしてこんなに込むんだ？」

「知らないの？お祭りだよ。大通りであるみたいだよ」

「ほお、祭か」

祭と言う言葉に胸が躍る裕大

「ちよつと、買い物だからね。お祭りじゃないから、買い物だからね」

街に着く頃には、たった一両の列車に人が押し込められていた人が次々と降りてくる中、裕大と未来は、最後に息を切らせながら下りてきた。

「・・・・・なんで、買い物に行くだけでこんなに疲れなきゃいけないんだ」

「しょ・・しょうがないでしょ・・・・・お祭りだもん・・」

「俺・・満員電車、初めて乗ったかも」

「私も・・・・・」

「よし、それじゃ祭に・・」

「買い物です　！！」

改札から出ても人の混雑は途絶えることなく逆に人が増えていた。

切符がなかなか買えない人や買えない人にイライラする人。変な銅像の前で待ち合わせをする人や銅像の前でたむろする集団。

浴衣　！！・・の奴はさすがにこの季節、寒くていいが裕大の目は右へ左へと目移りする。

「ちよつと　！！」

「ん？おお・・悪い悪い」

未来の声に我に帰る裕大だがその時、何やら違和感のある集団が裕大達の横を通り過ぎて行った。

思わず振り返るが、その集団は人ごみに消えた。

「どうかした？」

「・・・いや、何でもない」

少々ふてくされる未来だが、買い物も無事終了した。

「んゝちよっと早く終わっちゃった。お祭りでも見て行く」
時計を見ながらそう言った

「いや、買い物終わったなら、早く帰ろう」

「どうかしたの？様子変よ」

さっきから違和感が取れなく周りに警戒をする。

「帰ろう、何かやな予感がする」

「ちよ、ちよっと待って」

店から急いで出ようとする裕大の手を掴んで止めた。

「わからないの？どうして買い物に誘ったか」

「ん？何が」

「今日は何の日？」

「何かあった？」

「誕生日」

「ん？未来のか」

「裕大のです！！今頃、家では誕生日の準備してるんだからまだ帰ったら駄目なの」

「そうか、すっかり忘れてた。道理でみんな口数が少ないなゝとか思ってたんだ」

「自分の誕生日ぐらい覚えときなさいよ」

「そうだったな、今日が俺が施設に預けられた日かゝ」

「・・・そっか、裕大って本当の誕生日ってわからないんだ」

「ああ、揺り籠に名前以外はなんの置き手紙もないまま、入れられてたらしい。未来は、親の記憶とかあるのか？」

「んゝうる覚えかな、ちよっとしか思い出せない」

「・・・ってそんな話をしてる場合じゃない。帰るぞ！！！」

未来の手を掴み強引に外に出た

「ちよっと人の話聞いてた？」

「家には帰らなきゃいいんだろ。しばらく家のまわりぶらつければいいべ。とりあえずここ街から出るぞ」

『同志の名のもとに』

裕大の頭の中で誰かがそう言った。そして、それを復唱するように何人もの人が『同志の名のもとに』と続いた。

その声を聞いたのは、裕大だけではなかったらしい・・・共通の周波数を使用しているらしく

回線をオンにしていた人は急に立ち止まったりキョロキョロしたり、空を見上げたりしていた。

「どうかした？」

未来は、周りの異変と裕大の様子に気付き声をかける。裕大の服の下で一気に汗が噴き出してくる。

「マジかよ・・・」

「え？」

遠くで小さな火薬が爆発したようなタタタタンと音が鳴る

「あれ？もう花火？まだ昼よ」

「違う、行くぞ」

裕大は手を掴んだまま、音が鳴る方とは反対方向に進んだ。

「ちよっと、駅は反対側よ」

「いや、いいんだ」

「帰るんじゃないかったの？」

「いいから」

裕大のように気づいた人は足早に今だに鳴り響く音とは反対側に急いでいた。

「何があったの？」

「同志だ。同志がいる」

「嘘・・・」

未来の足が止まった。

「本当だ、共通の回線にあいつ等の声が入ってきた。今鳴ってる音は銃声だ」

しだいに銃声だけではなく悲鳴も途切れ途切れ聞こえてくるようになった。

「さあ、行くぞ」

「駄目・・・ここに友達がいる。さっきメールがあったの」

「大丈夫だ、きっと逃げてる。それに発砲してる所にいるとは限らない。何ともないって」

それでも動こうとしない未来

「未来！お前が行ってどうする？何ができる、危険に飛び込んでも何も出来ないだろ。とにかく自分が助かる事だけを考えろ」

未来は何かと葛藤しながら無理やり納得させ、こくりと頷き足を動かし始めた。

その時、後ろから人の波がやってきた。

悲鳴や「おい、やべーぞ」「逃げろ」など声を発しながらこっちにやってきた。

「未来、逃げるぞ。とにかく人のいない所に」

「うん」

人の波に飲み込まれ、ただ従いながら進んで行くうちに未来はある事に気づいた。

「ねえ、そっちは大通りよ」

「ああ？何だって」

「そっちは、お祭りの会場　！！」

「まじか、そりゃヤバイ」

どうにかこの波から逃げだそうと周りを見渡が、どこにも抜け道は見つからない。

だが、ふと目に入ったのは茶色いコートを羽織った奴が裕大の横を並走して走っていた。

「こいつ・・・」

駅で見た違和感のある集団にいた一人だ。

そう思った時、その隣の男と目があった。しばらくの睨みあいの後、男はコートの中から銃を取り出した。

「おい、こいつ銃持ってるぞ　！！」

裕大はそう叫びながら男の銃をはたき落とし横の壁に押しつけた。

人は男から離れようと、遠ざかるが後ろからどんと押し寄せる人波とぶつかり、重なり合うように倒れた。

転がり落ちた銃はオートになっていたのかその場で、暴発し至る所に弾が飛び散った。

重なり合うように倒れた人たちにも銃弾は飛び、一瞬にしてけが人と死体の山が出来上がった。

騒ぎを聞き付け警官が数人やってきて、暴発した弾を腹に喰らっていた男に銃口を向けながら徐々に近づいて行く。

「取り押さえろっ！！」

一人の警官の掛け声で一斉に犯人に飛びかかる警官

「同志の名のもとに　！！」

男がそう叫び、何かを地面に叩きつけた。裕大はそれを何かとも確認せずに後ろにいた未来を抱きかかえパトカーの後ろに飛び込んだ。ものすごい衝撃と爆音で地面が揺れ動き、あたりを見回すと男や警官がいた場所には黒く焦げた跡しか残ってなかった。

「いやあああー！！」

未来が何かを見て叫び声をあげた。目の先には、どうぞ見てくださいと言わんばかりか苦痛に歪んだ生首が堂々と立っていた。

「馬鹿　！！見るな」

急いで未来を抱き寄せるが「もういや・・・」そう言いながら未来は泣き崩れた。

折り重なっていた人々は、落ち着きを取り戻しけが人を助けながら

起き上った。

ただ、どうすればいいのかわからず立ち尽くす事しかできなかった。
「おう、俺もあの人達助けに行ってくるけど、お前大丈夫だよな？」

未来は声も発さずにただ一度頷くだけだった。

そして裕大は、未来から離れ「大丈夫ですか？」そう言いながら、
人ごみの中に入っていった。

人ごみの中、動ける人を集めあれこれと指示をする裕大を遠目で見
ながら車がなくなった道路に座り込む未来。

裕大達がいる歩道とは逆の方で子供の小さな泣き声が聞こえること
に気が付いた。

恐る恐る声ができる方に近づくと車の陰に座り込み泣いている子供を
見つけた。

「大丈夫？お父さんかお母さんは」

泣きじゃくる子供はただ顔を横に振るだけだった。

「じゃあ、一緒に探してあげよっか。そんな所で泣いてても、誰も
気づいてくれないよ」

手を差し出すと子供はその手を取り立ち上がった。

だが、その時、店と店との間の隙間から体中赤く染め銃を持った男
が、現れた。

「パパ」そう言ったので、未来は振り返り、その男に気づいた。

「その子から離れろ」

男はそう言い未来に銃を向ける。

「こ、この子をどうするつもりですか」

未来は子供を自分の後ろに運んだ。

「俺は、その子の父親だ」

「だ、だから・・・どうするつもりですか？」

弱弱しくも男に問いかけた。

「・・・殺すに決まってる」

「な・・・何ですか？」

「自分の娘だ。どうしようと関係無い　！！」

男の声に裕大達も気づいた。周りからはまたパニックになりだす人や「お譲ちゃん、逃げなさい」と無責任な言葉を遠くから投げかける人もいた。

「未来っ　！！」

裕大の服の中には銃が隠してある。どうする？出すか、出したらどうなる？

俺も同志だと勘違いされないか？その前に銃を持っている事に怯えられるんじゃないか？

五十嵐だって銃は持っていたはずだ。あいつはおそらく出さなかった。頭の中で色々な思考が飛び交う。銃を出してどうする？あいつを殺すのか？

未来の目の前で人を殺すのか？

「駄目だ・・・そんな事」

でも、そんな悠長な事も言ってもらえない。その時、自分の足元におそらく警官であろう人の

銃を握り締めた手が落ちていた。

裕大はとっさに手を外し銃を構え、男の所に向かった。

「さっさとどけ、お前も死にたいのか」

「い、嫌です。どきません」

未来の後ろで、また泣き始める子供

「どうして父親のあなたが、自分の娘を殺そうとするのですか？」

「その子の両親は、もう死んだの同然だ。だったら、そんな重みから解放してやるのが親の務めだろ」

「あなたは、間違えています。両親がいないからってその子が不幸になるだなんて、誰が決めたんですか？」

「お前に孤児の気持ちの何がわかる」

「わかります。私だって孤児です」

その言葉に声を詰まらす男

「おい　！！　未来から離れろ」

銃を構えながら男にジワジワと近づく

「未来だと・・・？」

裕大の発言に反応を示す男

「あんた・・・同志だろ？　今まで、家族を守るために戦ってきたってのにどうして、家族を見捨てるような行為を取ったんだ　！！」

銃を未来に向けたまま男は裕大の左手首のリストバンドを見た。

「お前・・・同志か？」

「違う！！　この銃は、さっきそこで拾った。どうしてこんな行動と取った！！　どうして他の人間を巻き込むような行動を取った　！！」

「お前はあのテープを見ても何も感じなかったのか！？　最後の娘に宛てたメッセージ、その娘と母親はどうなったか知ってるか？」

「知ってるさ、火災で死亡。しかも、そのメッセージが報道される前日にだ」

「あの人達は、自分の家族よりも俺達同志を奮い立たせることを選んだ。ならばどうして、お前はそれに答えようとしない」

「しらねーよ、そんなもん。あいつらみたく別に捨ててもいい家族だなんて俺は、持ち合わせちゃいねえ！！」

「・・・どの道、その子は死ぬんだ。だったら、俺がこの手で殺した方がましだ。妻を殺したように」

男は再度、未来に銃向ける

「どけ、これが最後のチャンスだ」

「嫌です」

「止せ！　撃つぞ。未来、後ろに下がれ」

裕大が必死に止めようとするが、全く聞く耳を持たない

「俺は、お前のような捨てられた子供がいるように捨てた親を一人

知っている。そいつは捨てた事をいつも後悔していた。だが、そいつは必ず最後に決まって言う言葉があった。

『あの子には未来がある、文字通りの未来が』だそうだ。」

「え・・・？」

「その未来を俺の手で潰してしまうのは、本当に残念だ」
男の人差し指に力が入る。未来はきつく目をつぶる。

一発の銃声で吹き飛んだのは男の方だった。撃ったのは裕大ではない。裕大も驚いた表情をしていた。そこへ何人もの警官がやってきた。

『大丈夫か？裕大』

頭の無線に悠二の声が聞こえてくる。

『悠二が撃ったのか？どこにいる』

『もちろん、裕大が見える所。そんな事より、その子連れて早く逃げろ。まだ、同志はいるぞ』

『ちょっと待て、なんでお前がここにいるんだ』

『俺は、一応岸边だぞ。反逆者の清掃命令が下ったんだ』

『・・・清掃だと？悠二、こいつ等を殺すことを清掃だなんて、マジで言ってるのか？』

『その‘清掃’お陰で、お前とその子は助かったんだろ』

倒れる男の横に駆け寄り「パパ、パパ・朝だよ起きて」そう言つて揺する子供

『・・・あの子はどうなる？』

『俺にはどうする事も出来ん。おそらく保護されるか、もしくはその名目で・・・』

『止めろ。もういい・・・』

裕大は無線を切り未来の所へ向かった。

「未来・・・大丈夫か？」

「うん」

「ごめん、俺には撃てなかった」

落ち込む裕大に未来は首を横に振った。

「撃てなくて良かった。裕大が人殺しになったらどうしようかなんて思ってた」

違う・・俺はすでに何人も人を・・殺してるんだ

第二十三話 ガンズショップ再開

あの日の発砲事件は過去最悪の惨事となった。死者60名、負傷者100人以上、行方不明5名。

犯行グループは全員射殺、祭と重なった事もあり、子供の犠牲者もたくさん出た。

ニュースではこのような状況で祭を開催していた責任者に非難を投げかけ、予想は出来なかったのか？どのように責任をとるのか？そんな事を繰り返し、責任者は涙をこぼしながら何度も頭を下げていた。

それに視聴者が飽きてくると、今度は目撃者の証言をもとに再現VTRを作ったりなど事件を報道していた。

「突然、男が駅前で銃を取り出し発砲し始めたんです」

「最初は何が起こったのかわかりませんでした。人の波に飲み込まれ、ただひたすらに逃げていました」

「警官が取り囲んだら 男は突然、自爆したんです」

「一人の少年が、下に落ちている銃を拾い男に向けて発砲しました」

「彼はその前にも、犯人の一人を見つけ、大声で叫んでました」

「私は秋祭りの会場で銃を乱射する2人を見ました。そりゃ、驚きましたよ。気がついたら足が勝手に動いてました」

VTRが終わり、キャスターが発砲したと思われる少年に牙をむける「その発砲したとみられる少年とは一体誰なんでしょうかね？」

「今週発売の○○雑誌に少年と思われる写真が掲載されています」

写真には街の風景と小さく少年の銃を構えた後姿が映っていた。銃を向ける先では、人にモザイクがかけてあり、ただ見る限り、明らかに撃たれているとわかるような体の仰け反り具合や血しぶきが確認できた。

その写真に映る彼は、一体誰かはわからないが、知っている奴が見るとこれは、明らかに裕大だとわかるような写真だった。

その情報は、裕大が学校に来る前には広まっていた。
もちろん裕大にも・

「おい・・裕大」

裕大が教室に入るなりさっそく一人が裕大に話しかけてきた。

「・・うるせえ」

オドオドとしながら話しかける男子に不機嫌そうに返す裕大

「だってよ・・裕大」

「うるせえっ！！って言ってんだろ。俺あ撃っちゃいねえ！！」

「ほ、本当だな？信じていいんだな？」

「当たり前ーだろ。人殺してたらこんな所にはいねええよ　！！」

「そうか・・良かった」

本気で胸を撫で下ろすクラスのみんなに裕大の感情は空回りした。

「あっ・・ああ。こ、殺しちゃいねーよ」

「いや、マジで不安だったんだって、殺してたらどうしょ、ってどう接したらいいのかわかんねーよってな」

「・・・疑わねーのか？こんな問題ばかり起こるクラスなのに」

「こんなクラスだからこそだろ。・・・マジで心配したんだから」
涙ぐむ男子と安堵の表情を見せるみんなに心が揺れ動いたのは裕大
だけでなく勉もそうだった。

俺達は良いクラスに恵まれた。そして、そんなクラスに嘘をつく俺
達に罪悪感に似た感情も涙と一緒にわき出てきた。

「おいおいおい、泣く事ねーだろ　！！　いやマジで」

「ごめん・・怖かったんだ。みんなどんな表情で、俺を見てくるの
かわからなくて・・・みんなから遠ざかろうと思って、トゲ出し
て学校来たのにこんな風に俺と接してくれるとは、思わなかったん
だ」

「ああーやべ、そう言う事言うなよ。もらい泣きしちゃうじゃねー
か　！！　・・・マジヤバイ出てくるっ　・・・」

クラス全体が鼻をすする音で充満する中、何も知らないで入ってきた先生の驚く表情を見て全員が爆笑した。笑いながらも裕大と勉は嬉しくて流す涙を俺達はまだ出せる事を喜んだ。

俺達はまだ人間だ・
そんな事を再確認した

「・・・へえ、そんな事あったのか」

康太の家で勉や裕大が嬉しそうに話す内容は康太にとって微笑ましくもあるが、羨ましくもあった。

それに気づいた勉と裕大は話の内容を変え盛り上がっていた。

ガチャリと開いたドアから悠二が入って来た途端、話は中断され不穏な空気が流れた。

「・・・わりい、シャワー貸してくれるか？」

銃をしまった鞆を肩に担いだ悠二の恰好は、泥だらけで顔にも泥がついていた。

「ああ、いいよ。勝手に使ってくれ」

「いつも悪いな・・・」

「・・・また、清掃かよ」

風呂場に向かう悠二が勉の一言で立ち止った。

「・・・悪い、俺もまだ岸边なんだ」

「岸边、岸边って・・・なあどうしてもお前がやらないと駄目なのか？」

「戦闘経験のある岸边から清掃部隊は選抜されてるんだ・・・拒否はできない」

俯きながら喋る悠二に康太は少し首をかしげた。

「まあ、泥だらけだから。早く風呂入って来い。家ば汚すなよ」
「わかってる」

テレビをつけると発砲事件の特集が組まれて警察の特殊部隊が取り上げられていた。

模擬演習で犯人を取り押さえる様子や、ペイント弾を使った銃撃戦を放送していた。

世間では最初に報道された同志には一部、同情の目も向けられていたが、今では同情する目など、どこにもなかった。

同志の虐殺する事にやりすぎと言う言葉も聞こえない。最初の奴等はこの事になるなんて事を想像していたのだろうか？

「五十嵐・・・」

康太が何も考えずに口にした事に裕大と勉も驚いたが康太が一番驚いていた。

「はあっ？なんで俺、今 五十嵐なんて言ったんだ？」

「大丈夫か康太？」

「ううん、駄目だこりゃ」

「五十嵐か・・・どこにいるんだべ」

死体も出て来ない、消息もつかめない。学校では洋子と駆落ちしたなんて噂で盛り上がっていたが、五十嵐の生命反応は途切れていた事から洋子は無事だったとしても五十嵐はもう・・・

けど、どうしてもそうは思えなかった。そう思いたくなかった・・・

頭上から降り注ぐお湯で体に付いた泥を落しながら悠二は、さっきまでやっていた事を思い出す。

『同志の名のもとに！』

壁に追い詰められた同志は頭に銃を向け引き金を引こうとするが、悠二の一発で頭に向けられていた銃は宙を舞った。

同志は立ち尽くしながらも狙撃に気づきスコップ越しに悠二と目が会ったような気がした。

だが、悠二の二発目で同志の頭にキレイな穴が開き、目をカッと開いたまま同志は後ろに倒れた。

他の出来事を思い浮かべながら人差し指をまるで引き金を引くように動かしていると知らず知らずに口元が緩んだ。

鏡に映る自分の姿を見て緩んでいた口は治りまた自分の感情に苛立ちを覚えた。

「くそっ・・・」

『ああ、こりゃそろそろヤバいかもね』

軽い口調の岸辺の声が悠二の頭の中に入ってくる。

「・・・何の話だ」

『なにが、選抜部隊だ。な〜にが、拒否はできないだ。嘘つき、自分で志願したくせにい〜』

「黙れ」

『大丈夫、みんなには言わないからさ〜。まあ実際い〜、みんな薄々感づいてきてるけどね』

「黙れ」

『そろそろ悠二君、暴走するかもしれないね。誰かのお兄さんみた〜く。へ〜っへへ〜』

不気味な笑い声を残してまた岸辺は消えた。

「くそっ・・・」

初めは好奇心だった。志願した理由は、またあの感覚を・・・生を実感したかっただけ。

生きている事を確認したかっただけだった。ただ・・・それを繰り返していくと段々病みつきになってきた。

やめられないとまらない

どこかのCMではないが、本当にそうなってしまった。

その衝動を抑えようと我慢すると気付くと口の中は切り傷で血だらけになっていた。

口の中に広がる血の味・・・自分の血でもいいが、自分以外の血はサイコーに良い。

横たわる死体の傷口に指を当てなぞりその指を口に持ってくる。初めはそれだけで良かった。

気づくと俺は死体の傷口に自分の口を持って来ていた。吸血鬼とは、こう言う奴がいたから広まったのかもしれない。それにこの感覚は人に感染する。傷口を舐め終わり開放感に浸っている時、遠くで他の岸辺が、俺のように死体の首筋に傷を作りから血を吸っているのを見た。

そんな事はお構いなしに息を吐くと白い吐息ではなく赤が混じった吐息が出た。

『康太等の血ってどんな味がするんだろ』

そんな事を考える悠二の顔はまたも口元がニヤニヤとしていた。

「・・・サイテーだ。俺」

「いや、洋子の父親はいないよ。何でかは知らないけど」

「ほほう、そんな事まで知っているのか、家族付き合いも良好なんじゃないの？」

「バカそんなんじゃないよ。まあ俺以外に近所付き合いとか、中村家は無いから・・・それに唯一、俺の過去を知らない家庭だ」

「康太の過去？」

首をかしげる裕大に、知らなかったのか・・・!!と困った表情をする康太。

「こいつ、昔引きこもりだったの。一軒家丸々使って一人で引きこもってたのさ」

「はあっ？引きこもり？康太が？ありえねー」

勉の補正が効いた話に盛り上がる中、悠二がやってきた。

「みんな、報告が遅れてすまない。・・・ガンズショップ再開だ」
全員の表情が曇った。

「・・・マジ？」

「ああ・・・」

「い、五十嵐は？」

「それも、向こうで報告があるらしい」

「もう・・・大丈夫なのかよ？」

「・・・こちら辺は、大体一掃した」

頭をかきむしりながらそう言った。

「また、あの戦いも・・・」

「それも向こうだ。行ってみないとわからん」

一人を除きガンズショップに向かう、足取りは重たかった。その足の軽い一人とは悠二だ。

店に入ると岸边の不気味な笑顔が最初目に入ってきた。

「いらっしやいませ〜。ようこそ」

「生きてたのかよ」

「死ねばよかったのに」

「俺が殺せばよかった」

受付で立つ岸边に康太達は一言ずつ言って部屋に向かった。

「いやゝ傷つくな〜」

「大して傷ついてもないくせに」

「あっバレた」

悠二もそう言い部屋に向かおうとすると岸边に呼び止められ、ある事を聞かされた。

「なっ・・・岸边！！てめえ正気か！」

受付を乗り越え岸边に掴みかかった。

「仕方ないだろ、上からの命令だ。それにこの決まりは、昔からある事。お前も知ってるだろ？もちろん、あいつ等だって。むしろ感謝してほしいくらいだ。彼等に飛び火しなかったんだからね」

「だからって関係のない人まで殺すのか？」

「違うよ、今回の設定がこうなっただけだよ。どうする？止める？あいつ等に教える？」

悠二はその場で答えを出す事は出来なかった。掴んでいた手を放し部屋へ向かった。

「はい、みんな揃ってる？報告をいたしまーす」

全員が下を向き岸辺が言う次の試合内容に耳を傾けていた。

「次の試合、初の道外だから頑張ってるね。はい、以上・・・って言いたいとこだけど、一つ報告があります。五十嵐君の事です」

「何かあったのか？」

口を開くつもりはなかったのに康太の口は勝手に開いた。

「全然、お手上げ状態・・・それで発信器の履歴から見て死んでるんだし五十嵐君、死亡って事で」

「それじゃ・・・洋子は？洋子はどうなる」

「うん、五十嵐君と同じさっき死亡届提出しといたよ」

その言葉に力を失ったのかのように崩れおちる康太。

「いや、悪かったね。うちの店員の暴走でこんな事になっちゃって、本来なら警察に届けるはずなんだけど被害者も目撃者もない。立証する事が難しいって事でこっちで銃殺刑にしました。もちろん全員」

「おい！！いい加減出て行け」

勉が銃を岸辺に向け叫ぶ。息を乱しながらも銃は揺れ動く事なくしっかりと岸辺の頭を捕えていた。

「康太、しっかりしろ。死んでるだなんて誰も思っちゃいねーよ」

裕大がそう言い、康太も自分にそう言い聞かせる。岸边はゆつくりと外に出ていった。

「大丈夫・・・大丈夫だ」

「い、生きてるって、五十嵐も中村も・・・ほら・・・それにパソコンもまだ詮索中だし」

裕大はパソコンと立ち上げ画面を表示する。だたその画面には、L
OSTと言う文字ではなく

ここの周囲の地図を表示し緑の点が動いていた。・・・ただそれに気づいたのは裕大だけだった。

「・・・生きてる」

「ああ、わかってるよ。あいつ等は生きてる」

「違う、そうじゃない！生きてる！！ほらこれ」

裕大は腕につけた画面をみんなに見せる。全員が画面にくぎ付けになる。

「どういう事？」

「この店に向かってきてない？」

勉の一言で全員が一斉に部屋から飛び出した。

途中、廊下で岸边とすれ違ったが「どけっ」そう言って横に突き飛ばした。

店の外は広い駐車場の中、落ち葉が舞い、その中をゆつくりとこっちに向かってくるコートと帽子を深くかぶる男が一人いた。

男はこちらに気づき、深くかぶっていた帽子を外した。

帽子の下から出てきた顔は五十嵐だった。全員の口が塞がらず表情が固まったまま・・・五十嵐も何を言えばいいのか鼻をかきながら考えて

「あ、ああ・・・その・・・ただいま？」

「う・・・うおおー！！五十嵐いい！！」

固まっていた康太達の手縛りは解け五十嵐に向かって駆け出した。

第二十四話 俺達で終わらせる。

「なあ・・五十嵐」

落ち着きを取り戻し康太が口を開いた。

「なんだ？」

「いや、お前が無事って事はさ・・だから・・その」

「ああ、あいつも無事だ。生きてる」

「ホントか・・良かった」

「ただ、家にはまだ帰れない」

「どういう事だ」

「後で話す」

「待った。後もう一つ」

外からにやにやしながら見守る勉と裕大。その空気を察し見守る悠二
「お、お前と洋子って、今どんな関係なの？」

喉から振り絞った声で五十嵐に聞いた

「どんな・・ってどんな？」

真顔で五十嵐の口からそう出た。

「いや、どんなんて、そりゃ・・き、気づけよ・・」

「んん？」

本気で悩む五十嵐に勉が助け舟を出した。

「学校で噂になってるんだよ。お前と洋子が付き合ってるって」

「え・・マジか・・」

「そうそう」

「でも、そうは言ったって、洋子と付き合ってるのは、康太だろ？」
「はあっ？」

思わず声が裏返る康太

「あれ・・違うの？」

康太の態度に驚く五十嵐

「五十嵐だから、言ったろ。幼馴染は一生幼馴染だって」

「洋子は五十嵐にゾッコンっていう噂もあるぞ」

「お前等が行方不明になった時、駆落ちしたって言う噂も出たしな」
周りから飛んでくる声

「じゃあ、お前と洋子は何の関係もないの？」

「ああ、全くない。誤解が解けて良かった。・・・でも俺にも本当に可能性はあるってわけだ」

五十嵐が、康太にそう言う

「え・・・いや、まあそう言う訳じゃ・・・いや、そうだけど」

「まあ、一つ屋根の下、あいつとしばらくいた訳だし」

「はあ？待てどういう意味だ。いやそうじゃねえ、今までどこにいたんだ」

『今は言えない』

「どこって言われても内緒かな」

体内無線で五十嵐がそう言う

『どういう意味だ？』

「いや言えって、気になるだろ」

『大丈夫だ。いつか教える』

「黙秘権を行使します」そう言って口を閉じた。

「・・・まあ、いい。いつか口を割らしてやる・・・それより五十嵐、狙撃は出来るようになったのか？」

「そうだな、久し振りにやってみるか」

康太と五十嵐が、やり取りをする中、悠二は迷っていた。

岸辺に言われた事をこいつ等に伝えるべきか？今伝えないと手遅れになる・・・

だが、伝えてどうする？伝えたらどうなる？けどこれは、伝えないといけない。

「あ、あのさ・・・」

悠二が口を開き全員がこっちに振り向いた時、裕大の電話が鳴った
「あ・・・わりい」

裕大はそう言って電話に出た

遅かった・・・

「はい、もしもし・・・え？燃えてる？」

電話の向こう側の声は異様に慌てていた。内容は聞こえないものの電話を受ける裕大の様子が次第に変わっていく所からただ事ではない事が伝わってきた。

「今から行く」

裕大は電話を切り何も言わないで駆け出した。

「裕大！！どうした」

「俺ん家が燃えてる」

裕大の家の方を見ると黒煙がモクモクと立ち上っていた。

「マジかよ・・・」

康太達は裕大の後を追った。

野次馬をかき分け裕大の家に着くと木造の家は、真っ赤な炎で包まれていた。

そんなに近くでもないのに顔がチリチリと熱さが伝わってきた。消防が水を懸命にまくが、一向に収まる気配はない。

「ちきしょおお！！！」

裕大が立ち入り禁止の線を引き裂き、飛びだしたがそれに気づいた康太と勉が抑え込んだ。

「止せ、裕大 死にたいのか」

「かまわねえよ！！放せつくそ、なんで・・・なんでこんな時に」

地面に抑えつけられた裕大は必死に暴れるが、完璧に抑えつけた康太達を振りほどく事は出来なかった。

「わるい、裕大・・・」

そう言ったのは抑えつける康太でも勉でもなく五十嵐だった。

その意味が、裕大も康太、勉も理解できなかった。

その瞬間、五十嵐は駆け出した。

「おい、何してる！！誰かそいつを止めろ」

消防の人たちを押しわけ五十嵐は、燃え盛る扉を蹴破り炎に包まれた家の中に玄関から入っていった・・・

「大変だ！人が中に入ったぞ！！」

何が何だか理解できなかった。消防の人が慌ただしく動く音が全く入ってこなかった。

防火服を着て中に入ろうと試みるが入口からは炎が噴き出る。

どうして五十嵐はあんな所へ入っていったのか？ただ、無事でいてくれそう願うだけだった。

しばらくすると、家の横から炎と一緒に火の玉が窓を割り外に飛び出してきた。

だが、その火の玉はすぐに五十嵐だとわかった。横たわる五十嵐にすかさず放水をする。

咽る五十嵐は、何かを大事そうに抱きかかえていた。

「未来・・・」

「なにっ」

康太と勉は裕大を抑えつけるのをやめ、五十嵐の所へ向かった。

「五十嵐　！！どうしてそんな無茶をした」

「これで・・・嫌でも・・・警察が動く」

五十嵐は咽ながらそう言った。

「何を言って・・・」

何を言ってるのかわからなかったが、五十嵐が抱える物を見て康太と勉は理解した。

「未来・・・無事だったのか」

そう言って裕大もよってくるが、言葉を失い、立ち止まってしまった。

「悪い・・裕大・・原形を一番留めているのがこの子だったんだ」
五十嵐が抱きかかえて出てきた物は確かに未来だった。

だが動かない、火事で死んだわけではない。所々、火傷はあるものの明らかに死因に至るものではない一番の原因は、刺し傷だ。首と胸から出血がみられる。

「これで、事故による火災じゃなくて、事件による火災だと立証できる」

犯人は口に出さなくても、だれなのかわかった・・・間違いないガンズシヨップだ。

「でも、なんで俺達が何かしたって言うのか」
そんな事、裕大にとってはどうでもよかった。

「あゝああああー！！！」

怒りがこもった叫び声上がり裕大は、人ごみを突き飛ばしある場所へ走った。

「裕大を・・止めろ」

五十嵐が脇腹を押さえながら言った。

「でも、どこに行ったか」

「わかるだろ　！！ここは大丈夫だから早く行け」

五十嵐が押さえる手の隙間から血がにじみ出ている事に気づいた。

「お前、その血・・」

「いいから、早く行け！！」

「俺がここに残る。康太、悠二と一緒に裕大を追え。後から、そっちに向かう」

「わかった・・おい悠二！！　行くぞ」

康太は悠二に叫び裕大の後を追った。

「五十嵐、お前一体何考えてる・・・」

勉の下で傷の痛みと格闘する五十嵐に尋ねた。

「・・別に、同志のやる方法以外でも俺達がさせられている事を伝える方法があるんじゃないかって思ってたな」

「だからって……裕大の妹を利用しようとしても思っているのか」
「……俺達で……これ以上被害を出したら駄目だ。俺達で終わらせるんだ……そのためだったら、俺あ死人でも使うぞ」

五十嵐のその言葉は受け取り方によっては最悪な言葉で、でも勉にとっては五十嵐と同じでこのゲームを終わらせたいという気持ちに共感するところもあった。

「……まあ今回は事故じゃないって事だけでもわかればいいか……」

「勉……悪いんだけどガンズショップまで連れてってくれ。治療を受けたい」

康太と悠二がガンズショップに着くと裕大が、ちょうど受付の席に両手を上げ座る岸边に銃を向けている所だった。

「裕大　！！駄目だ」

「その通りだ。こいつを殺したって何も始まらない」

「うるさい　！！俺は、こいつがどうして未来達を殺したのかが聞きたいんだ」

その言葉でピンと来たのか、岸边がニヤける。

「なんだ。悠二君から聞いてないのかい？ちゃんと彼には伝えたよ」
康太と裕大の視線が悠二に向く

「どういう事だ。悠二」

「……すまない、言うタイミングが遅れた。坂本　未来の父親もプレイヤーだったんだ。彼は、同志になって俺達に銃口を向けたんだ。」

悠二は、康太達に目を合わせる事なく話した。

「ほら、ちゃんと伝わっていただろ」

「裕大が襲われたあの日、彼女の父親もいたんだ。」

「なんで……なんで教えてくれなかったんだ　！！それに、未来と

父親はもう、何も関係無いじゃないかつ」

「だが、血縁関係はある　！！・・・そう言う決まりだろ・・・ルールを犯した者はもちろんの事、周りの人間、家族も殺されるって」

呼吸が乱れ、悠二の言っている意味が分からなくなる。裕大は、すべての元凶を岸边になすり付け銃を強く握った。

「おいおい、俺を殺すつもりか？君も同志になりたいのかい？」

「同志なんて関係無い、俺は何もかも失った」

「君はいいかもしれないが、彼等はどうなる？君が、反逆者になる事でトバッチリを受けるのは彼らだ。」

そう言いながら康太の方を指さす

「だったら、俺はチーム1から抜ける。これでいいだろ」

片手で持っていた。銃を両手に持ち替え引き金に力が入る。

「待て、裕大・・・お前にも家族はいるんだ。」

悠二の一言で引き金にかかった人差し指が止まった。

「お・・・俺には、もう家族はいねえ！！」

一瞬戸惑いながらも涙声で裕大はそう叫んだ。

「違う、そうじゃない。彼女と同じだ。お前の両親が、生きてるんだ。」

「俺を捨てた親だ。どうなってもかまわねー」

「そうだ！！それで彼女は、死んだんだ。彼女の父親の勝手な行動で、関係のない子供まで死んだんだ。お前は、それを繰り返すつもりか　！！」

岸边を殺したい・・・だが、それで未来のような被害者が増える。裕大の中で二つの意見が葛藤し、銃を地面に投げつけ「チキショー！！」たったそれだけの言葉で、葛藤した気持ちを吐きだした。

後日、強盗殺人及び放火による事件は警察が捜査をする事になり、焼け跡から裕大以外の住人が全員死亡した事が、確認された。

事件当日、裕大の誕生パーティーが出来なかったので、裕大に内緒で（未来から聞かされていた）その日にする事になっていた。

「俺のせいだ・・・俺の誕生日のせいで・・・」

全てを聞かされた最後の頭を抱えながら言った裕大の一言に全員の胸がきつく閉まった。

「おい、みんな準備ができたぞ」

そう言いながら悠二が部屋に入ってきた。

「・・・じゃあ行くか」

康太が、先に席を立ち後にみんなが続いた。今日は、話し合いの結果、裕大を捨てた両親を見に行く事になっていた。

「おい、本当に俺達ついて行っていいのか？」

廊下で裕大に康太が聞く

「いや、俺一人だったらどうなるか、わからないから。一緒に来て欲しい」

「そうか・・・わかった。それなら一緒に行くよ」

店の外に止めてある車に全員が乗り込んだ。

「あ・・・悪い、鍵もらって来るの忘れた」

運転席に座った悠二は、鍵を取りに店の中に入ってしまった。

岸边から鍵を受け取り車に向かおうとした。

「気をつけてなー」

受付で手を振る岸边の声に悠二は立ち止った。

「・・・岸边、頼みがある」

悠二は振り返り岸边の方を向いた。岸边は、まるで知っていて待っていたかのように笑った。

「裕大の両親は会社の独立に失敗し家も財産も何もかも失った。そんな中、裕大 お前が生まれた。・・・その後、再度始めた会社が何とか軌道に乗り今、子供が一人いる。」

悠二がそんな事を言う以外は、車の中はとても静かだった。全員が窓の外に目をやり、紅葉した木々を眺めるだけだ。

「着いたぞ」

悠二が車を止めた場所は、知らない住宅街が並ぶ場所だった。ぞろぞろと車から降り、長旅に疲れ伸びをする奴もいた。

「あそこだ」

悠二が指をさす方に一軒の家があり、別に立派とも酷いとも言えない家が一軒あった。家の前には車が一台止めてあり、どこかへ出かけるのか荷物が積んであった。しばらく、様子を見てると扉があき子供が一人飛び出してきた。

「ほら、早く車に乗りなさい お爺ちゃん達が待ってるぞ」

「はい」

子供は勢いよく後部座席に乗り込む。裕大は、父親を穴が開くのではないかと思うぐらい睨みつけている。

「裕大・・・」

「・・・ったく、いい気なもんだ・・・」

裕大はそう言っていると、家の方に歩き出した。

「おい、裕大」

勉が裕大の後を追いつ、横に並んで歩く。父親のいる方にどんどんと近づいて行く。

母親も扉から現れ、鍵を閉め車に近づいてくる。父親が、こちらに気づき奇妙な目でこちらを見てきた。

「お前らだけ幸せになりやがって・・・」

裕大が父親の横を通り過ぎながら呟いた。父親の顔は、急に青ざめてくる。

「あなた・・・」

母親も感づき、父親に話しかける

「パパ、どうかしたの？あのお兄ちゃん達知り合いなの？」

「い、いや・・・何でもない」

両親は急いで車に乗り込み逃げるかのように急発進した。

「裕大・・・あんな会い方で良かったのかよ」

目の前を勢いよく通り過ぎる車を目で追いながら、勉が尋ねた。

「いいよ、元々あんな奴等とは血は繋がってるかもしれないけど、全くの他人だ。」

「あん時、岸边殺しときゃよかったとか、後悔してる？」

「・・・わかんね。なんか全部アホらしくなってきた」

正面から冷たい風がやってくる。

「うっわ、さぶっ」

「車の中に戻るべ」

「ああ、そうだな」

風が来る前に急ぎ足で車に向かった。

「裕大、これからどうなるんだ？」

「んゝ補助金出るらしいから、一人暮らしかな？」

「うわっ大変そゝ」

「まあ、五十嵐もやってるんだし何とかなるべ」

ガンズショップに戻ってきて部屋に向かう途中、そんな話で盛り上がっていた。

だが、扉を開けるとそんな会話も終わる出来事が待っていた。

「お帰りゝ」

部屋の中で待っていたのは、岸边と運転手だった。置かれている状況が理解できずただ固まる康太達。

「・・・そして、さようなら」

岸边のその一言が、康太達が聞いた最後の言葉だった。運転手が、黒いリモコンのスイッチを押した瞬間、康太達は意識を失い倒れた。

だが唯一、悠二だけが立っていた。

「・・・全部、部屋の中に入れなさい。廊下に倒れてたら目立ってしようがない」

「ああ、わかってる」

岸辺の指示に従う悠二。倒れている康太達を引きずり部屋の中に入れた。

「俺が頼んだからっていくらなんでも、早すぎだろ」

「そうでもないさ。そろそろ時期だったからね」

「俺が、いつかこうなるってわかってたのか？」

「んや、君もこいつ等と一緒に送られると思ってたよ。あそこに送られればもう生きては帰れないし。悠二君、助かったね」

「本当に送るのか？まだ子供だぞ」

「そうだね、多分最年少だ。でも、送る 金になるから」

「最低だな」

「悠二君だってそうだろう？僕にこれ売ったんだから・最低と言うより僕より岸辺らしいね。いや、岸辺より岸辺らしいかな？真の岸辺誕生 ！！」

「・・・・・・」

「・・・・まあ、錠をはめたら教えてくれ 受付で待ってるから」

岸辺と運転手はそう言うのと部屋から出て行った。

机の上には、人数分の手かせが、置いてあった。悠二はまず、康太からやろうと錠をとり康太の所へ向かった。

「こういう事だ。悠二」

康太の前でしゃがみ込み作業を始めようとした悠二の頭の後ろに銃が突きつけられた。

「なんでだ・・？」

悠二は驚きながらも両手を上げゆっくりと立ち上がる。悠二の後ろには銃を構える五十嵐が立っていた。

「・・・・なんで意識を失わない？」

第二十五話　もう一人の戦争体験者

消毒くさい匂いが漂っている事に気づき目を開けると、見慣れぬ天井が見えた。

「ん・・・うわっ」

尋常じゃない光が目に入り自分が今、裸眼だと言う事に気づいた。

「頭の横にコンタクトレンズ置いてあるぞ」

声に気づき、声がする方に顔を上げる。

「よく生き返ったな。正直、死んだと思った」

「・・・誰だ」

コンタクトを素早く入れて目を慣らす、ピントがうまく合わない

「君は、一度ここに來た事があるね」

「何の話だ」

「私は、一度見た顔は忘れられないんだよ」

ようやくピントが合ってきた。

壁に松葉杖を立てかけた白衣を着た男が、立っていた。

部屋は広く、とてもきれいでリッチな部屋だった。

「病院か？」

「特殊な病院だが、一応病院だ」

「悪いが病院に通った記憶なんてない。人違いだ」

「そうでもないさ。この前は違う女性を連れてきた」

「女・・・あつ」

意識を失った女の付き添いで病院に一度來たっけ・・・

「まったく・・・あの野次馬の中、君と洋子君を見つからないように運ぶのは大変だったよ」

その言葉で記憶がどんどんと蘇ってきた。

洋子を家まで送る途中、同志と名乗る奴に襲われ腹に銃弾を喰らった・・・そして倒れた。

「洋子は？無事か」

「・・・自分の体より洋子君か・・・大丈夫、無事だ。私に連絡をよこしたのは、彼女だ。『お父さんを助けてくれ』ってな」

「・・・お父さん？」

「彼女は小さい頃、似たような事件に巻き込まれたんだ。その時は父親に助けられたが、父親は犯人にけがを負わされた。打ち所が悪くてな・・・しばらくして脳内出血で父親は亡くなった。父親と君が重なったんだろう。だから、父親の担当をしていた私に電話をよこした。」

「電話番号を覚えてるだなんてすごい記憶力だな」

「凄いのは君だ。どんな生命力をしてるんだ？救急隊に扮した私の部下が着いた時には、心肺停止状態だった。そこから君は、持ち治した」

「凄い、ゴキブリ並みだな・・・」

「・・・まあいい。本題に入ろう」

男は片足を引きずりながら近寄ってきて、ポケットから何かを取り出し布団の上に置いた。

蒲団の上に置かれたのは、ガンズショップの発信器だった。

五十嵐はすかさず、自分の左手首を見た。自分の左腕には、端末の穴が開いてる手首があった。

発信器が付いていない・・・

「君、プレイヤーだろ？」

「・・・」

「大丈夫だ。この発信器は、今は作動していない。だから盗聴される心配もない」

「あんた、何者だ？」

「特殊な病院の院長だ。」

男は、少し笑ってそう言った。

「五十嵐君　！！」

扉が勢いよく開き、洋子が入ってきた。

そして問答無用で五十嵐の腹の上に乗った。
傷口の上にちょうど膝がジャストミートした。

「いゝ・・・」

体の穴と言う穴から一気に汗が噴き出す。

「大丈夫だった？もう心配したんだから。」

その後も洋子は体を揺らしながら何かを話してるが、痛さに悶える
五十嵐の耳には届かなかった。

「洋子君！降りなさい」

「院長、違うよ。『君』じゃなくて『ちゃん』でしょ」

「洋子ちゃん、彼から降りなさい」

「はゝい・・・」

残念そうな声を出し洋子は、五十嵐から降りた。

「・・・さて、洋子ちゃん。ちよつと彼と調べたい事があるから、
お母さんの所に戻っててくれないかな？」

「ええゝ、私も五十嵐君とお話したい」
残る痛みと格闘しながら、さっきからの洋子の反応に首をかしげる
五十嵐。

「終わったら教えるから、いいね」

「うん・・・わかった」

洋子が部屋から出て行き、深くため息をする二人。嵐の後の静けさ
とはまさにこれだ。

「おい、傷口開いたか？」

「いや・・・大丈夫」

「さすが、私が縫合したかいがある」

「それよりも、洋子ってあんな性格だったか？」

「ああちよつと子供に戻っちゃってな。相当ショックだったんだろ
う」

「はあっ？・・・元には戻らないのか？」

「あれでも結構戻ってるんだ。最初の頃は、君の事をお父さんと呼
んでたんだぞ」

「17歳にしてお父さんか・・・」

「何喜んでるんだよ」

「喜んでねーよ」

なんだか軽蔑されてるような目でこっちを見てくるので、一瞬戸惑った。

「・・・ほ、ホントだよ」

「なるほど、君もあの戦争の体験者か・・・」

「も？」

「実は私もある意味、体験者だ」

リアルウォーの事、自分の過去を（一部補正有）話したあと、そう言われるとは思ってもいなかった。

「君とは年代が違うが、私は『国境なき医師団』にボランティアとして入っていた事があった。」

私がいたのは、一般に呼ばれる『創られた戦争、偽りの戦争』と呼ばれる内戦が開戦したばかりでね、傭兵もそんなに出回っていない時だった。

兵隊をどんなに治しても、また戦場に死に行く。そんな事の繰り返しだった。

そんな時、一人の傭兵に会った。

「くそがっ　！！」

テントから手術着を血まみれにした私が罵声を上げながら出てきた。テントの中には、手の施しようのない兵隊がいた。

しかもその兵隊は、私が遂この前治療したばかりの兵隊だった。一度見た顔が忘れられないと言うのは、とても残酷なものだ。

「俺が何のために助けたと思ってるんだ　！！」

日本語で罵声を上げる私に対し周りからは変な目でこっちを見てくる。

「見てんじゃねーよ　！！」

その場に腰を下ろし煙草を口にくわえ火をつけようとした、ちょうどその時だった。

「お前、日本人か？」

顔を上げると目の前に服を何重にも重ね着し、背中に銃と大きな布袋を背負った顔じゅう泥まみれの日系人が立っていた。

「こんな所で日本語が聞けるとは思ってもいなかった」

日本語を流暢に喋る奴だな、と最初は思っていた。

私も日本語をしばらく聞いていなかったからかもしれない。

《何の用だ？俺は、傭兵が嫌いなんだ。》

「おいおい、俺も日本人だ。日本語が久しぶりに聞きたいんだ。聞かせてくれ」

「日本人だと？なんでそんな恰好してる。傭兵と間違えられるぞ」
医師以外にも、ボランティアとしてここにいる日本人の事は聞いている。私はその誰かだと思っていた。

「間違えられるも何も、俺は傭兵だ。」

「な・・・」

銜^{くわ}えていた煙草が、地面に落ちた。

俺とそんなに年は変わらないだろう。なのにどうして傭兵なんかに・・・

「そうだ。俺にも一本煙草をくれ」

「傭兵だったのかよ・・・これ吸ったらさっさと行け。お前の顔なんて記憶もしたくねえ」

煙草とマッチ箱をそいつに乱暴に放り投げた。

「まあそう言うなや　これもなんかの縁だ。仲良くしようぜ」

「ご免だね、お前だって人を殺すんだろ？そんな奴と仲良くなんかできるか・・・なんで、日本を離れてこんな所にいるんだ？」

「・・・あの国に嫌気がさしたのさ」

「嫌気だど・・・？ここら辺じゃ平和な国に住みたいと思う奴等は
っぱいいぞ」

「何事もない平和なら俺も望むさ。けど、そうじゃない平和なら俺
はいらない」

「どういう事だ？」

「お前もいつかわかる。日本と言う仮面をした国の本性がな。じゃ
あな、楽しかったよ」

傭兵は、煙草を握りつぶし傭兵の群がる所へ歩いて行った。

「おい、名前は？」

記憶したくないと言っておきながら何故か口が勝手に動いた。

「岸边 悟だ」

そいつとは、それ以来会ってはいない。どこかで死んだのだと思っ
ていたが、風の噂で色々と活躍を聞かされた。

そんな噂のせいで、同じ日本人だからと言う理由でボランティアに
来ていた日本人が突然殺された。

それで私も日本へ連れ戻された。それから私はこの国とあの戦争の
真実を知った。

「どうやって知ったんだ？」

「一応、一流大学を出てるからな。同学年のお偉いさんにも知り合
いがいる。そいつ等からあくまで‘噂’として聞いた」

「なるほど・・・」

「でも、まさかあの岸边が日本に飼いならされてるとは」

「違う岸边は、ただの呼び名だ。岸边 悟は死んだ。」

「死んだ・・・？」

「あいつは、俺を戦争の世界に引きづり込んだ男だ。俺が殺した。
あいつもただのプレイヤーだったんだよ。」

「そうか・・・」

「悲しいか？」

「そりゃ悲しいもんだ。知っている奴が死ぬって言うのはな」

「あいつが死んで悲しむ奴なんていたんだな・・・」

「お前さんは、どうなんだ？」

「殺したいほど憎んでいた相手だ。でも、いざ殺してみると何も感じない。」

「人殺しなんて所詮そんなものだ。」

「あんたは、殺したい相手はいないのかよ」

「いるさ・・・この国だ」

一瞬戸惑った五十嵐は、これまでにないくらいの笑い声を出した。

「馬鹿かあんた。この国相手にして、ただの病院に何ができる。」

「ここをただの病院だと思うなよ」

見下したように言う五十嵐に勝ち誇ったかのように男が言った。

「知ってるよ。病院で唯一、この国に侵害を受ける事のない病院だ。だから、日本で違法とされる治療も行う事が出来る。」

「そう、司法にも行政にも指図されない唯一の病院だ。」

「その病院に一体何ができる？」

「例えば、君の保護が出来る。ここ以外の病院だったら今頃、君はガス室送りだ。」

「助けてもらった事は感謝するが、俺の保護をしてどうなる。何も変わらないだろ」

「それで君に、この国の現状をテレビを使って報告してもらおう。もちろん、君の親しい友達や親類は私達が保護しよう」

「確かにいい考えかもしれないが、・・・断る。俺の仲間はどうなる？ スイッチ一つで死ぬんだぞ」

「・・・だが、必要な犠牲だ。」

「あんた正気か？」

「もちろんだ。私だってこの病院を創り上げるのにいくつもの犠牲を払った。汚い事もたくさんしてきた。この国に妻は殺され、今は息子まで人質に取られてる」

「息子が、どうなってもいいのか？」

「向こうだってそう簡単には、息子を殺さないさ。私には、この国が一気に崩壊するような情報を持っているからな」

「切り札を互いに持っているって事か・・・」

「その通りだ。」

「そう言うのなんて言うか知ってるか？宝の持ち腐れだ。」

「・・・」

「話はそれで終わりか？」

「・・・まあ、いい。気持ちが変わったら教えてくれ」

男は、松葉杖を取り立ち上がった。

「その足も日本にやられたのか？」

「・・・いや、これは息子にやられた。危なく殺される所だった。」

「かなり荒れた息子だな・・・」

「ハハッ、そこだけ聞けば、そうだろうな」

そう言う男は部屋から出て行った。

あれからしばらく日にちが経ち、怪我の具合が良くなる中

「五十嵐君、いま大丈夫？」

そう言いながら突然、洋子が一人女性を連れて入ってきた。

「ねえお母さん、お父さんにそっくりでしょ？」

「ええ確かに雰囲気は、似てるかもしれないわね」

「ほらホストだ、ホスト」

「だから、お父さんはホストじゃないって言ってるでしょ・・・ホストクラブのオーナーです。」

「・・・っあら、ごめんなさいね。洋子、ちょっとジュース買ってきなさい。」

「はい」

二人で盛り上がる会話に戸惑う五十嵐に気づいた母親は、そう言っ

て洋子を部屋から出した。

「洋子を助けていただいて本当にありがとうございます。」
深々とお辞儀をする母親に戸惑う五十嵐。

「いえ、俺こそ彼女を巻き込んでしまつて、本当に申し訳ないです。
・・・それに、あんな風になつちやつて・・・」

俯く五十嵐に母親は首を横に振った。

「ううん、むしろ楽しいわ。あの子、お父さんが死んでから早く大人になろうとして、あんな無邪気な時期は全然なかったもの。」

「でも、ホント・・・申し訳ないです。」

頭をさらに深く下げる五十嵐の顔を母親は、両手ではさみ持ち上げた。

「フベラッ・・・」

「ホント雰囲気だけだと思つたら、性格まで似てるわね。謙虚なのか、心が弱いのか」

「は？はあ・・・」

五十嵐を覗きこむように見る母親は、洋子とそんなに年が離れていないのか若々しく瞳に吸い込まれそうになるくらい大きな目をしていた。

「・・・あら、駄目よ。私みたいなおばさんに顔を赤く染めちゃったりしたら」

「いえ、まだまだ若いですよ。お母さん」

本音だった。実際、化粧もそんなにのせていないのにとっても綺麗だった。

「あつ何それ、口説いてるの？」

「いえ、別に・・・そう言う訳じゃ」

「ほらっ！！熟女キラーだ！！」

扉を豪快に足で開け、両手でジュースを抱えた洋子が入ってきた。

「五十嵐君やっぱり、そっち系だったんだ。でも、駄目だよ。お母さんと結婚したら私の立場はどうなるのよ。私の家で五十嵐君と会った時、私どんな顔すればいいのよ！」

「洋子」

少々不気味な笑顔で、洋子に近づく母親

「何？お母さん」

「私がなに？熟女？誰が熟女だって？」

笑顔のままお母さんは、洋子の頭に見事なアイアンクローをした。

「痛い、痛い、お母さん痛い」

「・・・まあいいわ、後は若い二人で楽しくやりなさい」

母親はそう言い残して、あまりの痛さに頭を抱えしゃがみ込む洋子を残し部屋から出て行った。

「ああゝ痛い・・・」

「大丈夫か？」

「うん・・・大丈夫。それより怪我はもう大丈夫？」

「ああ、意外とよくなってきた」

「さすが、康太のお父さんはすごいね」

「・・・・・・何だって？」

「・・・康太のお父さん」

「・・・誰が？」

「・・・お医者さん」

「どの？」

「え？いつもの」

「あの、井上先生・・・」

看護師が急ぎ、井上にある事を伝えた。

「はあっ？退院？」

看護師にそう伝えられ驚く井上

「あんな体で無理に決まってるだろ。それに彼は、大事な人間だ。何としても止めろ」

そう言いながら自分も五十嵐の所へ向かう。
だが、部屋にはもう五十嵐の姿はなかった。

「どこに行ったんだ？」

「先生　！！正面玄関です。」

井上も急ぎ正面玄関へ向かうが、その時はじめて足が不自由な事に後悔した。

なんと、少々小太りな・・・っあ、嘘。かなり太ってる看護師よりも足が遅い・・・

ホッホッホッホッと走りながら口に出すタルの様な看護師よりも足が遅い。

「治療しようかな・・・この足・・・いや、でもなあ・・・戒めだし・・・」

そう何度も呟きながら、井上は急いだ。

やっとの思いで玄関に着くと何人もの看護師に引き止められる五十嵐の姿があった。

「まだ退院は危険です。戻ってください」

「いや、お金ないんで」

「治療費いらないから、お願い」

「自分、閉所恐怖症なんで」

「広い所に大部屋に移しますから。・・・って言うか、あの部屋狭い？」

「じゃあ自分、暗い所苦手なんです」

「今、明らかに嘘ついたよね？暗い所とか君、ほとんど関係無いじゃん。暗くないからあの部屋めっちゃゴージャスである意味、輝いてるから。」

などとやり取りをする五十嵐に何とか追いついた井上

「何を考えてるんだい？五十嵐君」

「悪いが、俺は行かなくちゃいけない」

「その前に君にはやらなきゃいけない事があるだろ」

「いいのか？ 息子さんが死ぬ事になるぞ」

「だから言っただろ。向こうは、息子をそんなに簡単に殺す事はない」

「息子さんが、俺のチームのリーダーだとしてもか？」

「なんだと？」

驚き井上は固まった。

「それは困るだろ？ だから俺があんたの息子を守ってやるよ。

あんたが、この国相手取って戦うのは、別にかまわねえ。だが、これは俺達の戦いでもあるんだ。どうする？ それでも俺をテレビで報道させたいか？」

息子の命かこの国の崩壊か・客観的な秤に乗せればこの国の崩壊に明らかに傾く。

だが主観ではそうはいかない。

「・・・・・・」

必死に悩む井上

「答えが出せないなら俺は行くぞ」

五十嵐は止める看護師たちを押しつけ病院の外に出た。

「待つんだ。」

病院と外の境界線の手前で五十嵐は、井上に引きとめられた。

「なんだ、止めるつもりなのか？」

松葉杖をつきながら、何も言わずに五十嵐に近づき、茶色いコートを取り出した。

「私のコートだ。季節が急変してその恰好じゃ寒いだろ。いいか、必ず返せ。そして仲間を連れて必ず戻って来い」

五十嵐がコートを羽織ると井上は、白衣のポケットから発信器を取り出した。

「盗聴機能と発信機としての役割以外の機能は、すべて削除した。それに自由に取り外し可能になってる」

「・・・わかった。」

井上は、発信器をコートのポケットに突っ込んだ。

「気をつけろよ」

そう言うのと井上は病院へ戻っていった。

「五十嵐君」

病院から叫びながら洋子が走ってきた。

「どっか行っちゃうの？」

「大丈夫だ。すぐ戻ってくる」

「すぐってどのくらい？お父さんもそう言って死んじゃったんだから・・・」

俯きながら涙を流す洋子の頭に五十嵐は手を乗せる

「大丈夫だ。何とかなる」

「・・・お父さんもそう言ってた」

不貞腐れながら洋子はそう言った。

「どんだけお前の言うお父さんは俺に似てるんだよ・・・だがその気持ちちは、心の中にしまいこんだ。」

「なら、賭けだ。俺がすぐに帰ってこなかったら、好きなだけお前の奴隷になってやる」

「本当？や、約束だからね。帰ってくるんでしょ？」

「ああ、約束だ」

手を大きく振る洋子に見送られながら、五十嵐は一度も振り向かずに病院の境界線をまたいだ。

そしてしばらく歩いたところで、五十嵐はコートのポケットから発信器を取り出し左手首の端末にカチリとはめ込んだ。

第二十六話 戦争が始まる

「どういう事だ。悠二」

五十嵐の構える銃は、両手を上げる悠二の頭をしっかりと捕えていた。

「そりゃこっちのセリフだ。なんで意識を失わない？お陰さまで計画が台無しだ」

「計画？」

「俺が、お前達から雲隠れする計画だ」

ゆっくりと振り向きながら悠二が言った

「一体、何のためにだ。その計画は、お前が俺達のチームに入ってから決まっていた事なのか？」

「それは違う　！！・・・これ以上、お前達と一緒にいたら俺はお前達を殺しかねん。だからだ」

「俺達を殺すだと？」

「五十嵐・・・お前に俺の気持ちがわかるか？俺はすでにゲームと現実の区別がつかなくなってきたんだ。

日常的に銃を持ち歩く中、歩いてる人に銃を撃つてみたいと思う気持ちを押え込むのが、どんなに大変な事かわかるか？その気を紛らすために反逆者の清掃に志願して、みんなに嫌な目で見られて・・・遂にはこいつ等を殺したいと言う感情まで芽生えてきた。

それを岸边に煽られて・・・正直に言おう。裕大が岸边を殺そうとした時、口では止めようとしてたが、心の底から『引き金を引け！』と思っていた。

だから、俺はお前達から離れる事にした。離れるのは、お前たちの方だな」

「俺達をどこへ運ぶつもりだ？」

「一応、日本だ。日本ではないがな」

その時、運転手が扉を開け五十嵐に襲いかかってきた。

五十嵐は瞬時に反応し、運転手を机に抑え込み手に持つてる注射器を奪い取り運転手の首に突き刺した。

「あっ・・・か・・・」

五十嵐は注射器の中にある液体をそのまま運転手の首から注入した。運転手は、がくがくと痙攣しだし意識はあるらしいが体は全く動かなくなった。

「神経剤か・・・」

五十嵐は再び銃を悠二に向け、悠二もその隙に銃を抜き五十嵐に銃口を向ける。

「体は、鈍ってないみたいだな」

「生きる理由も見つけたし、体が、覚えてる」

にらみ合いが続く中、また扉が開き、今度は岸边が入ってきた。

「はい、そこまで終了。五十嵐君、駄目だよ。ルール違反じゃないか。」

「お前等だって、こんな事が起こるとは教えてくれなかったじゃないか。そもそも、このゲームにルールなんてあったか？」

悠二から目を離さずに五十嵐はそう言う。

「まあ、それもそうだけどさ。でもみんなが倒れてるんだから君も倒れようよ」

「倒れてただろ。復活したんだ。・・・悠二、どうしてこんな事した？」

悠二が答える前に岸边が口を開いた。

「五十嵐君、昔の戦時中ある実験が行われていたのを知ってるかい？対象者は一般市民だ。白衣を着た人は『この実験は絶対に安全だ』

そう言って、あるスイッチを押し続けさせる。

だが、隣の部屋からは一緒に実験室に入った人の悲鳴が聞こえてくる。もちろん大体の人はスイッチから手を離す。向こうからは荒い息遣いと痛みに苦しむ悲鳴が聞こえてくる。もうスイッチは押したくないと言うだろう。でも白衣の奴は『安全だから続けてください』そう言う。

スイッチを恐る恐る押す。するとまた悲鳴が上がる。思わずスイッチから手を離す。それを何度も来るかえすと遂には、向こうからは悲鳴も何も聞こえなくなった。スイッチを押した人は、死んだんじゃないか？　そう思う。

白衣の奴は、それでもスイッチを押すように言う。そこから実験の概要だ。『安全』と言う言葉と白衣Ⅱ医者、学者という先入観。それでもそいつはスイッチを押すのか？　それとも独自の判断でスイッチを押さないのか？

結果は一体どうだったか。8割以上の人がスイッチを押したんだ。それと同じだ。僕が悠二君にこうするように命令したんだ。」

「岸边、俺は悠二に聞いてるんだ」

長々と説明をしたのにそんな一言で一刀両断され大げさにショックだとあらわす岸边

「・・・俺もその実験を知っていた。俺はその実験結果に従っただけだ。」

「そうか・・・なぜ残りの2割以下を選ばなかった。」

「そりゃ日本人ですから、日本人の特徴を・・・」

「黙ってろ、岸边」

「・・・ショック!!」

黙りこくる悠二に五十嵐は深くため息をついた。

「もういい、俺も一緒に連れてけ」

そう言うのと五十嵐は悠二に向けていた銃をおろし、自ら手かせを着けた。

「いいのかい、五十嵐君？　君だけ助けてやる事だって出来るんだよ」

「俺は、こいつとは違う。俺なら残りの2割以下を取る」

銃を下ろしその場に立ち尽くす悠二を見ながらそう言う

「・・・そうかい。それならそれでいい。また俺にはたくさんの金が入る」

そう言って岸边は部屋から出て行った。

「こいつ等を運ぶの手伝ってくれ」

悠二は倒れる康太達に手かせ足かせをつけ終わり、手かせをつけたまま立っていた五十嵐にそう言った。

「ああ、わかった」

五十嵐は裕大を持ち上げ、悠二は康太と勉を外に止まっているトラックまで運んだ。

「乗れ」

悠二は康太達を乗せ終わると五十嵐にそう言った。そしてそれに素直に五十嵐は従った。

「俺を・・・」

「なんだ」

「俺を恨んでくれて構わない。それに多分もう二度と会う事はないからな」

「別に恨まねえよ。お前にとってこれが最善策だったんだろ。」

「駄目だ。恨め！！そうじゃないと俺はやっていけない」

「だからだ。ぜってえ恨まねえし、康太達にもお前がしたことは何も教えない」

トラックが動き出し、ニタリと笑う五十嵐の顔が悠二の眼に焼きついた。

「クソッ・・・」

地面が不規則に揺れている事に気づき、康太は目を覚ました。

「よお、気付いたか？」

目の前には手かせをし、すでに戦闘服を着た五十嵐が腰を下ろし座っていた。

「・・・んあ？なんだこりゃ」

そして自分にも手かせがされている事と服が着けられている事に気

づいた。

「やられたよ。俺達、ガンズショップにどうやら拉致られたらしい」
周りを見ると天井と壁は布で覆われていて、勉と裕大が倒れている事に気づいた。

「おい、勉っ裕大!! 大丈夫か?」

その時、またしても床が縦に大きくジャンプした。

「うおっ、なんだ?」

「俺達、今どこかに運ばれてるんだ」

「運ばれてる? どこに?」

そして、ようやくここはトラックの中だと理解した。

「一応、日本らしい」

「一応?」

「意味はわからん。ただ、ここは北海道でない事は確かだ」

五十嵐は壁の布を少し持ち上げた。何があるのか気になり外を見るとあたり一面、砂漠が広がっていた。

日本でも広がる砂漠化現象は、南から徐々に広がりを見せていると聞いていたが、ここまでだとは思ってもいなかった。

「なんだ! これ・・・」

そして俺達を乗せたトラックは、砂漠のど真ん中を走っていた。

「おい、俺達をどこに連れて行く気だ」

康太は運転席の方の壁をバンバンと叩く

「よせ、運転手はいない。全自動の車だ」

康太は壁の布をどかし、運転席の方を覗いてみるとハンドルなどが勝手に動いてるだけで本当に誰も乗っていないかった。

「あれ・・・悠二は?」

「わからん、俺も気づいた時にはいなかった。」

「・・・お前って嘘つくの下手くそだな」

「はあっ? どこが嘘だ」

「いや、何となく違和感が・・・違うならいいんだ。悪いな」

「そうか・・・」

五十嵐は、表情を崩さないようにしていたが内心、心臓がバクバクしていた。

「そういや、今回の対戦場所が道外だとか言っただけ？それが原因かな」

トラックに揺られながら康太は、この状況を考えようとしていた。

「いや、それはない。場所は青森のはずだ。そこはまだ砂漠には浸食されていないはずだ。」

本当ならパニくるのが普通だろうが、なぜが落ち着いていた。

「なんでこんな状況なのに落ち着いてられるのかな？」

「さあな・・・みんないるからじゃないのか？」

確かに、気を失ってはいるものの、みんながいる事で結構安心する。

「そろそろ、こいつ等起こすか・・・」

「いや、いいだろ。まだトラックが止まる気配もないしな」

「おいお前等、起きろー」

五十嵐がそう言う中、康太は全くの聞く耳持たずで二人を起こしていた。

そして、二人もこの状況を見て啞然としていた。

裕大は腕にしたパソコンをとおうと袖をまくるが、パソコンがなくなっている事に気づく。

携帯パソコンの他にも、携帯電話やとにかく通信手段に使えるものは全員無くなっていた。

「どうするよ・・・」

「いや、どうするもなにも・・・このトラックが止まるまでどうにもできないべ」

「それにしても暑いな・・・温暖化ってこんなに酷かったんだ。東京って凄いな。この前、50度越えたんだっけ？」

「確かそうだな。熱中症で倒れる人とか、バカだなくとも思ってた

けど。こりゃ倒れてもおかしくないな」

「でも、北海道と比べると倒れる人の数がこっち側の人って半端ねーべ。桁がまず違うからな」

「つーか、一応これって季節は秋って言うか冬になりかけてるよな？この前、町にも雪降ったし」

なんて少々観光気分浸っている中、五十嵐が口を開いた。

「砂漠地帯は気温の寒暖差が激しいんだ。日が落ちれば一気に気温が下がる」

日が落ちたとたん・・・いや、落ちはじめる前から気温は下がっていくのが肌を通して感じていた。

だが、日が落ちたとたん気温の下がり具合は一気にスピードを上げた。

「うおおおおお、なまらさみい」

「これが凍^こ凍^この真^まの恐^{おそ}ろしさか」

「いや、康太・・・ここが東京と決まった訳じゃないから。って言うか東京ではないべ。

東京には人がまだいる。砂漠化がこんなに深刻なのは、長崎とかそっちら辺じゃなかった？」

「ああ、あそこら辺ってもう人なくなっちゃったんだっけ？」

「確か・・・使えないからって、国があそこら辺の土地、買い取ったんだよ」

その言葉で全員が凍りつく・・・

「確か、3年前だよな・・・じゃあその頃からリアルウォーは・・・」

「まさか・・・無い無い。」

「いや、そうでもないみたいだ。」

外に顔を出す裕大が、そう言った。

「外見てみる・・・あれ、原爆ドームだよ」

全員が外に顔を出し、裕大が言う方向を見る。するとそこには、砂漠の中心にポツンと立つ少々穴があき崩れているが、原爆ドームと

わかる建物があった。

砂漠化が原因で崩れたとされる原爆ドーム。崩れた時は大問題になった。

平和の象徴が崩れたただの色々と騒がしくもあった。そんな事があって、他の重要な建物が次々と引っ越しをするようになった。

たとえば京都の清水寺は秋田に金閣、銀閣は二つ揃って岩手が購入した。

その他にも重要文化財と言われる物はすべて東北地方に移動になった。

もちろん原爆ドームもレプリカだが、北海道に建てられた。

「まさか、平和の象徴付近でドンパチするって事はないよな」

「それはさすがに・・・モラルってあるだろ。普通」

だが、そんな考えはすぐに打ち砕かれた。トラックが止まったのだ。

「日本もこんなところで、落ちちまったのかよ・・・」

バキンと言う音とともに手かせが外れ、壁の布が一気に剥がれおちた。

周りにはやはり砂漠だけで、一つ違ったのは同じ色の戦闘服を着た男が立っていた事だ。

「降りろ」

男は俺達にそう指示し、武器を持たない俺達はそれに従った。

トラックの横に並ばされ「名前は？」と聞かれた

「井上康太です」「鈴木 勉です」「佐伯裕大です」

そして、五十嵐は？ちよっと心が揺れたが

「五十嵐です」

五十嵐以外の全員が心の中でため息をついた。

「俺の名前は長谷川だ。みんなからはハセと呼ばれている。ついて来い」

歩くスピードがやけに早く。ただひたすらついて行った。

「お前等、よく砂漠の上を簡単に歩くな」

ハセは、振り向きながらそう言った。

「はっ？」

「ここに新しく来るやつは、いつも砂漠に足を取られてついて来れないんだ。

ついて来れなかったら一度、喝を見舞いしてやろうと思ってたのによ。

必死に放そうとしてもついてくるし・・・全部丸つぶれだよ」

「いや、こう言うフィールドは店にありましたから。慣れてます」

「砂漠のフィールドがある店か、よっぽどでかいんだな。どこの店だ？」

「北海道です」

「北海道？お前等、北海道から来たのか？」

「はい」

「そうか俺は新潟だ。北海道から来たのは、お前等が多分初めてだ」
「多分？」

「俺も二週間前にここに来た。」

「あの・・・ここはなんなんですか？あなたもプレイヤーですよ」

「説明は後だ。とにかくついて来い」

ハセは、先ほどの早いスピードではなくゆっくりとしたスピードで歩いた。

原爆ドームが段々と近づいてきた。そして、そこら辺では建物に明かりが灯り人の声が聞こえてきた。

人影も見え始め周りは全員、着こなし方は人それぞれだが、同じ戦闘服を着た人が何人もいた。

「おい、康太。全員プレイヤーだ」

「ああ・・・まさか全員で殺しあいをするって事は・・・ないよな」

「まさか俺達、武器ないんだぞ。奪えとでも言うのか？」

進みながらそう話す康太と勉だがそこに裕大も加わった。

「おい、あそこ見てみる」

明かりが灯る中、一つだけ明かりの輪から外れた明かりがあり、そこに一人近づいて行く人がいた。

「おい、本当にこのゲームから解放される方法を知ってるんだろかな？」

火が焚いてある場所には二人のいかつい男が座っていた。

「ああ、知ってるよ」

声も低く凶太く目はまるで鷹のようにつり上がっていた。

「ほ、本当か・・・？教えてくれ」

「おう、耳を貸せ」

「ああわかった」

男が耳を近づけた瞬間、座っていたおっさんは男を殴り倒した。

康太達にはそこで交わされる会話が全く聞こえない。ただ、男が突然殴られた事しか分からなかった。「何やってるんだよ。あれ！！」
康太の声にハセが気付いた。

「いって・・・何をするんだ」

仰向けに倒れた男はおっさんに抑えつけられ身動き一つ取れなかった。

「ゲームから解放される方法が知りたいんだろ？それを教えてやるんだよ」

もう一人の男が立ち上がり砂漠の中から一本の斧を取り出し男に近づいてき、ゆっくりと斧を持ち上げた。

「おいおい、頼むからマジでやめてくれよ」康太がどんなに懇願してもそれが叶う事はなかった。

斧は男の左腕めがけ振り下ろされた。男の悲鳴がここまで届いた。

下で男がもがき苦しむ中、おっさんは腕をロープで巻き付け止血を施した。

「いいか？あとは誰にもバレないようにあの方角へまっすぐ進むんだ」

おっさんが下でもがく男にそう言った。

男は痛みを我慢しながら、おっさんが言った方向へゆっくりと歩いて行った。

すばらくするとおっさんは、フラフラと歩く男に向けて発砲した。

ドサリと倒れる男、それを見て大爆笑するおっさん二人

「ダッハハハハッ！！バツカでえあいつ誰にもバレないようにって言ったのに俺達にバレてやがんの」

よくわからない状況で突然こんな事が起こり立ち尽くす康太達。

だが、ハセがおっさん二人の方にドンドンと近づいて行った。

「なんだ？あいつが死んだ事に文句でもあんの？」

まだ、笑いが収まらない二人

「・・・いや、別に」

「そうか、なら俺達に近づいてきてんじゃねーぶっ殺すぞ」

またしても爆笑する二人。だがそんな二人をハセは銃を取り出し素早く殺した。

「別にお前等も自分が死んだ事に文句はねーだろ」

そう言って横たわる死体の一つに持っていた銃を投げつけた。

「悪かったな、いきなり変な事になっちまって・・・」

建物の中に入り、煙草に火をつけながらハセがそう言った。

「ここは一体何なんですか？」

「武器は向こうのかいテントの中にある。好きな奴を選べ。後は

もう遅いから。早く寝ろ。長旅で疲れたろ？」

ハセはそう言々と建物から出て行こうとした。

「待ってください。ここはなんなんですか？これから何が起こるんですか？」

康太の問いにハセは立ち止った。

「ここは戦場でこれから戦争が始まる」

第二十七話 戦争が始まった

「狙撃手はそれぞれ好きな持ち場につけ。あとは自分の身を隠す建物が壊れない事を祈りな。」

それ以外の歩兵は各班に分かれる。どんだけ固まっていようが構わんが、一人には絶対なるな」

ハセは全体の指揮をとり、みんなはそれに従った。

「うわっ、たった2週間前に来たとか言ってたよな？ スッゲーみんな従ってるよ」

康太がそんな事を呟く中、隣の人が話しかけてきた。

「お前、知らないのか？ あいつが一番の古株なんだ。どちらかと言うと2週間も生き残ってるって言った方がいいね」

「えっ・・・マジっすか？ ハセさんの仲間は？」

「ああ、俺とあと一人生き残ってるな・・・狙撃手だ」

砂袋で作られた壁に身を隠しながらそんな事を言われた。

「ああああ、ヤになってきた・・・」

「ここに連れてこられたのが運のつきだ。」

狙撃手の五十嵐はともかく、勉も裕大も別の班に移動させられ康太達はバラバラにされてしまった。

「昨日はちゃんと眠れたか？」

「眠れるわけじゃないですか・・・あんな事聞かされて」

あんな事とは、ここでやる事についてだった。

《俺たちはここを死守する。それだけだ》

「一体どこを？ もしくは誰を守ればいいんですか？」

「とにかく来る奴を倒して、生き残ればいいんだ」

「くそ、なんでこっちには重火器がないんだよ・・・」

「こっちは数で勝負なんだよ。だから毎回毎回、人がたくさん死ぬ。そして、たくさん補充される」

康太は、そんな事を聞かされながら素早く自分の胸を二回叩き叩い

た拳を前に突き出した。

「おいおい、なんだそれ？なんかの宗教か？」

「違います。俺達の決まり動作です。まあゲン担ぎ的な奴です」

「まあ別にいいだろう。宗教家なんて、そこら中いくらでもいる」
あたりを見渡すと確かに見た事のあるような神への祈りをしている人はたくさんいた。

「自分^{あなた}はやらないんですか？」

「俺は無宗教なの」

康太が問うとそう返ってきた。

「さあ、御出でなすったよ。今回はどこの国の機械だ？」

住宅街の遠くで金物と金物がこすれあう低い音が何度も聞こえてきた。

「なんだよ・・・足音みたい音しやがって・・・」

康太はそう言いながら自分の足を何回も叩いていた事に気づいた。

「足付きか・・・なら北アメリカの方かな・・・？」

「え？」

康太の疑問に答えようとした瞬間、すぐ隣の建物が爆撃された。ものすごい衝撃で康太は耳と頭を抑えその場にしゃがみこんだ。

それほど爆発はしなかったものの上から、建物に隠れていた人と瓦礫が康太達を襲いかかってきた。

「おう・・・ヤバい、ヤバい、ヤバいヤバいヤバい！！おい何やってる逃げるぞ」

康太は、さっきまで話していた人に掴み立たされ反対側の建物に逃げ込んだ。

「す、すみません・・・助かりました」

「・・・ったく頼むよ。クッソ俺もお人好しだな」

「康太、大丈夫か？」

そう言いながら建物の奥から勉が出てきた。

「ああ、マジで死ぬかと思った」

「死ぬかと思う前にまずは逃げろ。その後に死ね」

「はい、すみません・・・」

建物の中から外を窺うと何やら八本足の蜘蛛のような・・・それでも敵つくて角角していて、でかい機械が住宅街に入ってきた。

「なんだあれ・・・？」

康太と勉は今まで見た事ない物を目にし固まる。

『おい、今からそいつの情報を探す。歩兵部隊はとにかくそいつを足止めしとけ ！！』

誰かの声が無線を通して入ってくる。

「くそっ・・・そう言うのは裕大とか面白そうにやるだろうけどな・・・」

「何？お前の仲間にそう言う奴がいるのか？」

康太は自分の銃を構えながらそう呟くと、またさっきの奴が、康太の声を拾った。

「ええ、いますけど一人・・・」

「それを早く言えよ・・・そいつの名前は？」

「裕大です。佐伯裕大」

男は無線を取りスイッチを入れた。

「おい、裕大って奴。無線に応答しろ」

『はい、俺です』

「今から中央にあるテントに向かえ！！そこにパソコンがある。それ使って今いる機械の情報をハッキングでもなんでもして急いで探せ！！」

『わかりました』

「誰か同行しろよ。重役の護衛だ」

男はそう言うが無線を切った。

そんな内にも機械はどんどんと住宅街へ入っていく。

その瞬間、機械の足元で爆発が起きた。一本の足がバランスを崩し残り七本で踏ん張る。

『今だ。撃ちまくれ!!』

無線でハセの声が聞こえた途端、隠れていた俺達は一斉に射撃を開始した。

撃ったはいいものの、弾ははじく音しか聞こえず。傷が付いているのかも微妙だ。

「これ撃ってる意味あるんですか？」

弾を補充しながら康太は聞いた。

「一か所だけを撃っても意味がない。関節部分を狙え」

「そうか!!」

康太は補充したばかりの弾を抜き、違う弾を詰め込んだ。

「俺の周りにいる人。離れててください」

「一体何を?・・・いいっ!!おい全員離れろ!!鼓膜が破裂するぞ」

康太の持つ銃を見て少々引きつった声を出しながら全員離れた。その瞬間、康太は引き金を引いた。

ものすごい煙と爆音が建物中に鳴り響き、機械の足が一本爆発し壊れた。

「よしっ!!」

康太はガッツポーズを決めながらそう言った。

『よくやった。新入り』

ハセの声が頭の中に入ってくる。

「おい、耳は大丈夫か？」

男が康太に声をかけてくる。

「え?なんですって!!」

「耳は大丈夫なのか？」

「すみません。聞こえませんか!!もっと大きい声で言ってください」

「みみは!!大丈夫なのか!!」

男は耳をさしながら体で表現し、康太はある事に気づき頷き、耳栓

を外した。

「すみません、耳栓外すの忘れてました」

耳栓を外すと周りからは銃声が響き渡る。

機械の足は康太が一本壊したものの、残りの七本を巧みに使いまだ住宅街を歩きまわっていた。

「くそっ・・・情報はまだか・・・」

『おい、みんな聞け。こいつ生命反応がない。中に人が乗ってないんだ』

誰かの声がまた無線から聞こえてくる

『なら、話は早い。電磁パルスを開け。あいつの足を止めてやる』

『駄目です。電磁パルスを開くと危険です』

今度は裕大の声が入ってきた。

『確かに電磁パルスを開けば、操縦者の無線は途絶えます。けど操縦者からの無線が途絶えたら、あいつの体中にある重火器が一斉に発射されます。多分こいつの狙いはそうだったんです。住宅街の真ん中で無線が途絶えれば俺達にも被害が出てしまいます。』

『おい・・・じゃあそいつにも何か弱点があるだろ？何か無いのか？』

『あいつ足の関節上の関係で腹の装甲が薄いんです。そこに衝撃を与えれば、多分壊れます。でも横からとかは絶対に当たらない構造になってて下に潜り込まないとそこは攻撃できません』

『よし、それがわかれば行くぞ！！援護射撃よろしく』

そう言うとなんか蜘蛛に向かって突進しだした。

だが、蜘蛛がそれに気づきそいつ等に射撃を始めた。何人かはその場に倒れ、壁を盾に逃げ込んだ人も蜘蛛から放たれた弾が壁を貫通しその人を貫いた。

『おい、電磁パルスを開け』

『危険です。どこに撃つかわからないんですよ』

『標準合わせられる方がよっぽどヤバイ。電磁パルスを開いて銃弾が飛び交う中、あいつの懐の中に入る』

裕大と誰かの討論が続く

「そんな・無茶だろ」

「こないつ崩れてもおかしくない建物であんな銃弾ぶちかますお前も無茶だったとは思うけどな」

「ここって崩れやすいんですか？」

「それを知らなかったのか・・・」

そんな事をため息交じりで話す。裕大と誰かの討論は裕大が結局負けた。

『よし、開け！！』

その瞬間、体内無線には妨害電波で嫌な音が響きわたる

「あぁっ！！くそ」

康太は急いで体内無線をオフにする

蜘蛛は動きを止め、辺り構わず装備している銃を撃ち始めた。

建物の中にも弾が飛んでくる。辺り構わず飛びまくる弾は人や建物を崩し倒し始めた。

こんな中、だれが蜘蛛に近づくんだよ・・・そう思いながら外を窺うと勇敢な3人が、蜘蛛に向かって走り出した。

残り20mの所で一人が弾に当たって倒れた。・・・また一人倒れた。

「うをおおおおー！！！」

残り一人は叫び声を上げながら蜘蛛の懷に潜り込む事に成功し、下から銃弾を撃ち込み蜘蛛の動きは停止した。

そして恐怖に立ち向かう叫び声は次第に笑い声に変わった。

「はっははははは、やったぞー！！！」

男のその一声で俺達は、一斉に雄叫びをあげた。

だが、その場でガッツポーズをとる男は突然爆発した。

その爆発によって上で機能停止していた蜘蛛も一緒に爆発し破片が周りに吐き出された。

吐き出された破片は、たくさんの建物を崩したり、仲間当たるな

どかなりの被害を受けた。

蜘蛛の破片は、康太の横にいた人の首を吹き飛ばし、その奥にいた人の胸に突き刺さしたまま壁に刺さった。

「あっ・・・ああ・・・」

胸に破片が刺さった人は、まるで壁に画鋏で紙を止めるかのように壁にぶら下がっていた。

両手で破片を外そうとするが、破片はピクリとも動かず抜ける気配がない。

康太の横では、頭がなくなった体がある場で立ち尽くし、大量に血しぶきをあげ、康太に降り注いだ。突然の出来事に動けなくなる康太。

そこへさっきまで優しくしてくれた男が頭がなく立ち尽くす死体を蹴飛ばし、破片を抜こうとする男の頭に銃弾を撃ち込んだ。

「おい、大丈夫か!？」

体を真っ赤に染めた康太を抱きよせ落ち着かせるよう促した。

康太は恐怖で口がガタガタと震え、目からは涙が出てきた。

「誰か、こいつを奥へ連れてけ。戦線離脱だ。・・・よく頑張ったな餓鬼」

康太は二人に両肩を背負われ奥へと連れてかれた。

テントの中でパソコンをいじる裕大の後ろを二人に背負われた康太が入ってくるのに裕大が気付いた。

「康太・・・?」

血まみれの康太を見て裕大は、ショックを受けた。

「嘘だろ・・・康太!！」

「大丈夫だ、こいつの血じゃない。しばらくしたら落ち着くだろう。しばらく寝かせてやれ」

二人はそう言うのとテントから出て行った。

機能が停止した蜘蛛が爆発した理由は、しばらくしてわかった。

蜘蛛がまた二台こちらに向かってやって来るのが見えた。おそらくあいつ等が砲撃したんだろう。

「どうなってる？電磁パルスで動けないはずだ」

「電磁パルス切ったんじゃないですか？」

勉と知らない男がそんな話を話す。

「いや、パルスは切れてない。無線が通じてないからな」

「それじゃ、一体何で？」

「とにかく、あの蜘蛛倒すしかないだろ。クソー俺達、骨折りだよな。こっちは被害があるってーのに向こうは機械が壊れて終わりだからな」

「・・・それだ!!」

勉はある事に気づき、ある生命反応を示す機械を蜘蛛に向けた。すると、ぱっちり反応した。

「やっぱり、中に人がいる。中であの蜘蛛を操ってるんだ。みんなに教えないと・・・」

「駄目だ。パルスをどうにかしないと連絡がつかない」

勉が隠れる二階建の建物からあたりを見渡すと、遠くの建物に五十嵐がいる事に気づいた。

勉は手鏡を反射させ五十嵐に気づかせた。五十嵐の方からも手鏡が光るのが見えた。勉は手信号で五十嵐にある要件を伝える。

五十嵐はスコップで勉の伝えたい事を読み取り、親指を立て『了解』と示した。

今にも崩れそうな建物から身を乗り出し五十嵐は銃を構え、電磁パルスを発生させる機械を破壊した。

『おい、誰だ!!パルス破壊したのは!』

「てめえこそ、いつまでパルス張ってるつもりだ!!あの機械には中に人がいる。パルスはもう意味はねえ」

男が無線を使いそう叫ぶ。

『中に人がいるだ？・・・なら、話は簡単だ。おい誰かポイントBまで連れて来い。』

俺が炙り出してやるよ』

また新しい人がまた無線で指示する。

「じゃあ、俺行きます」

勉がそう言った瞬間、五十嵐がいた建物が崩れる所が見えた。

「なっ・・・五十嵐・・・クソッ」

勉は二階から飛び出し機械の前に出た。

「ほらっこっちだ」

蜘蛛は一步一步こっちに近づいてきた。

ポイントBまであともう少しだ。道も真っ平らになり走りやすくな
った。

『駄目だ。勉！！その道は通ったら駄目だ』

裕大から無線が入る

「いや、こっちの方が近道だ」

『違う、そうじゃないその機械は足が速いんだ！！』

「え？」

後ろを振り向くとさっきまでカニ歩きの事をしていた機械の足だが、先端部分からローラーが出てきて、勉に向かって急発進した。

「ヤベっ・・・」

周りからは勉を助けようと撃ちまくるが弾ははじけるだけで意味が
なかった。

そして遂に蜘蛛が、勉を銃口で捕らえた。

その瞬間、蜘蛛が横から大きな衝撃を受けバランスを崩した。

蜘蛛から発射された銃弾は勉の横で大量にはじけた。

『大丈夫か？勉』

無線から聞こえたのは五十嵐の声だった。

「・・・五十嵐！！生きてたのか？」

『俺は常に移動してるんだ。いいから早く逃げろ。蜘蛛みたいな奴
がバランスを持ち直しちまうぞ』

五十嵐の指示で勉は建物の中にもぐりこんだ。

蜘蛛はまたそこら辺を歩きだす中、蜘蛛の足元から突然、地面が崩れ炎が噴き出し始めた。

『ポイントB地点、到達。よくやった餓鬼』

身動きが取れない蜘蛛から人が二人熱さに耐えきれず飛び出してきた。

そこを、見逃すまいと一斉射撃をした。

『さあ、残り一台だ。倒しに行くぞ』

ハセの声が無線に響く

第二十八話　ここでの生き方

『全員耳塞いでろ!!』

バキヨンと言う銃声とともに蜘蛛にゴムのような質量感のある物が張り付き、耳を塞いでてもわかるような轟音と衝撃が体を貫いた。

蜘蛛は活動を停止し、俺達は蜘蛛に慎重に近づいた。すると、蜘蛛の蓋がとれ両手を上げる人が出てきた。

「お願いだ!! 撃たないでくれ」

両手を上げる人の顔は目、鼻、耳のすべてから血を流していた。

その状況はさっきの武器の威力を物語っているようだった。

「頼む殺さないでくれ、もう何も見えないし何も聞こえない。中にもう一人いるんだ。助けてくれ」

投降する二人を蜘蛛から下ろした。

両手をあげ、両膝をつきながら一人は見えない目でキョロキョロし周りにずっと命乞いをしていた。

「頼む・・・殺さないでくれ・・・」

もう一人は、ただ深く深呼吸をするだけで何も喋らなかった。

覚悟を決めているのか、身動きひとつ取らない。

一人の男が何も言わずに命乞いをする奴の頭に後ろから銃弾を撃ち込んだ。

「おい!!」

思わず声に出す勉。

横で命乞いをする人が倒れるのを感じ取ったのか、何も喋らなかった奴は突然、どこかの国の言葉を呟きだした。どこかはわからないが、『お父さん、お母さん・・・』と繰り返しているのは感じ取れた。

「避難民か・・・残念だ」

そう言う男はまた引き金を引いた。

「おい　!!　何やってんだよ。命乞いしてたじゃねーか、そんな奴

まで殺すのかよ！」

勉の意見に引き金を引いた男が答えた。

「・・・なら聞くが、こいつ等がしたことは許せる行為か？この機械に乗って俺達の仲間を何人殺した？俺達が殺したのはたったの4人だ。たった4人に俺達の仲間は一体何人殺された　！！

・・・いいか、ここで生きてくつてのはこう言う事だ。」

男が立ち去るとバラバラとバラけて行った。

「おい、新入り。あいつも1週間前に来たんだ。あいつもここに来た時はお前みたく言っていた。けど俺があいつに『ここで生きていくつてのはそう言う事だ』って言ってやった。

納得できないかもしれないが、お前もいつかはわかるよ」

ハセが勉の肩を軽く叩きながらそう言い離れて行った。

「さあ、飲むぞ！！」

「ウイーーーー！！」

ハセの一声で全員のジョッキが高だかく上がった。

「勝利の雄叫びを上げるぞ！！」

「ウイーーーー！！」

「死んでいった仲間に！！」

「ウイーーーー！！」

「乾杯！！」

「カンパイーーーー！！」

そんな状況に戸惑う康太達。

「どうした。坊主ども飲めや！！」

日が沈み始め気温が下がり始める中、ここは異様な熱気に包まれていた。

「今回は坊主どもの大活躍だったからな！！」

「俺知ってるよ。あいつ等、最年少の優勝候補とか岸边の間で噂されてたもんな」

康太達はただ愛想笑いをして過ごす事しかできなかった。ただ唯一、五十嵐だけはその輪に入り酒を飲んでいた。

「どうした？お前等、テンション低いぞ」

ハセともう一人ハセの仲間が康太達に近づいてきた。

「ハセさん、どうしてこんな事が出来るんですか!？」

康太の質問に盛り上がっていたその場が一気に静まり返る

「皆さんもどうして？そんな喜び方ができるんですか？たくさん人が死んだんですよ。」

ハセさん!! あなただって仲間の一人が死んだんじゃないんですか？」

「ああ、そうだよ・・・」

「それなのにどうして・・・仲間が死んで悔しくないんですか？」

「悔しいさ・・・それを忘れるために俺達は酒を飲むんだ。」

それが先に死んでいった仲間に出来る唯一の救いだ。そしてその救いは俺達をも救ってくれる!! さあ、みんな氣を取り直して思いっきり飲もう!!」

「ウェイイイー!!」

静まり返った場が一気にさっき見たく戻った。

「なんでなんだよ・・・」

納得がいかない康太に今度は五十嵐がやってきた。

「康太、俺達も龍之介や大次を失った時、どうやって立ち直ってきた？」

「・・・しらねえ、知らないうちに落ち込んだ気持ちなんてなくなってた」

「忘れちゃっただろ？悔しさや悲しさなんてさ・・・」

「けど、こんな早く立ち直った事なんてねえよ」

「それはこの前までなら、次の試合まで長い期間があったからだ。」

けど、明日にはまた同じ事が待ってる。なら早く悔しさや悲しさなんて忘れちゃった方が楽だろ？・・・ここで生きるってのはそう言う事だ」

指を康太に差しながら五十嵐はそう言った。

「チッ、わかったよ。」

康太は五十嵐のジョッキと自分のジョッキを持った。

「井上康太！！飲みます！！」

二つのジョッキを高だかく上げ一気に自分の口に流し込んだ。

初めて飲んだ（嘘）ビールの味は口の中に苦さと渋さが残った・・・

「よー！ーし！！よくやった坊主」

周りからは歓声が上がリ調子に乗ってそれを繰り返し康太はバタンと倒れた。

「ぬあああ！！坊主っ大丈夫か？」

本気で心配する奴もいれば大爆笑する奴もいた。

そして、ここでの生き方を学び、ここでの生き方を教えてくれた、ハセさんは次の日の爆撃で死んだ。

人は簡単に死んでしまう・・・

一本の長い廊下に何枚もある扉の一枚からガンズショップの店員の服を血で染めた悠二が現れた。

服に染みついた血を眺めながら深くため息をついた。

「・・・何か、違うな・・・」

そう首をかしげながら廊下を歩きだした。

悠二の出てきた扉の奥には、全身から血を流した死体がごろりと転がっていた。

新しい制服に着替え岸辺の所に向かった。

「岸辺、何の用だよ」

「君も岸边だろ？ちゃんと番号で呼んでください」

「いいだろ、別にこの店に今俺とお前しかいないんだから」

「まあ、それもそうだね。それより取り調べ中の反逆者はどうなった？」

「何も喋る前に死んだ。あいつ本当に何も知らなかったみたいだな」

「えーちよっと、また殺しちゃったの？これで何回目さー」

「俺はこんな事がしたかったんじゃない。俺は生きてるって言う証拠が欲しかったんだ。拷問がしたかった訳じゃねー」

ただ拷問は上がる悲鳴を聞き、「死にたくない」と命乞いする人を見ると生きている実感に近い物が感じ取れた。

「でも、結構楽しそうにやってるじゃない」

「・・・お前、次言ったら殺すぞ」

今までの悠二なら何も怖い物は感じられなかったが、今の悠二には殺意が体中からあふれ出ていた。今の悠二なら本当に殺しかねない・・・思わず岸边の顔も引きつった。

「まあいいや。それより、僕と悠二君徴収がかかってる。これから東京に行くよ」

「ああ、わかった」

部屋で荷物を準備する中、タンスの中からリストバンドが落ちてきた。

今の悠二の左腕には発信器はついていなかった。

仲間の売り飛ばした事で忠誠心が認められ発信器は外される事になった。

・・・長年苦しめられていた物がこんなにもあっけなく無くなると言うのはスツキリとしないものだ。

『よろしく、悠二』

『ちなみに二十歳だ』

『はあっ？お前が二十歳？ぎっけんなよ嘘ついてんじゃないねー』

「・・・」

『別に恨まねえよ、これがお前の最善策だったんだろ』

「駄目だ・・・恨めよ・・・俺を恨め。」

『だからこそだ。ぜってえ恨まねえ』

過去の記憶がリストバンドを通して蘇ってくる。

悠二は手に持ったリストバンドをゴミ箱に捨てた。

「なんで東京に徴収がかかったのかな？」

「さあ？僕の紹介した子供達が大活躍してるからじゃない？」

貸し切りの小さな飛行機に乗り込み指定された席に座り離陸を待った。

飛行機はすぐに離陸をはじめ、陸が小さくなり始めていた。

『こんにちわ、悠二君、翼君』

目の前の巨大なモニターにいかにも悪だくみをしてそうな馬面のおっさん達が姿を現した。

「お前、翼なんて名前なのかよ・・・」

「良い名前だろ」

ニツコリと笑いながらこっちを見てくる

「誰だ？あいつ等」

「んゝ反逆者に結構殺された事になってる官僚や色々とお偉いさんかな？」

『なにかと死んでいた方が便利なんでね』

「で？死者が一体何の用だ？」

「これだけの人数がそろうだなんて結構な大事おおいごとですねゝ」

『そうだ。その原因と責任追及を兼ねて君達をここに呼んだんだ』

「ここ？」

疑問に思う悠二と岸边（翼君）ここって飛行機の中？

『君達を呼んだのは、君達が紹介したチーム1についてだ。彼らの活躍ぶりはすごいね。』

なんと4週間も生き残ってるんだ。でもそのせいで、彼等は知って

はいけない事まで知ってしまった。』

「知ってはいけない事？」

首をかしげる悠二の横である事に気づき脂汗をダラダラと流す翼

『君も別に知らなくてもいい事だ』

「それで？言いたい事はなんですか？」

単調なおっさんどもにそう聞く悠二

『だから、言っただろ？責任追及だ。』

モニターの前に小さな机が現れ、机の上には拳銃が置かれていた。

『私達は、君達のどちらかに責任を取ってもらおうと思ってね。武器は一つだ。どちらかが相手を殺せ』

翼はその言葉を聞いた瞬間、シートベルトを外そうと必死に動くが全く外れない。

どんなに引っ張ってもシートベルトが外れない。

「あれっ？あれっ・・・なんで？外れない」

慌てる翼を横目に悠二はカチリとシートベルトを外しゆっくりと机に向い置いてある銃を取った。

悠二が銃を取った事に気づき固まる翼に悠二は銃を向けた。

「ま、待て、本気で僕を・・・」

全てを言い終わる前に悠二は引き金を引いた。

何の躊躇もなく引き金を引いた事にモニターに映るおっさんの中に何人かは表情が固まった。

「これでいいのか？」

『・・・ああ、それでいい』

清潔感を漂わせる白いシートは、翼から流れる血で清潔感が失われていた。

『君にはそのまま大阪に行ってもらおう』

「おい待てよ。このシートに待て座れと言うのか？」

『いや・・・なんのために席を指定したと思っている？最初から君

を生かすためだよ』

シートが突然くると回転し新しいシートが出てきた。

そして翼が付いたシートは海の上で飛行機の外へと投げ出された。

『名前の通り鳥になれたんだから彼も本望だろう・・・落下しているがね』

「それで？大阪に何がある？」

『君の元仲間だよ。彼等はある事を知り、あの場所から脱走を企てた。まあ我々が保護したけどな』

「それで？」

『君が殺せ。君の我々への忠誠心が見てみたい』

「わかりました。けど、俺は別にあんた達に忠誠を誓った覚えはない。」

『ほお、じゃあなんで、君は岸边なんだい？』

「・・・楽しいから」

悠二の手に翼の血がついてる事に気づきその血を舐めながらそう言った。

大阪、昔は食い倒れなど色々と栄えていたらしいが、砂漠化が所々で始まり、人はどんどんと北へ移動し、日本人は減り代わりに避難民が増えていた。

日本人と避難民の割合は大体一対一、いや外に出ると避難民がそこら中を歩いているから、実際より避難民の方が多く見える。

悠二は大阪に着き、食糧生産工場へと向かった。

無人の高層ビルが立ち並び、ビルとビルとの間、コンクリートできた道路にも砂は侵食し始めていた。

風が吹くと砂と埃が舞い、タイミング悪くその時に息を吸うと思いつきり咽る。

「ゴホッ・・・マスクとか売ってないのかな？」

残念な事にここら辺には、コンビニやスーパーも見当たらない。

風に舞う砂のきつい住宅街を抜け、目の前に大きな壁が現れた。

その壁伝いに歩くと今度は大きな門が現れ、その奥には大きな建物が見える。

『ご用件は？』

大きな門が話しかけてくる。

「食品衛生管理局からやってきました。」

『お待ちしておりました。どうぞ』

大きな門は、人一人入れる分だけ扉を開き悠二は門をくぐった。建物の中に入ると従業員らしき人がいた。

「岸辺さん、お待ちしてました。こちらです。」

道案内をされながら建物の中を見渡すと、食糧生産所でこんな警備システムが必要か？と思うような物騒な物までそこら中、置いてあった。

「避難民が食料を盗もうとしましてね。それでこのような警備システムが必要なんですよ」

「そう言う風に言えと言われているのか？」

「・・・ええ、まあそうですね。」

「あなたは人を殺したことはありますか？」

「いえ、私達はただ保護するだけです。まあ保護している人が逃げ出しでもすれば発砲許可が出るんですけどね・・・」

「逃げ出そうとした人は？」

「その前にあなたの方が現れて殺してしまうでしょ」

「それもそうだな・・・」

「でも、可哀想に・・・あんな子供まで殺すんですか？」

「上からの命令だ。仕方がない」

「私にもあのぐらいの息子がいます・・・」

「ストップ。それ以上話すと、俺はあなたを殺さなくちゃいけない。気持ちにはわからなくてもないが私に向って言うもんじゃない」

「……はい、わかりました」

「ここから下に降りれます」

従業員がそう言って一枚の扉を指さした。

「あんたは来るか？」

従業員はただ俯いて首を横に振るだけだった。

扉を開け階段を降りると長い廊下の両側にいくつもの牢屋がぎっしりと並んでいた。

牢屋の中を確認しながら奥へ進むが牢屋の中には今のところ誰も入っていない。

「悠二か……？」

誰もいねーじゃん……そう思いかけていた時、奥の牢屋から声が聞こえた。

声のする牢屋へ向かうと中に康太達がいた。

「悠二！！無事だったのか……心配してたんだぞ」

明らかにやつれている康太が、悠二の事を心配してきた。

「……ああ、俺は大丈夫だ。一応岸边だからな。それよりお前等、一体何があつたんだ？」

五十嵐の方へ視線を向けるが、五十嵐の目には本当に憎しみも怒りもなくいつも通りの目をしていた。

「上の奴等がお前等は知ってはいけない事を知ってしまった、とか言ってたが一体何だ？」

別に聞いてはいけなことも何とも言われなかったからただ聞いてみたかった。

悠二の質問に康太達は顔色を曇らせた。（元々やつれてて顔色は良くなかったがより一層）

「……俺達、戦争してたんだ」

「それは知ってる。お前達が戦っていた事は聞いていた」

「でも、その戦争は俺達の戦争じゃなかったんだ……」

「どういう事だ？」

康太達は口を開く事なく黙っていたが、五十嵐が口を開いた。

「代理戦争だよ。俺達は知らない国のために今までこれまで戦ってきてんだ」

第二十九話 代理戦争

「……遂にハセさんのチーム、全員死んじゃったか……」
横たわるハセの仲間の死体を見つめながら誰かが呟いた。

「すみません。俺をかばってあの人は……」

康太が悔しそうにそう言う

「まあ、あの人はお人好しだったからな……それにお前等はまだ若い、俺だってきつとそうしたさ」

「次はあなたが指揮を執ってください。今、一番長生きしているのはあなたです」

「悪いが俺にそんな重役は務まらない。俺はあいつを推薦するぞ」
男が指さしたのは康太だった。

「え……はあっ？」

驚く康太を横に全員が納得したかのように頷く。

「え……いや、ちょっと……俺達一番若いし、そんな年上の人たちを指で指図するだなんて到底出来ません」

「確かに指揮官としてはどうかかわらないが、運にせよ実力にせよ、今のところお前達は怪我もせず、全員生き残っている。それはお前達の戦い方にヒントがあるのかもしれない。だからその戦い方を俺等に指示してくれ」

「そうは言われても……俺達の戦闘システムは五十嵐が考えた奴だし……」

あたりを見渡し五十嵐を探すが、絶対にさっきまでいたはずなのに見当たらない

「……逃げたな……あの野郎」

「とにかく、そいつが考えたとしてもお前達のチームのリーダーはお前だろ？ならお前がやれ」

「……わかりました。俺が指揮を執ります」

諦めたかのように深くため息をつきながら康太は指揮官になった。

「おいおい、そんなテンションでどうする。そのテンションは指揮に影響するぞ」

「と、とにかく、明日に備えて今日は飲みましょう!!」

「ウイイイー!! わかってるねー指揮官」

酒盛りも終わりに近づき、康太達とその他の代表者が集まり建物の中で作戦会議が始まった。

「あの・・・まず、俺達ってどうしてここにいないといけないんですか？」

「それは、ハセさんが言ってたように、前にいた奴等からそう聞いていた。」

「それが俺、疑問だったんですよ。すぐそこに敵がいるじゃないですか。ホラッ」

康太が指さす巨大な地図には確かにすぐそこに敵地があった。

「いつもいつも、向こうから攻めてきてこっちを守るばかり・・・攻め入りましょうよ」

「でも、それはここを守ると言う事を無視しちゃう」

「思っただんですけど、昔と今の状況が違ったんじゃないですか？」

昔は俺達が圧倒されていた。だから、この街を防衛線にして敵を待ち構えていた。この街、地図を見るからに数人だけでも守りやすいし、ゲリラ戦にも適してる。そんな状況がずっと続いて行くうちに俺達みたく兵が補充されていく、訳も分からない俺達はただひたすらここを守る。だからこの街、軽く要塞になってしまってる。でも、根源はここなんですよ」

敵地を指でドンドンとつつく

「根を絶やさねばまた草は生えてきます。それに向こうだって準備万全でこっちに来るんだから、攻め入れば準備だなんて出来やしないでしょ?」

みんなからの返事を待つが、全員が悩み黙りこくる。

「あれ？やっぱ駄目ですかね・・・？」

「いや・・・悪くはない・・・ただ今までやった事がなかったからな・・・」

「こんな事を繰り返してたって、何も変わりません。ただ意味もなく人が死んでいくだけです！！」

「それじゃ、多数決にしよう。賛成な物は手を挙げろ」

多数決をしたところ全員が手を挙げた。

「よし・・・決まりだな」

「よかったあ」

康太は安心し胸をなでおろす。

「それじゃ、そろそろ新しい人が来るはずだ。迎えに行つて来い」

「え？俺行くんすか？」

「当たり前だ、お前が行かなくて誰が行く。安心しろ俺もついてく」

街から離れた所にトラックの明かりが二つこちらに向かって近づいてくる。

ところが一台はこっちに向かってきたがもう一台はどこか別の方向へ行ってしまった。

そして、俺達が初めてここに来たようにトラックの荷台の布が外され中に俺達と同じ戦闘服を着た人たちが入っていた。

「降りろ」

男がそう言うと、乗っていた人はそれに従いトラックの横に並ばされる。

「名前は」

横から順に自己紹介が始まり、それが終わると町に行けと指示する。砂漠に足を取られながらヨタヨタと歩く。

「街に残しておいた方がいいなありゃ・・・」

「いえ、そんな事ないと思いますよ」

康太はそう言うとその中の一人に声をかけた。

「お前、機械得意か？」

「ええ・・・まあ・・・」

「このトラック遠隔で動かせる？」

「・・・はい、中を見てみないとわかりませんが多分出来ると思います」

そいつに運転席を見るようにいい、一緒に来た男が声をかけてきた
「お前、一体何する気だ？」

「このトラックを奪うんですよ」

「まず、このトラックに先行部隊を乗せて敵地に入ってもらいます。
敵も補充兵と勘違いすると思うんですよ」

さっきの場所に戻り、作戦会議を始める。

「それで先行部隊は敵にばれないように見張りとか、いたら困るんでそこをどうかしてください。その内にまたトラックで何人か乗りこんで町の中に入ってもらいます。そのトラックが俺達の防衛ラインです。足で移動する人たちもトラックから少し遅れて町の中に入ってもらいます。後は敵をせん滅するだけです。」

「トラック奪うなら俺に言ってくりゃ良かったのに・・・」

「裕大を呼ぶ暇がなかったんだよ」

「でも、補充兵の中に機械に詳しい奴がいなかったらどうしてたんだよ」

「その時はトラックのタイヤをパンクさせてから裕大を呼ぶさ」

「どうして、一発で機械に詳しい奴を見つけたんだ？」

「さあ・・・何となくですね？」

「こいつ、嘘とか見破るのうまいですからね」

「まあそんなのどうでもいいっしょ。とにかく行きましょう、時間は待ってくれない」

気付くと砂漠の地平線から日が昇り始めていた。

「やってやるか・・・」

一人の男が眩しそうに日に目を向けながらそう言った。

建物の外に出ると色々な銃を担いだ仲間が待っていた。

「はーい、ゲン担ぎ行きまーす」

「ウイイーー」

人数が多いので胸を二回叩いた拳は空へと突き出した。

「俺達は一心同体だ！！生きて帰るぞー！！」

「ウイイーイー！！」

「生きて帰るぞーっ！！」

「ウイイーイーー！！」

「ぜってえー帰るぞー！！」

「ウイイーイーー！！」

「・・・ツシャー！！行くぞ！！コノヤロー！！」

「ウイイーイーー！！」

「・・・っはい、以上です。」

上がりまくったテンションは一気に笑いに変わり逃げて行った。

日が昇り始めてまだ薄暗い中、俺達は街を捨て、敵地へ向かった。

「俺は隠密行動の方が好きなんだ」

「・・・だろうな」

そう受け答えをして、五十嵐はトラックに乗り込みそのほか十数名が乗り込み敵地へ先に向かった。

トラックは敵地の手前で止まり向こうの動きを待った。

住宅街から二人の兵士が急いでやってくる。

「よし・・・まずは二人か」

ナイフを抜き取り、強く握りしめる

「いや、四人だ。入口付近の両サイドの建物に見張りがいる」

五十嵐はスコープを片手に布の隙間から敵の位置を把握する

「どうするよ？」

日がそろそろ真上に達する時間で布で囲まれた荷台の中は人口密度が高く、とても暑い・・・

緊張と暑さで全員の顔から汗がにじみ出る

「あいつ等が来たと同時にやりましょう。狙撃自信ある人いますか？」

五十嵐ともう一人はライフルを構え見張りに標準を合わせる。見張りは特にやる事がないからか、非常にリラックスしてる。

「俺の合図をお願いします」

五十嵐は安全装置を外し、深く息を吐いた。

「チェック」

二人がトラックに近づき、握るナイフにより一層力がこもる。

「チェック」

狙撃手の二人の指が、引き金へと近づく

「チェック」

二人の銃が暗い部屋でピカリとひかり、見張りの二人は頭から血を噴き出し、「クリア」五十嵐が小さくそう呟く。

五十嵐の合図とともに近づく二人に仲間が一斉に飛びかかった。

反応の遅れた二人は銃を掴むことも出来ずに抑え込まれた。

二人の首にナイフが立てられる。

「待て、待ってくれ」

命乞いをする二人

『おい、今の銃声はなんだ？』

二人の無線から敵の声が入る

「なんでもないと言え」

五十嵐は敵から無線を取り敵の口元に持って行く

「あ、ああすまん大丈夫だ。俺が撃った。トラックの中に補充兵が
やっぱり入ってた。」

今からそっちに連れて行く」

『そうか、わかった』

無線が切れなんとか一難は去った。

「待て待て待て待て、俺には家族がいるんだ。頼む殺さないでくれ」

「そりゃお互い様だ」

二人の首がナイフで掻っ捌かれた。

「行くぞ」

「オウヨ」

倒れる二人を横目に五十嵐の一声で先行部隊はそれぞれ別々の建物
の中へ侵入し始めた。

トラックは康太達の所に戻ってきた。

「よし、先行部隊は侵入成功だ。後は俺達にかかっている。ドハデに
やるぞ」

男らしい掛け声と共に兵士が荷台へどんどんと駆け込んだ。

トラックは動き出ししばらくすると敵地が見えてきた。

「住宅街の道に入ったら、上から狙い撃ちにされる可能性があるか
らトラックのスピードを落とすから全員飛び降りてくれ」

敵地の入り口でスピードがどんどんと落ち始め次々と外へ飛び降り
た。

全員がトラックから降り終わるとトラックはスピードを出し始め案
の定、全方向からの射撃を喰らいその場で横転し炎上した。

飛び降りた康太達は上からの射撃を喰らい、急いで建物の中へ身を

隠した。

「屋上に二人いる!!」

両側の建物の屋上から康太達を狙い撃ちまくる二人がいた。だが、先行部隊の一人が屋上の一人を銃で殴り倒しナイフで始末した。

それに気づいたもう一人の敵は、すかさず銃口を向けるが後ろにいた五十嵐から頭に銃弾を喰らい倒れた。

「うわっ・・・先行部隊の奴等、凄いな・・・」

「さあ、俺達も頑張らしましょう」

奥へ進むと待ち伏せしていた敵の銃弾に喰らい何人も倒れた。応戦をし、向こうから悲鳴が聞こえてくる。

だが、機械の足音がまた聞こえてきた。

「おい、これはさすがにヤバイぞ・・・」

「あいつは、俺に任せてください」

「任せるってどうする・・・いっ!! お前は どうして と言う物を 見つけてくるんだ」

康太が肩に背負っていたのは対戦車ミサイルだった。

「落ちてました! 無反動ミサイルです。俺が撃つまで向こうに弾幕、張っておいてください」

そう言うとき康太は銃弾が飛び交う中、建物の外に飛び出した。

「おい、待て!! くそっ全員で弾幕を張れ!!」

そこまではみんなの声は聞こえた。

あとは銃弾の飛び交う音と自分の息使いだけが聞こえた。全てがスローモーションかのように見える。背負っていたミサイルを近づいてくる蜘蛛に向け標準を合わせると一呼吸置き、引き金を引いた。肩に強い衝撃が伝わり弾丸は蜘蛛めがけて飛んで行く。

康太は弾丸の行く末を見る前に重いミサイルを道に捨て建物の中へと急いだ。

弾丸が蜘蛛の到達し爆発するのと康太が建物の中に横っ飛びするタ

イミングがほぼ同時に起きた。

「よしっ」

「『よし』じゃねーよ。馬鹿お前が死んだらこの後どうするつもりだ」

そう言って康太はヘルメットを叩かれた。

「でも、生きてる」

「それは結果論だ！」

「ああ、なんか似たような会話を昔、誰かとしたような気がする・・・」

その後、残りの仲間も到着し一気にたたみかけた。
問題はその後だった。

戦闘も終盤に入り、向こうはほぼゲリラ戦になっていた。

裕大ともう一人の仲間で詮索する中、裕大の横から突然現れた敵は裕大を殺す事なく頭を撃ち抜かれた。

裕大が振り返ると建物の屋上で五十嵐が手を挙げた。

『悪い、助かった』

『気にするな』

そんなやり取りがあった時だった。

『おい、誰かこいつの言葉わかる奴いるか？』

そんな無線が入り、後ろから今まで聞いた事がないような言葉が聞こえてきた。

『避難民か？』

『いや、それにしても服装が立派だ。スーツなんか着てやる』

『どういう事だ』

『命乞いしてるぞ。そいつ』

『そりゃ、聞いてたらわかる。意味が知りたいんだ』

『いや、だから命乞いしてる。「お願いです。殺さないで。私はこの国の人間じゃない」って』

『言葉がわかるのか？』

『ああ、片言だが少しは喋れる。そいつに無線を渡してやってくれ
そう言っているのは五十嵐だった。』

その時、康太の頭の中に五十嵐が体験した戦争の事が一瞬過ぎった。

第三十話 俺達・・・死ぬのか？

「五十嵐がそいつと話をしている内に俺達はそいつがいる所へ向かった。俺達が付く頃には会話もほぼ終了していた。その後、五十嵐がそいつが何者なのか、俺達が一体何のために戦っていたのかわかった。」

『こいつ等は、今はもうない国の代表者だ。俺達を金で買い敵対する国と戦わせてたんだ。』

康太達が、そこに着くと俺達の仲間に頭を銃で突き付けられた人が両膝をつき、まるで拝むかのように手を合わせそいつに命乞いしていた。

「つまり俺達は、こいつ等のために戦って来ていたと言うのか？」

『傭兵よりもひどい扱いだ。日本人同士で他の国の争い事を代理で請け負っていたって事だ・・・俺達は何も知らないでだ』

「・・・ふざけやがって」

銃を構えていた男は、命乞いする奴の足に弾を撃ち込んだ。

足に銃弾を撃ち込まれた奴は叫び声をあげ横に倒れ、より一層命乞いする声の大きさが大きくなった。

「俺達は！！何も知らないでこんな事のために戦ってきたって言うのかよ！！おい　！！今から俺が言う事、こいつに言え！！」

無線を倒れる奴に放り投げた。

「訳も分らないで戦っていた俺達の気持ちかわかるか？何も知らないで死んでいった奴等の気持ちわかるか！？てめえ等みたいなしらねえ国のために戦っていたつもりなんて毛頭ねえっ　！！俺達は自分の家族のために戦ってきたんだ！てめえ等の争い事なんてどうだっていいんだよ・・・勝手に争って人殺して、金も武器もなく

なったから、はい停戦。拳句の果てには俺達巻き込んでこの国で戦争おっぱじめやがって、だったら最初から争い事なんてやってんじやねーよ!!」

五十嵐は通訳し終わったのか無線からは何も聞こえなくなった・・・その瞬間、銃声が何発も鳴った。倒れる男の頭に何発も弾が尽きるまで引き金を引いた。

弾をすべて撃ち尽くしたときには足元に血が溜まっていた。

「・・・おい!! 街に戻るぞ!! 俺達の所にも、こう言う奴等がいるかもしれない。見つけてぶっ殺すぞ」

けど、街に戻る頃には、ヘリが一機逃げるかのように飛び立っている所だった。

「くそっー!!」

仲間は全員、ヘリに向かって意味もないとわかっているのに引き金を引いた。

全てを知った俺達の怒りは無情に叫び空に向って撃ちまくる・・・それしかできなかった。

その日の酒は盛り上がる事もなかったのやけ酒に終わった。

「俺達は次の日から敵地で武器と足を見つけて移動を始めた。ここからの脱出を試みた。

けど、それをこの国は許さなかった。砂漠地帯を走ればヘリや見た事ない戦闘機で爆撃され住宅街に逃げ込めば、住宅街に火柱が何本もたった。爆撃で仲間が乗ったトラックが火だるまになりながら宙を舞う所を見た瞬間、恐怖に駆られた俺達はトラックから飛び降りた。全員がそれぞれバラバラに走って逃げた。それで捕らえられこの様だ」

「・・・だから、俺を置いて逃げれば良かったんだ」

「腹から血を出した五十嵐を放っておいて逃げる事なんてできるか」
康太達の説明を悠二はただひたすら聞いていた。

「それで？悠二はなんでそこにいるんだ？」

「・・・俺も一応は岸边だ。お前達に処刑命令が出された。執行するのが俺に決まったんだ」

「・・・えっ？」

「すまない・・・上からの命令だ」

銃をとりだし檻の中にいる康太達に銃口を向けた。

康太達は置かれている状況が理解できないのか、口を半開きにしたまま動く事が出来なかった。

「・・・結局、あんたは2割以下を取ることはないって事か・・・」

「そうだ。俺は結局、自分が一番大事なのさ・・・」

悠二の引き金を引く指に力が入る。

カチっと言う音が鳴り悠二は銃ホルダーに戻した。

「おお・・・弾を入れるの忘れてた。別に今日殺せとは言われていない。明日また来るとしよう」

悠二はそう言うと、出口に向かって歩き出した。

「悠二ー！！」

康太が牢屋から顔を出しこっちを見てくる。

「・・・俺達、死ぬのか？」

「ああ、そうだな・・・」

そう言い残し、出口の扉が閉じた。

「こちらがあなたの個室になります。」
「ありがとう」

従業員が悠二を案内し、そこまで来ると従業員はどこかへ行ってしまった。

部屋には机と布団以外何もなかった。

ただ机の上に大きなラジオが一個置いてあった。

スイッチを入れると康太達の会話が聞こえてきた。

『俺達、どうしてこんな事になったのかな・・・？最初はただのテレビゲームだったよな。それが次第にガンズショップに行って、チーム作ってゲームやって、気付けば本物の銃で殺しあいしてる。』

『引き金を引くの到现在何の躊躇もない・・・目の前で人が死のうが殺そうがなんとも思わねえ・・・知らない間に俺達、普通の人間じゃなくなってたんだな』

『最初の頃なんて、そんな人間になっても生きてていいのか？とか言ってたよな・・・まあいいんじゃないか、周りで人がたくさん死ぬのに俺達は生き残っちゃった。ここら辺が潮時なんじゃない？』

『けどさ・・・別に命乞いじゃねーよ。学校にいた時はさ、くっだらねえ事で盛り上がって、くっだらねえ事にムキになってさ、馬鹿ばっかやって。こんな事やって何が面白いんだろ？とか思ってたけどさ、今思えばさ・・・あれが一番面白かったな』

・・・失ってからわかる大切な物ってこう言うもんなんだろうな・・・出来れば、みんなの所に帰りてえなあ・・・』

『あゝああああー！！帰りてえー！！！！』

『チキシヨウ！！帰りてえ』

無線からは康太達の涙ぐむ叫び声と鼻をすする音が聞こえてくるが、その部屋には悠二はもういなかった。

「おい、お前等！！」

牢屋に悠二がズカズカと近づく

「なんで、俺を恨まねえんだ！！恨めよ！！憎めよ！！」

「また盗聴かよ悠二。サイテーの奴がやる事だぞ」

「俺に殺される奴等は、全員俺を恨んで死んでいった。それが俺の生きる糧になってたんだ。俺が生きている証拠だったんだ。」

「恨んだって何も変んねえだろ・・・恨んだってしょうがねえんだよ・・・」

「駄目だ。恨め！！俺は生きている実感が欲しいんだ」

「生きてる実感だなんて俺にだってねえよ。生きてる実感だなんて死んでみないとわからないもんだ。死んでみてようやくいい人生だったか、駄目な人生だったかわかるもんだろ」

「・・・くそっ・・・駄目だ。そんなてめえ等殺してもなんも面白くねえ」

頭をかきむしりながらそう言い、悠二は突然、牢屋を開けた。

「逃げるぞ。その方が面白くなる」

牢屋が開いた途端、館内に非常ベルが鳴りはじめた。

「悠二、お前マジで言ってるの？」

「この状況でもう後戻りはできねえよ。」

「どうしました？何かありましたか？」

そう言いながら入ってくる警備員二人に悠二は銃口を向け引き金を引いた。

倒れる警備員から銃を奪い、康太達に投げた。

「出口までの道案内はする。だが自分の身は自分で守れ」

康太達は銃を取り、警備員から他に使えるような物を奪い取った。

警報が鳴り響く中、康太達は廊下に何個も牢屋が並ぶ部屋から飛び出した。

しばらく長い一本道で出くわすのは警備員の服を着た人達だったが、次第に黒い服、黒いヘルメット、背中には黄色い文字で何かが書いてある。とにかく全身フル装備の人たちが増えてきた。

「おい、こいつ等見た事あるぞ。警察の特殊部隊とかでテレビで特

集してた。」

物陰に隠れ応戦しながら裕大がいった。

「当たり前だ！！ここは一応は食糧生産所で、警備クラスは特Aだ。だから警察署と連結してるんだ」

「はあっ？食糧生産所？俺等、囚われてて飯と言えるような飯は喰えなかったぞ！！」

康太がそう言いながら放った弾は敵に命中し後退を始めた。

「はっ、大した事ねえーな。特殊部隊！」

康太達は先に進み倒れている奴から武器を拾った。

先に進んで行くうちに今度は敵は後ろから追ってくるようになった。

「この渡り廊下を渡りきれば、残り半分だ」

一本の廊下を渡りながら後ろに威嚇射撃をしながら少しずつ進んだ。

「くそっ、キリがねえ・・・」

「残段数は？」

「残り少ない」

全員からそう返ってきた。

「俺がしばらく持ちこたえる！！その内に廊下を渡りきれ」

五十嵐がそう叫び、康太達はそれに従い後ろを振り向かすに一気に渡りきった。

「五十嵐、早く来い！！」

五十嵐は廊下の凹凸部分に身を隠し動けないでいた。

「俺はいい、置いてけ！！」

「何言ってやがる　！！いつまでもクール気取ってんじゃねーぞ！！」

「うるせえ　！！こいつを見ろ！」

五十嵐がそう言いながら自分の服をまくり上げると傷口が化膿した新たに出血を始めていた。

「俺はもう無理だ。足手まといにはなりたくねえ・・・」

五十嵐の額には脂汗がにじみ出ていた。

「俺がしばらくここで持ちこたえる！！その内に早く建物の外に出ろ！！」

「あああ？ふざけんなよ！！てめえ、死ぬぞ」

「死なねえよ　！！俺は団体行動が苦手なだけだ！！康太！！いいか？お前が親父の事どう思っているのかはしらねえが、今はお前の親父の所に行け」

「俺の親父だと・・・？」

悠二は自分が持っている連射銃の残りの弾倉を五十嵐の方に放り投げ、五十嵐はそれを足で止めた。

「お前等、行くぞ！！」

「くそっ死ぬなよ。五十嵐」

「・・・そいつは少々無理な注文だ。」

隠れる壁の後ろから敵の足音が近づいてくる。五十嵐は壁から飛びだし引き金を引いた。

敵が何人も倒れて行く・・・五十嵐は少しづつ後退しながらも射撃を止めなかった。

向こうからの威嚇射撃は五十嵐の肩や至る所をかすめていった。五十嵐は痛みを紛らわすために思いつき叫んだ・・・叫びながら銃を撃ち続けた。

悠二から貰った弾も撃ち尽くす頃には、五十嵐は廊下を渡り切り横の壁に身を隠した。

弾がないか、自分の服の中を探すがやはりなかった。だが、五十嵐の足元に康太達が置いて行ったのか、弾倉が一個置いてあった。

「・・・おう・・・ありがてえ・・・」

五十嵐は新たに弾を詰め直すが、五十嵐は手りゅう弾を取り出し、しばらく見つめた。

体の至る所に出血部分があり、体がもう無理と悲鳴を上げている事に気づいた。

五十嵐は深く息を吸いこみ、手りゅう弾を強く握り安全ピンを抜き、手りゅう弾を掴んだ拳で二回、自分の胸を叩き前に突き出し強く握っていた手りゅう弾を地面に落とした。

渡り廊下で大きな爆発が起き渡り廊下が崩れていく頃、康太達は建物から脱出し爆発する所を目の当たりしている所だった。建物の外は夜になりかけていて薄暗かった。

「くそっ・・・あの野郎・・・」

「死なねえーって言っただろうがー！！」

「立ち止まるな！！行くぞ」

悠二がそう言うのと同時に康太は、五十嵐が「いいから早く行け！！」と叫んだような気がした。

「悲しむのは死んでからにしろ！！」

悠二の声に康太達は動こうとしない、自分の足に鞭を打った。

悠二を先頭に康太達は壁に向かって走った。

周りでは弾がはじける音が鳴り響くたんに頭に頭を低くかがめた。

「悠二！！行き止まりだぞ。どうする気だ」

「そもそも出口は、一個しかないんだ。そんな所から出れるわけねえーだろ！！」

悠二は壁を背に張り付き両手を足かけのように組み康太達を待った。

「オラッ来い！！」

「おい悠二、マジかよ」

「・・・これしか方法はないんだ」

康太が悠二の手に足をかけた途端、悠二の「フンダラっ！！」と言う掛け声とともに康太は上へと投げ飛ばされた。

康太は何とか壁の上に片手をかけ上によじ登ると目の前に有刺鉄線が張りめぐらされている事に気づき、自分の上着を脱ぎ有刺鉄線に

引っ掛け下に押しつぶした。

後からやってきた勉と裕大を先に跨^{まだが}らせ悠二を待った。

だが、悠二は上をずっと見るだけで一向に上によじ登ろうとはしてこなかった。

「悠二!! 何やってる、早く上がって来い。あとはお前だけだ」

勉と裕大は先に下に降り、康太は悠二に手を伸ばした。

「わかってるだろ。康太・・・この高さを一人で登るのは無理だ」

『出口までの道案内はする』悠二のさっきの言葉が頭をよぎる・・・

「なっ・・・悠二!! お前、最初から」

「うるせえ!!」

悠二は康太に銃を向け一発撃った。

「うわっ・・・」

康太はバランスを崩し外側に落ちて行った。だが、それを勉と裕大がキャッチした。

「早く行け!! そのままを下にまっすぐ下れば、住宅街だ」

壁をはさんで悠二の声が聞こえてくる

「くそっ!! ふざけやがって!! さっきまで俺達を殺そうとしてたくせになんで俺達を助けるんだ!!」

「知るか、んなもん! ただ今めっちゃいい感じなんだ。生を実感してる。そうか、俺はこんな事がしたかったんだ!!」

「何言ってるんだがわかんねえよ。お前が死んだら帰り道がわかんねーんだよ!!」

「大丈夫だ。なんとかなる!! 五十嵐も言ってただろ。親父の所に行け!! いや、あっちからおそらく来る。こんだけ騒ぎを起こしたんだ、嗅ぎつけなかったらお前の親父はカスだ!!」

「全く理解できん!! 悠二、お前もいいから上って来い」
向こうで銃声が聞こえ悠二はそれを応戦する

「悠二! 逃げろ!!」

「いいから、早く行け!! 早く・・・早ギャ・・・」

「悠二・・・く、くそがつ!!」

壁をはさんで悠二の頭が弾き飛ばされる音と倒れる音が聞こえてきた。

暗闇を抜けると高いビルが立ち並ぶ場所に出てきた。

後ろからは足音と横からは奇声な声を上げる車が俺達を追ってきた。

「くそっ・・・逃げるぞ」

「逃げるってどこに・・・」

そう聞かれても、この場所もどこに行けばいいかも全く分からなかった。

「とにかく生き残るんだ」

そう言っただけに走り出すと目の前に突然ヘリが現れ地面すれすれでホバーリングを続けている。

ライトが眩しくて何も見えないが、一人、細長い銃を持っているように見える

「ここまでかよ!!・・・くそっここまで来たのに」

「早くヘリに乗れ」

あきらめムードになる中、ヘリからそう言われた。

ライトが消され、銃だと勘違いしていた物は松葉杖でヘリに乗っていたのは康太の親父だった。

「親父・・・」

「康太!! 早くヘリに乗るんだ」

「・・・乗り込め、みんな」

康太はそう叫び、訳も分からず親父のいるヘリに乗り込んだ。

扉を閉めるとヘリは急上昇しだし、ヘリに気づいた敵はヘリに銃を撃ち始めた。

「一応、ヘリの中だから大丈夫だと思うが全員、念のため耳を閉じ

てろよ」

井上がそう言うとか何か丸い機械のスイッチを押した。

すると突然、下にいる敵は耳を押さえながら苦しみ始めた。ヘリの外からは何やら黒板を爪でひっかく音の大音量版のような物が聞こえてきた。

「このヘリの外から人間がまだ聞こえる程度の高周波を大音量で出してるんだ。耳はどんなに鍛えようがこの音には耐えきれない。脳に直接攻撃を出来る場所だからな」

「わかった。わかったからもうこの音を止めてくれ」

耳をどんなに塞ごうと音がまるで手を通してきているかのように音は鳴り響いた。

「先生、もう離陸に問題はありません。止めても大丈夫です」パイロットがそう言うとか井上は機械のスイッチをオフにした。

「子供には効き目がいいらしいな」

井上がそう呟く中、康太達は感動の再開に勤しむ事もなく、緊張の糸が切れたのか三人は一気に倒れた。

第三十話 俺達・・・死ぬのか？（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。お陰さまで三十話まで書く事ができました。

三十話まで書く事ができました、と言っておきながらなんですが、次で最終話とさせていただきます。

最後まで楽しく読んでいただけたら幸いです。

最終話 温かい手の感触

目を覚ますとそこは昔来た事のある病院の天井だった。

「な・・・なんだ？」

声がやけにこもっている。何故かは口に酸素マスクが付けられていたからだ。

上体を起こしながら酸素マスクを外すと横には康太の脈拍数を血圧を測る機械がリズムよく刻んでいる。

そしてその奥には、勉と裕大が康太と同じように酸素マスクやら管のような物をつけベットに横たわっている。

周りを見渡すとガラス張りの部屋で見渡しているとガラスの向こうに親父が立っていた。

康太は驚き目をカッと開く。親父は自分の左腕の手首を指さした。

康太は何かと思い自分の左腕を見ると発信器がなくなっていた。

「なっ・・・」

もう一度、親父を見ると今度はガラスの部屋の中にある受話器を指さし親父は向こうの部屋の受話器を取り耳につけた。

康太は受話器を取ると親父の声が聞こえてきた。

『おはよう、いや今は夜だからこんばんわかな？』

「俺達、一体どうなったんだ？」

『へりに乗り込んだ後、緊張の糸が解けて倒れたんだ』

「倒れた？」

『気付いてるか？あれから3週間経ってるんだぞ』

「3週間？俺達は3週間も寝てたのか？」

『いや、もっと目覚めるは先だと思っていた。正直半分諦めかけていた』

「どうして俺達を閉じ込めてる。ここはICUだろ？」

『そうだ。覚えていたか』

「俺は一度見たものは忘れねえんだ」

『一度だけお前を職場に連れて行った事があったからな』

「それで、どうしてICUに入れてるんだ」

『そこに入れられている意味、わかるだろ？』

「集中治療室に入れないといけないほど俺達は危険だって事か？」

『いや、正確には康太・・・お前以外の奴だ。お前以外、今のところ意識が戻らないんだ。もしかしたら一生、目覚めないかもしれない。もちろんお前もそうなる可能性があった』

「え・・・？なんで？」

『これは精神的な問題だ。どんなに医療が発展しようが、この謎は一生解明される事はないかもしれない』

「違う！！何でだって聞いてるんだ！！」

『いいか、お前達は極限の緊張状態でこれまで生きて来ていたんだ。助かった・・・そう思った瞬間が一番危険なんだ。だが、お前達は倒れた。意識がそのまま戻らないことだってあるんだ。お前の意識が戻った事だって奇跡に近い。勉君や裕大君はまだ戦場で戦っているのかもしれない』

「・・・何で俺だけ」

『さあな・・・とにかくお前だけでも意識が戻って良かった。五十嵐君は・・・死んだのか？』

康太は、俺達が建物から出てきた時、渡り廊下が爆発する所を思い出した。

「・・・ああ、俺達を庇って死んだ」

『そうか・・・五十嵐君は死んだのか・・・』

その時、親父の横の扉が閉まるのとボタンと閉まる音が受話器を通して聞こえた。

『ミスったな・・・とにかく、別にそのガラス張りの部屋から出るのは別にかまわん。だが、俺の横にある扉からは、しばらくの間絶対に出るな。悪いが外から鍵をかけさせてもらう。この部屋にトイレもあるし問題はないだろう』

そう言うと親父は急ぎ目で部屋から出て行った。

親父が扉の外に出ると、扉のすぐ横にしゃがみ込み泣きじゃくる洋子がいた。

「洋子君・・・」

「すぐに帰ってくるって約束したのに・・・死んだら奴隷も何もできないじゃない。。」

・・・戻ってきた。

地面に座り込み自分の左腕にはもう、俺達を苦しめてきた物は何もない。なのに何とも思わない。俺はここまで来るのに一体何人の人を殺して何人の仲間を失った？

『俺は人の屍の上を生きていい資格なんてない』

誰かが昔そう言っていた。誰だっけか？思いだせない。だが、その言葉が何回も繰り返される。

ここは、あの親父の病院だ。って事はこの近くに俺の暮らしていた街がある。だが、その街はなんだが遠くにあるように感じる。

部屋の中はとても静かだ・・・脈拍がリズムよく刻まれる音しか聞こえない。そんな状況なのに、この前まで銃声や爆音が鳴り響く場所にいた事を忘れさせてくれない。

目の前で人の頭が取れる所が突然映し出された。吹き出す血が康太に大量に降りかかる。

次に映し出されたのは住宅街の中、誰かと一緒に行動していた時、曲がり角を曲がった途端、

前に立っていた仲間の上半身が全て吹き飛んだ。

「うわあああああー！！！！」

どんなに目を固く閉じようと次々と映像が映し出される。

「止せ！！やめろ！！やめてくれ、誰か止めてくれ」

そう叫んでも映像は全然止まらない。今度は俺が今まで殺してきた

人の映像が流れてきた。

「違う。俺はそんな殺し方はしていない！！そんな事はしていない」
どんなに否定しようが殺してきた事実は変わることはなかった。

気がつくと俺は心配して見にきた看護師の首を絞め、後にやってきた看護師に取り押さえられていた。

『またミスったな・・・お前は出なくても看護師が中に入ってしまったか・・・』

鎮静剤をうたれ、落ち着きを取り戻した康太

「・・・あの人は、大丈夫か？」

『ああ、命に別条はない』

ガラスの壁をはさみ康太と親父が話す

「今のうちに俺を隔離でも監禁でもなんでもしてくれ。俺はもう駄目だ」

『残念だが、監禁はうちの病院でも出来ない。軟禁なら出来るがな』

「なら、軟禁でもいいからしろ」

『今、それを実行中だ。一応これが軟禁状態だ』

「勉強が危ないだろ！！」

『それは問題はない。お前に触れようとする奴だけが襲われそうになるだけだ。看護師も心配してお前の肩に触れたらしい』

「あんたはどうして俺と受話器越しにしか話そうとしない」

『・・・私は別にいいが、私がガラスの部屋の中に入ってきたらお前どうする？』

「・・・あんたを殺すかもしれない」

『だろ？だからやめとく。こういう場合はすべてノリとタイミングだ。お前も疲れただろしばらく寝ろ』

「・・・寝たらまたあの夢を見ちまう」

『悪夢を見なくなる方法を教えてやるか？』

「どうすりゃいい？」

『慣れろ、過去は所詮過去だ。そう思え』

その言葉に康太は怒りを覚えた。

「じゃああんたは母親が死んだ事も慣れたって言うのかよ・・・」

『・・・違う、そう言う意味じゃ・・・』

「どこが違うって言うんだ　！！あんたはあんたのせいで母親が死んだってーのにそれも忘れたって言うのか！！・・・っざけんなよ！！死ぬ、くそ野郎」

そう言うとき康太は受話器を強く元に戻した。

親父を思いっきり睨みつけるが親父はそれを気にもかけずに、もう一回受話器を取るようと表現するが、康太はそれを無視してベツトに戻った。

相変わらず悪夢が繰り返される中、変化は前触れもなく突然起きた。

「ん・・・・・・？」

康太はガラス張りの部屋で幻覚と幻聴に悩まされる中、誰かの声が聞こえた。

「・・・誰だ？」

康太は立ち上がりあたりを見渡すと裕大が突然、動いた。

「裕大・・・おい、裕大！！」

康太は裕大に急いで駆け寄りベットに取り付けてあるナースコールを押しまくった。

「わかるか、裕大？俺が見えるか？」

『どうしました？』ナースコールの向こう側から声が聞こえる

「裕大の意識が戻った。戻ったんだ！！」

向こうからは『今からそちらに向かいます』と入っただけで康太は裕大に話し続けた。

「裕大、お前左腕見てみる。発信器がないんだ。俺達帰ってきたん

だ。ほらっ見ろ、俺の左腕にも発信器はないんだ。俺達もうあの戦いはしなくていいんだ。俺達の戦いは終わったんだ。俺達、生き残ったんだぞ」

康太は裕大の左腕の袖をまくり裕大に見せた。

裕大は、一瞬笑ったかのように見えた・涙を一滴垂らし、また裕大はゆっくりと目を閉じた。

「・・・裕大？」

その時、裕大の脈拍数を測る機械が突然ドラマみたく鳴り出した。

「はっ？・・・え？裕大？嘘だろ・・・え？なんで裕大、裕大！！しっかりしろよ。裕大」

康太が裕大を必死に揺らす、親父と看護師が何人か入ってきて康太を裕大から引き剥がした。

「ちよっと、離れててください」

看護師がそう言いながらガラス張りの部屋から康太を追い出そうとする。

「おい、裕大！！ふざけんなよ。てめえも死ぬつもりなのか！ちよっ・・・退けっ邪魔だ」

看護師5人相手に康太は負けた

すぐ向こうでは、親父が電気ショックでもやっているのか裕大の体が飛び跳ねる

「もう一回だ！！離れろ」

そう言う親父の声が何回も聞こえた。

親父は、裕大の上に跨り心臓マッサージを始めた。

「くそっ、戻って来い！！戻ってくるんだ」

親父のそんな声と裕大の様子を見て

「くそっ・・・くそがっ・・・」

力無くそう呟きながら、康太は頭を両手で抱えその場にしゃがみ込む事しかできなかった。

親父はあれから二時間も心臓マッサージを続け看護師にもうやめましようという声にも耳を傾けずしばらく続けた。そしてガラス張りの部屋の外で座り込みながら待つ康太の横にやってきた。

「すまん、助けられなかった・・・」

「・・・なんで。」

「すまん、私の力不足だ・・・」

「違う、そうじゃない。裕大は意識が戻ったんだ。俺と目があったんだ。なのになんで・・・なんで・・・？」

どんなに悔しがろうと、どんなに悲しがろうと康太の目から涙が一切こぼれる事はなかった。

「意識って言うのは本当に難しい・・・戻ったかと思うと、また失う。そして二度と戻る事はない事だってある。それと今回は似たような症例だ」

「どうして大人って何でも比べたがるんだ・・・症例だとか判例だとか・・・そんなの関係無いだろ・・・裕大は裕大だろうっ！！周りのケースと比べてんじゃねーよ」

「康太・・・」

その日のうちにガラス張りの部屋から裕大と裕大がいたベットはなくなり、俺と勉のベットが広い部屋に二つ並んだ。

その日の夢は悠二と五十嵐が死んだ時の事が何回も繰り返された。康太がどんなに止めようとしても、五十嵐達が死ぬ・・・それは変わる事はなかった。

「何やってんだ、お前？」

康太はガラスの壁に寄りかかりながら座ったまま寝ていたらしい。目を開けると目の前に五十嵐が立っていた。

「どうなってんだ・・・死んだはずだ」

「ああ・・・死んださ・・・これはお前の夢だからな」

夢と言う言葉に違和感を覚えたがまあ・・・いいか・・・

「そうか・・・夢か、道理でお前が白衣を着てる訳だ。その恰好で冥土に行くつもりか？普通、白い着物だろ」

「これだって十分白い服だ。で？何やってんの」

「五十嵐・・・裕大が死んだよ・・・」

「ああ、知ってる」

「なんで、俺だけ生き残ったのかな？ 勉強もまだ意識が戻らないし・・・」

」

「さあな、なんか訳でもあんじゃね？」

「親父から聞いた。お前、発信器外せてたらしいな」

「だからあの時、俺を置いてけって言っただろ」

「そこまで教えてくれなかっただろ。」

「そりゃ、盗聴されてるのに言えるわけないだろ」

「なんで、俺達を置いて逃げる事だって出来ただろ？ どうしてしなかった？」

「お前が怪我した俺を見捨てなかったり悠二が自分を犠牲にしてお前達を助けた。それと同じだ。理屈じゃねーんだよ。そう言う行動は」

「理論ばっか言ってそうな、お前からそんな事言われるとは思わなかった。」

「で？こんなとこで何してんの？」

「別に・・・悪夢に悩まされてるだけだよ」

「ふーん、悪夢ね・・・」

「お前は悪夢に悩まされる事とかなかったのかよ」

「あったさ。でも、慣れた」

「・・・そうだよな・・・どうせ、俺の記憶の中で創りだしてるんだからそうだよな。親父とおんなじこと言うのは当たり前だよな」

「・・・ほお、お前親父と結構会話してるのか？もしかして今もしてるのか？」

「うるせえよ！！ああ言う状況なら会話するしかねーだろ」

「今は違和感あるか？」

「ああ？ 何に」

「親父との会話」

「・・・別にねえよ」

「それと同じだ。慣れだよ」

「いや、違うだろ」

「いや、違うない」

「そんな事ない」

「そうか？」

「そうだろ」

「そうかな？」

「そうなの」

「・・・まあいい。俺そろそろ行くわ」

「そうか」

「親父さんに伝えといてくれ。この病院の警備システムちよろいなくて。それからお前はちゃんと布団で寝れ、風邪ひくぞ。あああと洋子にあやま・・・」

気がつくとき康太は蒲団の中にいた。

「あれ？ 俺布団で寝てたんだけ？」

そう思い口に出しながら、康太は蒲団から出た。夢の中で誰かがいたような気がしたがどんな内容だったか思い出せない。

『おはよう。どうだ？ 気分は』

「別にいつも通りだよ」

『やな夢は？』

「だからいつも通り、現れたって言ってんだろ」

『ほら、それが慣れた。』

「ああ？」

『目が覚めるとクソツまたあの夢だ・・・とか思う事あるだろ？ こ

の前まで起きたらパニックになっていたのに今ではただ憂鬱になるだけ。それが慣れた。今は寝るのにそんなに躊躇はしないだろ?』

「・・・ふざけんなよ」

『凶星か?・・・軟禁も、もう解いてもいいだろ。部屋から出たかったらいつでも出る。』

親父は部屋から出て本当に外から鍵をかける音も鳴らなかった。

部屋の外に出るとそこは親父の病院だった。白く長い廊下、そこにはいくつもの扉がある。

それはガンズショップのミーティングルームにどこか似ていた。

悪夢や幻覚を見ても発狂することは少なくなっていたのは事実だ。けど・・・それが一体何だ。俺は忘れたんだ!!

そんな事を思いながら廊下を歩いていると各階にある談話室と書かれた部屋があった。

そこには、色々な新聞が並べてあった。

部屋越しにその新聞を覗くと『日本の呆れた真実』『創られた戦争は日本によって再び創られていた』などのゴシック体の文字がでかく表示されていた。

康太は談話室に入り、その中の新聞をひとつ取った。

『リアルウォー撲滅へ!!』

康太が新聞の表紙を指で横になぞると次々とページがめくられていく。

『議員、官僚にも内通者がいた。』『岸边と呼ばれる紹介者』『総理辞任!!』『行方不明者、すでに死亡の可能性も・・・』『ガンズショップ全て閉館』

『芸能界激震!!』『〇〇がまた不倫』

「なんだよ・・・これ」

その時、談話室の扉が開く音が聞こえ振り向くと洋子の母親がそこに立っていた

「凄いでしょ？全部、あなたのお父さんがやったのよ」

「・・・おばさん」

「おばさんって何？私まだ若いわよ。五十嵐君にそう言われたもの」

「おばさんがいるって事は・・・」

洋子の母親が「あっ、またおばさんって言った！！」そう言う中、洋子が談話室の外でちょうど康太に気づき康太と目が合った。目の前に洋子がいると言うのになんだか洋子が遠くに見えた。

「康太っ！！」

洋子が急いで談話室に入る中、康太はそれをくぐり抜け談話室から飛び出した。

「待て、康太！」

洋子から逃げるが洋子は康太を追いかけてくる。康太は部屋にかけ戻り急いで扉を閉めた。

扉の向こうから洋子の足音がドンドンと近づいてくる。

「・・・鍵、鍵」そう呟きながらドアノブを見るが、この部屋は外から鍵をする仕組みだった事に今気づいた。

「やっべ・・・」

「開けろ！この野郎」

洋子がそう言いながら扉開けようとして扉をガンガンと揺らしてくる。

薄暗い部屋でガンガンと揺れる扉を抑えているとなんだか少し怖いよな・・・

「くっそ・・・どこかのB級ホラー映画じゃねーんだからよ。勘弁しろよ」

「何をぶつくさ言ってるんだ。開けろよ」

「うるせえ、こんなところ来てんじゃねえーよ。なんでここにいないだよ！」

「私も入院してたからだよ！ねえ、開けてよ」

「はあっ？お前みたいなバカが入院？」

「誰がバカだ！！康太に言われる筋合いはない。学力は私の方が上です」

「そっちじゃねー！！精神的な面でバカだって言ってたんだ！！」

「うるさい！！その精神的な面で入院してたんだよ。ねえ開けてよ」

「いーや、駄目だ」

康太がそう言うのとガンガンと揺れていた扉は、ピタリと止まった。

「・・・ねえ、なんで開けてくれないの？」

静かな洋子の声が扉から聞こえてくる。

「・・・俺は、お前にはもう会えねえ・・・会っちゃいけないんだ。お前と俺はもう違う世界の人間なんだ。」

「はあ？何言ってるの、違う世界って・・・」

「なら聞くけど、洋子！お前は人殺した事あるか・・・？人が目の前で無残に死んでいく所を見た事があるか？虫の息の人に止めを刺した事はあるか？俺の手はそんな奴等の血が染みついちまつてる・・・誰かが言ってた『もう元の生活には戻れない』って・・・その通りだ。俺は元の生活にはもう戻れない・・・」

どうして人殺したら刑務所に入れられるか知ってるか？きっと世間にそいつが人を殺したって事を忘れさせるためにだ。重々酌量の余地ありとか言って刑務所から出たらきつと知らない環境でそいつ等だって普通に生活するんだよ。洋子、お前は人を殺した俺と面と向かって普通に話ができるか？出来ないだろ、少なくとも俺はきっと出来ない。・・・この扉が俺達の境界線だ。俺はそっちにはもう戻れねえ・・・」

「何言ってたんだか全然わかんないよ。いいからこの扉開けて・・・」

「五十嵐を殺したのは俺だっ　！！」

再び扉を開けようとする洋子に康太はそう叫ぶと、扉がまた動かなくなつた。

「足手まといになる五十嵐を俺達は見捨てた。あいつの最後を誰も見てやる事が出来なかった。」

「そ……それが何よ　！！　康太はそんな事しないって私知ってるもん……五十嵐君だってきつと死ぬつもりじゃなかったはずよ！・・・　そうよ、団体行動が苦手だっただけよ」

「それにな……死んでいった仲間の顔が思い出せないんだ。一緒にいたのに名前は覚えているのにどんな性格だったのかも思い出せないんだ……」

「康太が覚えてなくても私、覚えてるよ。小心者で少々ひ弱な龍之介君。口は怖いけど誰にでも優しい大次。機械オタクでシスコンの裕大君。誰よりも家族を大切にして康太の親友の勉。康太達のために戦いに戻って行った五十嵐君。それで私の幼馴染の康太。私、覚えてるよ。顔だって思い出せる。私が思い出させてあげるから、この扉開けてよ……」

洋子が一人一人言っていくと康太の頭の中にみんなの顔が鮮明に浮かび上がってくる。

「……お前、五十嵐の事好きだったろ」
特に意味もなく康太の口からそうこぼれた。

返事がない事に疑問を持ったが「とおっ」と言う洋子の掛け声と洋子のドロップキックによって扉が破壊され、康太は仰向けに倒れた。
「イッテ……何すんだよ」

「ええ、そうですよ！！好きですよ。ちょっとお父さんに似てていいなあとか、思いましたよ！！それがあなたに何か関係あるんですか！！」

「お、おいこら。今の発言によって一人の男の恋が終わったんだぞ！！」

「はぁ？何言ってるの？」

「……何でもない」

「あっ！もしかして康太、私の事・・・」

「うるさいっ！！」

「あ、あんたねえ、こう言う言葉知らないの？幼馴染は一生」

「幼馴染ってか？ああ、俺もそう思うよ！ってか今実感した。ガキの頃、結婚の約束したのを覚えてるのは意外と男の方が多いとかね」

「えっ？そんな約束した？」

「・・・いや、してないけど。例えだよ例え」

「どお？普通に面と向かって会話してるんじゃない？」

「あっ・・・」

「何が境界線よ。こんな脆い境界線なら私が何度でも壊してやる。別の世界にいるって？」

洋子は突然、康太の手を握った。

「・・・別の世界にいるならこうやって触る事だって出来ないはずでしょ？いつまで自分の殻に籠っているつもりよ。もしかた籠るってんなら、私がまた窓から石投げて康太を引きづり出してあげる。」

康太・・・あんたの手冷たいわね。意外と冷え性？」

洋子の手は温かく俺の手のように冷たくゴツゴツとしていなかった。冷え切っていた康太の体を溶かすかのような温もりに今まで出てこなかった涙がここぞとばかりに溢れてきた。

「・・・あつたけえな」

「ちょ、ちよっと何泣いてるのよ・・・ってか、いい加減、手ー放して」

「・・・ごめん。もうちよいこのままで・・・」

「ん、仕方ないな・・・一分500円ね」

「それは高いだろ！！駐車料金よか、たけーじゃねーか！！」

「一切値切りは無しです」

「なら、もういいです！！」

康太が手を離そうとするが、洋子が手を離さなかった。

「え？おい、ちょっと・・・何？離せよ」

「・・・よし、二分経った。」

そう言いながら洋子は手を離れた。

「うわっ、最低だ！お前・・・普通慰めるとかなんかするだろ！！
なのに金にすべて結びつけやがって」

「いいじゃない、あんたの場合しみじみと慰めるより、こう言う方がいいでしょ。」

「うるせえ！俺だってたまにはしみじみムードが必要な時だってあるんだよ」

「それよりいい加減、涙止めてよ！いつまで流してんのよ。鼻まで出てきてるじゃないのよ！汚いじゃない」

「お、・・・お前は鬼か！？お前の血は何色だ！！」

「ちゃんと赤い色してます！！」

「嘘つけ！お前はピツ○口と同じだ。ナ○ツク星人と同じ血の色をしてる」

「み、緑ってか！！・・・あれ？たしかナメツ○星人って女性いないんじゃないの？うわっ何それ！さっきまで恋がどうの言ってたあんたが私に対してそこまで言うか？」

「いや、それは違う！お前がそこまで深読みするとは思ってなかった！！」

本来なら看護師にうるさいと怒られるかもしれないが、看護師がこの階にいないのかまったく誰も止めようとしなかった。

だが、今回はそれがいい方向に動いた。

「・・・んだよ・・・うるせえな」

言い争う二人の声がピタリと止まった。

「勉・・・？」

ガラス越しに勉が酸素マスクをゆっくり外す所が見えた。

「勉っ！！」

「私、先生呼んでくる」

康太は勉に駆け寄り、洋子は部屋を飛び出した。

「勉、大丈夫か？俺が見えるか」

「……何泣いてんだよ。」

勉の声は弱弱しく聞きとるのがやつとのような声だった。

「う、うるせえよ。泣いてねえよ」

勉はまた瞼を閉じようとしていた。その時、康太は裕大の事を思い出した。

「待て。勉！！目ば閉じんじゃねー。お前まで死ぬつもりか！！お前にまで死なれたら俺どうしたらいいんだよ！！どうやって生きていきゃいいんだよ！！俺一人残して逝く気か！！」

勉はゆっくりとだが、康太のいる側の手で握り拳を作り胸の所に持って行ったあと康太の方に拳を向けた。

「……俺あ死なねえよ」

「本当だな？戻ってくるんだな。信じてるぞ」

康太は自分の拳で胸を二回叩き拳を勉に向けた。

「必ず生きて戻って来い」

康太は勉の拳に自分の拳をぶつけた。

「待ってるからな」

洋子と親父、看護師が着く頃には勉の拳は下に落ち、康太は両膝をつきグツタリとうなだれていた。部屋の中には勉の脈拍を測る機械がリズムよく鳴る音だけが響いた。

その後、この国は疑われた議員は全て一掃され新しい議員が選ばれた。そして、その議員の半分は元プレイヤーと言う意外な結果になった。

テレビでは一部不満の声もあったが、頑張っしてほしいなど賛同する意見が圧倒的だった。

そして康太の父親は一度は逮捕されたものの公訴提起はされず『この国と真っ向から戦った男』とテレビでは引っ張りだこになっていた。

「誰もがこの国に絶望したものの俺の存在のお陰で少しは希望と言う活力にはなったのではないだろうか？」とか親父が言ってたから「そんな事はない」と俺は親父にドロップキックを母親の墓の前でお見舞いしてやった。

そして十数年後。。。誰もがリアルウォーの存在を忘れたころ。小さなモデルガンショップにある張り紙が貼られるようになった。

「あれ？おい浅野、そんな張り紙前からあったっけ？」

「ん？・・・ああこれの事か？」

浅野と呼ばれる店員は張り紙を一枚剥がし高校生に渡した。その張り紙はゴシック体でこう書かれていた。

『リアルウォー再開』

最終話 温かい手の感触（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

ええっこんな終わり方！？とかは是非とも胸の奥にしまい込んでください・・・し、仕方ないだろ！ネタが尽きたんだ！！と言いたい訳しかできないので・・・

最終話と書いておきながら毎回の事、本当の最終話はおまけの方です。よかったらそちらの方も読んでいただけたら「地球に生まれてよかった」・・・とか自分が思うんでよろしくお願いします。

第零話 始まりはここから・・・

「バカ野郎！！いいか、チーム名って言うのはな。結構大事だと思うぞ」

「だから、そもそもチームなんて別に作んなくてもいいだろ」

小さなガンズショップで康太、勉、大次、裕大、五十嵐が丸机に向かいあい話し合いをしていた。

「いや、それは・・・ほ、ほら、せっかくこんな風に同じクラス
の奴が打ち合わせもしないでこんな風集まるって言うのはなんか
運命があるんだよ。きっと」

チームを作るのに俄然やる気のある康太。

「いや、ただ単にこの場にいる全員を道連れにしたいだけだろ」
やる気ゼロの大次。

「まあ、いいじゃねーか。みんなもう紙に名前書きちゃったんだし」
膝壊してサッカー部辞めて、自棄^{やけ}になる勉

「俺はどっちでもいいよ。でもチームあった方が個室も使えるよう
になるし、試合だって出来るんじゃない？」

少々チームに関心がある裕大

「・・・」

興味なしの五十嵐

「そうだ。裕大君、よくぞ言った！！チームを作ればこんな丸机
じゃなく、完全個室のホワイトボード有りの長机にパイプ椅子のあ
る部屋に入る事が出来るんだぞ」

「くっ・・・あついや・・・でも」

心が揺らぐ大次

「・・・ロッカー付きだぞ」

勉の一言で大次の心は完全に折れた。

「よし、作るか！！チーム」

「だから、さっきからそう言ってるだろ。問題はチーム名だ」

「○○高校二年でよくね？」

「却下、身分証明しちゃってどうするんだよ！！馬鹿できないじゃん」

「じゃあ、○○組」

「駄目だ！！お前それ・・・完全傷者じゃねーか！！なぜにそっち系？」

「名前で相手をビビらせるみたいなの？」

「はい、次」

「○○証券会社」

「・・・無し」

「(株)○○法人」

「なぜに株式会社！？」

「なあその前にリーダーって誰？」

用紙を見ながら勉がそう言った。

「・・・そりゃ、言いだしっぺだろ。普通？」

「はっ？ヤダよ。なんで」

多数決の結果、満場一致で康太に決まった。

「はい、それじゃ後はチーム名だけだ」

新規登録の画面に名前と年齢を打ち込み（もちろん年齢は詐称）チーム名を決め決定ボタンを押すだけだった。

「チーム百戦錬磨」

「駄目、もういた」

「チーム一騎当千」

「おいおい、個人種目じゃねーんだからよ。一人で千人とかどういう事よ・・・完璧個人主義者じゃねーか。ナルシスとか？裕大君は機械オタクな上にナルシスとなのか？」

「いや違います。フェミニストです。・・・あれ？みんな？冗談

だよ・・・ちよつと引いた眼でこっちを見ないで」

「・・・・で？落ち込む裕大は放っておいてどうすんの？康太、お前なんも案出してねーだろ」

「え・・・・俺？・・・・じゃあチーム俺」

「・・・・か、完璧ナルシストじゃねーか！！」

「馬鹿ちげーよ！！俺ってーのはお前等も入ってんだよ。俺がいないと駄目ーみたいなの？一人でもかけたらやってけません的な・・・・団結力が命です的な？」

「お・・・・おお、まあ良いんじゃないの？」

「ああ、駄目だわ。もうチーム俺、他にいるわ・・・・」

まとまりかけた。チーム名も勉の一言でまた振り出しに戻った。

「ああゝ決まんねえゝ」

全員がくたびれる中、ようやく五十嵐が動いた。

「んあ？五十嵐、何する気だ？」

五十嵐は画面に近づき何も言わずに決定ボタンを押した。

「ぬおおおおおー！！五十嵐、お前何してんの！！」

「別にチーム名なんて関係無いだろ。やるのは俺達だチーム名じゃねえ」

なんだか正論に聞こえ納得する康太達・・・・あれ？俺達の必死に考えてたあの苦労は？とかは家に帰る頃にようやく思い出していた。

『試合終了、チーム鯨VSチーム1。勝者チーム1』

メガホンでそんな声がフィールド中に響きわたる。

「また、俺死んだ・・・・」

「俺も・・・・」

「俺も・・・・」

「結局生き残って活躍したのは五十嵐か・・・・」

全員が部屋に戻りボケラツとする中、五十嵐が入ってきた。

「五十嵐、お前一体どこに隠れてるんだ？」

「どこって？何が、普通に草むらに潜んでるだけなんだけどな」

「五十嵐！！頼む俺達に戦い方を教えてくれ」

康太が椅子から飛び降り土下座をした。

「おお、俺も何か案あるなら聞きてえ」

そう言いながら大次も椅子から立ち上がった。

「・・・一応、考えた戦闘システムはある」

「おおおお！！さすが」

『チーム百戦錬磨VSチーム1。勝者チーム1』

「よし、生き残った！！」

「俺も！！」

「全員だ。全員！！」

「よっしゃー！！」

全員で部屋を後にし興奮がやまないまま出口に差し掛かった時、誰かが話しかけてきた。

「君達、チーム1かい？」

「え？ええそうですけど・・・」

「僕、岸辺って言うんだ。この街に道内一のガンズショップがあるのは知ってるかい？その店員なんだ。この小さな店じゃもう敵はいないだろう？」

「まあ確かに・・・もう誰も挑戦してくる奴いなくなっちゃったよな・・・」

「だからさ、こっちの店においでよ。たぶん君達の年代の子が一人で寂しくやってる人がいるんだ。その子もチームに誘ってあげて欲しいんだ」

「どうする？向こう行ったら学校の奴等にばれちゃわねえ？」

「でも、ばれてもいいだろ。こんなに人数いるんだから」

「そうそう、この店よりフィールドとか種類は豊富だしさ」

「・・・じゃあ行くか」

「よかった。断られるんじゃないかって内心ドキドキしてたよ」

その時の岸辺の胸をなでおろす、笑顔が妙に不気味に見えたのはおそらく康太だけだったのだろう。

みんながその笑顔に少しでも不安を感じていたらあんな事にはならなかった。

あんな事が待っているとはみんな知らず、康太達はゴールの光も見えない暗い闇のゲームに足を踏み入れたのだ。

五十嵐、ライトノベルに目覚める

「おいおいおい、これ見ろよ。」

康太が龍之介がいないうちに鞆をあさり、ある紙のブックカバーに身を包まれた本を見つけた。

「えっ？何さ・・・」

興味を示したのは勉、大次、裕大・・・ってか、今それしか部屋にいない

龍之介は先に着替えてフィールドに出てるし、五十嵐は保健委員のなんかで遅いし。

とまあ、そんな事はどうでもいい！龍之介の鞆の中にあつた物、それはなんと今は珍しい紙の本が出てきた。

「龍之介の奴、そんな休み時間、読書ばかりしてるからいじめられたりするんだよ」

「いや、五十嵐だっていつも読んでるだろ」

「五十嵐をいじめる勇氣がある奴があのかラスにいると思うか？」

「ああ・・・いないな」

康太の推測だが身長185以上、体重は90後半以上。なのにあの体格で黒髪短髪。そしてあのつり上がった目つき・・・どっかの兄ちゃんよりなまら怖い。

「けど龍之介みたく背が小さくて気の弱い奴が本読んでたらどうよ？」

「そりゃいじりがありますな。。。」

「・・・つと言う訳で、俺達で龍之介を本から脱出させてやろうではないか！」

そう言って本を誤って下に落としてしまった。

「ヤベッ・・・」

その時、一瞬だが本の中に文章ではない物が見えたような気がした。

「おいおい、何やってるんだよ」

「ん・・・？今、なんか挿絵なかったか？」

「はあ？挿絵？龍之介が読んでる本って子供用の本なのか？」

そんな事を大次が言いながら龍之介の鞆からまた本を取り出した。

「いや、一瞬だけどさ見えたんだよ」

そう言いながら康太と大次がそれぞれ手に持った本を開き、中を見ていると

「ぬあっ・・・！！」「うおっ・・・！！」

驚く康太と大次に首をかしげる勉と裕大しばらく固まる、康太と大次。

「何、あいつどんな本読んでるの？」

裕大がそう口に発した途端。康太と大次が大爆笑し始めた。

「ダッハハハハ！！ヤベーよ。龍之介！！こりゃいじりがある！！！」

「全くだ！こりゃいじられても仕方がない。これ見てみるよ」
そう言っつて康太は勉強に本の一部を見せた。

「こ、これは・・・」　　そういわゆるライトノベル！

大爆笑する勉となんだこんな物かため息をつきながら冷める裕大。

冷める裕大の反応にみんなが凍りつく。

「・・・ん？・・・いや、違うよ。俺そんな趣味はないからね。・・・いや、本当だから。ちよつと！・・・みんなが遠くに感じるよ！近くににいるのに遠くに感じるよ！！」

「・・・と、とにかく、龍之介をこの本から解放させてやろうではないか諸君」

「オォー！！！」

「とりあえず・・・本をてっとり早く龍之介から遠ざけるのが先決なんだが・・・裕大？これいる？」

「い、いいいりいりません。欲しくもないです」

「はいはい。わかりやすい反応ありがとうございます。ならこの本の行き先は決定いたしました！！ジャツジャジャーン！テレレレッレレ」

そう言いながら紙の本はゴミ箱の中にストンと入ってしまった。

「よし、それじゃ俺達も練習に行くぞ！！！」

「オォー！！！」

そう言って康太達は部屋を後にした。

しばらくすると保健委員の務めを終えた五十嵐が入ってきた。

入ってきた時、偶然にもゴミ箱を蹴ってしまった五十嵐。

「ヤッベ・・・」

こぼれたゴミをゴミ箱にしまう中、ブックカバーに身を包まれた本を見つけた。

「・・・？」

その中の一冊を取り、中を見てあるページで手と体が固まり五十嵐が今まで見た事ないような表情をした（ご想像にお任せします）

「ええっあの本捨てたんですか!!」

森林のフィールドで二対三で戦う中、龍之介は康太に血相変えて尋ねてきた。

「ああお前のためを思って、あの本はダストボックス行きになった」

「いや、ほんと勘弁して下さいよ!あれ高かったんですよ。一冊三万です!」

「さ、三万っ!?本一冊に今そんな値段するのか?」

「あれ一応、レトロな商品なんです。2009年にヒットしたアニメの原作本なんですよ。なんでも社会現象にもなったらしくて・・・」

「2009年?あれそんな昔の本なの?」

今戦闘の最中なのを忘れてでかい声で会話する康太と龍ノ介
「なんであんなに新品同様であるんだよ。古い紙って色あせたりするもんだろ」

「なんか、昔の人は本とか人形とか3つ買ってたらしいんですよ。僕の考えなんですけど、一つ目は最初に読むなり遊ぶなりして、それが壊れたら2つ目に手を伸ばす。でも3つ目に行くまでにはきつと飽きちゃったんじゃないですかね?だから未開封のまま置いてあったりするんですよ」

「なるほど・・・だから保存状態がいいのも予想がつく。でも、昔って今より物価とか高かったんじゃないのか?それなのに紙の本とか3冊も買ったのか?」

「さあ・・・そこまではわからないですけど・・・」

「おい、お前等。戦闘中なの忘れて何やってるんだよ」

気がつくとも達達に囲まれていた康太と龍之介・・・

「あ・・・ヤベッ」

そう言うと同時に達達は一気に引き金を引いた。

『戦闘終了。勝者 勉強手、他二名』

「おい、どんなアナウンスしてんだよ!!」

戦闘が終了した途端。龍之介は一目散に部屋にかけ戻り勢いよく扉を開けた。

それと同時に五十嵐も勢いよく自分のロッカーを閉じた。

そんな事は気付かず龍之介は足もとにあるゴミ箱をくまなく探した。

「あれ・・・ない・・・ない」

「おい。。。ゴミ何かあさってなにしてる？」（バレるんじゃないかドキドキ）

「五十嵐君。このゴミ箱の中身知らない？」

「ああ、確か店員がやってきて回収してたぞ」（来た事には来たが・・・）

「ああ、せっかくの貴重な本が・・・」

「なんかあったのか？」（まあ大体予想はつく）

「いえ・・・何でもないです」

「とにかく練習に戻ろうじゃないか」

五十嵐はそう言って龍之介をつれ部屋から出て行った。

しばらくすると五十嵐のロッカーがひとりでに開き、鞆の中にブックカバーが外された本が二冊見え隠れした。

第零話 始まりはここから・・・（後書き）

今度こそこれで最後です。最後まで読んでいただきありがとうございます。えっこんな終わり方？とか思う方、そうです。こんな終わり方なのです！私にはこんな終わらせ方しか知りません。

そう！恋愛と同じです。なんやかんやでグダグダになって知らないうちに終わってる感じのあれです。

でもそれが人間のいい所だと私は思います。

「俺達の戦争」いかがだったでしょうか？また機会があれば新しい物語、もしくは「俺達の戦争2」を書き始めるかもしれません。その時は、よろしくお願いいたします。

ご意見やご感想、毎回の事お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3698f/>

俺達の戦争

2010年10月28日07時15分発行